

ハイスクールG×E

フリムン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好きなゲーム『ゴッドイーター』な、そこはかたなく保護欲を刺激する少年が、神喰いとして悪魔墮天使神様を神機片手にフルボッコしちゃうお話。

「え？ 悪魔？ 墮天使？ 何それ怖い。あ、でも天使は怖くないかも。うん」
どうやらホラーやオカルトが苦手なようです。

ちなみに、装備はロング・スナイパー・シールドの模様。

うちの子では無いけれど、作者の使っている装備が使われています。

タグについては、物語の進行に応じて増減します。

評価・感想をくれると嬉しいです。

不定期更新ですが、エタるつもりは毛頭ありません。頑張ります。

目次

人物紹介	※ネタバレあり	1
旧校舎のディアボロス		
プロローグ		12
第1話		18
第2話		21
第3話		29
第4話		36
第5話		43
第6話		55
第7話		67
第8話		75
第9話		83
第10話		91
第11話		98
第12話		109
第13話		118
第14話		126
第15話		134
第16話		145
第17話		157
第18話		163
第19話		171
第20話		182
第21話		197

第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	戦闘校舎のフェニックス	閑話 とある三神の談話	閑話	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話
300	292	283	276	267		262		255	244	228	216	207

猫と少年の休日 その1	閑話 2	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話
448		437	419	410	397	386	369	356	346	334	321	309

第52話	第51話	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第44話	第43話	月光校庭のエクスカリバー	猫と少年の休日 その3	猫と少年の休日 その2
613	592	581	562	547	537	526	515	505	494			470	460

停止教室のヴァンパイア	風邪引き少年と看病 その3	風邪引き少年と看病 その2	風邪引き少年と看病 その1	閑話3	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第55話	第54話	第53話
806	788	774			760	736	719	697	678	661	645	637

第 7 2 話
第 7 1 話
第 7 0 話
第 6 9 話
第 6 8 話
第 6 7 話
第 6 6 話
第 6 5 話
第 6 4 話
第 6 3 話
第 6 2 話
第 6 1 話

993 981 964 949 933 922 908 888 875 863 850 830

人物紹介 ※ネタバレあり

○かみゆいハルト神結悠斗

・あだ名

『ハル』または『ハルトきゅん（非公認）』『ハルにゃん（非公式）』

・好きな物

甘いもの。小動物。友達。

・嫌いな物

辛いもの。怖いもの。友達を侮辱する奴

・苦手な物

悪魔。堕天使。お化け。

・特徴

身長は小柄で、私服では良く小中学生に間違われる事もある。母親の趣味で、女物の服が多く、しかも地味に露出が高い。結果、私服で出掛けると女子に間違われる事もしばしば。

体は細いが、ゴツドイーター化の影響で、その身体能力が飛躍的に上昇した。

普段は臆病で、イツセーへの毒舌&鉄拳制裁以外は控えめな態度だが、自分の友達に酷いことをする連中には容赦なく怒りをぶつけ刃を振るう。

自分へ向けられる好意にはなぜか鈍感。

最近小猫ちゃんの影響で猫関係の持ち物が増えてきた。

・血の力

『喚起』……ゲームの能力まんま。

・スキル

『死中の一撃』『自動治癒』『サイレントキリング』『穴熊』『インフィニティ』『乱戦の心得』『スタウトファイト』『剣聖』『飛将』『砲撃手』『超越者』『捨て身の剣』

ただし、現在ハルトの力量不足により、スキルを二つ以上同時に発動させることはできず、発動させれば体が持たないとの事。

・神機

刀身・マルドゥーク系統ロング『アモン』

銃身・ボルグ・カムラン系統スナイパー『アルバレスト』

装甲・サリエル系統シールド『キング・リア』

○兵藤一誠

・特徴

正直これを書く必要もないほどに知られた原作主人公。本作では大幅な性格改変はなく、精々がいい兄貴肌になった程度。ハルトの幼馴染みで、ハルトのことを弟のように可愛がり、信頼している。

・血の力

『鼓舞』……ギルバートの『鼓吹』にとっても良く似た力。て言うかぶつちやけまんまそれ。

・ブラッドアーツ

『破撃ノ拳打・龍』……赤い光を纏ったパンチ

『破撃ノ蹴打・竜』……赤い光を纏ったラ○ダーキック

『翔天龍』……超加速。《Maximum Jet》ともいう

『赤天竜破咬崩』……両手足に赤龍の力を乗せ、身体能力を上昇させながら乱打する技……

だったが、フェニックス戦では乱打されなかった。

『ドラゴンシヨット』……あの技。

『洋服崩壊』……あの技。

○塔城小猫

・特徴

一途純情飼い猫系ヒロイン。ぶっちゃけ現在のメインヒロイン。原作とは違い、『小猫』という名前をハルトに付けて貰った。

ハルト同様、甘いものに目がなく、甘味を巡る争いならば、たとえハルトであろうとも引きはしない。

さまざまなアプローチでハルトの気を引こうとするが、気付いて貰えなかったり邪魔が入ったりしていつも妨害されている

・血の力

『???』

・ブラッドアーツ

『???』

○姫島朱乃

・特徴

後悔苦悩系ヒロイン。虐めていたハルトに惚れてしまった罪悪感や、彼の友人であるイツセーやアーシアを襲ったのは墮天使である事が彼女を苦悩させている。

表面上はいつも通りだが、たまに笑顔の仮面が外れたり、笑顔のまま黒いオーラを噴

出させる。

若干ヤンデレと言うか、精神が不安定なところがある。

・血の力

『??』

・ブラッドアーツ

『??』

○リアス・グレモリー

・特徴

本作で追加された性格は特に存在しない。強いて言うなら幼馴染みな【女王】のせいで胃に穴が空きそうで辛い。

・血の力

『支配』：王として皆を『支』え、魔力を『配』る。自らの眷属の魔力を一時的に増幅させる。眷属ではないハルにも効果あり

・ブラッドアーツ

『滅魔ノ戯曲・巨星』：巨大質量の消滅魔力をぶつける技。原作では物語後半に出てくる技を血の力で獲得。

『滅魔ノ戯曲・流星』：消滅の魔力をグミ撃ちする技。練習すればサーゼクスのようなコントロールができる可能性も。

○アーシア・アルジエント

・特徴

リアスと同じく、特に新たな設定を組み込んでいない存在。悪魔だけど天使で最強に見える。物理じゃなくて癒しの。

・血の力

『???』

・ブラッドアーツ

『???』

○木場祐斗

・特徴

この作品である意味もつとも性格改変を受けた人。

元々原作でもホモ疑惑があつたが故に、ハルトという存在の介入によりガチホモの領域へもう片方の足を踏み入れつつあるイケメン。

でも、何がどうしてこうなった、というより、成るべくしてなったな、って感想が多分一番ピツタリだと思う。

・血の力

『祝歌』……魔ではなく、邪悪な心をもつ者に対して、絶大な攻撃力を誇り、また、一時的に味方の血の力が強化される。

・ブラッドアーツ

『聖魔ノ剣舞・煌月』…聖と魔のエネルギーを刀身に纏わせ、斬撃威力と範囲を増加させる。イメージは【朧月】

『ブレード・シールド』…剣群が連なり盾となる

『背信者の斬撃』……聖と魔の織り混ざった斬撃を飛ばす。

○ゼノヴィア・クアルタ

・特徴

開幕聖剣砲ぶっぱが大好きな脳筋【騎士^{ナイト}】。基本的には冷静で落ち着いた天然ボケな性格だが、ことハルトが絡む事柄になると、途端に臭いフェチの変態ストーカーと化す。

おっぱいのイツセー、ホモの木場、ストーカーのゼノヴィアと変態三銃士が揃ったことにより、【王^{キング}】の胃がマツハの模様。

なおヒロインではない。もう一度言う。ヒロインでは（反応ロスト

・血の力『??』

・ブラッドアーツ『??』

○ギヤスパー・ヴラデー

・特徴

原作では話が進むにつれて男を上げていく男の娘。

さほど変わった部分はない女装段ボール紙袋ヴァンパイアだけど、頼れる先輩の他にも、信頼できる友人が出来たお陰で原作よりも心に余裕が出来た。

・血の力『??』

・ブラッドアーツ『??』

アラガミ☆GIRL's

アラガミ☆GIRL'sとは、口調(特にマルドゥーク)のせいでこの僕にすらもちよ
いちよい性別を間違えられる不憚な彼女たちの愛称(嘘)であり、ここはそんな彼女た
ちを紹介する場所である。まる。

○《白狼王》マルドゥーク

・愛称『マルマル(仮)』

・担当神機『刀身：アモン(ロングブレード)』

・一人称『我輩』二人称『貴様(他人)』『主(ハルト)』

・三人のリーダー的存在で。台詞の数が最も多い。

ハルトが早く自分達の力を存分に奮える日が来るのを楽しみにしている。

人間形態では白髪ツインテールに金の瞳、白地に赤い模様のゴスロリを着用した美幼
女で、狼の耳と尻尾が生えている。

美幼女だからって、別に精神年齢が低い訳じゃなくて、とりあえず三人で違う年齢層
にしようとしてサリエル、カムランとクジを引いた結果、この姿となった。

ケモミミ幼女 m f m f。

○《魔女王》サリエル

・愛称『サーちゃん（願望）』

・担当神機『装甲：キング・リア（シールド）』

・一人称『妾』二人称『そなた（他人）』『我が君 or あなた（ハルト）』

・モデルは通常種だが、墮天種でも可。

アラガミ形態と人間形態の見た目年齢差がでなかった強運の持ち主。

人間形態では青みかかった長い黒髪に金の瞳、体のラインがよく出るスリットドレス、高めの身長を持った美女。

盾である我が身を誇りとし、ハルトにかかるすべての攻撃を凌ぎきってやると自身に誓っている。

木場の気にあてられて『腐』の属性に目覚めつつある。

○《鋼騎士》ボルグ・カムラン

・愛称『ボルちー（悪ノリ）』

・担当神機『銃身：アルバレスト（スナイパー）』

・一人称『拙者』二人称『汝（他人）』『主君（ハルト）』

・人間形態ではボブカットの黒髪に金の瞳を持つ鎧姿の女騎士。着やせするらしく、胸はそこそこあるらしい（曰く、ゼノヴィアとタメを張れるほど）

忠誠心が高く、三人の中では割りと落ち着いた部類のため、ハルトを巡る争いの際、よく漁夫の利を得ていく。

旧校舎のディアボロス プロローグ

——熱い。

まるで右腕が灼かれているように、凄まじい熱さが覆い尽くす。

——痛い。

もはや痛い、等という言葉では言い表せない痛みが、全身を突き刺す。

「は——ッ！」

息が漏れる。

僕の目には今、四つの異形が写っている。

——気高き、白狼の王。

——誇りある、鋼の騎士。

——妖艶な、魔女の女王。

——そして、形を持っていない、黒いナニカ。

その四つが、今僕を見下ろしている。
品定めするように、僕を見ている。

『これが、新しき主か』

白狼が、厳かにそう呟く。

『そのようです』

それに騎士が答え、

『あらあら、可愛いご主人様ですこと』

魔女が、妖艶に嗤う。

『そなたはどう思う？ 《紡ぎ手》よ』

白狼が問いかけるのは、黒いナニカ。

《紡ぎ手》と呼ばれたそれは、その問いに呼応して蠢く。

声は聞こえなかった。

だが、彼らには届いたのだろう。蠢きを何らかの返答とし、頷く。

『では我ら、《紡ぎ手》と運命さだめの導きにより』

『汝を我らが王とし』

『ここに、忠節の意を表しましょう』

《紡ぎ手》を中心とし、白狼、騎士、魔女が僕を取り囲む。

『我らはそなたが望んだ物』

『汝が夢見て、憧れた物』

『あなたの願いを叶える物』

囁くように、歌うように、言い聞かせるように、彼らは言葉を紡ぐ。

僕が望んだ物。

——それは力だ。ありきたりだけでも、誰かを守る力。

僕が憧れた物。

——それは武器だ。神にも届き、そして神をも下せる強い武器。

僕が願った物。

——それは超常殺しだ。僕の目の前で、僕の憧れを奪っていった超常を、この手で殺すこと。

体は依然熱くて痛くて、今にも気を失ってしまいそうで、狂ってしまいそうだけど。

それでも今、僕の中にある^想激情の炎は消えることなく、僕の胸中を焼き焦がす。
^{これ}激情は憤怒であり、悲哀であり、そして歓喜だった。

大切を奪われた憤怒。

大切を失った悲哀。

憧れを手に入れる歓喜。

『そなたに問おう』

『汝は、力を欲するか？』

『それとも、恐れを抱く？』

「——ほ、くは……………」

『その身を憤怒に染めるか？』

『その心を悲哀に沈めるか？』

『その全てを歓喜に委ねる？』

憤怒はある。

恩人で大切な、兄貴分を目の前で殺された。だから同時に、悲哀もある。

そして、憧れである力を得られる歓喜もある。

—— だったら、僕はどうする？

今、僕は三つの激情を抱いていて、それなのに頭はいたって冷静だ。

冷静だからこそ考えろ。

確かに僕は力に憧れた。でも、それで力に溺れるのは愚かなことだって、僕は知っている。実感は無いけれど、僕はそれを様々な物語で知った。

目の前で、恩人の兄貴分が血を流して倒れている。僕を助けるために、目の前の黒い超常に殺された。

そして今、僕が見ているものは、白狼でも、騎士でも、魔女でも、ナニカでもない。

今見ているものは、超常同士の戦い。

イツセー兄ちゃんを殺した、憎い黒。

そして、殺されたことに涙し、今なお僕を守ってくれている優しい紅。

黒の数は四。鴉のような翼をひろげ、空から光を撃っている。

対する紅は一人。僕とイツセー兄ちゃんを守りながら、必死に戦っている。

僕はどうしたい？

もう一度、自分に問いかける。

僕は、仇を討ちたい。

僕は、誰かが傷つくのが嫌だ。

僕は、優しい紅を助きたい。

僕は、そうだ、僕は彼女を、グレモリー先輩を助きたい!!

だから、僕に——ッ!

第1話

夢を見た。

あれは、僕が寝る前にやっていたゲームの夢だ。

荒廃した世界で、人類の天敵となった神を、人類が力をつけて逆に喰らうゲーム。

僕はそのゲームが好きで、毎日やっているし、そのゲームのストーリーで妄想したりもする。

「……………だからって、あれは無いよなあ……………」

その夢のなかで、僕はゲームの主人公だった。神機を手に、仲間と共に沢山の荒ぶる神を狩っていた。

仲間はみんな笑顔で優しく、夢の中なのに、ゲームの登場人物だったのに、軽く惚れかけた女性キャラもいたくらいだ。

……………あのおっぱいは反則だと思っただ、シエルちゃん。

……………ただその夢で、僕は……………。

「アッドエンドって、僕はいったいどんな夢を見ていたんだ、ホントに……………」

僕は夢のなかで死んだ。

しかもアラガミに食われたとかじゃなくて、事故死……………。

「普通、あれで死ぬか？ おのれエミール許すまじ。マジで」

死因：エミールが落下してきたことによる頸椎骨折。

さすがにゴッドイーターの首でも人一人の重さには耐えきれなかったようだ。

「ホント、考えれば考えるだけアホな死に方だよなあ……………。もうちよつと真面目な理由とかが良かったな、うん。それはそうとエミール、次会った時が……………つて夢の中だから無理か。くそう」

僕がそんな悶々とした感情を抱いていると、部屋のドアが開かれる。

「ハルー、そろそろ起きなさい？ 入学式当日に遅刻はしたくないでしょ？」

「うえーい……………」

そうだった。

僕こと『かみゆいハルト神結悠斗』は今日、高校生になったんだ。

「それも、あの有名な元女子高、《駒王学園》に！ あそこは元女子高で、しかも可愛い女子が多いと評判で、そして何より、『二大お姉様』なる先輩がいるそうじゃないか！

……ふ、ふふふ！ テンション上がってきた。

ベッドから起き上がり、背伸びをする。

そこで僕は、一枚の写真を目にする。そこに写っていたのは、一匹の白い小さな猫。

昔僕が拾ってきた子猫で、一時期うちで飼っていた猫だ。名前は『小猫』。だって小さかったから。

『一時期』、とつけた理由は、今はもううちにいないから。別に死んだとかじゃない。

猫というのは気ままな物で、ある日朝目が覚めたらどこにもいなかったんだ。

……あれは泣いたね。すごく探したけど、結局見つからなくてさ。

一緒に昼寝したり、結構懐いてくれると思ってたんだけど。

「いってきます、小猫」

そう言っつて、僕は部屋を出た。

その時僕はまだ、自分の右腕の異変に気づけてはいなかった。

第2話

さあ、やって来ました《駒王学園》！

右も左もどこを見ても女子ばかり！　ここは、天国か？　いいや、ここが桃源郷だ。

まずは右を見る。

そこには女子がいる。

続いて左を見る。

そこにも女子がいる。

今度は後ろを見る。

やっぱり女子がいる。

最後に正面を見る。

そこには《変態》兵藤一誠の姿が。

.....。

「フンッ!!」

「痛あ!?!　なんで今殴られたし!?!」

「うるさいよイツセー兄ちゃん。このおっぱい変態が」

目の前のこの変態は兵藤一誠。僕の幼馴染みにして、僕の人生最大の汚点である。

「お前、日に日になんか俺に対する手癖と悪口が酷くなつてないか？」

「理由が知りたいならまずは自分の胸に聞いてみてよ」

この変態のせいで、いったい僕がどれだけの被害を被つて来たことか……………。

一緒に帰るのを見られただけで悠斗×一誠なんて噂されるは、元浜先輩と松田先輩に話しかけられるだけで男女から敬遠されるわ、なんかもう、もう……………

あ、思い出したら段々腹立ってきた。シバキ倒そう。

「お、おいハル？ その握り拳はいつたいなんだ？」

「気にしなくていいよ？ 少しシバキ倒すだけだから。大丈夫、痛みは一週間くらいだ

し」

「長えよ!？」

あ、くそ逃げられた。なんて無駄に逃げ足の早い人だ。

……………まあ、でも。

「元氣そうで、何よりだよ」

癪だが、本当に癪だが、あの人は僕の恩人なんだ。

それに、あの変態的言動さえ抜きにすれば、とてもいい人なのだ。

熱血漢というか、人情に篤いというか、そういう人なんだ、イツセー兄ちゃんは。

子供のころ、苛められていた僕のために上級生に喧嘩を売ったり、溺れている子供のために川に飛び込んだり。

ホント、そういうのをもつと全面に出せばモテると思うんだよね、あの人は。

もしくは、ああいう言動を受け入れてくれる人が現れるか。

……………無理かな？　無理そうだな。



あんまり早く来すぎたもんで、入学式までまだ時間は結構ある。

誰かとしやべって時間を潰そうにも、同じ中学の連中は殆どいないかまだ来てないし、イツセー兄ちゃんには逃げられてしまったし……………。

と言うわけで、僕は今この高校の敷地内を絶賛探索中。てかこの学校、地味に広い。

さすが私立。

「うわ、林とかあんのかよ。スゲーな」

そして、その林の中にそびえ立つ、一つの建物。

ちよつと不気味。

「……………よし、戻ろう」

別に怖い訳じゃないんだ。ただちよつと幽霊とかオカルト系の話が苦手なだけなんだ。怖い訳じゃないよ？

踵を返す前に、もう一度その建物を見上げる。多分、授業で使われない限り、もうここには来ないだろう。

だって怖……………くないし！

見上げた先には一つの窓があった。

——あそこから幽霊と見えたらヤだなあ……………。

そんなことを思ったからだろうか。いきなり後ろから声をかけられる。

「あの」

「うえっひゃあい！」

思いきり飛び上がった。20cm位は飛んだ気がする。

「あらあら、驚かせてしまったかしら？ うふふ、ごめんなさいね？」

後ろにいたのは、この高校の制服を着た、長い黒髪にタレ目が印象的な、優しそうで美人なお姉さん。

多分この人先輩だ。

「あなた、一年生よね？ どうしたのかしら？ こんなところで」

「入学式までまだ時間があったので、あちこち見てたんですよ」

「そう。なにか面白いもの見つかった？」

「いえ、特には……………あ、この建物ってなんですか？ ずいぶん古いですけど、旧校舎とかですか？」

「ええ、ここは旧校舎。今は使われなくなつて、オカルト研究会が占領しているわ」

オカルト研究会……………そう聞くだけで、僕の危機回避センサーがけたましい音を鳴り響かせる。

あと目の前の先輩からも。

「うふふ、そういえば自己紹介がまだだったわね。私は姫島朱乃。三年生よ」

「どうもです。僕は神結悠斗です」

「よろしくね、ハルトくん。ところで私、ここのオカルト研究会の副部長をやっているんだけど……………」

「失礼しましたー!!」

はると は にげだした !

当たり前だ。あの流れは絶対に勧誘する流れだった。誰が入るものか、あんな恐ろしい場所!

オカルトは嫌いだ! 幽霊も嫌いだ! だって怖いもん!! 夜トイレに行けなくなっちゃう!!

ここまで来れば大丈夫のハズだ。

うん決めた。もう決めた。僕は絶対オカルト研究会になんか入らない。

絶対だからな!!



うふふふふ、可愛い一年生ですこと。

神結悠斗くん、といったかしら？ 最後の年にいい後輩ができそうですわね……………

ふふ。

それに、嫌らしい視線を向けてこないのも好感が持てますし、何よりあの表情。なんというか、そこはかとなく保護欲を掻き立てられるあの感じ……………。

なんとしてでも我が部に入れたいものですわ。

「…鼻歌。朱乃先輩、なんだか機嫌が良いですね」

小猫ちゃんにそう言われるまで、私は自分が鼻歌を歌っていることに気づかなかつた。

「ええ、なんとしてでも我が部に入れたいものですわ、彼」

「あら、朱乃が男子に興味を持つなんて、どういう風の吹き回し？」

今度は私の幼馴染みの親友であり、私の主であるリアスが少し笑いながらからかうように言ってくる。

「心外ねリアス。私は別に男嫌いな訳ではないのよ？」

「…それで朱乃先輩。その人の名前はなんて言うんですか？」

私の袖をくいくいと引っ張りながら、小猫ちゃんが訪ねてくる。

「確か、神結悠斗と言っていたわ」

その時、その名前を聞いた小猫ちゃんが一瞬固まった気がした。

第3話

色々と身の危険を感じた入学式から数日が足ったある日のこと。

「(ハハ)は……………ど(ハハ)?」

僕は道に迷っていた。

別に方向音痴とかではない。ただ……………。

「姫島先輩ほんと、なんであんなにエンカウントするかなあ……………」

あの先輩、神出鬼没過ぎる。朝校門でバッタリであったかと思うと、休み時間にトイレ前で鉢合わせ、放課後図書館に行けば出くわし、帰ろうとしたら昇降口で声をかけられる。

それだけならいい。むしろ二大お姉様の一人にそれだけ会うから、どちらかと言えばラッキーと言えるだろう。

だけど、二言三言目には大体が勧誘なのだ。

だから入らないっての。

最近の流れは、出会う↓挨拶する↓勧誘される↓逃げる(ダッシュ)。

という具合。そして今日は逃げる時間が長かった。なんであんなに足早いのか。胸とか邪魔にならないの？

まあなんとか勝てたけども。

けど僕？ 火事場の馬鹿力はあるなときに出さなくていいからね？ ビックリしたよ。だってジャンプしたら、人一人飛び越えられるくらいの高さだったんだもん。あのまま二段ジャンプもできそうな気がした。

ちよつと話がそれたから、話を戻そう。

僕は今完全に迷っていた。

学校の中じゃない。校外でだ。生まれたときから住んでる町だけど、学園周辺にはあまり来たことがなくて、だからここがどこなのか良くわからない。

この町、結構広いんだよなあ。シヨツピングセンターはあるし、学校も小学校から大
学まで揃ってるし、なんか山とか、丘の上に教会まである。

ちなみにあの教会。すでに無人の廃教会で、さうとう廃れている。

だから僕は子供の頃の一回しか行ったことが無い。

「うーん……………どうしたものか」

「どうかしたのかしら？」

「ちよつと道に迷ってしまつて……………ん？」

座りながら頭を抱えて悩んでいると、頭上から声をかけられた。

「一瞬、姫島先輩かと思つて体が硬直したが、顔を上げるとそこに会つたのは紅だった。えつと……………」

「あら、私を知らないのね。自惚れる訳では無いけれど、割りと有名だと思つていたのに」

「すみません。どうも人の顔とか名前を覚えるのが苦手です」

「謝らなくていいわ。そもそも初対面で馴れ馴れしかった私が悪いのだし。」

「始めまして、私はリアス・グレモリー。あなたが神結悠斗くんね？」

「はい、そうです……けど、なんで知ってるんです？」

「そこまで目立つ何かをやらかし……………てるなあ。姫島先輩関連で特に。」

あの先輩とイツセー兄ちゃんのせいで、僕は男女から少し敬遠されているのであった。

「って言うか、リアス・グレモリーって姫島先輩と並ぶ二大お姉様じゃないか!! 难道う、凄いレア体験してるはずなのに嫌な汗が吹き出してくる。」

「あなたの事は朱乃から聞いているわ。なんでも、朱乃に勧誘されては逃げているそうね」

「やっぱりそっち繋がりか!! そうだよな! なんかやつぱさういうのって繋がりあ

るよな！

「オカ研、私が部長なのだけと、やっぱり入らない？」

「入りません」

即答した。当然だ。

だつて怖いもん!!

「そ、即答なのね……………。わかつたわ、ひとまず諦めるけど、いつでもおいでなさいな」

「気が向いたら行きます」

「その返答はなんか来なさそうね……………」

その後、僕は道を教えてもらい、帰路に着いた。

しかし別れ際、何か紙を渡されたんだけど、なんだつたんだろう？

——貴方の願いを叶えます。

……………流石オカ研。オカルトチック。

よし、捨て……………。たらバレたときに殺されそうだから、これは部屋の机の中に嚴重封印をしておこう。

それにしても、

「お腹、空いたなあ……………今日の晩ごはんなんだろう？」

僕は今、物凄く、

——オナカガスイテイル。

何だって食べられそうだ。最悪コンクリートでも……………無理だな。



あの子が、神結悠斗くん。

確かに朱乃の言う通り、無性に可愛がりたくなる雰囲気纏っていたわね。弟、といった感じかしら？

でも、あの気配はなに？ 人間の気配ではあるんだけど、なんとというかこう、人ならざるモノの気配が混じっている気がした。

神性に近い、けど神聖なモノでは無い気配。かといって、悪神や邪神のような神性とも違う。

……………まさか、セイクリッド・ギア 神器？

だとしたら、朱乃に感謝ね。彼女が見付けてくれなかったら、私は彼の存在に気付かなかったはず。

最初はビックリしたわ。なんせあの朱乃が男子に興味を持つんですもの。

それだけじゃなく、部活への勧誘まで始める始末。我が部に勧誘することはつまり、悪魔への勧誘と同義。あの子がそれをわからないはずがないから、多分、彼の神器に気づいてやっていたのだろう。

……………多分、そのはず、よね？

まあ、とりあえずこれで、この学園で見つけた神器持ちは二人。

ハルトくんへの挨拶は済ませたから、後一人ね。どうアプローチをかけた物か……………。

後、朱乃にはどういう心算だったのか問い詰めるとしよう。

そういえば小猫も、彼の名前を聞いた時からなんだかそわそわしていたわね。

第4話

なんだろうか。最近、体の様子がおかしいんだ。

いや、調子はいいんだ。むしろこれ以上に無いくらい調子が良い。

走れば疲れない上に、多分50m走れば四秒くらいは出せそうな速度だし、助走を付けない垂直跳びで1m近くは飛べるし。

力加減を間違えると手に持つてるものまで壊してしまいそうだ。この力でイツセー兄ちゃんにパンチ噛ますのを堪えた僕を褒めて欲しい。フツーに死んじやう。

これでも何かおかしいんだけど、それ以上にお腹が空くんだ。

どれだけご飯を沢山食べても、1、2時間後には凄い空腹感が襲ってきて、このままじゃ餓死してしまいそうになるくらい。

今のところガムや飴玉を口に入れておくと、なんとか誤魔化せるんだけど、これがいつまで持つかは判らない。

……………僕の体、いったいどうしちゃったんだろう。

ああそれと、喜ばしいんだけど、なんだか素直に喜びたくない情報が一つ。

——イツセー兄ちゃんに彼女ができました。

……………爆ぜろリア充。ぺっ！

なんでも、相手から告白されたらしく、この前僕や元浜先輩、松田先輩に見せつけていた。

だから、

『この子が俺の彼女、天野夕麻ちゃん』

『え？ UMAちゃん？』

なんて、その人に失礼な返答をしてしまうくらい僕たちは現実を直視できなかった。

なんであんな変態が、あんな可愛い人と付き合えるんだよ。神様は理不尽だ。

……………まあでも、所々格好いい人だから、あのUM……………失礼、天野さんも、きつとそういうところに惹かれたんだろうな。

うん、そう考えると納得。応援しよう。

さて、お腹も空いたし、欲しい物も買ったから帰ろうか。どこに姫島先輩が潜んでい

るとも限らないし。

……………最近、変に意識しすぎている気がする。自意識過剰なのかな、僕。



……………結局、鬼ごっこが始まってしまった。くそう、なんであんなに目敏いんだ。確かに僕が先に見つけたけどさ。でもちやんと隠れたし……………。

しかし凄かった。美人って、休日のデパートでも目立つんだね。

しかも大声で名前を呼ぶもんだから、周囲の視線が痛かった……………。

だがしかーし！ 最近の僕を侮っては行けない！ お腹は空くけど、体の調子はすこぶる良いんだ。いくら姫島先輩が男子顔負けの運動能力を誇っていても、今の僕に追い付けるはずが無いのだよ！

——グウウウウ……………。

あ、お腹空いて死にそう。

口に何が入れなきゃ……………あ、駄目だ。ガムも飴玉ももう残ってないや。買い忘れ

てた。

どうしよう………そういえば、この近くに公園があったっけ。水でも飲めば少しは落ち着くはず。

………あれ？　なんだろう？　なんか、視界がぼやけて………



俺、兵藤一誠は、ついさつきまでこの十六年の人生の中でもっとも幸せな時間を過ごしていた。

可愛くて明るくて、そして何よりおっぱいの大きな、生まれて初めての彼女、天野夕麻ちゃんとデートをしていたんだから。

楽しかったなあ。買い物したり食事したり。

ありきたりだけど、精一杯考えた俺なりの最高のデートだった。

『だった』と、なぜ過去形なのか？ それは今、目の前の夕麻ちゃんが、夕麻ちゃんじゃなくなっているから。

姿も服装も夕麻ちゃんだけど、言動と、何よりその背中から生えている黒い翼が、夕麻ちゃんが人間ではないことを如実に物語っていた。

「夕麻……………ちゃん？」

正直、まだ理解できていない。

だって、彼女の口から「死んで」なんて言葉が出てくるなんて……………。

「楽しかったわ。あなたと過こしたわわずかな日々。初々しい子供のままごととに付き合えた感じだった」

冷たい声音で、冷笑を浮かべながら、妖艶に彼女は言った。

彼女は手に光を集める。

その光は、重たい音を響かせながら、形を作っていく。その形は槍のようで。

「バイバイ、イツセーくん」

そしてそれを、彼女は降り下ろした——。

だが、

『グルギヤアアアアアアアア!!』

そんな、獣のような声を上げる、黒い人影によって、その光は『補食』された。

「そんな！ 私がの光が！ 何者!?!」

補食したのは、黒い人影。

そう、黒だ。それも、絵の具のような黒ではない。どこか生物的で、生々しい、焦茶

に近い黒。

その黒が、人の体の右半分を覆っている。

そして、人間の部分を残す左側は――。

「――ハル？」

俺のよく知る、大切な弟分が、まるで腹を空かせて獲物を見つけた獣のように俺達を見ている。

『オナカ……………スイタ……………タバモノ、ヲ……………タバモノオオオオオ!!!』
そう叫びながら、血走った目でハルは俺達に襲いかかってきた。

ハル、どうしちまったんだよ、お前！

第5話

『タベモノ、タベモノ、タベモノ……………オナカ、スイタアアアアア!!!』

半狂乱になりながら、ハルは俺達に襲いかかる。

いや、正しくは夕麻ちゃんに、だ。

俺の事を視界に入れつつも、なぜか素通りしていった。

「く、来るな、化け物め!」

夕麻ちゃんが光の槍を次々に連続で投げるが、その全てが退けられるか『喰われる』かのどちらかだ。

「なんで攻撃が当たらないの!?! なんで、なんで喰われるの!?!」

夕麻ちゃんが空を飛びながら攻撃する。

そしてハルが、人間とは思えないような身体能力を駆使して、空を跳ぶ。

ハル……………ハル……………、

「ハルッ!!」

気がつけば、俺は駆け出していた。逃げるためではない。ハルを、大事な弟分を止め

るため。

ハルの身に何が起きているのかは判らない。でも、あのままじゃ駄目だって、なぜか理解できている。

「おいハル！ お前いつたいどうしちまったんだよ！ ハルッ！」

呼び掛ける。爆ぜた地面から飛び散った石が体を掠め、皮膚が裂ける。

それでも俺は、ハルに手を伸ばす。

「ハル、どうしたんだよ！ 何が起きてる！」

ハルの左手を掴み、こちらに引く張る。

——なんだこれ！ ビクともしねえ！

まるで石を引っ張っているような感覚だった。

その時、呼び掛けが届いたのか、ハルの動きが止まった。

そして、俺の方を向き、口を開く。

—— ツ!!

『……………イツセー、ニイ……………チャン?!』

一瞬、喰われると思ってしまった自分を殴りたい。

目は血走り、息遣いも荒く、視線の焦点もあつていないようだけど、それでもハルは、俺の名前を呼んだ。

「ああ、そうだ、俺だ、イツセーだ！ ハル、目を覚ませ！ お前に今、何が起きてるんだ!？」

恐怖心なんか一切無かった。

ただただ、コイツを止めなければと言う思いしか、俺には無かった。

——
だから。

—— 背後の動きに気付かなかった。

後ろから、強い衝撃を受けた。

続いて、口から水のような物が溢れる。

それを俺が血だと認識するより先に、膝の力が抜けて崩れ落ち、痛みを通り越した熱さが襲い来る。

俺の腹を貫いていたのは、先ほど夕麻ちゃんが持っていた、光の槍。

触れようとすると、槍はふつ、と消え去った。

ポツカリと開いた穴から吹き出る、赤い紅い、俺の血。

それが、地面と、ハルの体を汚していく。

「とんだ化け物の乱入があつたのには驚いたけど、予定通りあなたを殺せて良かったわ。

ゴメンね？ あなたが私たちに取って危険因子だったから、始末させてもらったわ。恨むなら、その身に神セイフリッド・ギア 器を宿らせた神を恨んでちょうだいね」

セイ……………なんだって？

よく判らない事をいって、彼女は俺を見下ろす。

意識が遠くなる。腹の痛みはもう無い。

俺、死ぬのかな？ マジかよ……………人生半分にも満たない年齢で、ロクに親孝行もせず、しかもあんな状態のハルを残して、俺は死ぬのかよ……………。

ああ、明日の学校、どうなるのかな？

松田や元浜は驚くだろうか？ 泣くのかな？ いやまさか、あいつらに限って

……………。

お袋、親父……………最後までどうしようもねえスケベ馬鹿でゴメン。

あと、自室のエロ本が見つかるのもシヤレになんねえ。

そして、何より……………。

『イツセー、ニイチャン？ ドウシタノ？ ネエ……………ねえ、イツセー兄ちゃん！』

———— あんな泣きべそかいてるハルを置いて死ぬなんて……………。

なけなしの気力を振り絞って、俺はハルに手を伸ばす。その手は血に濡れて、紅く染まっている。

「ハル……………お前はほんと、泣き虫だなあ……………」

「イツセー兄ちゃん！ なんで？ ねえ、なんで!？」

「ゴメンなあ、ハル。俺、もう……………」

「嫌だよ、兄ちゃん……………嫌だ、置いていかないで、僕を、ハルを置いていかないでよ、お兄ちゃん!!」

ああ、懐かしいな、その呼び方も。

泣きじやくるハルが俺の名を呼ぶなか、俺の意識は本格的に遠くなっていく。

そんな状態で俺の脳裏に浮かぶのは、一人の女の子。

紅い髪をした、年上の美人。

どうせ死ぬなら、あの人の胸で……………つて、俺は最後の最後までいったい何を考えているんだろうか。

……………畜生、薄っぺらな人生だったなあ……………生まれ変わるなら、俺は……………。

途切れる意識の瞬間、俺の得た情報は三つ。

一つは、泣き叫び、獣の咆哮をあげるハルの声。

二つ目は、先ほど浮かべた、紅い髪。

そして三つ目は、

「あなたね、私を呼んだのは」

そんな、女の子の声だった——……………。



——僕は今、どこにいるんだろう？

ここは真つ暗だ。何も無い。

覚えているのは、デパートでエンカウトしてしまった姫島先輩から逃げるために鬼ごっこを繰り返して、なんとか撒いたあと、水を飲んで空腹を紛らわすために、公園へ向かったところまで。

そこからの記憶は無い。

ただ一つ言えることは、

—— お腹が、空いていない。

どころか、ここは暖かくて、心地よくて、全てを委ねてしまいそうになる。

そんな時、

『おいハル！ お前いつたいどうしちまったんだよ！ ハルツ！』

イツセー兄ちゃんが必死に僕を呼び掛ける声が聞こえた。

そして、視界が明るくなっていき、一番最初に目には言ったのは、

『……………イツセー、ニイ……………チャン？』

焦ったような表情をしたイツセー兄ちゃんが、僕の手を握っていた。

何があつたのか聞いてくるけど、それは僕にも判らない。むしろ聞きたいくらいだ。

ふと、イツセー兄ちゃんの後ろに視線を向けるとそこには、黒い翼を生やした天野さんが。

天野さんはこちらを何とも言えないような目で見ていて、しかも中に浮かんでいる。

……………やっぱりUMAちゃんじゃないか。

混乱している頭が、そんな割りとどうでもいい事を考え付かせる。

そして、僕が今の状況を尋ねるために口を開いた瞬間——。

イツセー兄ちゃんが、死んだ。

光の槍のような物で腹を貫かれ、沢山の、ほんとに沢山の血を流して、倒れた。殺したのは目の前の天野さん。さっきら何か訳の判らない事を言っている。

僕は泣きながら、イツセー兄ちゃんにすがり付く。

嫌だよ、死なないでよ、イツセー兄ちゃん！

そんな僕に、兄ちゃんは優しく話しかける。

そして、

そして、

そして、

兄ちゃんの体から、力が完全に抜け落ちる。

一瞬だけ、紅い光と誰かの声が聞こえた気がしたけど、そんなことはどうでも良かった。

ただ一つ、僕がするべきは、

目の前の敵を、喰イ殺スツ!!

『アアアアアアアアアアアアアアアア!!』

ただど次の瞬間、僕の四肢は地面に縫い付けられた。

「悪いけど、複数人だかららせてもらおうわ、得体の知れない化け物さん?」

目の前には、天野さんだった、やたら露出度の高い服を着た女の人。そして、もう三つの黒い翼を持つ人達。

その四人が、光の槍を手に、僕に歩み寄る。

しかし、

「ダメよ。彼はやらせないわ。彼が死んだら、朱乃が悲しむもの」

そんな四人の前に立ちはだかったのは、紅だった。

「あなたがなんでそんな姿になっているのかは判らないけれど、今はまだ深くは聞かないわ。今は、ね。」

さて、墮天使達？ よくも私たちの縄張りで好き勝手やってくれたわね。高くつくわよ？」

——そして、超常同士の戦いが始まった。



驚いたわ。

いきなり《王》である私が呼び出された事もだけど、なによりも転移したその先の光

景に。

そこにいたのは、四人の墮天使と、セイクリッド・ギア神器持ちとして目をつけていた、男子生徒（死にかげ）。

そして、異形の姿をして涙を流し叫んでいる、朱乃のお気に入り、神結悠斗くん。

私は彼を守らなければいけない。

朱乃が悲しむ姿はもう見たくないし、なにより、

「よくも私たちの縄張りで好き勝手やってくれたわね。高くつくわよ?」

この落とし前は、つけさせなくては――。

でも、流石に4対1は厳しいかしら? 困ったわ。

第6話

くっ、流石にキツイわね。朱乃でも呼んでくれば……………つてそういえば朝から彼女、いなかったわね。

「あははは!! どうしたのかしら、紅髪の悪魔! 流石のグレモリー家でも、多勢に無勢のようね!」

「そう思うんだったら、三人くらい帰してもいいんじゃないかしら?」

そろそろ、軽口を叩けるほどの余裕も無くなってきた。致命傷は負っていないものの、光は悪魔にとつて猛毒だ。掠っただけでも全身を焼くような痛みが走る。

「ねえ、グレモリーの悪魔? どうしてあなたは、その化け物と、死にかけを守っているのかしら?」

セイクリッド・ギア
神 器 持ちの少年……………兵藤一誠と、ハルト君を指差しながら、堕天使の一人が尋ねてくる。

はっ、笑わせてくれる。

「そんなの、私たちの縄張りの住民で、同じ学園の後輩だからよ!!」

それに、彼らは死なせない！ 滅びなさい！！」

私は空に向けて、特大の魔力を放つが、それは空中を飛ぶ彼らにとつて避けやすい。またもアツサリと避けられてしまう。

「グレモリーは情愛が強いとは聞いていたけれど、まさか眷族以外にもその愛を向けるとはな」

「勘違いしないでもらえるかしら、堕天使。私たちグレモリーは、眷族への愛が強いのではない！ 私たちは、自分の家族への愛が強いのだよ！」

もう一度、今度は連射式に魔力を打ち出す。

「家族？ はっ！ 笑わせないで！ いくら同じ学舎に通つていようとも、そいつらは結局赤の他人じゃない！ 悪魔が綺麗ごとやんじゃないわよ！」

光の槍が更に数を増して降り注ぎ、徐々に防御魔方阵が削られていく。

「そろそろ、決めて上げるわ！」

四つの光の槍が1ヶ所に集まり重なり、混じりあい、その質量と大きさを増していく。「これで終わりよ！ 光に飲まれて消えなさい！ 紅髪の悪魔！！」

その極大の光の槍、まさに上級堕天使が放つような光の槍が、私に迫り来る。

これは、まずい……………つ！

防御を咄嗟に止めて、私は回避行動入ろうとする。

しかし、

「避けていいのかしら？ 後ろの二人に当たるわよ？」

「卑怯な！」

……………ああ、ここまでか。

そんな、諦めの言葉が口から漏れてしまう。

……………ゴメンなさい、朱乃。彼を守れなかったわ。

……………ゴメンなさい、小猫。あなたをこれ以上守ってあげられなくて。

……………ゴメンなさい、祐斗。また、復讐の対象を増やしてしまった。

……………そしてゴメンなさい、二人とも。あなた達を巻き込んだ上に、守れなくて。

そう思うと、眦から涙が溢れ落ちる。

———そして、私の視界を、光が覆った。

だが、

「グレモリー先輩ッ！」

突如として、私の視界が開けたのだった。



彼らは語る。

僕を見定めて、仕えるかどうかを決めるためにも

『これが、新しき主か』

彼らは結論する。

その答えを。

『では我ら、《紡ぎ手》と運命さだめの導きにより』

『汝を我らが王とし』

『ここに、忠節の意を表しましょう』

そして詠う。

『我らはそなたが望んだ物』

『汝が夢見て、憧れた物』

『あなたの願いを叶える物』

囁くように、歌うように、言い聞かせるように、彼らは言葉を紡ぐ。

僕が望んだ物。

——それは力だ。ありきたりだけでも、誰かを守る力。

僕が憧れた物。

——それは武器だ。神にも届き、そして神をも下せる強い武器。

僕が願った物。

——それは超常殺しだ。僕の目の前で、僕の憧れを奪っていった超常を、この手で殺すこと。

体は依然熱くて痛くて、今にも気を失ってしまいそうで、狂ってしまいそうだけど、それでも今、僕の中にある想いの炎は消えることなく、僕の胸中を焼き焦がす。

これは憤怒であり、悲哀であり、そして歓喜だった

『そなたに問おう』

『汝は、力を欲するか？』

『それとも、恐れを抱く？』

「——ぼ、くは……………」

『その身を憤怒に染めるか？』

『その心を悲哀に沈めるか？』

『その全てを歓喜に委ねる？』

憤怒はある。

恩人で大切な、兄貴分を目の前で殺された。だから同時に、悲哀もある。

そして、憧れである力を得られる歓喜もある。

——だったら、僕はどうする？

今、僕は三つの激情を抱いていて、それなのに頭はいたって冷静だ。

冷静だからこそ考えろ。

確かに僕は力に憧れた。でも、それで力に溺れるのは愚かなことだって、僕は知っている。実感は無いけれど、僕はそれを様々な物語で知った。

目の前で、恩人の兄貴分が血を流して倒れている。僕を助けるために、目の前の黒い超常に殺された。

そして今、僕が見ているものは、白狼でも、騎士でも、魔女でも、ナニカでもない。今見ているものは、超常同士の戦い。

イツセー兄ちゃんを殺した、憎い黒。

そして、今なお僕達を守ってくれている優しい紅。

黒の数は四。鴉のような翼をひろげ、空から光を撃っている。

対する紅は一人。僕とイツセー兄ちゃんを守りながら、必死に戦っている。

僕はどうしたい？

もう一度、自分に問いかける。

僕は、仇を討ちたい。

僕は、誰かが傷つくのが嫌だ。

僕は、優しい紅を助けたい。

僕は、そうだ、僕は彼女を、グレモリー先輩を助けたい!!

それだけじゃない！僕は超常に奪われた！今日のこと、超常はどこにでもいるんだって僕は知った。

これからもきつと、超常は僕達の大切を壊していく！だったら、だったら僕は！

「奪われたくない！失いたくない！僕に力をくれるでしょ？くれよ！僕の大切を守るだけの力をさ！くれよ！君たちの全てを——ツ！」

僕に、くれよ!!

『よかろう！そなたの想い、しかと受け取った!』

『ならば我ら、王と騎士の誇りにかけて!』

『あなたに、神喰いの力を授けましょう!』

右腕の熱さが全身に広がる。

でもそれは、さっきまでの苦痛の熱さじゃない。

心の底から、体の奥から駆け巡る、熱い熱い激情の炎だ。

「お、おお……………」

口から声が漏れる。

押さえつけることなんか出来ない。

「うおおおおおおおおおおおお!!」

故に叫んだ。想いの限り、激情に任せて、雄叫びを上げた。

『さあ呼べ!』

『我らの名を!』

『あなたの神機武器を!』

『『今ここに、《神を喰ゴッドらう者イーター》が生まれる!!』』

「来いよ、《マルドウーク【アモン】》!

《ボルグ・カムラン【アルバレスト】》!

《サリエル【キング・リア】》!

それは、僕がゲームの中で使っていた装備だった。

右腕に黒い腕輪が現れ、そこに飲まれるように、僕の黒い部分、アラガミ化した箇所

が消えていく。

「いくよ、神機!!」

体に迸る熱さのままに、僕は駆け出した。

目指すは目の前の、グレモリー先輩を殺しかねない、光の槍。

それを、

「グレモリー先輩ッ!」

先輩を後ろに引きながら、下から神機を切り上げる。

初めて使う武器だけど、不思議なくらいに手に馴染む。

そして、これで何ができるのかも。

「ブラッドアーツ発動!」

使うのは、走り込みから打てる技。

「【ドライブ・ツイスター】!!」

切り上げる。

槍と剣が拮抗したのはほんの一瞬。

まるで、柔らかいものに刃を通した時のように、アッサリと光の槍は切り裂かれた。

僕は、空に浮かぶ四つの黒を見据えながら口を開く。

「お仕置きの時間だ。」

——泣いて悦べ、クズども」

………僕って、怒ると結構口が悪いかも知れない。

え？ 今更だつて？

第7話

体が軽い。今なら、なんだってできそうな気がする。

「なんなの……………なんなのよ、お前はー」

天野さんだった……………えっと、墮天使？ が僕を指差して喚き散らす。他の三人は啞然とした表情で固まっている。

「いや、そんなこと僕に言われてもね」

正直、僕にも何がなんだか全くもって分からない。

何故、僕は神機を持っているのか。何故、ゲームの事が現実になっているのか。

分からないことだらけだ。さっきから目の前で、と言うか、今自分が置かれている状況すら分からないのだから。

でも、そんな中でも分かっていることが幾つかある。

「グレモリー先輩。イツセー兄ちゃんは、助かるんですよね？」

僕はグレモリー先輩に、振り返らずにそう訪ねる。

「え、ええ。今からすぐに取りかかれば、彼は息を吹き返すわ」

「じゃあ、早くやってください。僕はこれから、アイツらの相手をするので」
「む、無茶よ！ 一人でなんて！」

「だったら、イツセー兄ちゃんを治療して、参加したらいい」

ひどく冷静だ。体は燃えたぎるように熱くて、鼓動はこれまでに無いほど脈打っているのに、心はまるで静かな水面のように穏やかだ。

「目標変更よ！ さっきのガキより、こいつの方が危険だわ！」

「「はっ！ レイナーレ様！」」

ああ、天野さんじゃなくて、レイナーレっていうのか、あの破廉恥女。
臨戦態勢を取る彼ら。

それに答えるように、僕も神機を構える。

「いくら特殊な神セイクリッド・ギア器を持っていようとも、空の私たちには届かないわよね、翼を持たない化け物さん？」

光が放たれる。それは凄まじい速度で、それはもう、人間の目では追うことの出来ない速度でここまで来るが、僕にはそれが見えていた。

だから、今度は切り裂くのではなく、性能を確かめるために装甲を展開した。
直後、とてつもない重さの衝撃と、耳をつんざくような爆音が響く。

だが、それだけだ。

僕には一切の被害がない。

「ええい、小賢しい！」

今度は光が次々と射たれてくるが、今度はそれを切り払い、躲し、受け止める。

「なんで当たらないのよ！」

「じゃあ今度は、僕の番だね、墮天使」

神機の形態を変化させる。

今度は剣でも盾でもない。それは銃だ。それも、スナイパーライフル。

僕はそれを持ち、狙いを定める。

まずはむさ苦しい男からだ。

「墜ちろ！」

強い反動が手に伝わった瞬間、男墮天使の右の翼が吹き飛んだ。

「ぐああああああ!!」

「ドーナシック!? 貴様！」

「やめろ! ミッテルト! 一人で先走るな！」

男がやられたのを見て激昂した金髪ツインテールの墮天使が、僕めがけて突進してく

る。

それを見据えながら、僕は神機を大上段に構える。

「ブラッドアーツ、発動」

このモーションから放たれる技は一つだけだ。だが、その一撃は、ロングブレードのブラッドアーツ中、上位の威力を誇る。

「ゼロスタンス派生」

刀身に紅いオーラが纏われ、墮天使が射程圏内に入った瞬間、僕は神機を勢いよく降り下ろした。

「落花ノ太刀・紅」!!」

放たれた巨大な斬撃は、轟音と共に墮天使を飲み込み、その黒い羽根を舞い散らせる。刀身からオーラが消えたとき、そこには白銀の刃と、辺りに散らばる黒い羽根しか残っていないかった。

「そんな……………ミッテルトが、一撃で……………」

殺した。

僕は今初めて、命を奪ったんだ。

人じゃなかったけど、憎い相手だったけど、僕は今、命を殺した。

だけど不思議なことに、その事に対する感慨は、全くと言っていいほど無かった。まるで、そういった部分を無くしてしまっただかのように。

「……………次は、どっち？」

自分でも驚くくらい、低くて冷たい声でした。

それで怯んだのか、レイナーレが唇を噛み締める。

「くっ、退くわよ、カラワーナ、ドーナシーク。体勢を立て直さない限り、今の私たちじゃあの化け物に殺殺されてしまうのがオチよ」

「そんなっ!」

「落ち着きなさい。大丈夫、ミッテルトの仇は必ず討つわ。でもまずは、ドーナシークを治療しなくては」

「……………申し訳ない」

話し合いが終わると、レイナーレはこちらを向く。

「名前を覚えてもらえるかしら、化け物さん」

「……………ハルト。神結悠斗」

「そう。なら神結悠斗。今日は引いて上げるわ。でも、次に会ったときがあなたの最期よ、化け物」

そう言つて、彼らは飛んでいく。

正直、あれくらい距離なら充分届くのだが、さつきから体に力が入らなくなっている。

多分、体力を使いすぎたんだらう。退いてくれて良かった。あれ以上戦っていたら、

こつちが死んでいた。

だから、ホツと一息着いた瞬間、緊張が一気に解けて、全身から力が抜けて崩れ落ちる。

……………あ、ヤバイこれ気絶する。イツセー兄ちゃんが無事かどうか確認してないや。

まあでも、グレモリー先輩が大丈夫って言ったから、大丈夫なんだろう。

僕もちよつと、眠ろうかな……………。

……………ん、？　ちよつと待つてよ？　さっきのアイツら、墮天使使つて言つてたよね？

それに、グレモリー先輩を悪魔だつて。しかも聞いた感じ、何かを比喻したり揶揄したりしている感じではなかった。

ってことは、つまり……………、

本物の悪魔？ AKUMA？

……………。

「きゆう。ごぼごぼ……………」

意識が途切れる最後、グレモリー先輩と姫島先輩と、もう一人、誰かの声が聞こえた気がした。

悪魔、怖い。



全く、本当に驚かせてくれるわ、この子達は。

まず、今目の前で横になっている兵藤一誠くん。見た目は普通の、どこにでもいるような子なのに、まさか転生に『兵士』の駒すべてを使いきってしまうなんて。どれ程のポテンシャルを秘めているのやら。

そして、何より驚いたのは彼、神結悠斗くんだ。見た目で言えば兵藤くんよりひ弱そうで、どちらかと言えばギヤスパーに似た雰囲気を感じる印象だったのだけれど、それもさっきの戦いで覆されたわ。

今は、途中から駆けつけた眷族達の、朱乃と小猫に介抱されているけれど、彼のポテンシャルは恐らく、転生させようとしても、ミューテーション・ビースト変異の駒でなければ無理でしょうね。

……………全く、面白い子達ね。明日からが楽しみだわ。

第8話

……………。ゴンッ！

「あだあ!？」

ベッドから落ちて頭を強打することで、僕は目を覚ます。痛い。

「うう……………クラクラする……………」

打ち付けた頭頂部を押さえながら、僕は時計に目をやる。時間は六時前。

お母さんは起きているだろうが、いつもなら僕もお父さんもまだ寝ている時間帯。

「……………僕、いつの間にベッドで眠っていたんだろう?」

何か夢を見ていた気もするが、よく思い出せない。

あと昨日の事も。

寝ぼけた頭が覚醒しきらない状態で、僕は昨日の事を思い出そうとする。

「確か昨日は、デパートで買い物して、姫島先輩に追いかけて、それから……………」

そこから先は少し曖昧だ。

もの凄くお腹が空いていた事は覚えてるし、何か怖い思いをしたことも覚えてる。

でも、いったい何が……………。

「ん？」

そこで僕は、右腕に違和感を覚える。

なんとなく重さを感じた右腕に目を向けると……………。

「え？」

そこには、見覚えのある、大きな黒い腕輪。

……………つてことは、待てよ？ あ、ちよつと思いついて来た。

四つの黒。生臭い赤。優しい赤。そして、腕輪と武器。

「……………あああああ!？」

思い出した。昨日の事全部。

まるで現実味の無い現実。むしろ夢だと言われた方が安心できる出来事。

そしてこの手で握った、

「神機……………」

その握りの感触はまだ生々しくこの手に残っている。

心臓が高鳴る。

本物の悪魔や墮天使に出会った恐怖と、憧れていた武器を握った興奮。

「来い、神機」

その高揚のままに、神機を呼ぶ。

すると、眩い光が迸り、ズシリとした心地よい重さが右手にかかる。

そのまま光が薄れると、僕の右手には昨日と同じ神機が握られていた。

「スッゲー！」

僕は無邪気に喜んだ。

大好きなゲームの、憧れた武器。

「あ、でもどうやってこれ消すんだろ」

とりあえず、漫画とかでよく見るように、強く念じてみた。

「あ、消えた。やってみるもんだね、何事も」

腕輪が消えたことに安心して、僕は伸びをする。

「よし、早起きは三万の得って言うし、起きるか！

………三万？　なんか違う気がする」

そんな割りとうでも良い独り言を呟きながら、僕は部屋を出た。

たまにはお母さんの手伝いでもしようかな。



……さて、今起きたことをありのままに話そうか。

玄関を出ると、微笑みを浮かべた美女姫島先輩が立っていた。

何を言っているか分からないと思うけど、僕も分からない。

つてか、なんでここにいるのさ。なんで僕ん家知ってるのさ。

拳げ句、

「おはようございます、ハルトくん」

なんて、天女の如き笑顔でそう言うもんだから、それを見た両親がてんやわんやの大騒ぎ。

やれハルに春が来ただの、やれよくやったぞ息子よだの、好き勝手に軒先で大騒ぎする始末。

やめて近所迷惑だから！ あとお母さん寒いから！

「ほら、行きましようっ」

そしてここで止めの一撃である。

……あ、さよなら。僕の平穏な My lifeよ。これから騒がしくなりそう
だ。

泣きたい。

だけどオカ研には絶対に入らない！ 絶対に、絶対にだからな！！
フラグじゃないぞ！！

あと姫島先輩、笑顔がとても素敵怖いです。



ああ、そんな顔を見せられると、もっと虐めてしまいたくなりますわ。ふふ、可愛い子。

それに、リアスから聞いた話によると、彼、堕天使を一人倒したようなね。
見かけによらず強い子ですこと。やっぱり目をつけて正解でしたわ。

今日は兵藤一誠さんと一緒に部室へお招きするから、そのときの反応も、凄く楽しみですわ。ふふ、ゾクゾクしてしまいます。

ああ、早く放課後にならないかしら。



ようやく放課後になった。

今日は一段とみんなの視線が痛かった。だって、入学して間もない一年生の僕が、清楚で大和撫子と名高いあの姫島先輩と肩を並べて登校してきたのだから。

よし、逃げよ帰ろう。姫島先輩に捕まる前に！ グレモリー先輩に見つかる前に！ これ以上は僕のS A N値が大変なことになってしまおう！

と思つてたら、

「君が、神結悠斗くんだね？ ちょっと一緒に来てもらえるかな？」

なんかイケメンに捕まった。

あ、この人知ってる。王子様って呼ばれてる先輩だ。確か……………き、き、木田？
なんかそんな感じの名前だったはずだ、うん。

「初めまして、僕は木場祐斗。部長……グレモリー先輩から君を呼んで来いとの話だからね」

木田じゃなかった木場だった。良かった、口に出さなくて。

って待って!? グレモリー先輩からのお呼びだし!? 字面だけ見たらなんか素晴らしい事のように感じるけど、あの人が本物の悪魔だとわかった以上、僕はあの人に関わりにたくない!

ホラーは怖いんだよお!! (錯乱)

すぐさま逃走体勢に入った僕に、木場先輩がイケメンスマイルからの爆弾を投下する。

「あ、逃げても君の家まで僕たちが迎えに行くからね?」

そうだったー!! 姫島先輩に僕ん家バレたんだったあ!! 逃げ道なしかチクシヨウ!

「大丈夫、兵藤くんも一緒に部室へ来てもらうから」

「え? イッセー兄ちゃんも?」

そうか、昨日の事を話すなら、イッセー兄ちゃんもいた方が良いのか。

なんか、そう思うと怖くなくなってきた。いや怖いけど、安心感というか、そういうものを感じた。

「うう………わかりました………」

そう項垂れながら、僕は渋々、イツセー兄ちゃんのいる二年生の教室へ向かうのだった。

第9話

放課後、俺のクラスに珍しい奴が来た。

「君が兵藤一誠くんだね？ 僕はリアス・グレモリー先輩の使いで来た、木場祐斗」

「そして半ば強制連行された神結悠斗です。イツセー兄ちゃん」

いや、グレモリー先輩のお使いってなら木場が来るのは分かる。

……………何故ハルがいる？

「それよりどういう事だイツセー!!」

だが、俺の思考を邪魔するように松田や元浜が詰め寄ってくる。

鬱陶しくなった俺は、血の涙を流す奴らに、止めの一言をくれてやる。

「なあお前ら。生乳って、見たことあるか？」

効果は抜群だった。

この場にいた俺を除く四人のうち、目の前バカ二人は戦慄し、イケメンは苦笑し、弟分は俺にパンチを放つ。

いや、ゴメンて。笑顔で2発目を構えないで下さいハルトさん。

俺が後退りすると、横から馬鹿どもが俺の腕を押さえてくる。

「ふはははは！ 良いぞもつとやれハルト！」

「遠慮はするな、俺達を押さえといてやる」

「うん、ありがとう、松田先輩、元浜先輩」

「あんまり時間かけないでね？ 兵藤くんも神結くんも」

木場の言葉に首肯を返したハルは、腰だめに拳を構える。

やだー、本気の一発じゃないですかー。

「し、死ぬー!! 最近お前なんか力強いんだからそんななん食らったら俺死んじやう！」

「少しは自重しなよ。そしたら僕もやらなくて済むからさ」

「明日！ 明日から頑張るから！」

「知ってる？ それはフラグだよ？ 往生際見さらせド変態があ!!」

まさに轟ッ！ という音と共に拳が放たれ、俺の鳩尾に突き刺さる。

そして、俺は無言で崩れ落ちる。

「どうだ！ 思い知ったかイツセー！」

「分不相応の幸福を得るからだ馬鹿め」

「ねえ、なに他人事にしてるの？ 二人にもやるからね？ 二人とも自重しないから」

「——え？」

そんな二人の悲鳴を聞きながら、俺は意識を手放した……………。



と思ったら、すぐに起こされた。

しかも憎きイケメンにだ。

横を見ると、折り重なるように気絶している松田と元浜の姿が。

「全く。三人で集まって誰かの家ならまだしも、こんな大勢の人間がいる公共の場で、あんな大声でなんて、幼馴染みとして、後輩として、恥ずかしい限りだよ」

手を払いながら、ハルが不貞腐れたようにそう言う。……………いやホント、スケベでゴメンね？ ほとんど条件反射なんだよ。

「さ、用事も済んだみたいだし、行こうか」

「そう言えば聞いてなかったけどよ、どこに行くんだ？」

「旧校舎だよ。あそこで部長が待ってる」

木場がそう言った途端、ハルの肩が跳ね上がった気がした。

そういやアイツ、異常なまでにホラーとかオカルトが苦手だったな。それら、旧校舎なんてホラーの定番地が怖いわけだよ。



来た。

来てしまった。

怖いな………帰りたい。

何故僕はここにいるんだろう？ 何故ここに来てしまったんだろう。何故こんなことになってしまったんだろう。

さつきまでの様にイツセー兄ちゃん達をシバき倒してる方が良いじゃないか。

何事も平和が一番だよ。世界平和最高」

「口に出てるぞハル。ってか、なんでそんな大事になってんだよ!？」

「怖いものは怖いんだよ！　しまいにや泣くよ!？」

「なんで!？」

「ふふふ、君達は面白いね。ほら、ここが部室。ここで部長が待ってる」

そう笑いながら、木場先輩がドアをノックする。

「部長、二人を連れてきました」

『ええ、入ってちょうだい』

木場先輩の呼び掛けに、中から答える声が聞こえる。

あの人、美人だったけど、悪魔なんだよなあ……………。

木場先輩が戸を開け、僕達はそれに続いて室内に入る。

ちよつとチビリかけた。

だって！　だって！

部屋は薄暗いし、床、壁、天井の至るところに謎の文字が書き込まれてて、しかも！
部屋の真ん中でつかい魔方陣が描かれてるし！

「かーえーるー!!」

「お、落ち着けハル!」

すぐさま回れ右をして走り出そうとした僕の腕を、イツセー兄ちゃんが掴んでくる。

「むーりーやーだーこーわーい!!」

「お前の怖がりにはホント筋金入りだな!」

それを振り払うべく、ジタバタもがいてみる。

あれ? イツセー兄ちゃんの力が強くなってる?

でも帰るもんね!
逃げる

「あつはは、大丈夫大丈夫。24時間ほど家でゴロゴロしてくるだけだから!」

「それ帰ってるから! 一日経ってるから! 24時間だったら明日の学校サボってる

ことになるから!」

「はーなーしーてー!」

「うおおおお!! 引き摺られる!?! なんでそんな力強えんだよ!」

もちろんだ! これが僕の全力だ! あと二段階の変化が残っているぞ! (錯乱)

「…あの、木場先輩」

「ああ、そう言えば君も初対面だったね。紹介するよ」

「…その前にアレ、止めなくて良いんですか?」

「いやあ、僕にはどうしようも……………」

後ろでそんな会話が聞こえる。

一つは木場先輩。もう一つは女の子の声。聞き覚えがあるような無いような……………」

それでも僕は後ろを振り返らない！ だって怖いから！ 怖いから！

だけど、もう少しでイツセー兄ちゃんを振りほどける、という時に、

「あらあら、うふふ。来たのね？」

——^{悪魔}天女の声が聞こえてきた。

「……………これはいったい何の騒ぎ？」

ついでに、悪魔（本物）の声も聞こえてきた。

え？ 僕がどうなったかって？

「きゆう。あばばばば……………」

「ハル！ おいハル！ ……………ハルウウウウ！」

気絶しました。

目の前が真っ暗です。

第10話

「目を醒ますとそこは地獄だった」

「のっけからなに言ってるんだお前」

目を覚ました僕の第一声に、イツセー兄ちゃんがそんなことを言ってくる。

「目は覚めたかしら？ 神結悠斗くん」

心配そうに優しくそう声をかけて来るグレモリー先輩。

しかし僕は知っている。

彼女は悪魔（本物）だ。

「……………」

僕は無言でイツセー兄ちゃんの後ろに隠れる。

「あら？ 嫌われてしまったかしら？」

「あー、いえ、ただ単にコイツ、滅法怖がりなんで、この部屋の雰囲気怖いです」
イツセー兄ちゃんが代わりにそう答えるけど、違う、違うよ兄ちゃん。

そんな風にイツセー兄ちゃんの後ろに隠れている僕を見て、グレモリー先輩が困ったよ

うに笑う。

「…かわいい」

ふと、後ろからそんな声が聞こえた。

……………大丈夫。ビツクリしたけど、今度は大丈夫。

跳ね上がる心臓を落ち着けて、後ろを振り返る。

するとそこには、黙々と羊羹を食べながら僕を見つめる白髪の少女が一人。

可哀想に。小学生あんな歳で白髪しらがだなんて……………苦労してるんだな。

確かに、身近に悪魔がいる生活は辛そうだなあ……………。

「…なんか失礼なことを考えてる？」

そこで、僕たちのやり取りを見た姫島先輩が、声をかける。

「あらあら、やつぱり同じ一年生同士、気が合うのかしら？」

「え？ 高校生!？」

……………殴られた。

いや、確かに僕が悪いんだけどさ。ごめんなさい。

「えっと、ごめんなさい。一年の神結悠斗です」

「……——ッ！　そ、そう。同じく一年の、塔城小猫。よろしく」

あれ？　なんかぎこちないな。まだ怒ってるのかなあ……………うう。

ん？　小猫？

「…どうしたの？」

「いやあ、なんか昔飼ってた飼い猫と同じ名前でき、ちよつとビックリしただけだよ」

「あら、ハルトくん、猫を飼っていた事が？」

僕の言葉に、姫島先輩が質問してくる。しかしその視線は何故か塔城さんに向けられている。

「そうなんですよ、姫島先輩。昔、コイツン家に毛並みの綺麗な白猫がいて、コイツにスゴい懐いてたんですよ」

イツセー兄ちゃんがそう答える。

……………なんで塔城さんが朱くなってんの？

でも、

「違うよ、イツセー兄ちゃん。アレは多分、懐いてたとかじゃなかったと思うよ。いつの間にかいなくなってたし」

猫つてのは気まままで自由な生き物だからさ。人には懐かないって言うし。

……………元気にしてるかな、アイツ。

「…違う」

「え？」

「…きつとその猫は、あなたの事大好き」

「……はは、なんで塔城さんが答えるのさ」

気を使ってくれたのかな？ 優しい女の子だ。

ストレスとか大変だろうけど、応援してるからね。

「…小猫」

「ん？」

「…名前、小猫。名前で呼んで。私もハルトって呼ぶから」

塔城さんから、そんな提案が出される。

まあ、一年生同士だから仲良くしようって事なのかな？

「うん、わかったよ、小猫ちゃん」

「…う、うん。よろしく、ハルト」

まあこの部活には入らないけどね！



——カミユイハルト。

私のご主人様。私の、大好きな人。

彼は昔、私を助けてくれた。

姉様が殺した悪魔の関係者達に、復讐として襲われて、傷付いて、ボロボロになりながら、私は何とかこの町まで逃げてきた。

体は痛くて、心は寂しくて、心身ともにボロボロで、もう、自分の命すら諦めかけていたとき、私は彼に救われた。

傷の手当てをしてくれて、温かいご飯をくれて、優しく撫でてくれた。

本当にボロボロだった私は、それだけで恋に落ちた。

その時はまだ幼かったし、今では自分でも、本当に単純な理由だなんて思う。でも、それでも、私は彼が大好きだった。

いや、過去形なんかじゃない。今でも大好きだ。忘れるわけがない。

ご飯をくれた。優しく撫でてくれた。

——そして、何より、小猫名前をくれた。

黒歌姉様と対の白音私とは違う、新しい小猫わたし。それを、この人がくれた。

彼と過ごす日々は楽しくて、幸せで、ずっとこんな日々が続けば良いと思つてた。思つて、しまつていた。

なんて馬鹿なんだろうと思う。

私は賞金首の妹で、私自身も追われる身なのに。その家が心地よすぎて、彼の隣が暖かすぎて、私はそれを失念してしまつていた。

だから、私は家を出た。

誰にも気付かれないように、皆が寝静まつた夜に、コツソリと。彼に危害が及ばないように。彼の家族を危険に晒さないように。

辛かった。悲しかった。寂しかった。怖かった。

それらの想いで胸が張り裂けそうに、それでも私は逃げ続けた。

なるべく彼から遠ざかる為。奴らの目を、彼らに向けないために。

そして野良猫私は、小猫になった。

リアス部長にであつて、悪魔になつて、そして、追つ手もいなくなつた。

そして、今度は、彼に再会した。

会いたくて愛しくて、だけでも彼は人の姿をした私を知らなくて会えなかった彼に、私は今日、ここで、再会した。

同じ学校にいるのは知っていた。同じ学年だと言うことも知っていた。

だけど勇気がなかった。

だから感謝しよう。

悪魔だけど、神様に。

悪魔だから、魔王様に。

眷族だから、部長に。

ありがとうございます。

私にチャンス을 くれて。

もう一度、彼に会わせてくれて。

だけど、私って、そんなに子供っぽく見えるのかな？

怒るよ？

第11話

先程から、グレモリー先輩による、オカルトチックなお話が繰り広げられている。

やれ悪魔天使墮天使の三つ巴戦争だの、地獄が悪魔と墮天使の二分割だの。

そして、僕は今、動ける状態では無い。

まず、僕はソファアの真ん中に座っている。

右側に姫島先輩。左側に小猫ちゃん。

う、動けない……………つか近い近い近い！　なんで二人ともそんなに近いのさ!?

小猫ちゃんも姫島先輩も、女の子特有のいい匂いがするし、姫島先輩は色々男子には堪らないし！

助けてイツセー兄ちゃん！

「くそう……………ハルが羨ましい……………」

あ、ダメだこれ。イツセー兄ちゃんが血涙を流している。

ならば木場先輩……………は、なんか我関せずな態度で優雅に紅茶を飲んでいる。イケメンはなんでも絵になるなあ……………。

ってそうじゃなくて！　なんか緊張と恐怖で僕どうにかなってしまいそうだよ！

「へー、これがオカルト研究部の活動なんですね？」

イツセー兄ちゃんがそんなことを言ってくる。

違うんだよ。ホントなんだよ。て言うか目の前のこの人が悪魔本人なんだよお

.....

帰りたい。

「——天野夕麻」

不意に、グレモリー先輩が口にした名で、兄ちゃんの目が見開かれる。

「どこでその名前を？」

「どこでもなにも、イツセー兄ちゃん覚えてないの？」

「ハル、お前、覚えてるのか？」

「.....覚えてるも何も、アイツがイツセー兄ちゃんを殺しかけた張本人だから」

あの日を、僕が忘れる日は来ないだろう。

あの日の悲しみと、怒りを。

「でも、みんな忘れていた」

「でしようね。上手く証拠を消されていたわ。でも、彼女は確かに存在するわ。

何せ彼女は墮天使。私たちの敵だもの。そして、貴方は一度殺された」

「殺された!? イッセー兄ちゃん、死んでたの?」

それには驚いた。てつきり治療が間に合ってたと思ってたから。

「なぜアナタが驚くのかしら? 現場にいたでしよう?」

「いや、一回死んでるとは思わなくて……………」

「そして、一度殺したハズのアナタが生きているとなれば、また狙ってくるでしようね」
すると、イッセー兄ちゃんが声をあげる。

「な、なんで俺なんだ! なんて俺が狙われなきゃいけないんだよ!」

確かにそうだ。身に覚えが無いのに命を狙われると聞いて、冷静でいられるはずがな

い

「それは、あなたの身に、セイクリッド・ギア 神 器が宿っているからよ」

「セイクリッド・ギア?」

今度は、兄ちゃんではなく、僕の口から疑問が漏れる。すると答えたのは、木場先輩だった。

木場先輩が、僕にも分かりやすく説明してくれる。

……………なるほど、つまり世界的アスリートや大統領クラスの人達もそのセイクリッド・ギア 神 器の

おかげなんだね!!

いいなー、格好いいなー。僕にもあれば良いのに。

あ、でも神器じゃなくて神機ならあるや。

木場先輩の台詞を、グレモリー先輩が引き継ぐ。

「そしてその神セイクリッド・ギア器のほとんどに戦闘能力が備わっており、中には悪魔や堕天使に有効なものも存在するわ。

イツセー、手を上にかざしてちょうだい」

イツセー兄ちゃんはその言葉に言われるがまま、左腕を上にかざす。

あれ？ イツセー兄ちゃんつてば、左利きだっけ？ 右じやなかつたっけ？

「あなたの中で、一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてちょうだい」

「一番強い……………ド、ドラグ・ソボールソールの空孫悟ソールかな……………」

えー、よりによってそれ？

いや、別にあの作品が嫌いって訳じゃないんだけどさ、なんと言うか、あのアニメつて、バトルシーンの映像の使い回しが多くて、兄ちゃんと一緒に見たけど、僕途中で飽きちゃった。

確かに名作なんだけども。

「そして、その人物が一番強く見える姿を真似るの」

空孫悟の強いシーン……………多分、ドラゴン波かなあ……………あれをやるのか。ここで。

頑張つて！ 僕は必死に笑いを堪えるから！

「なんかハルの視線が無性に腹立つけど……………ドラゴン波！」

すると、なんと言うことだろうか。イツセー兄ちゃんの左腕が輝きだし、そこに赤い籠手が装着される。

「うおおお!? なんだこれ!?!」

「それがイツセー、あなたの神セイクリッド・ギア器よ」

「イツセー兄ちゃんなにそれカツケー!!」

「ああ！ なんかヒーローの変身アイテムみてえだ!」

その赤い籠手をみて、僕とイツセー兄ちゃんのテンションはすごいことになった。

「あなたはそれを危険視されて、墮天使——天野夕麻に殺されたの」

「ッ! ……………」

しかしそのテンションも、グレモリー先輩の言葉によって落とされてしまう。

「でも、俺生きてますよ?」

イツセー兄ちゃんがそういうと、グレモリー先輩は僕の方にも視線を送りながら、優

しく微笑む。

「その点に關しては彼にもお礼を言いなさい。彼が私とあなたを守ってくれたから、あなたは今ここにいるのよ？」

「え？ ハルが？」

「……………そんな目でみられると、恥ずかしいな。」

「彼の神器が咄嗟に発動してくれたお陰で、私達は助かったの。アレは強力だったわ」

僕の神器？ ああ、神機か。

「あらあら、それは気になりますわね。私達にも見せて下さらない？」

姫島先輩が横から僕に体重を預けるようにもたれて来る。

そしてそれを見た小猫ちゃんが何故か對抗するようにもたれて来る。

まっつつぶれる。

二人とも重くは無いけどさ、僕の精神が潰れる！

「わ、わかりました！ 見せます！ 見せますから二人とも離れて下さい！」

「あら、連れないのね。うふふふ」

「……めんなさい」

僕は二人から離れ、右手を前にかざす。

「来い！ 神機！」

途端、右腕を光が多い、腕輪と神機が同時に現れる。

「良い剣だね」

意外なことに、木場先輩が真つ先に反応した。剣とか好きなのかな？

「それがあなたの神セイクリッド・ギア器なのね」

そう言つて嘆息するグレモリー先輩に、僕は訂正を入れる。

「違いますよ。これはセイクリッド・ギアじゃなくて、神機つて言うです」

「じんぎょ？」

おっと、どうやらここにいる全員がその存在を知らないようだ。

仕方ない。語るか。

「神機つてのはですね………」



「——つて言うゲームなんですけど、ご存じないですか？」

長々と語り終え、最後にその質問をするが、誰一人として頷かず、更には首を傾げる

始末。

「それで、そのゲームの武器が何故か僕の手元にあるんですよ」

僕はその最後に、イツセー兄ちゃんに質問する。

「兄ちゃんなら、ゲームのタイトルくらいなら聞いたことあるよね？」

「いや？」

だが、帰ってきたのは否定だった。

………あれ？ 僕、イツセー兄ちゃんの前でプレイしたことあるし、有名なゲーム

だよ？

「え？ ホントに知らない？ 僕結構やってたよ？」

「いや、まずお前がゲームをしていた記憶が無いんだけど？」

——え？ つまりどう言うこと？

どこかおかしい現状に、僕は黙り混み、頭を悩ませる。

すると、グレモリー先輩が両手をパンツとならし、空気を変える。

「とりあえず、本題ね」

「そうと、先輩達は立ち上がる。」

「私がおなたに召喚されたとき、イツセーは死ぬ寸前だった。というか、私が手を施した時点で、あなたは死んでいたわ。だけど、私はあなたの命を甦らせることにしたの」

——悪魔としてね」

「ホワツツ？　今なんて？」

「目の前のこの悪魔は今なんて言った？　うん？　悪魔？」

「あ、クマか。」

「イツセー、あなたは私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わったわ。私の下僕悪魔として」

その瞬間、この部屋にいる全員から、コウモリのような翼が生えた。

.....。

.....。

「.....」

イツセー兄ちゃんが声をこつちを恐る恐る振り替える。

その期待に答えましょう。

僕は息を吸う。

腹式呼吸を使って目一杯。

そして、

「きやあああああああああーーーーーッッッ
!!!!!!」

旧校舎に、僕の悲鳴が響き渡った。

第12話

「もうやだあ！　ここやだあ！　僕帰る!!」

「が、ガチ泣き!」

怖い怖い怖い!

なにここー！　悪魔だらけじゃん!

「だ、大丈夫かい?」

「ひいひい！　イケメン悪魔!」

「ええ!」

「お、落ち着きなさい」

「あ、あかいあくま!」

「それは何か違うないかしら!」

「…落ち着いて、ハルト」

「落ち着いてるよおお!!」

「…ええー……………」

「あらあら、これは……………ふふ」

「びえええん！」

「私だけ本気泣きですよ!?!」

「ここは地獄? 人外魔境? どっちでも良いからここから脱出しなくては!

「うわああああん!」

「お、おお落ち着けハル!」

「イツセー兄ちやあああん!!」

僕は泣きながらイツセー兄ちやんの後ろに隠れる。

しかし、そこには悪魔の翼が。

「兄ちゃんも悪魔じゃないかあああ!!」

僕は逃げ惑う。

その影響で、室内の調度品が倒れたり割れたり、結構な被害が出てしまうが、今の僕にはそれに気を配る余裕なんて無い。

そして僕は部屋の隅に退避する。

というか、逃げ場が無い。

ああ、お父さん、お母さん。僕、ここまでも知れない……………。



ハルが泣いた。

しかもガチだ。本気と書いて本気^{ガチ}だ。

ここにいる全員が悪魔だと知った瞬間、泣き叫びながら錯乱する。

ってか、俺にも脅えるのかよ!?

「ね、ねえイツセー? どうして彼はあんなに私達、というか悪魔とかを怖がるのかしら? 言いづらけれど、正直なアレは異常なレベルよ?」

「あー、それなんですけどね……………」

これはぶつちやけ、俺がそもそもの原因と言えるのでは無いだろうか。

ハルは昔から、驚くほどに純粹で無垢だった。

一緒にいると、自分がスゴく汚れてると思ってしまうほどに。

事の発端は、俺とハルが小学生の時。当時は俺が六年生で、ハルが五年生だった。

そして俺は、そのころエロ以外にも、何故かスゴくホラーに嵌まっていたんだ。だから、自分が嵌まったホラー映画をハルにも教えた。

流石にR—18指定ではなかったけど結構怖いと評判の映画を、だ。

『ハル、面白い映画、一緒に見ようぜ！』

当時はまだ、戦隊物とか仮面ライダーを好んで見ていたハルだ。今はどうか知らないけど、ホラー映画などとは縁遠い生活をしていたハズだ。

そんなハルに、俺はそのとても面白い映画を勧めた。

確か、悪魔が出てくる話だったはずだ。

俺が勧めたということもあり、ハルは何の疑いもなく、ただ面白い映画だと思ったんだろう。

だけど、高校生になってもサンタクロースを信じているような奴だ。

そんな奴が何の覚悟もなしにホラー映画を見たらどうなると思う？

それはもう、筆舌にし難いトラウマになるハズだ。実際、ハルはトラウマになった。

もう、ホラーのホの字でも感じ取った瞬間にはその場からいなくなるくらいに。

その結果が、今の状況だ。

「——という訳なんです」

「つまり、オカルトもダメって事だよな？」

「ああ、そうなるな」

「…私達、存在自体がオカルト」

「だからこそあの状態なのでしょうね」

「これは流石に、弄れませんか」

「多分、そんな事してるから本気泣きされるのよ、朱乃」

さて、どうしたものか。

「ここは一つ、兄貴分として俺がビシツと決めるか。」

「……………原因を作った張本人でもあるし。」

「なあ、ハル」

部屋の隅で小さくなって震えているハルに、膝をつけて、目線の高さを同じくして、俺は優しく声をかける。

ハルの肩が一瞬跳ね上がったが、恐る恐る顔を上げて俺の方を見る。

「そんなに、オカルト悪魔が怖いか？」

その問いに、ハルは頷く。

「じゃあ、悪魔になつた俺も怖いか？」

その問いの答えには少しだけ時間がかかったが、ハルは首を横に振って否定する。

「じゃあ、人間の姿をしてるあの人たちが怖いのか？」

これにはもつと時間がかかっている。

多分、悪魔への恐怖と、皆の容姿とさつきまでの態度への感情がせめぎ合っているのだらう。

「さつきまで、お前、皆が怖かったか？」

首が横に振られる。

「悪魔は怖いか？」

今度は縦にだ。

「じゃあ、今は皆が怖いんだな？」

今度は、反応がない。

「大丈夫だ。皆優しかっただろ？　どんなに悪魔が怖くても、今お前の目の前にいる人達は、お前に優しかっただろ？」

頷く。

「だったら、そこまで怯えなくても良いんじゃないか？　皆お前を心配してるぞ？」

俺がそういうとハルは、ゆっくりと周囲を見渡す。

きつとそこには、自分が錯乱したせいで荒れた部屋と、それに怒るでもなく、心配そうに自分を見ている皆がいるはずだ。

「な？　怖くないだろ？　大丈夫だって。それに何かあったら、兄ちゃんを頼れ、ハル。

俺も悪魔になっちまったけど、弟分を守れなくて何が兄ちゃんだよって話だからな」

「……………うん。ゴメンなさい」

小さくか細い声で、ハルが謝る。

俺はハルの頭をグリグリと少々荒っぽく撫でながら、歯を見せて笑う。

「よしよし、良い子だ。でも、謝るのは俺じゃ無いだろ？」

「うん……………」

そういうとハルは立ち上がり、俯きながら皆の方に体を向ける。

「あの、その……………ゴメンなさい。皆に怯えちゃって。あと、色々散らかしちゃって」
もじもじと、涙目の上目遣いで皆を見つめながらハルは謝罪の言葉を口にす。

すると、それに皆は慌てたように「大丈夫」という言葉を口にし、謝罪を受け入れる。
うむ。正直、ハルのあの仕事で許さなかった奴を俺は見たことがない。

しかもアレ、本人が無意識にやってるから、中々にタチが悪い。

恐るべし、我が弟分。



ようやくハルも落ち着き、部室の片付けも粗方済んだところで、リアス部長がとある提案提議投下をしてくる。

「ねえ、ハルトくん。よかつたらあなたも私の眷属にならない？」

「え？ ……………ふえ」

一瞬にして涙目になったハルを、俺たち全員で宥め、リアス部長が姫島先輩と小猫ちゃんに叱られるという一幕があつたのは言うまでも無い。

全く、何やってるんですかリアス部長。

ちなみに、ハルが眷属になることはできなかった。

眷属になるには、チエスの駒の形をした『悪魔の駒』イェウイル・ピースを使うのだが、リアス部長が今持っている、『戦車』ルック、『僧侶』ベシヨツ、『騎士』ナイトの駒すべてがハルに反応しなかった。

曰く、ハルのポテンシャルが高いせいで、駒一つに対してハルが役不足になるからだそうだ。

ハルを駒一つで眷属にするには特別な駒が必要で、でもその駒はもう使ったあとだから無理で、二つ使おうにもそれぞれ一つずつ使ってるから駒が足りなくて無理なんだと。

すげえな、ハルの奴。

そこまで凄い奴が弟分だなんて、兄貴分として鼻が高いぜ、俺は。

まあ、ハル。

俺は悪魔になっちゃったけどよ、これからもよろしくな！

第13話

「イツセー兄ちゃんが眷属になって幾日かたったある日、兄ちゃんが僕に質問してくる。

「なあ、ハル」

「なに？ イツセー兄ちゃん」

「思ったんだけどよ、お前のあの怖がり方、ちよつと異常だぞ？ なんであんなに怖がるんだ？」

イツセー兄ちゃんのその質問に、部室中にいる皆の視線が僕に集中する。

そう、僕はあの後、結局なし崩し的に部活に所属することになった。

まだ悪魔は怖いけれど、優しくしてくれる皆の事は好きだから、なるべくこの部室に来て、少しでも早く馴れるように努力している。

そんなとき、イツセー兄ちゃんの質問が来たんだ。

「そうね。確かに気になるわ」

「ホラー映画のトラウマってだけにしては、異常なくらいだったしね」

グレモリー先輩と木場先輩も便乗してくる。

怖がる理由か……………。

うん、今なら信じて貰えると思うな。

「あれは確かね、まだ猫の方の小猫を拾う前だったかなあ……………」



そのころに僕さ、傷だらけの女の人を助けたことあるんだ。確か、顔はあんまり覚えて無いけど、黒い着物を着た綺麗な人を。

まあ、助けたって言っても、子供の僕にできる事なんて、秘密基地を隠れ場所として提供して、食べ物とか絆創膏を持って行ってお話するだけなんだけどね。

それでも、感謝されたのは覚えてる。

え？ 秘密基地？ ほらあそこだよイツセー兄ちゃん。小学校の近くにある雑木林。

あそこに僕と兄ちゃんと元浜先輩達の四人で作ってたでしょ？

でもね、今なら分かる。あの女の人、多分悪魔だったんだよ。

そして、何かに追われてた。

だからね、一緒にいる僕も悪魔に襲われたんだ。

凄く怖かった。

僕は殺されかけたし、実際、女の人が助けしてくれなかったら僕、死んでたかも知れない。

しかも襲われたのがさ、イツセイ兄ちゃんとホラー映画を見た後だったんだ。だから、その時の恐怖が残っててさ。

怖かったんだ、ホントに。

僕に襲いかかってくる炎、雷、氷、それ以外にも、沢山の化け物^{お化け}。

助けてくれた女の人には悪いけど、僕はその人も怖かったんだ。

だって、その人が何かした瞬間、辺りが真っ赤になっただもん。

今、整理しながら話してるし、皆がいるから落ち着いて話してられるけど、本当は僕、今でもこの記憶は怖いんだ。

だからあの時、僕は取り乱したし、女の人に多分、酷いことを言っただと思う。

でもね、後で振り返って見るとさ、その人、僕に泣きながら謝ってたんだ。

詳しいことは覚えて無いけど、ひたすらに「ゴメンね」って。それだけは、しっかりと記憶に焼き付いてる。

そしてその次の日から、僕はその女の人に会わなくなっただ。

ううん。会わなくなっただと言うより、会えなくなっただ、かな。

次の日、僕が秘密基地に言ったら、どこにもいなくてさ、書き置きがあったんだ。綺麗な字でさ、「ゴメンなさい」って一言だけ。



「だから、僕にとって悪魔は今でも怖い存在だけど、そのきっかけになった出来事は、後悔でもあるんだ」

「…後悔？」

「うん、そうだよ小猫ちゃん。あの人は僕を助けてくれた。それなのに僕はあの人に酷いことを言って傷付けてしまった、後悔の記憶」

僕が語り終わると、部室内に重い沈黙が訪れる。

「…でも、その人は追われてたんでしょ？ だったら、ハルトはそれに巻き込まれたんだから、その人のせいとも言えるんじゃない？」

「そういう事じゃないんだ、小猫ちゃん」

小猫ちゃんの言葉に、僕は否定を返す。

「その人のこと、僕大好きだったんだ」

「…——ッ！」

「今思えば、アレが初恋だったのかもしれない。僕はそんな人に、酷いことを言った。そんな後悔なんだよ」

「…そう」

僕にとつて、この記憶はとても複雑な物だ。

凄く怖くて、切なくて、悲しい記憶。

誰にも信じてもらえないから、これまでずっと抱え込んでいた記憶。

僕は今、それを初めて他人に話した。

それだけでなんだか、身軽になった気がした。

これで少しは、この恐怖症も、マシになるかな？



姉様だ。

今のハルトの話に出てきた女の人、それは多分、黒歌姉様の事だ。間違いない。まったく。

姉妹揃って同じ人に、同じように救われるなんて、なんて似た者姉妹なんだろうか。姉様の事は嫌いだし苦手だけど、やっぱり家族なんだなって思ってしまう。

——姉様は、ハルトのこと、どう思っているのかな？

もし姉様と再会したらハルトは、どんな反応をするのかな？

顔は覚えてないってハルトは言っていた。でもきつと、もう一度会えばハルトは思い出す。

だって、姉様はハルトにとって初恋の相手だから。

もし、もしそうなったとき、私はどうするんだろう。

怖いな。

姉様とハルトが再会するのが。ハルトに、私の気持ちを伝えるのが。

ねえ、ハルト。

ううん、ご主人様。

もし私が、あなたの小^飼猫だつたつて教えたなら、あなたはどんな反応をしますか？
喜んでくれる？ それとも怖がる？

あなたに救われた二匹の猫は、黒^片歌はどこかに行つてしまつたけれど、白^小音は今、あなたの隣にいます。

今はまだ勇気が無くて伝えきれないけれど、いつか、いつの日かあなたに伝えます。

本当の事を。

私の想いを。

だから、待っててね、ハルト。

姉様には、負けないんだから。

第14話

僕が自分の悪魔恐怖症の理由を話してから、数日がたったある日の事。

僕は、大変な物を目撃してしまったのかも知れない……………。

「……………イツセー兄ちゃん、とうとう……………お巡りさーん！ この人です！ この変態です！」

「ちよ!? ハル!? いきなりなんだ！」

「事案！ 事案だあああ!!」

「イツセー兄ちゃん！ なに？ 誘拐なの!? 事案なの!? お巡りさーん！」

「ちよ、違うから！」

「だって、イツセー兄ちゃんが金髪美少女のシスターさんを引き連れているのだから！
「P、Please calm down!!」

その金髪シスターさんが何か言っているが、僕にそんな英語能力を求めないで下さい。
い。

「落ち着けハル！ ほら、アジアも落ち着いてって言ってるし！」

「……………え？ 兄ちゃん英語できるの？ うっそだー」

まさか、そんな嘘だ。

これまで兄ちゃんが成績で僕に勝った試しなんか無い。保健体育を除いて。

そんな兄ちゃんが、英語、だと……………？

「ちよつと何に驚愕してるかわかんないけどさ、あれだからな？ 別に俺が英語できる

ようになった訳じゃないからな？」

「あ、そうなの？」

するとイツセー兄ちゃんは、僕にコソツと耳打ちをする。

「どうやら悪魔の能力らしくてな、ありとあらゆる言語が使えるらしい」

「え、なにそのチート。裏山」

正しくは、相手にとって慣れ親しんだ言語に聞こえるんだと。

「んでこの子、ここの教会に赴任してきたらしくてさ、今から案内する所なんだ」

「じー」

「……………なんだよその目は」

「よし、僕もいこうか」

「え？ なんで？ 別に良いけどさ」

「だって、イツセー兄ちゃんだけだどこの人が危ないから」

僕がそういうと、イツセー兄ちゃんの肩がガツクリと落ちる。

「俺って、信用無いのな」

「自分の胸に手を当てて考えるといいよ」

「うぐ……………」

「ほらイツセー兄ちゃん。この人に僕もついていくって言つてよ」

「わかつたよ、つたく」

兄ちゃんが僕も案内する事を伝えると、そのシスターさんは華やかな笑顔でこう言つた。

「Thank you very much for your help.」

うん、なんて言つてるかはわからないけど、最初の『てんきゅー』はちゃんと聞き取れたから、多分ありがとうとかその辺だろうな。

「ありがとうございます、だつてさ」

「うん、何となく今のは通じたよ」

その後、イツセー兄ちゃんの同時通訳によつて僕たちは自己紹介を済ませる。

ふむふむ。アーシア・アルジエントさんね。よろしく。

つて言うか、

「……………ねえイツセー兄ちゃん。悪魔とシスターが教会に行くつて、大丈夫なの？」

「……………あー」

この人、絶対深く考えてなかったな。

多分アレだ。アルジェントさんがあまりに美少女なもんだから、本能の赴くままに案内役を買って出たんだろうな。

間違いない。

「はあ、まあ、それが兄ちゃんだしね。仕方ないか」

困っていたらどんな人でも手を伸ばしてしまう。

それが、僕の兄貴分なんだ。



教会へ向かう途中、公園の前を横切ると、子供の泣き声が聞こえてくる。

目を向けるとそこには、膝に怪我を負った子供と、それをあやすその子の母親がいた。多分、あの子が転んだのだろう。

僕はポケットに手を伸ばし、絆創膏を取り出して、その子供の所に向かう。

すると、僕とほとんど同時にアルジエントさんも動き出す。

一瞬目が合ったが、言葉が通じないので、互いに微笑むだけ。

そのまま僕たちは少年の目の前に行き、まずは僕が少年に声をかける。

「大丈夫、ちよつと転んだだけじゃないか。ほら、絆創膏貼つてあげる」

優しく声をかけながら、傷口の血をティッシュで拭き取り、大きめの絆創膏を貼つてやる。

今度はアルジエントさんがその膝に両手をかざす。

シスターのおまじないか何かかな？

僕がそう思っていると、アルジエントさんの両手の両手から淡い緑の光が溢れ、少年の膝を照らした。

え、なにあれ？ 魔法？ 回復魔法？ ケ○ルのな？

いや、でも魔法は悪魔と悪魔に通じてる人にしか使えないんだよな、確か。

聖職者が悪魔と繋がってる訳じゃないし……………。

あ、もしかして、

セイクリッドギア
「神器？」

まるで思考がリンクしたかのように、僕の疑問をイツセー兄ちゃんが尋ねた。

いつの間にか少年は泣き止んでおり、アルジエントさんの手の光も収まっていた。

少年は、どこか不気味なものを見るような目を向けつつ、頭を下げている母親に手を引かれながら歩いていく。

「ありがとう！ お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

きつと母親の方は、あの光の正体が分からなくて怯えたんだろうな。その分、子供は無邪気だなあ。

イツセー兄ちゃんが子供の言葉をアルジエントさんに通訳してあげると、アルジエントさんが嬉しそうに顔を綻ばせた。

あと、やつぱりあれセイクリッド・ギア神 器みたいだ。何か事情がありそうだけど。

教会まで送ると、イツセー兄ちゃんが途中で足を止める。

……………あー、そういうや悪魔って、こう言うところ入れないんだっけ？

仕方ない。

「兄ちゃん、通訳お願い」

「ん？」

「ゴメンね、アルジエントさん。僕ら今から向かうところがあるんだ。だから悪いけど、ここままで大丈夫？」

それを通訳してもらうと、アルジエントさんがなぜか慌てたように頭を下げる。

「お忙しいところご迷惑を掛けました、だって」

「そんなこと無いよって通訳して」

「おう」

そして僕らは、アルジエントさんに手を振り別れを告げた。

うん、言葉は通じなかったけど、いい人だったなあ。

また縁があれば会えるだろうな。

——グウウウ……………。

「兄ちゃん、お腹すいたからどつか食べに行こうよ」

「ん？ ああそうだな。もうそんな時間か」

最近、また少しずつお腹が空いてきた。

おかしいなあ。一旦治まってただけ……………。

そういや、いつから治まってたっけ？
多分確か、神機を初めて使った辺りからか。あの時僕、軽くアラガミ化してたし。

……………アラガミ化？ 強烈な空腹？

まさかね。多分僕の思い過ぎだ。

第15話

その日の夜、俺はいつになく険しい表情の部長に強く注意された。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで問題になるの。」

今回は人間のハルトもいたし、あなたの厚意を素直に受け取ってくれたみたいだけど、いつ光の槍が飛んでくるかわからなかったのよ?」

マジかよ。

もしかしたら俺は、ハルトまでもを危険に晒していたかも知れないのか。

「は、はい」

「あなたの人間としての死は悪魔転生で免れたかもしれない。けれど、悪魔の死は消滅よ。無に帰すの。」

それだけじゃないわ。今の私では、ハルトを悪魔にすることはできない。悪魔のあなたと一緒にいると言う理由で彼が襲われて殺されても、私は彼を蘇らせる事はできないの」

そうだ、ハルは死んだら、俺みたいに転生つて言う裏技が使えないんだよな。

「…………ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は気を付けてちょうだい」
「はい、俺もハルを危険に晒したくは無いです」

「あなた自身の心配もしなさい？ 私の眷属なのだから」

俺と部長の会話がそこで終わると、朱乃さんが部室に入ってくる。

「あらあら、お説教は済みました？」

「朱乃、どうかしたの？」

部長の問いに、朱乃さん少しだけ顔を曇らせた。

「はぐれ悪魔の討伐依頼が大公から届きました。対象名はバイザーとのことですよ」

すると、部長もどこかバツの悪そうな顔をする。

「…………ゴメンなさい、イツセー。さっきの話からアレなのだけれど、ハルを呼んでくれないかしら？ 正直、この相手は私たちだけじゃ厳しそうよ」

倒せないことは無いんだけどね。

と、部長は少しだけ悪戯っぽく笑う。

「私達の戦いを、皆にも見せて上げたいわ」



なんか夜中に呼ばれた。て言うか拉致られた。姫島先輩に。

「眠い……………」

「あらあらごめんなさいね？」

「だったら帰して下さい」

「うふふふ」

いや、うふふふじゃなくてね？

僕は今、姫島先輩に腕を組まれて歩いている。

夜中に美女と腕を組んで歩く。

文字にすると何とも甘美で素晴らしい事なのだが、状況が状況だ。喜べない。

て言うか怖い。

悪魔でも、オカ研メンバーの皆は怖くないんだけど、姫島先輩は悪魔とかそういうのを無しにしてもなんか身の危険を感じる。

悪意とかそういうのじゃなくて、なんと言うか、こう……肉食獣に感じるような危険臭。

「ほら、後少しですわよ」

気がつけば、僕は町の外れまで来ていた。

先程のように住宅は殆ど無く、街灯がちらほらとあるだけ。
つまり、暗い。

「どこに向かうんですかー!? 帰るー! こーわーいー!!」

「向こうに皆いますわよ?」

向こう!? 三途の川の!?

「おーい、ハルト」

「…ハルト」

あ、イツセー兄ちゃんに小猫ちゃん。

……………一人を見たらなんだか落ち着いてきた。

「ご苦労様、朱乃。それにハルト、急に連れ出して悪かったわね」

「うう……………大丈夫です……………」

「私達はこれから、はぐれ悪魔の討伐をするのだけど、情けない話、私達だけじゃ厳しいの」

——だから、少しでいいから手伝ってくれない?

そうグレモリー先輩がお願いしてくる。

すると、普段は無表情の小猫ちゃんが、どこか怒ったような表情でグレモリー先輩に詰め寄る。

「…部長、どういふことですか。ハルトを戦いに巻き込むなんて」
「小猫?」

「…ハルト、イヤなら断つても良いんだよ? 私達に依頼が来たと言うことは、私達で倒せる相手と言う事だから」

小猫ちゃんが、少し早口で僕に言ってくる。

まだ事情はよく飲み込めていないけど、これから皆は何かと戦うのだろう。

確か、はぐれ悪魔と。

『はぐれ悪魔』と言う言葉の意味はわからないけれど、僕より強いはずのグレモリー先輩が、僕にも協力を扇いできたと言うことは、つまり、

「それって、小猫ちゃん達も危険だって事だよな? だったら僕も行くよ」

「…ハルト?」

「だって、皆が危ないのはイヤだし、それに」

僕は一旦、そこで言葉を区切る。

あの日、皆に僕の昔話をした時から決めてた事があるんだ。

「…それに?」

「僕、皆のこと怖がりたくないんだ」

それは、悪魔恐怖症の克服。

僕は皆が大好きだ。

みんな優しく、一緒にいると楽しくて。

でも僕は悪魔が怖いから、ふとした拍子で皆の事を怖がってしまう。

そしてそんな自分を、嫌悪してしまう。

「だから僕は、一緒に行くよ」

「…そう。ハルトが決めたなら、私は止めない。でも、怪我だけはしないでね？」

「大丈夫だよ。僕にもちゃんと、神機戦える力が、もうちゃんとあるんだからさ」

「…うん、ならよかった」

そう言つて、小猫ちゃんは微笑む。

僕はそれに少しだけ驚く。

だって、彼女はいつも無口で、表情の少ない子だったから。

「だから小猫ちゃんも、怪我しないでね？」

「…大丈夫。これでも私、戦車ルックだから」

「ふふ」

ふんす、と息を吐き、どこか気合いの入ったような彼女を見て、僕はつい笑ってしま

う。

「…笑うのは、酷いと思う」

「ゴメンゴメン」

そこでいきなり、僕の肩が後ろに引かれてバランスを崩し、次の瞬間には僕の頭は何か柔らかい物の上にあった。

「あらあら、二人ともとても仲が良さそうですね」

その柔らかい物は、姫島先輩のおっぱいだった。

「ッ!？」

「ほら、暴れないの。うふふ、可愛いわね」

咄嗟に離れようとした僕を、姫島先輩が抱き締めるように押さえつけ、僕の頭が余計おっぱいに沈み込む。

まって! いや、こういうのは男子として嬉しいんだけどさ! ほら! イッセー兄ちゃん血涙を流してるし、何より小猫ちゃん!

無表情だけど、なんかオーラ出てるから! あれ絶対怒ってるよ! なんてかは分からないけど、絶対怒ってる!

「…朱乃さん。ハルトを離してください」

小猫ちゃんが僕の両手を掴み、引っ張る。

「うふふ、やーだ、ですわ」

なんか楽しんでる!? いや、楽しくなかったらやらないんだろうけどさ! この人ア

レだ、小猫ちゃんを怒らせると言うか、おちよくつて楽しんでる！

「…ハルト、ほらこつち」

いたたたたたた!! 首もげる! 腕千切れる!

僕が声を出せずに苦しみ、二人が不機嫌顔とニコニコ顔で睨み合っているとき、救世主（ただし悪魔）が現れる。

「こら二人とも、その辺にしときなさい? ハルトが死にそうよ」

グレモリー先輩のその一言で二人の動きが止まり、僕を見る。

そして二人はすぐに僕を離し、顔を青くしたり、冷や汗をかいたりする。

「…ゴメンなさい、ハルト。本当にごめんなさい」

「ちよつとおふざけが過ぎましたわ。ごめんなさい」

「ああ、うん。大丈夫」

何とか絞り出した声は、自分で驚くほどに弱々しかった。

二人が僕に駆け寄り、謝りながら体のあちこちを触ってくる。

いや、大丈夫だつて。あれ以上やられてたら流石にヤバかったけどさ。

その時、小猫ちゃん顔が一瞬険しくなる。

「…血の臭い」

「そう、来たのね。皆、準備なさい！ イッセーとハルトも構えて！」

グレモリー先輩に促されて、僕は神機を、兄ちゃんは籠手を装備する。

「イッセー、あなたには下僕の特性と悪魔の戦い方を教えてあげる。ハルトは……………」

「戦います。もう、怖がりたくないから」

「そう。なら、構えなさい。来るわよ！」

グレモリー先輩がそう言うと、皆の空気が引き締まる。

……………来る。

『不味そうな臭いがするぞ？ でも美味そうな臭いもするぞ？ 甘いのかな？ 苦いのかな？』

不気味な声が辺りに響く。これだけでもう気を失いそうだった。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しに来たわ」

グレモリー先輩のその言葉に、ケタケタケタと、人間の発することのできない笑い声が響く。

血の気が引く。

そして、

「おっばい！」

とりあえずイツセー兄ちゃんをぶん殴る。

だがしかし、次の瞬間現れたのは、女性の体の下半身に巨大な化け物が付いている異形だった。

それを見た僕は、

「……………きゆう」

なにこれ怖すぎる。

第16話

「きゆう……………」

「ハル！」

恐怖で意識が遠退く。

いつもなら、僕はこれで気を失っていただろう。

でも、

「……………ふりや！」

「耐えた!？」

今も恐ろしくて、怖くて仕方がないけど、でも、ここで気を失ったら意味がないんだ
!

僕は決めたんだ、変わってやるって。

もう皆を怖がりたくないから、自分に嫌気を感じたくないから、だから僕は、ここで
気を失ってはいけない。

足はこれ以上ない位に震えてて、今にも神機を取り落としそうだけど、僕は前を見つ

める。

敵を、見据える。

すると、僕の両肩に手が置かれる。

「…大丈夫だよ、ハルト。私達が付いてるから」

「そうですわ。ここには、皆がいますのよ?」

小猫ちゃんと姫島先輩が、優しい笑顔を僕に向けながら、そう言つて来る。

——うん、わかった。

そう頷き返すと、二人は安心したように、僕から手を離し、前を向く。

その視線の先では、グレモリー先輩とはぐれ悪魔が言葉を交わしていた。

「その紅の髪のように、お前の身を鮮血で染め上げてやるわああ!」

「悪役ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。祐斗!」

「はい!」

グレモリー先輩の呼び掛けに、木場先輩が飛び出す。

正直、速すぎて殆ど見えなかった。木場先輩の姿が霞んで見えたくらいだ。

「ハアッ!」

いつのまにか木場先輩の手に握られていた長剣の銀閃が走る。

そして、その光景に遅れて、金属と金属を打ち合わせるような音が何度も響く。

「くっ!!」 部長、コイツ、物凄く硬いです。まるで全身が金属のような硬さです」

「そう。なら小猫、朱乃!」

「…はい」

「はいですわ」

今度は、僕の隣にいた小猫ちゃんが駆け出し、姫島先輩が歩を進める。

「…斬れないなら、砕けろ。えいっ」

何とも力みの無い言動とは裏腹に、小猫ちゃんの鋭い踏み込みから放たれた一撃は、

その矮小さからは想像もできない轟音を響かせて、化け物を吹き飛ばす。

「…ハルトに良いところ、見せるんだから」

何か小猫ちゃんが言っているようだけど、何て言っているかは聞き取れなかった。

だって声ちっちゃいし……………。

「あらあら、張り切ってますわね、小猫ちゃんったら。これは私も、良いところ見せなくてはいけませんね」

姫島先輩が手を上に翳す。

瞬間、眩い閃光とともに雷が化け物に直撃した。

化け物は激しく痙攣し、体から煙を上げる。

「……………ちよつとどころじやないくらいグロい。」

「あらあら、まだ元気そうね？　まだまだ行けそうですわ」

再び雷が化け物を襲い、感電させる。

「うふふふふふふ」

姫島先輩は笑っている。それはもう、本当に愉しそうに。

「ひいつ!？」

あまりの恐ろしさに、僕は悲鳴を上げる。あの人やつぱり怖いよ。

「……………大丈夫よ、ハルト。朱乃は身内には優しいから。あなたのこと気に入ってる

みたいだし、甘えたらきつと優しく抱き締めてくれるわ。多分」

グレモリー先輩、最後の一言で台無しだよお……………。

姫島先輩、ホントはオカ研じゃなくて、愉快部なんじゃ無いのだろうか……………。

「調子に乗るなよ小娘どもがあああ!」

所々黒焦げになりながらも、化け物は魔力を放出して姫島先輩の雷を消し飛ばす。

【淫猥なる魔酸】!!」

化け物が魔方陣を構築して、僕たちに反撃をしてくる。

……………いや、一応ちゃんとした技なんだろうけどさ、それはないわー。

だってさ、おっぱいもんで乳首に魔方陣だして、そのまま乳首から攻撃してくるんだもん。

なんか色々と、おかしい攻撃だなあ。

「のおうわ!？」

だけど、やっぱり【酸】アシッドって言うだけあって、その液体に触れたコンクリートがアツ

サリと溶けてしまう。

意外と強力な酸だ。

「きゃあ!!」

僕たちは何とか避けられたが——僕は小猫ちゃんに、兄ちゃんはグレモリー先輩抱えられて、だけど——、姫島先輩は近くにいたために少し反応が遅れて、右足に少し酸がかかり、火傷してしまう。

「朱乃!」

「姫島先輩!!」

僕とグレモリー先輩の声が重なる。

「まずは貴様から溶けて消えろお!」

化け物が両手を構えると、先程と同じ魔方陣が構築される。ただし、大きさはさっきの倍以上だ。

「まずいわ！ あけn——「姫島先輩ッ！」え？」

気がつけば僕は駆け出していた。

殆ど無意識に小猫ちゃんの腕から抜け出し、無我夢中で姫島先輩のもとまで駆け寄る。

「死ね！ 雷撃の小娘ええ！ アシッド・カノン【魔酸砲】!!」

「さ、せ、る、かああああ!!」

僕が姫島先輩の前に飛び出した瞬間、大量の酸が砲弾のように襲いかかってくる。

例え神機の装甲を展開しても、本来なら間に合わないはずだった。

もし間に合ったとしても、僕の装甲はシールドで、後ろへダメージが通るはずだった。

だけど、

僕の神機は、握れば握るほど、その神機の情報が入ってくる。

何ができるのか、何をすべきなのか。

だから、わかるんだ。

今のこの、絶望的な状況を切り抜ける為の方法が。

脳裏に声が響く。

——
スキル発動。

——
【穴熊】

体が動く。

何かに導かれるように、確信を持って。

発動したのはスキル。

それも、防御系最強のスキル。そうだ、これは僕がゲームで使っていたスキルじゃないか。
いか。

凄まじい衝撃が装甲を襲うが、僕らには一切のダメージは通らない。

【穴熊】に含まれているスキルたちが、すべてのダメージを無効化していく。

「ば、バカな！ 無傷だとおお！ 人間めえええ！」

化け物は、先程の攻撃が効かなかった事に驚愕し、今度は僕から潰そうとしてくる。

「逃げて、ハルトくん！」

姫島先輩の悲鳴に近い声が聞こえる。

でも、そういうわけには行かないんだ。

「大丈夫ですよ、姫島先輩。僕だって、戦えるんですから」

神機を構えると、神機を握る両手に脈動を感じる。

まるで、獲物を目の前にした獣のように。

「行くよ、神機！　喰い千切れ、プレデター・フォーム【捕食形態】！」

神機は形を変え、化け物に食らい付く。

相手はアラガミじゃないけど、神機が教えてくれる。

僕は悪魔や堕天使のような超常を喰らうことで、

「リンクバースト、発動！」

限界を超えられるのだと！

体を光が包み込む。力が溢れる。

——同時に、少しだけ、お腹が満たされたような感覚が訪れる。

「小賢しいいいい！」

その質量を持つて押し潰さんと走ってくる化け物を前に、僕は一つの構えを取る。

それは、ゲームで『ゼロスタンス』と呼ばれていた構え。

「ブラッドアーツ発動」

イメージするのは、神速。

すれ違いざまに切りつける、あの技。

「切り刻まれる。【疾風ノ太刀・鉄】！」

化け物が刻まれる。

『騎士』^{ナイト}の木場先輩が斬れなかった相手を。もちろん、弱っていたと言うこともあるが。

「ぎやあああああ！」

「これで止めだ！^{とど} ブラッドアーツ発動！」

1歩、僕は踏み込んだ。

剣の切っ先を相手に向け、力を溜める。

刀身に纏うのは、金色のオーラ。

「穿ち砕け！ 【轟破ノ太刀・金】!!!」

直後、響くのは轟音。

突き出した剣は、化け物よ腹を突き破り、化け物部分と人型部分を切り離した。

よって、断末魔の叫び声を上げる。

それを見ながら、僕は銃形態ガンフォームへと神機を切り替える。

「だめ押しだけど、返すよ」

そして打ち出したのは、先程食らった、酸の「アラガミバレット」………いや、悪魔だから「イーヴィルバレット」とでも名付けようか。

そしてついに、化け物、はぐれ悪魔バイザーは、この世界から完全に消滅したのだ。た。



バイザーが完全に消滅したのを見届けた僕は、その場で尻餅を付く。

正直、アドレナリンが出てたから戦えたけど、もうヘトヘトだ。

戦うのは怖いけど、もしかしたら、これからもこんな闘いがあるのかも知れない。だったら、この慢性的な体力不足をどうにかしなくちやな。

「ハルトくん！」

いきなり、後ろから抱き付かれる。

なんかデシヤヴ。

「ありがとうございますわ、助けてくれて」

やっぱり姫島先輩か。

「いえ、無事で何よりです。足、大丈夫ですか？」

「ええ、このくらいなら。本当に、ありがとう………カッコ良かったですわよ、ハルトくん」

そんなこと耳元で言わないでください。

凄くこっ恥ずかしいです。

「…ハルト、デレデレしないで」

痛い痛い痛い!! 小猫ちゃん耳引つ張らないでよ取れちやうつて!

これで少しは、皆の事、怖くなくなったかな?

うん、なくなったかも。

第17話

最初はただ、彼をからかうことだけを楽しむつもりだった。

何となく、悪戯心というか、いじめっ子心を擽るような雰囲気をもった彼は私にとつて、とても良い後輩玩具でした。

ええ、後輩を、ましてや悪魔が人間を玩具呼ばわりするのはひどく傲慢で、悪しき事なのだと理解はしていますわ。でも、そう思わずにはいられませんでした。

だから、彼が神セイクリッド・ギア器を持っていると知らなくても、私はつい彼を勧誘しました。すると、彼は怖いものが苦手なのか、若干涙目になりながら逃げてしまいました。

それだけで、もうダメでした。

それ以降、私は彼を見かける度に勧誘して、からかつて、悪戯をしたのです。

それがいけないことなんだと、頭では理解していました。でも、彼の顔を見るとどう

しても、その欲求が押さえきれなくて、どうしようもなくなつて。

正直、私は彼に嫌われていると思つていました。憎まれているとすら。

だって、彼が嫌がることを何度も何度も繰り返して、本来なら嫌われたあげく憎まれてしまつてもおかしくありませんでした。

初めて、彼を愛おしいと感じたのはいつでしょうか？

恐らく、私たちが全員悪魔だと知つた彼が錯乱して暴れて、そのあとイツセーくんに慰められて、私達に謝罪をしてきた時だろうか？

私、あの表情は反則だと思つたのです。

本来なら悪戯心が湧き出てくる筈の私ですら、母性を擦られ、守りたいと思つてしまつたのですから。

だから、彼が小猫ちゃんと仲良くしてる所に乱入していたのは、もしかしたら嫉妬心だつたのかも知れません。

愛おしいと感じた彼が、誰かと楽しそうにしている。

私との時は、怯えている。

自業自得だって、解っています。でも、私と話すときも、楽しそうにしてほしい。そう願ってしまう。

ああ、醜い。

なんて度し難くて、傲慢で、醜い感情なのだろうか。

そう思っているのに、やっぱり彼の怯えた顔を見たくなくなってしまふ辺り、私はグレモリー眷属にあるまじき醜さを持っていて、どうしようもなく救えない。

でも、それでも私は気付いてしまった。

自分の想いに。

身勝手な、感情に。

吊り橋効果なのかも知れない。でも違うのかも知れない。

私は彼に酷いことをしていた。怯えているのに怖がらせたり、沢山迷惑をかけたたり。だというのに、私は、

—— 彼が、神結悠斗が、好きだ。

自分で確認して、自己嫌悪する。

今すぐ自分を縊り殺してしまいたい。

私にそんな身勝手が許される訳が無いだろう。

彼を苛めて、それを楽しんで、彼を傷付けて、その挙げ句が彼を好きですって？
本当に愚かしくて救えない。

そもそも、中途半端ハーフな私は、誰かを愛してはいけないのだ。

堕ちた翼を片翼にもつ、穢れた私などが。

そもそもだ。

彼を襲ったのも、彼の憧れだと言うイツセーくんを殺したのも墮天使で、私の同胞。嫌いなモノ

だから、私は彼を好きになっではいけなかった。

いつものように悪戯をして、余裕のお姉さんぶって、そう接しなければならぬ。

だというのに、この胸はこんなにも苦しくて、

こんなにも張り裂けそうで、

涙が溢れそうで、

———こんなにも、彼が愛おし過ぎて。

身勝手に傲慢で、我儘で自己中心的だって、自覚しています。

だから口にはしません。おくびにも見せません。

でもあなたの事、好きになっけていても良いですか？

こんなに醜くて、どうしようもなく救えない女だけれど、この想いはもう誤魔化せないから。

だから、好きになっけていても良いですか？

ハルトくん。

第18話

ある日の陽もとつぷり暮れた放課後。

今日はお父さんが飲み会で、お母さんが自治会に参加してるからね。遅くまで外出オツケーってね。

そんなわけで、僕は部室に来ていた。

というか、最近はもうここに入り浸っているくらいだ。

この間の化け物討伐以降、目に見えて悪魔恐怖症が緩和されていつてる気がする。あ、でも多分、オカ研以外の悪魔に出会ったらわからないかも。

そして、今の僕は何をしているかと言えば。

「…もぐもぐ」

「羊羹おいしーね、小猫ちゃん」

「…うん。おいしい」

小猫ちゃんと並んでソファで羊羹を食べていた。

「粗茶ですわ、二人とも」

「あ、どもです」

「…ありがとうございます」

最近なんだか優しくなった姫島先輩が淹れてくれた緑茶を飲んで一息。

やつぱり羊羹には暑くて苦いお茶が一番だよ。異論は認める。あ、ホットミルクもありだね。

そしてまたモグモグと羊羹を食べる僕たち。

「……………朱乃」

「はい、なんですか部長？」

「あの二人を見ていてなんだか凄く癒されるのは私だけかしら？」

「……………うふふ、そんなことありませんわ、部長」

「そうですね。あの二人はもう、この部のマスコットの存在ですから」

「やつぱりあなた達もそう思うのね」

なんか向こうでグレモリー先輩や姫島先輩、木場先輩達がなにか話してるけど、何の話だろう？

「…は、ハルト」

「ん？」

「…ハルトが食べてる栗羊羹、私にも一口頂戴」

「うん、いいよ？ あ、じゃあ小猫ちゃんが食べてる抹茶羊羹一口ちよーだい」

「…いい、いいよ」

僕は、手元にある羊羹を一切れフォークに突き刺して、小猫ちゃんの目の前まで持つていく。

「はい、あーん」

「……………え？」

あれ？ どうしたんだろ？ 小猫ちゃんが固まった。て言うか顔赤い。

え？ なに？ 僕なんかした!? あ！ そうか！ このフォーク僕の使いかけじゃ

んか！

「ああ、ご、ゴメン小猫ちゃん！ やっぱり使いかけのフォークついていやだよね!」

「…ぱくつ」

「あつ」

しかし、慌てる僕を余所に、フリーズから解放された小猫ちゃんは、なんの躊躇いもなく羊羹を口に入れた。

「……………ハルトと間接キス……………あーんとのコンボ……………」

「え？ 小猫ちゃん、今なんて？」

声が小さいのと、口に物が入っていたせいで声がかくぐもっててよく聞こえなかったよ。

すると、今度は小猫ちゃんが自分のフォークに羊羹を刺してこっちに向ける。

「…おかえし。ハルト、あーん」

「……………こ、これは……………」

やられる側になって漸く理解した。

そうか、これは凄く恥ずかしいぞ！ しかも小猫ちゃんの朱に染まった表情も相まっ

て、なんだこの破壊力！

なるほど、これが悪魔のリーサルウエポンか。

「…あーん」

いや、小猫ちゃんゴメンって。さっきのは謝るから、これは無しにしない？

「…あーん」

ダメだ！ これは何があんでもやってのける人の目だ！

む、むう……………恥ずかしいけど、先にやったのは僕だしなあ……………。

「……………あむ」

「…良くできました」

僕が諦めてかぶりつくと、小猫ちゃんは嬉しそうな声音と笑顔でそう言って来た。

しかし小猫ちゃんて、無表情そうにみえて、結構表情豊かなよなあ……………。
なのになんて学校の子は皆無表情だなんて言ってるのだろうか？

「…ハルト、もう一個頂戴？」

小猫ちゃんがクイクイ、と僕の袖を引いてお願いしてくる。

——なんだろう。可愛いんだけど、それ以前にこう、なんか既視感が……………。

「…ハルト？」

ああ、そうか思い出した。

猫の小猫だ。

アイツも僕のお菓子をよくこんな風におねだりしてたなあ……………。

なんか小猫ちゃんに餌付けしてる気分。

「ううん、何でもないよ。はい、あーん」

「あーん、ですわ」

「…っ?!?!」

「あ、姫島先輩」

僕が出した羊羹は、横から顔を出した姫島先輩が食べてしまい、小猫ちゃんは、なん
と言うか、悔しさとか、お菓子を取られた怒りとかでよく解らない表情をしていた。

「…酷いです、朱乃さん」

「うふふ、二人だけで世界作っちゃって、なんだか妬けちやいますわあ」

あの、僕を置いて行きなり二人でコソコソと内緒話は酷くないですか？

しかも僕の方を二人でチラチラと見ながら。

凄く気になる。

と、そこでいきなり。

「イツセー!!」

グレモリー先輩が兄ちゃんの名前を呼びながら立ち上がる。

それに続くように、皆の顔が険しくなる。

なにごと？

「…ハルトはここにいて。すぐ帰って来るから」

「ちよつと待つてよ！ いったい何事?!」

僕が回りに説明を求めると、グレモリー先輩が口を開く。

「イツセーに持たせていた魔方陣から信号が届いたの。SOS用の魔方陣から、ね」

SOS!?

それってヤバイやつなんじゃない!?

「待って! 僕もいく!」

「いけませんわ。危険ですもの」

姫島先輩が僕をここに留めようとする。

「でもイツセー兄ちゃんが危ないんでしょ!」

「…ハルトも危ない」

「そんなこと言ったら、小猫ちゃんや皆だつて危ないんじゃないの?」

「大丈夫よ、ハルト。私たちは悪魔だもの」

「でも、悪魔のイツセー兄ちゃんが危ないんでしょ?」

「そ、それは……………」

グレモリー先輩が押し黙ったのを見て、僕は強引に魔方陣の仲に入る。

「はあ……………仕方ないわ。今は非常時だもの。朱乃、小猫。彼を両側から掴んで!

悪魔じゃないから、単独では魔力がうまく行使できないわ!」

先輩の指示に従い、二人が僕の腕に自分の腕を絡めてくる。

あの、非常時こんな時もそんなノリなの? え? こんな時だから? ええ……………。

そんな、何となく締まらない心持ちで、僕は魔方陣の光に包まれていった。

この光の向こうにある惨状を予想することもなく。

第19話

「庇ってくれた女の子目の前にして、逃げらんねえよな！」

俺は、明かに俺より強いであろう神父の前に、戦う構えをとった。

例え「最弱兵士」でも、一矢報いることができるかもしれない。

「え？　え？　マジ？　マジ？　俺と戦うの？　死んじやうよ？　苦しんで死んじやうよ？」

なんて、神父は楽しそうに笑いながら不気味な事を言ってくる。

くそ、怖え。足が震えやがる。

だけど、アーシアの前でカッコ悪いところは、見せられねえな！

俺が拳を握り直し、神父が飛び出すその瞬間、床が紅く輝き出した。

「何事や？」

疑問を口に出す神父の足元を光が走る。紅い光は、徐々にとある形を作っていく。

これは……グレモリー眷属の魔方陣だ！

俺がその陣を理解した瞬間、光が爆発するように輝きを瞬間的に増した。

光が収まった時、そこには見慣れた人達の姿があった。

「兵藤くん、助けに来たよ」

木場がイケメンスマイルを送ってくる。

「…ッ！ ハルト、見ちゃダメ」

木場の後ろから小猫ちゃんが顔を出し、壁に縫い付けられた死体を見た瞬間、血相を変えて後ろに声をかける。

つて、ハル!? アイツも来たのかよ!?

「どうしたの? いったい何が……………え?」

小猫ちゃんの静止も空しく、ハルはひよこつと横から顔を出し、そして一瞬で顔を青ざめさせる。

「うっぐ……………」

そしてすぐさま口許を押さえ、部屋の外まで駆けていく。

ハルの姿が見えなくなつてすぐ、アイツの苦しそうな声と、水つばい何かが落ちる音が響く。

あれは、吐いたな。

小猫ちゃんと朱乃さんが心配そうにハルのところへ向かうと、それを見ていた神父が、楽しそうに俺に問いかけてくる。

「おんやあ？　ね、ね、悪魔くん。今のは人間かなあ？」

「……………そうだよ」

「ぎやはは！　悪魔と人間が一緒とか！　うんうん、決定けつてーい！　あのガキも一緒にお仕置きしちゃうぞー！」

……………なんだと？

「しつかし、だっさいねえ！　この程度で吐いちやうなんてさー！」

そう言いながら、神父は死体を蹴りあげる。

「てめえ！」

「おおつと怒るなよ悪魔くん。なんだつて、コイツが僕ちにブツ殺されちゃったのは、君たちのせいなんだぜえー！」

「……………俺達のせいだど!?!」

「さつきもいったろ？　馬鹿なのかな？　悪魔に関わる人間も、お仕置きだつてさー！」

だ、か、らあ。

と、神父はクネクネ動きながら、気味の悪い声音で言葉をつなぐ。

「あのガキんちよもしつかりちやつかり殺つちやうよ！　つてねー！」

光の剣と銃を構えながら、神父が斬りかかってくる。

しかし、降り下ろされた刃が俺に届くことは無かった。

「およよ？」

突如として、その剣の刃が消滅した。

「随分と私のかわいい下僕をかわいがってくれたようね？」

怒気を含む冷たい声が聞こえ、後ろを振り向くとそこには、右手を前に翳し、髪を溢れる魔力で揺らしながら立っている部長がいた。

「はいはい、かわいがってあげましたよお。本当は全身くまなく予定でござんしたが、どうにも邪魔が入りまして、それは夢幻となつてしましたあ」

神父は、なんとも腹立たしい声音で、まるでこちらを小バカにするように笑っている。「そんでそんで、できうることなら、さっきのゲロゲロ臭いガキんちよも微塵切りいっちゃおうかなつてさあ……………わっひゃー！」

ふざけたことを抜かす神父めがけて、三つの飛来物。

家具に、雷撃に、黒い魔力。

しかしそれらは、神父が何かを床に叩きつけて出来た光の膜のような物に阻まれた。

「あひゃひゃー！ あつぶねー！ 結界が無かつたら即死だった！ つか！ ひゃひゃひゃー！」

「…ハルトに手を出したら、許さない」

「そんなことをすれば貴方、死ぬだけでは足りないですわよ？」

ドアの向こうから、怒った声音と表情の小猫ちゃんと朱乃さんが出てくる。

その二人に挟まれるように、青い顔をしたハルが歩いてくる。

「部長、ここに接近する墮天使の気配がありましたわ。その外道を野放しにするのは口惜しいですが、ハルトくんといっせーくんがこの状態です。退くのが得策かと」

「……………そうね。皆、帰還するわよ！」

「ひやは！ そう簡単に逃がしましえんよお!!」

「させるか！」

朱乃さんが魔方陣を構築し始めた時に、神父が新しい光の刃を作って斬りかかってくるが、木場がそれを受け止める。

「部長！ アーシアも！」

「無理よ！ 元々この魔方陣で転移出来たのは悪魔だけ！ それを無理やり、人間一人分を追加したの！ これ以上は無理だわ！」

「そんな！」

俺はアーシアを振り返る。重なった視線に、彼女はにっこりと笑うだけだ。

その瞳に、涙を湛えながら。

「アーシア！」

「いっせーさん。また、会いましょう」

やめろよ、そんな悲痛な声で、笑うなよ。

「アルジェントさん！」

ハルも、アーシアを呼び掛ける。

「ハルトさんも、また会いましょう。言葉は通じないけれど、また、いつかそれがこの場での最後の会話だった。」

魔方陣が輝き出す。

「祐斗！ 急ぎなさい！」

部長が呼ぶと木場は瞬間移動とも呼べる速度で、俺達の隣に降り立つ。

「逃がすかってー！」

神父が追ってくるが、それは小猫ちゃんが投げたソファーによって防がれる。

神父によってソファーが切り裂かれる光景を見ることもなく、俺達は部室へ転移していった。

部室へ戻った俺は、初めて行った転移の感覚を感じることもなく、ただ彼女の、最後の笑顔を思い出していた。



あそこから帰ってきて、僕はソファアの上で、姫島先輩に膝枕をされて横になっていた。

姫島先輩が、心配そうに優しく頭を撫でてくれるが、正直、まだ気分は優れない。

——人間の、惨殺死体。

あんなものを見たのは初めてだ。むしろ、あそこまで悪意をもって殺されることの方が珍しいのでは無いのだろうか。

墮天使を初めて斬った時や、バイザーを斬ったときも、少なからず血を出していた。ましてやバイザーに至っては、あの死体のように胴体と下半身が切り離されていた。いや、されていた、と言うか、切り離した。

僕が、自分の手で。

……………つ。

その時の光景が、感触が、今ごろになって生々しく甦って来る。そしてそれが、さっきの光景と重なって、再び僕を苛む。

なんで僕は平気だったんだろう。

なんで僕は、命を奪ってにおいて、平然としていられたんだろう。

—— どうして皆は、平気そうなんだろう？

悪魔だから？ 人間じゃないから？

.....。

今、僕は自分を殴りたくなかった。

皆を怖いと、恐ろしいと、忌まわしいと思ってしまった僕を殴りたい。

皆だって怖いのかもしれない。もしかしたら、慣れてしまったのかもしれない。なんせ、あんな化け物討伐を何度かしている程なのだから。

「部長！ 俺はあのアーシアって子を！」

「無理よ。どうやって救うつもり？ 彼女は墮天使側よ。私達とは相容れない存在同士なの。彼女を救うって事は、墮天使を敵に回すことになるの。」

そうなったら、私達は戦わなければならない。

……………墮天使に目を付けられている、ハルトまでも」

「っ!!」

向こうでは、イツセー兄ちゃんと、グレモリー先輩が言い争っていた。

あの時、僕がちゃんと動けていたら、皆の足を引つ張らずにいたら、変わっていただろうか？

あの神父を倒して、アルジェントさんを助けられていただろうか。

……………倒す？ 倒すって、どうするの？ ゲームや漫画みたいに、相手が負けを認

めれば終わり？ まさか。

じゃあ、殺すのか。

「……………うっぐ」

「大丈夫？ ハルトくん」

「……………めん」

「え？」

「ごめん、なさい……………イツセー兄ちゃん」

「ハル？」

僕の絞り出した言葉にも皆が視線を向ける。

「ごめん、なさい……………足引っ張っちゃって、何もできなくて……………ぐずつ、僕が、ぼぐが、行きだいで、自分で言ったのび……………あじ^足引っぱって……………迷惑^足かけで、ごべんなさい……………」

涙で息がつまる。

悔しい。悲しい。

人の死が怖くて、戦うのが怖くて、戦えなくて、情けなくて。

その僕の臆病さすべてが、恨めしい。

「ぼぐ、ぼぐ、誰かが、びど^人が死んでるのがごわぐ^怖で、だからびんな^皆のめい^迷ばぐ^惑になっ

ちやつで、ごべんなざいいい……………」

泣いた。

あれだけ止められたのに、調子に乗ってでしゃばって、挙げ句皆の足を引っ張って、アルジエントさんを救えなくて。

そんなことをした僕が泣くのは卑怯だって知ってる。わかっている。でも、僕は泣いた。泣いてしまった。

嫌いだ。こんな泣き虫な僕が。

嫌いだ。こんな臆病な僕が。

嫌いだ。こんな卑怯な僕が。

——
強く、なりたくないあ。

第20話

——夢を見た。

——夢を見ている。

——夢を彷徨っている。

何もない無限の中を。

何にでもなる夢幻の中を。

ここはどこ？

なんで僕はここにいるの？

声が響く。

『戦いが怖いのか、主よ』

うん、怖い。すごく怖い。

『死を恐れますか、主君』

死は嫌だ。味方も、敵も。

『なぜ怖いのですか、我が君』

それは僕が臆病だからだ。

だから血が怖い。痛いのが怖い。戦いが怖い。

余りに自分が役立たずで、皆の足枷で、本当に腹が立つ。

『そうか。主は自分の弱さが嫌いか』

うん。

『だからこそ、主君は我らを呼んだのでしょう？』

ああ、そうだったね。

『だったら、何を怖れますか』

どういふこと？

『我らは主が、そなた自身が望み、欲した力』

『主君が願ひ、手を伸ばした力』

『故に妾達は、その手を取った』

僕が、望んで手を伸ばした？

『恐れる必要はない。そなたの苦しみは』

『我らが全て喰い尽くしてしましましょう』

『だから、恐れる事などありません』

王が、騎士が、女王が、僕を包み込む。

守るように、慰めるように、

——喰い尽くすように。

『さあ、手を伸ばせ』

『そこに主君の求めた力全てがある』

『そう、破壊破壊の全てが』

その力があれば、もう何も怖くないかな？

『恐怖など、とうに喰い尽くした』

僕は強くなれるかな？

『弱さなど、力で塗りつぶせば良いのです』

僕は皆を守るかな？

『敵対する全てを倒^{破壊}してしまえば』

そうか。

僕の望む全てが、そこにあるんだね。
なら僕は手を伸ばすよ。

もう、臆病なのは嫌だから。

もう、皆の足を引つ張りたく無いから。

そして、あの優しいシスターを、救いたいから。

「だから僕はまた、君達に手を伸ばすよ」



夢を見ていた。

どんな内容かは臆気だけれど、何をすべきかは分かった。

「――皆を、守れるくらいに強く」

なるんだ。

なりたい、ではなく、なる。

それが、僕の願いで、望みなんだ。



アルジェントさんを救えなかった次の日、僕は学校を休んだ。

僕は大丈夫だって言ったけれど、小猫ちゃんや姫島先輩、それにその二人に説得され

た両親に、無理やり休まれた。

「暇だなあ……………」

ぶつちやけ、今の現状はそれに限る。

『強くなる。心も、体も』

そう決意はした。

目標も決まった。

けれど、何をすれば良いのかはまだ分からない。

でも、とりあえず今は、じっとしてられない。

「……………外に出ようか」

天気も良いし、散歩でもすれば、気も紛らわせられるだろうし。



「……………ハル、お前なにしてんだこんな時間に」

「……………イツセー兄ちゃんこそ」

公園に行くと、そこで黄昏ているイツセー兄ちゃんに出会った。

言葉を交わしながら、僕は兄ちゃんの横に腰を下ろす。

「助けられなかったなあ、ハル」

「うん……………」

兄ちゃんの言葉に頷きながら、息を吐いて空を見上げる。

空には雲一つ無く、暖かい春の陽光が辺りを照らしている。

沈んだ気分なのに、気持ちいいと思える天気だ。

「助けられなかった。僕が足を引つ張ったから……………」

「それはもう良いって。言つたら？ お前が悪いんじゃないだって」

「でも、僕が……………」

「ていつ！」

「あだ！」

次から次へと弱音が出てくる僕の頭を、イツセー兄ちゃんが軽くはたく。

「いつまでもうじうじ悩んでんなよ。自分が弱くて嫌なのは、俺も同じだ」

「イツセー兄ちゃんも？」

「そうさ。セイクリッド・ギア 神器の効果も良く分かんないし、力も弱いし、正直、お前に嫉妬もしたく

らいだ」

「……………」

「でもな、俺は諦めねえ」

「え？」

「たとえどんなに実力さが絶望的でも、俺は諦めねえ。何がなんでも、アジアを助け

る。そう決めたんだ」

「……………やっぱりカッコいいね、兄ちゃんは」

ホントに、この人は、こう言うところでカッコ良くて、そして僕は、兄ちゃんのそんなところに憧れたんだ。

憧れた人が諦めてないんだ。僕もうじうじしてられないな。

「そんなこと無いさ。俺はカッコ良くなかねえよ」

そう言つてイツセー兄ちゃんが腰を上げたとき、僕の視界に見知った金髪が写り込んだ。

……全く。噂をすれば影、つて誰が考えたんだろうね。的を射すぎているよ。まさか外人にも有効だとは。

「アルジエントさん……………」

「え？ アーシア？」

「あ。……………イツセーさん、ハルトさん」



今日は楽しかった。

ハンバーガーショップではアーシアがバーガーを買えずに困惑したり、ハルトが信じられない量を購入したり（俺の奢りだった。泣きたい）、アーシアがバーガーの食べ方が分からずにアウアウ言ったり、ハルトが大量のバーガーをペロリと平らげたり。

所変わってゲーセンでは俺とハルのレーシングゲームの三番勝負が始まったり（なん

とか勝てた)、アーシアがもぐら叩きでアウアウ言いながら必死になったり、クレーンゲームで俺が何度か失敗しながらぬいぐるみを取ったり。

そして最後は、三人で写真を取った。

アーシアを真ん中に挟んで、三人で取った写真はきつと、俺達の大切な宝物になるだろうな。

自然に、そう思えた。

「アーシア、俺達はもう友達だ」

ふとしたことからアーシアの神セイクリッド・ギアの力と、なぜ彼女がここに来たのか、その顛末を

聞くことになった俺達は、彼女の手を取り、そう言った。

「イツセーさん？」

「俺も、ハルも、アーシアの友達だ。だから、絶対にアーシアを助けてみせる」

俺がそう言い切ると、ハルも拙くて辿々しい英語を使って同意する。

「……………それは、悪魔の契約としてですか」

「そんなわけあるか！ 俺達は今日、目一杯遊んだら？ だったらもう友達なんだ。

悪魔とか人間とか神様とか関係なく！ 話したい時に話して、遊びたい時に遊ぶ！ 俺

達は、今日からそう言う友達なんだ、な？」

ハルも、それに頷く。アーシアの言葉はわからないだろうけど、ハルだって、アーシアを友達だって思ってるんだ。

アーシアの双眸から、涙が零れ落ちた。

ああ、本当に楽しかった。誰かさんのせいで軽く破産しかけたけど、それでも、とても楽しかったんだ。

——夕麻座天ちゃんが現れるまでは。

ちようど、ハルがトイレに席を立った時の事だった。

「悪魔と友達？ はっ、笑わせないでもらえるかしら？ お腹が振れてしまうわ」

そんな、冷たい声と笑い声が聞こえた。

「ゆ、夕麻ちゃん……………」

俺の驚いた声音に、彼女は興味深そうな視線を向けて、クスクスと笑う。

「へえ、生き返ったの？ 良かったわね、あなたの主様は胸が大きいわよ？」

その小馬鹿にしたような声は、あの可愛らしい夕麻ちゃんのものではなく、大人っぽく妖艶さを感じさせるものだった。

「……………レイナーレさま……………」

アーシアが夕麻ちゃんをそう読んだ。

レイナーレ？ ああ、そうか。

忘れてた。いや、忘れようとしていた。

天野夕麻は初めての恋人墮天使だった。

なるほど、彼女の本当の名はレイナーレか。

墮天使レイナーレ。俺を殺した張本人。

「……………墮天使が何の用だ？」

「は、汚らわしい下級悪魔が、気安く話しかけないでちょうだいな」

向けられた視線は、先程の興味深そうな物ではなく、侮蔑したような、見下したような視線だ。

「アーシア、戻ってきなさい？ 逃げても無駄なのだから」

逃げる？ どういうことだ？

「嫌、です……………。私は、もうあそこへは戻りたくありません……………。人を殺すような、場所へは……………」

「そんなこと言わないでちょうだい。これでもかなり探したのよ？　ほら、帰りましようっ。」

俺はとつさに、震えているアーシアの前に立つ。

それを見たレイナーレは、心底めんどくさそうな顔をする。

「じゃましないで貰えるかしら、イツセーくん。また殺すわよ？」

「やれるもんならやってみる！　来い！　セイクリッド・ギア！」

啖呵を切り、俺は左手に赤い籠手を装着する。

だがレイナーレは、俺の籠手を見て哄笑を上げる。

なんでも、俺の神セイクリッド・ギア器はありふれた、どこにでもある物らしい。

「だけど、今はそれだけで十分だ！　動きやがれ、俺の神セイクリッド・ギア器！」

『Boost!!』

よし、これで！

力が強化されて、俺は踏み込む。

だが、

「無駄よ。あなたがいくら強化されても、私には決して届かない」

俺の両足に、光の槍が突き刺さる。

「が!？」

「イツセーさん!？」

駆け寄ってきたアーシアの光が、俺の足を包み込み癒していく。

倒れ伏した俺に槍の切っ先を向けながら、レイナーレは冷たくいい放つ。

「アーシア。その悪魔を殺されなくなかったら、私と共に戻りなさい?」

「うるせえ! お、お前なんか!」

「わかりました」

「アーシア!」

足の治療を一通り終えたアーシアが、レイナーレの元へ歩いていく。

「イツセーさん。今日一日、ありがとうごさいます。ハルトさんにも、そう伝えておいて

下さい」

ふざけんよ! だからなんでそんな、そんな悲しそうに笑うんだよ!

俺は、そんな顔が見たくないから!

だが、俺のそんな内心も知らず、アーシアはレイナーレの翼に包まれる。

「ふふふ、ごきげんよう、イツセーくん。次生まれるときは、もうちよつとましに生きな

さいな」

そう言つて、レイナーレは槍を振りかざす。

「そんな！ レイナーレさま、お話が違ふではありませんか！」
「黙りなさい。悪魔は滅するべきなのよ」

アーシアの慌てた言葉に、墮天使は冷たい声で答える。

そして、光の槍が降り下ろされた。

第21話

俺に向かって勢い良く飛んでくる光の槍。

その的である俺は、癒されたとはいえ、光で両足を焼かれ、動くことはできない。

「なに!？」

だが、突如として、その光は撃ち碎かれた。

「……………何をしているのさ、墮天使」

その声は、ここから少し離れた場所から聞こえてきた。

「バカな!？」 その距離から撃ち抜いたとでも言うの!？」

「この距離を当てられなくて、スナイパーは名乗れないね」

この声は……………ハルだ!

あいつ、なんで逃げてねえんだよ!？」

「この、人間風情が!？」

レイナーレが頭上に手をかざし、光を集め始める。

だが、大きな音がハルの方から響いた瞬間、その光は霧散した。

「アルジエントさんを離せ。次は当てるぞ」

その声は酷く低くて、重くて、俺の知っているハルの気配では無かった。

「くっ……………」

なんとか体をずらし、ハルの姿を見るとそこには、怒りのオーラを纏ったハルが、神機を手にレイナーレを睨み付けていた。

「あらあ？　良いのかしら？」

だが、レイナーレはそれに怯えること無く、アーシアの首筋に手を添える。

「私を撃てば、もしかしたらアーシアに当たるかもよ？」

それでも良いのかしら？　まあもつとも、あなたが引き金を引くよりも早く、私はアーシアの首を落とせるわよ？」

「なん……………!？」

その言葉に、俺とハルは絶句し、動きを止める。

「アーシアを殺されたくなかったら、動かないことが懸命ね」

「卑怯な！」

「あははは！　なんとでも言いなさい？　帰るわよアーシア。

イツセーくん、今回は彼とアーシアに免じて殺さないで上げて上げるわ。感謝なさ
い」

そして今度こそ、墮天使レイナーレは、アーシアを抱えて飛び去ってしまう。

「待てよ、墮天使……………アーシアアアアア!!」

俺は手を伸ばし、アーシアの名を呼ぶ。

だけど、後に残ったのは黒い羽根と、俺達三人が楽しそうに写っている写真だけだった。

——また何も、できなかった。

ちくしよ……………ちくしよ……………。

「ちくしよおおおおお!!」

俺達以外誰もいない公園に、俺の声が響き渡った。

ああ、ハルの気持ちが良い解ったよ。
弱いのは嫌だ。

誰も守れないのが、ただ見てる事しかできないのが嫌だ。

——ああ、強くなりてえなあ。



部屋に、乾いた破裂音が連続して響いた。

発生源は僕とイツセー兄ちゃんの頬。

叩かれた。僕たちはグレモリー先輩に平手打ちをされた。

「何度言えばわかるの？ ダメよ、あのシスターの救出は認められないわ」

あの後僕たちは、事の顛末を皆に話した。

話した上で、アルジエントさん救出を提案した。

当然、悪魔と墮天使の問題で、部長はそれに關して、手を出すな、と言った。

それが納めできない僕たちは、何度も何度もお願いをし、その結果が今のビンタだ。

「これは下手をすると、悪魔と墮天使の戦争にまで発展しかねない問題なのよ？ それを私達のみで決める事なんて……………」

そうか。そう言うことなら。

「なら、僕が行きます」

「ハルト？」

「僕はこの中で、唯一の人間です。僕なら、何も問題は無いでしょう？」

「あるわよ！」

悪魔と墮天使で問題が発生すると言うのなら、僕が。

しかし、それも先輩に却下されてしまう。

「いくら貴方が規格外でも、相手は大勢いるのよ？ それにあなた、命を奪えないじゃないー！」

そうだ。確かに僕は殺すのが怖い。

でも、それでも僕は行かなきゃいけないんだ。

アルジエントさんが、僕の友達が待ってるんだから。

「なら、俺は『はぐれ』になります」

「イツセー!？」

「グレモリーの眷属から、悪魔の社会から外れて、俺達だけでも向かいます!」

「ダメよ! そんなの、私が許さないわ!」

「なら部長は俺に、俺達に、友達を見捨てろっていうんですか!？」

「あなた達は死んだら、生き返れないのよ!！」

イツセー兄ちゃんとグレモリー先輩が激しく言い争う。

「家族を、友達を、仲間を愛して、敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか!？」

イツセー兄ちゃんのその言葉に、グレモリー先輩は黙り込み、静かに睨み合いが始まる。

「……………あの子は私には無関係の子よ。イツセー、彼女の事は忘れなさい。ハルト、あなたもよ。あなたが死んだら、悲しむ人たちが沢山いるの」

そこへ、姫島先輩がやって来て、グレモリー先輩に耳打ちをする。

姫島先輩から何かを聞いたグレモリー先輩は、部室にいる僕たち全員を見渡すように言った。

「大事な用事ができたわ。私と朱乃は少し外へ出るわね」

「部長、話はまだ——！」

踵を返した先輩を兄ちゃんが追いかけると、先輩はクルリと振り返り、兄ちゃんの口元に人差し指を当てる。

「イツセー、あなたに話しておくことがあるわ」

グレモリー先輩がイツセー兄ちゃんに教えたのは、兄ちゃんに使われた駒、「ポーン兵士」の特性、プロモーション。

そしてもう一つ。

「イツセー、セイクリッド・ギア神器は、宿主の想いに応えるの。だから想いなさい。強く、強く、心の

そ底から。

強い想い、強い意思こそが、セイクリッド・ギア神器の力の源。いい？」

それだけ言うと、グレモリー先輩は踵を返して部屋から出ていってしまう。

……………今のは、もしかして？

そう思って、ドアの所へ視線を向けると、まだ部屋から出ていない姫島先輩と目が合

う。

すると、姫島先輩はニッコリと笑い、素早くウインクをして部室から出ていってしま
う。

……………やっぱり、そう言うことか。

全く、グレモリー先輩のツンデレめ！

「行くよ、イツセー兄ちゃん」

「おう」

僕と兄ちゃんがドアへ向かうと、二つの人影に遮られる。

「待つんだ、二人とも」

「退いてくれ木場、小猫ちゃん！俺達は行かなきゃいけないんだ！」

「…殺されますよ？相手ははぐれとは言え、悪魔殺しのプロ達ですから」

「それでも行くさ」

「いい覚悟、と言いたいけど、やっぱり二人じゃ無謀すぎるね」

「だったら、いったいどうしろってんだ！」

痺れを切らせて怒鳴るイツセー兄ちゃんに、木場先輩は優しく微笑む。

「僕は、『二人じゃ』って言ったよ？ 僕らも行く。ほら、これで四人だ」

木場先輩がそう言って笑う。

……………ちえ、イケメンはなんでも絵になるなあ。

「僕らはアーシアさんを良くは知らない。けれど、キミ達は僕らの仲間だ。だからこそ、

僕はキミ達二人の意思を尊重したい」

「木場……………」

「それに、個人的に神父や墮天使は嫌いだからね」

そこで、僕の裾がクイ、と引つ張られる。

「…それに、部長も言っていました。教会は敵地だって。なら、先輩はプロモーションでき

ます」

「あ」

イツセー兄ちゃんもようやく気付いたようだ。

「さ、行こうか。キミ達の友達の、アーシアさんを助けるために！」

「…出発」

ああ、なんて頼もしい人達なんだろう、この悪魔たちは。

嬉しいなあ。

ね、イツセー兄ちゃん。

「ああ、行こうぜ！ 待ってるよ！ 今助けに行くからな、アーシア！」

イツセー兄ちゃんのその号令で、僕たちは部室を飛び出した。

第22話

すっかり日も暮れ、月明かりが照らす中、僕たちは教会の入り口まで来ていた。

僕たちは顔を見合わせ、無言で頷く。

覚悟はとうにできている。

あとはあの人を、アルジエントさんを救い出すだけだ。

入り口を潜り、一気に聖堂まで駆け抜ける。

僕は平気だけど、三人は少し不快そうな顔をしている。まあ、捨てられて墮天使の巣窟とは言え、曲がりなりにも教会なんだ。悪魔の三人には少しキツイのかもしれない。

「あれは……………」

ふと、上を見上げたイツセー兄ちゃんがポツリと呟く。

つられて僕達が見上げると、そこには首を破壊された磔の聖人像が。

「神への反逆、つて言う皮肉の意味なんだろうね」

木場先輩がそれを見て考察する。

「…不気味な静けさ」

小猫ちゃんが辺りを警戒しながら拳を握りこむ。

確かに、妙に静かだ。

こういう潜入の経験はないけれど、四人も一気に異物が入り込んだんだ。気付かれていてもおかしくはない。なのに……………。

「なんで、誰も出てこねえんだ？」

イツセー兄ちゃんが、不審げな声音で辺りを警戒しながら言う。

すると突然、聖堂内に拍手の音が鳴り響く。

奥の物陰から、口元にイヤらしい笑みを湛えた人物が表れる。

「ハイハイハイ、ごっつ注目ー！ やあやあご対面！ 再会だねえ！ 感動的だねえ！

みんな大好きフリード神父ちゃんの登場だよ！」

あれは……………。

「フリード！」

ああ、そうか。

あの日、僕がなんの役にも立たなかった日、あの死体を作った張本人か。

「おお!? いやはは！ まさか名前を覚えられてる？ 僕ちん大人気？ あ、さつき自

分で名乗ったつけ？ あらら、俺っちったらうっかりさん！ テヘペロ！」

フリードとか言う神父は、常に笑顔だ。

だけどその笑顔は、アルジエントさんみたいな優しいものでも、姫島先輩みたいな綺麗な物でもない。

胸糞の悪い笑みだ。

「んー、俺としては？ 二度と会う悪魔はいない予定だったんですよ！ え？ なんてってそりゃあお兄さん聞いてくださいよ！ ほらほら、俺ちゃんめちやくそ強いでしょ？ だからさ、基本悪魔は初見バツタリエンカウントからの瞬殺チョンパッパだったわけですよ。 出会って刻んで死体にキスしてグッドバイ！ 悪魔だからバツドバイ？ それが俺様のエクソシスト生活でした！ でもでもお、そんなスンバラスイ僕さまの人生計画は、君らのせいでハチャメチャ街道まっしぐら！ ダメだよねえ？ 人間、諦めたら終わりだよな？ え？ 人間じゃないからわからない？ そうだよね！ だって悪魔なもの！ 一人人間混じっちゃってるけどさ！ だからさ！ ム力着火なわけで！ 死ぬと思うわけよ！ だから死ぬ！ つーか氏ね？ いいから死んじまえよ！ このクソでクズでゲロ臭え腐れ悪魔どもがよおおおおおおお!!!」

饒舌に僕らには理解できない言葉を口にして、神父は一気に激昂する。

………まあ、僕英語は得意じゃないから、あの神父が何を言ってたのかなんてわか

らないんだけどね。

でも、みんなの様子を見る限り、知る必要もないみたいだし、そもそも知る意味もない。知りたくもない。

神父フリードは懐から銃と柄だけの剣を取り出す。

そして、柄だけの剣に、光の刃が出現する。

きつと普段の僕なら、その時点でライトセイバーだのビームサーベルだのとテンションを上げたはずだろう。

でも、今はそれどころじゃないんだ。

「兄ちゃん！ 僕は言葉がわからないけど、兄ちゃん達ならわかるんだよね!? 聞き出して！」

「わかってるさ！ おい！ アーシアはどこだ！」

すると、神父はそれにアツサリと答える。

「んっんー？ その祭壇下に隠し通路があるんで、そこから行けたり行けなかったり！ あ、いつけねゲロっちまった！ まいっか！ どうせてめえらここで死ぬし！ うひゃひゃ！」

今のをイツセー兄ちゃんに通訳してもらい、祭壇の所へ行こうとするが……………、

「ハル！」

イツセー兄ちゃんの声に反応して、横に転がる。

瞬間、僕がさつきまでいたところへ光の銃弾がいくつも撃ち込まれる。

「行かせないよー！ だつてそれが僕の使命！ 大天使………あ、違った、墮天使からの偉大なる使命なり！ ってね！ だから行かせないよー！ あ、でも、逝つてはいいよー！ 俺つてばやつさすいー!!」

「………だから、なに言つてるかわかんないんだつてば」

神父が僕に刃を降り下ろす。

細い刀身だ。正直、神機の一振りですべて砕けてしまえそうだ。

——間に合えば、の話だが。

姿勢が悪かった。横に跳んで転がった状態じゃ、受け止められる物も受け止めきれない。

でも、

「神結くん！」

木場先輩がその光の剣を受け止める。

今、僕たちは一人じゃないんだ！

それから僕たちはしばらく戦っていたが、この神父、凄く強い。

剣の技量や射撃能力もそうだが、何より周りを見極める力に長けているんだと思う。

まず、高速の剣戟で、木場先輩以外を近づけさせず、不意打ちで小猫ちゃんが投げた
ら長椅子を切らずに反らし、スナイパーで狙いを澄ましていた僕に撃ち抜かせ、その物
陰から出てきて木場先輩を切りつける。

強いという事もあるが、何より戦いが巧い。

素人目に見ても、そう思ってしまう力量だ。

と、そこへ、

「プロモーション！ 【戦車^{ルック}】！」

へっ、捕まえたぜ！」

神父と同じように物陰を利用したイツセー兄ちゃんが、神父の腕を掴む。

「ぶっ飛ベクソが！」

そんな言葉とともに、イツセー兄ちゃんの籠手の着いた拳が、神父の顔面に突き刺さ
る。

結果、神父は吹き飛び、壁に激突する。

「あのときは良くもアーシアを殴ってくれたな、クソ野郎。一発殴れてざまあみろだ」けれど、その神父はよろよろと立ち上がる。

服が所々破け、体もすすだらけだが、特に目立った外傷は無い。

「あーつぶね危ねえ。このボタンを押すと一時的に光の結界が発生する装置が無ければ即死だった！ 説明乙！」

何か仕掛けがあるみたいだけど、今のを防ぐとは……………恐ろしい反応速度だ。

だけど一度足を止めたんだ。もう逃がさないよ。

僕達四人が、神父を取り囲む。

すると神父は苦笑いを浮かべる。

「あー……………あー、これは、あれかなあ？ 絶体絶命黒ひげ危機一髪！ スペシャルピンチってやつ？ うわマジご勘弁！ 悪魔を殺すのは良いけど、悪魔に殺されるのはやーよ！ というわけで退散します！ 悪魔チョンパツパできないのが心残りだけど！」

「……………僕達がキミを逃がすと思うのかい？」

「そんじやまグツドバイ！」

木場先輩がそう言うにも関わらず、神父は床に何かを投げつける。

瞬間、辺りを目が開けられないくらいの眩しい光が照した。
目眩まし!?

少し視力が回復した頃には、その神父の姿はなかった。
どこからか声だけが聞こえてくる。

「その雑魚悪魔の………：………イツセー君って言ったっけ？ 俺、君にフォーリンラブ！
絶対になぶつ殺すから！ あとその言葉通じてないっぽい人間の小僧も、イケメン
も、ガキも！ とりあえずお前ら全員、今度はブッコロだから！ 覚えとけよ！ やん、
俺ってば三下捨て台詞ー！ ほんじゃ、ばいちゃー！」

そんな、良くわからない言葉を残して神父はこの場から消えた。

「くそ、逃げられた！」

「それよりもイツセー兄ちゃん、今はアルジエントさんを！」

「わかってる！ 行くぞ、皆！」

僕たちは頷き合い、祭壇の隠し通路へと向かった。

この下に、アルジェントさんがいるんだ。
待ってて。今、行くからね！

第23話

祭壇下の階段を下り奥へ続く通路を抜けた僕達の前に、巨大な扉が現れる。

「いいかい兵藤くん、神結くん。ここから先は恐らく、敵の真っ只中だ。覚悟はいい？」
木場先輩のその言葉に、僕たちは力強く頷く。

「わかった、じゃあ、行くよ——」

イツセー兄ちゃんと木場先輩が扉に手をかけると、その扉が勝手に開く。

「いらつしやい。悪魔に化け物の皆さん」

開け放たれた扉の向こうから、墮天使レイナーレが言葉をかけてくる。

部屋中には、神父とおぼしき格好の人達が沢山いて、その部屋の奥に、僕達は十字架に磔にされている少女を見つける。

「アーシア！」

「アルジエントさん！」

僕達の呼び掛けに、俯いてグツタリしていた彼女は顔を上げる。

「……………イツセーさん？ ハルトさん？」

その声は酷く弱々しくて、今にも消え入りそうだった。

「ああ、助けに来たぜ、アーシアー！」

イツセー兄ちゃんが笑いかけながらそう言うと、アルジエントさんは涙を流す。しかし、そんな空気も、レイナーレが壊してしまう。

「感動のご対面だけど、遅かったわね。いま、儀式が終わるところよ」
突然、アルジエントさん体から光が溢れる。

同時に、彼女の苦しそうな悲鳴が聞こえる。

「なにを!？」

僕らが駆け寄ろうとすると、神父達が道を塞ぐが、小猫ちゃん達が僕達の道を切り開く。

それでも少し時間が掛かり、アルジエントさんの下へ行く頃には、彼女から大きな光が飛び出していた。

それを、レイナーレが手に掴む。

「これよ、これだわ! これこそが、私が長年欲していた力!

セブリティッド・ギア
神器!

ああ、これ

さえあれば!」

レイナーレの表情は、歓喜と狂喜と、恍惚に彩られていた。

対して、その光を抜き取られたアルジエントさんは、グツタリと気を失い、顔を青ざめさせていた。

.....。

「.....何をした」

ポツリと、僕はそう呟く。

アルジエントさんから出てきた光。そしてそれを取り込んだレイナーレから出た光。その二つはどちらも淡い緑の光で.....。

「今、アルジエントさんに何をした」

だけど、僕の声は届かない。

レイナーレは今、歓喜の感情にうち震え、周りが目に入っていないのだ。

だから僕は、声を張り上げた。

「今彼女に何をしたのかって訊いているんだ！ 墮天使!!」

跳び上がり、斬りつける。

だけど、空中を戦場とする彼女には、僕の剣は届かなかった。

「何って、セイクリッド・ギア 神器を抜いたのよ。ふふ、残念ねえ」

「どういう意味だ」

「だって、あなた方がどんなに頑張っても、その子、死ぬわよ？」

「なん……………っ!？」

「セイクリッド・ギア 神 器を抜かれた者は、死ぬしか無いのよ」

……………つまり、なにか？

こいつは今、アルジエントからセイクリッド・ギア 神 器を抜き取った。

そして、それを抜き取られた人は、必ず死ぬ、と？

なんだそれは。

ふぎけるな。

「レイナーレエエエエ!!」

イツセー兄ちゃんの怒号が響く。

「二人とも！ 一度上に上がってくれ！ 守りまながらじや分が悪い！」

木場先輩が神父を斬り払いながら呼び掛け、小猫ちゃんと道を作る。

イツセー兄ちゃんがアルジエントさんを抱き上げ、僕に目配せをして走り出す。

僕もそれに無言でついて行った。



「アーシア！ アーシアはもう自由なんだ！ 俺達といつでも遊べるようになるんだ！」

イツセー兄ちゃんが、長椅子に横たえたアルジエントさんの手を握り、必死に呼び掛けている。

僕は唇を噛みながら、ただひたすら、彼女の手を握りしめることしかできない。

「……………私、少しの間だけでも、友達ができて……………本当に、幸せでした……………」

僕には、彼女が何て言ってるのかわからない。こんなことなら、もつと英語を勉強しておけば良かった。

でも、言葉は通じなくても、彼女が何を言いたいのか、何となく、わかる。わかって

しまう。

そして同時に、彼女が助からないことも。

「な、なに言ってるんだよ！ そんなこと言うなよ、アーシア！ これから俺たちは、もつと沢山遊んで、笑って、楽しく過ごすんだよ！ どこにだつて連れていつてやるさ！

ゲーセンも、カラオケも、ボウリングだつて！ 他にもあるぞ！ もつと沢山の事を、俺たちはするんだよ！ アーシア！ 俺たちは三人でさ！」

イツセー兄ちゃんも泣いていた。

きつと、気づいたのだろう。

彼女の命の灯火が、すでに消え始めていることを。そしてそれを今、全力で否定しようとしている。

「俺らはダチだ！ ずつとずつと、友達なんだ！ ああ、松田や元浜にも紹介しなくちゃ

！ これからアーシアは幸せになるんだよ！ 沢山の人に囲まれて、笑顔で過ごすべきなんだ！」

「……………きつと、この国で生まれて、イツセーさんや、ハルトさんと、同じ……………学校に行けたら……………」

「なら行くぞぜ！ 一緒の学校に行くんだよ！ 日本語なら、俺たちが教えてやる！」

アルジエントさんの手が、僕とイツセー兄ちゃんの頬を撫でる。

「……………もう、前が見えませんが………私のために、私なんかの為に、泣いてくれる……………ああ、もう、何も……………」

その手が、ゆつくりと落ちていく。

「……………ありがとう……………幸せでした……………」

——それが、彼女の最期の言葉だった。

ゆつくりだったから、僕にも聞き取れた。

何が、ありがとうだ。

何が、幸せだ。

結局救えなかった！ 死なせてしまった！

守るって、助けるって、そう決意したばかりなのに！ なのに、僕はッ！！

イツセー兄ちゃんは、泣きながら空に、天に叫んでいる。

悪魔なのに、神様に救いを求めて。

「滑稽ね。悪魔が神に救いを祈るなんて」

嘲る声が聞こえる。

堕天使が、地下から上がってくる。

「見てごらんなさい？ 下であの騎士につけられた傷なんだけどね？」

その傷口にレイナーレが手をかざすと、淡い緑の光が放たれ、傷を塞いでいく。

——おい。

「見て？ 素敵でしょう？ どんな傷も癒してしまう、美しい光。なんて素晴らしい

セイクリッド・ギア
神 器なのかしら！」

——なんで、なんでお前がそれを使う。

「……………返せよ」

声が震えた。

「嫌よ。これは私の物なのだから」

認められるものか。

「ふざけるな……………ふざけるなよ！ それはお前みたいな腐れ外道が使っているいい光じゃない！」

語気が荒れる。怒りで、視界が真っ赤に染まる。

「返せよ！ それはアルジエントさんの光だ！ 優しいアルジエントさんの、優しい光だ！

それをお前が使うな！ お前が汚すな！ その光を、あの人に返せよ、レイナー

レエエエエ！！」

こいつだけは許せない。赦しちやいけない。

僕はもう、僕達はどうも、怒りを抑えきれない。

「薄汚い化け物が、私の名を呼ぶんじゃない！」

光が降り注ぐ。

僕とイツセー兄ちゃんを貫こうとする、優しくない光。

アルジエントさんのそれとは、比べ物にならないくらい、汚い光。

「邪魔だ！」

神機を横薙ぎに一閃し、光を消し去る。

憎い。

こいつが、憎い！

『ならば手を伸ばせ』

『恐怖などとうに喰い尽くした』

『あとは、敵を破壊するだけ』

うん、わかってるよ。

僕がこいつを、殺す為に。

「——スキル【剣聖】発動」

僕は、力を振るう事を躊躇わない！

第24話

「お前だけは、お前だけは絶対に、斬喉つてやる!!」

血が滾る。血が沸き立つ。

怒りで鼓動が速くなる。

「ブラットアーツ!」【無想ノ太刀・黒】!

刀身を黒いオーラが纏う。

この力は禁忌と呼ばれた力だ。だからこそ、今はその強さが頼もしい。

「ああああ!!」

踏み込み、斬りつける。鈍い轟音とともに振り下ろされた刃は避けられたものの、その余波でレイナーレは空中でバランスを崩す。

「な、何よ、その馬鹿げた威力は!?!」

今の一振りで、恍惚の表情だったレイナーレの顔が、一瞬で青ざめる。

まだだ。

この刃は、一度動きを止めない限り続くんだ。

飛び上がって斬りつける。

「ふ、ふん。空中じゃたいしたこと無いわね！」

届かない。

なら、重ねればいい。

無理？ 不可能？

そんなものは知ったことか。

そんなもので止められるほど、僕は落ち着いていけないんだ！

「【韋駄天】 【飛天車】！」

「なにっ!? くっ！」

二つの、いや、無想ノ太刀も含めて、三つのプラットアーツが重ねがけされた攻撃が、レイナーレを襲う。

「きゃああああ!!」

咄嗟に光の槍で防御した彼女だが、当然、それはあえなく打ち砕かれ、地に落ちる。

「まだだ！」

足りないんだ、これだけじゃ！

まだ、僕の怒りは、激情は治まらない！

もつと強く、もつと激しく！

【無想ノ太刀・黒】の効果はまだ続いている。

——ブラッドアーツ発動、

——発動、

——発動、

——発動！

「【無尽ノ太刀・蒼】！【ソニックキャリバー】！【アークキャリバー】！【朧月】！！」

合計、五つの重ねがけ。

結果、言葉では言い表せないくらいに力強さが、体の奥から沸き上がってくる。

同時に、自覚できるほどの体への負担がかかる。

血管が膨れ上がる。

鼓動が大きく速くなる。

血が逆流するような吐き気に襲われる。

口から血が零れ、今にも倒れてしまいそうだ。

——でも、それでも！

「お前を斬らなきや、気が済まないんだよ、レイナーレ!!」

剣を振るう。

光が碎ける。

剣を振るう。

黒い羽根が舞い散る。

剣を振るう。

血飛沫が僕を濡らす。

体が悲鳴を上げる。骨が軋み、皮膚が裂けて血が飛び散る。

レイナーレも必死に抵抗するが、僕の剣には敵わない。

「おおおおお!!!」

咯血しながら叫び、大きく斬り上げた。

下から上へと走った刃は、レイナーレの体を切り裂いて吹き飛ばす。

「いやあ、いやあああ……………」

血だらけになって地に伏したレイナーレが、泣きながら這うように僕から逃げていく。

指輪から放たれる光も、心なしか弱く、傷を治すに至っていない。

「……………」

僕はそれを、冷めた思考で見下す。

ああ、なんて哀れで、醜くて、無様な生き物なのだろうか。

体は血まみれだ。

返り血と、内側から破けた皮膚から流れてくる血で、僕の体は真っ赤だ。息は荒く、足元がふらつく。

それでも僕は、歩を進める。

トドメを、刺すために。

殺すために。

「ブラッド……アーツ………発、動」

息も絶え絶えだ。声も掠れている。

「いや、いや！ 来ないで！ 化け物お！」

トドメの一撃は、先程の連撃のフィニッシュ技。

「……………【斬てつ……………っ!?!】

だけど、その技が放たれることは無かった。

「がふっ……………!?!」

口から、大量の血が溢れて、膝を付く。

——ああ、体の限界か。

血が抜けて、少し冷静になった思考が、そう判断する。

思えば、あそこまで無茶をする必要なか無かった。多分、一つのブラッドアーツ
だけで十分だったはずだ。

それでも止まれなかった。止まりたくなかった。

そうでもしなければ、この思いは、この怒りは、消せないと思っただから。

神機を取り落とし、うつ伏せに倒れ込む。

おいおい、何やってんだよ僕。

立てよ。ほら、立って神機を取れよ。

まだやるべき事は残ってるんだ。だからほら、立てよ……………立てよ!!
「ぐ、ううう……………」

どんなに自分を鼓吹しようとも、口から漏れるのは呻き声のみ。
体はおろか、指の一本すら動かない。

それを見たレイナーレは、体を起こし、僕を笑う。

「は、はははははっ！ 無様ね！ たかが人間ごときが、力を付けた程度で調子に乗って、この至高の墮天使に刃向かったからそうなるのよ！ 哀れね、人間！^{ゴミクス}それがあなたの限界なのよ！」

僕を指差し、先程の怯えを捨て去って、彼女は僕を見下す。

「無様にのたうち回って死になさい！ 人間！^{虫けら}！」

光が降り注ぐ。僕を殺すために。

それでも、光を放つレイナーレ自身は近づいてこない。多分、僕が怖いんだ。

全く、なんでこいつは学習しないのか。

今まで、自分が投げた光が、誰かを殺した所なんて見たことあるのだろうか？
少なくとも、僕は見たことがない。

だから僕はこんな光、

『Boost!!』

「うおおおおおお!!」

ちつとも怖くなんか無い。
だって、

『Boost!!』

「しゅらあ!!」

兄ちゃんが、僕の憧れヒトコロが打ち砕いてくれるって、信じてたから。

「頑張ったな、ハル。美味しいところ持つてく様で悪いけどさ、あとは俺に任せしてくれ」

「……………もちろんさ、イツセー兄ちゃん」

僕の目の前には今、優しいヒーローが立っていた。



アジアが死んで、俺は絶望に打ちひしがれた。

あのアジアが、あの優しい少女が、こうも呆気なく死んだ。

その事実を、俺は自分の死以上に受け入れられなかった。

「アジアア？ おい、アジア起きろよ？」

だから、呼び掛けた。何度も何度も。

終いには、自分が悪魔だと言うのも忘れて、ひたすら神様つてのに願った。

だけど、神様は答えて暮れない。答えるはずもない。

後ろで、ハルの怒号が聞こえた。

何かを破壊する音も、レイナーレの驚愕の声も、聞き取れた。

ハルの語気が荒い。

あれは知っている。ハルがあんな口調になるのは、本気で怒った時だ。本気で怒って、周りが見えなくなつて、自分の体を後回しにしても、自分の激情を相手にぶつけるときの声だ。

——それは、ダメだ。

昔、こうなつた時のハルは、自分が傷だらけなのも構わずに、喧嘩の相手を殴つていた。

相手が泣いても、自分の体が限界になつても、だ。

「ハル……………っ！」

案の定、ハルは倒れた。

レイナーレを追い詰めて、追い詰めて、そしてトドメの前に、ハルは倒れる。

それを傷だらけのレイナーレが笑い、ハルを殺そうとする。

—— やらせるもんか。

—— こんな事で、弟までも殺されてなるものか。

—— 俺セイクリッド・ギアの神器が弱い？ なら強くなつてくれよ。

—— 神お前器は、俺の想いに答えてくれるんだろ？

—— だったら応えろよ。俺の心に、俺の、想意志に、応えろよ！

「なあ、セイクリッド・ギア神器 アアアアア!!」

籠手の宝玉から光が溢れる。

アーシアのような優しい光ではない。

レイナーレのような、醜い光でもない。

ハルのような、荒ぶる光でもない。

力強くて、頼もしい光だ。

『Dragon Booster!! Bloody Reinforce!!』

赤い光。

血のような、炎のような、赤い光が溢れ出す。

駆け出す。

拳を横に薙ぎ払う。

『Bloody Booster!! The Encourage!!』

体のそこから溢れる光が辺りを照らし、俺に力を与える。

俺自身が、『鼓舞』されていく。

これで、俺はようやくやくこいつを殴り飛ばせる。

俺から友達を奪っておきながら、弟までもを奪おうとした相手だ。
たとえ元恋人だろうと、躊躇う理由は無い！

「い、いや！」

多少治つたらしい翼を羽ばたかせて、レイナーレは今にも飛び立とうとする。

「逃がすかよ、バカ」

掴んだ腕には、驚くほどに力が無く、弱々しい。

俺は一気に引き寄せる。

「私は、至高の！」

「知るかよ！ 吹っ飛べ、クソ墮天使！」

『Blood Arts Operation!!』

籠手から発せられるその音声と共に、とある技名が頭に浮かぶ。

【破撃ノ拳打・龍】!!

赤い光が、拳を覆い尽くす。そしてその光は、龍の形をしていた。

「おのれええええ!! 下級悪魔がああああ!!」

その龍を纏った左拳を、レイナーレの顔面に鋭く打ち込んだ。

一瞬、本気で好きになっていた夕麻ちゃんの顔が頭に浮かんだ。

「おおおおおおお!!!」

でも、俺はそれを振り払うように拳を振り抜いた。

夕麻彼女ちゃん女は墮こい天使つだ。俺の、憎むべき相手なんだ。

打ち抜かれたレイナーレは大きくぶつ飛び、壁を突き抜けて行った。

「はあ、はあ……………っ!」

息は切れ、肩で息をする俺の肩に、手が置かれる。

振り向くとそこには、剣を杖にしたハルが立っていた。

俺たちは互いに目を合わせ頷くと、拳を打ち合わせる。

そして、

「ぎまーみろ」

声を合わせて、そう言った。

「……………仇は討ったよ、アルジエントさん」

空を見上げて、ポツリと、ハルがそう呟いた。

でも、アーシアはもう二度と、俺達には笑いかけてくれないんだ………。

涙が、俺達の頬を伝った。

第25話

イツセー兄ちゃんが墮天使を殴り飛ばした。

それはいい。凄くいい。

でも僕は一つ、気になることがあった。

それは、イツセー兄ちゃんが使った「破撃ノ拳打・龍」。あれは絶対、ブラッドアーツだった。

しかも、兄ちゃんの籠手が発したあの光。あれを僕はよく知っている。

あれは、血の力だ。

血の力の発現時に、体から溢れる光。

なぜ、ゴッドイーターでもない、ましてや偏食因子すら持たないイツセー兄ちゃんが血の力に目覚めたのかは解らない。

でも、今はどうでも良い。

今はただ、あの墮天使を倒せたことだけを理解しておこう。そちらの方が、重要なんだから。

「お……………つと」

体の力が抜けて、僕は後ろに倒れていく。

「…頑張ったね、ハルト。カッコ良かったよ」

でも、後ろから小猫ちゃんが抱き付いて、僕を支える。

「よかった……………無事だったんだね、小猫ちゃん」

「…うん」

一通りの会話がすむと、涙がまた零れてくる。

さつきも泣いた。戦ってる時も泣いていたはずだ。

それなのに、僕の涙は止まることも、枯れることも知らないように、次から次へと溢れてくる。

嫌だなあ……………もう泣きたくなんか無いのに。

「…いいんだよ。泣いても。痛かったね、辛かったね。……………悲しいね」

優しい、慈愛に満ちた小猫ちゃんの言葉が、僕の心に染み込んでくる。

「うん……………うん……………」

涙が止まらない。

僕は、友達を守れなかった。

言葉は通じなかったし、年齢も、好きな食べ物も、あの人の事は殆ど分からなかったけど、あの人は、あの優しい女の子は、アルジェントさんそれでも僕の大事な友達だった。仇は討った。

でも、それで彼女が帰ってくる事なんて無いんだ。

「部長、連れてきましたわ」

いつのまにか来ていた姫島先輩が、同じくいつのまにか来ていたグレモリー先輩の前に、レイナーレを落とす。

「ありがとう、朱乃。起こして貰えるかしら」

「はい」

グレモリー先輩の頼みに、姫島先輩は空中に水の塊を作り、それをレイナーレの顔面に叩きつけた。

「……………姫島先輩、怒ってる？」

「ゴホッ、ゴホッ！」

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ」

「リアス・グレモリー……………」

「久しぶりね。早速だけど、あなたのお仲間の二人……………ドーナシックとカラワーナと言ったかしら？ あの二人なら来ないわ」

グレモリー先輩が事も無げに言ったその言葉に、一瞬理解できなかったのかレイナレは固まり、次いで顔を蒼白へと変える。

「う、嘘よ……………」

すると、先輩は懐から二枚の羽根を取りだし、レイナレに渡す。

「これが彼女たちの羽根よ。あなたならわかるでしょう？」

「そんな……………」

「そこそこ手強かったけれど、所詮は下級墮天使。しかも一人は手負い。2対2で負ける方が難しいわ」

グレモリー先輩はニツコリと笑顔を向ける。

けれど、その目は笑っておらず、侮蔑と怒りに満ちていた。

「さて、墮天使レイナレ。私が何を言いたいか、わかる？」

「え？」

羽根から視線を先輩に戻す墮天使。

そして視線を戻した瞬間、彼女は固まる。

なぜなら、

「消えて貰うわ、墮天使レイナーレ」

グレモリー先輩の体から、これまで見たことがないくらいの魔力が吹き出ていたからだ。

魔力で髪は踊り、周囲は紅のオーラで照らされる。

「もちろん、その神セイクリッド・ギア器は回収させてもらうけれど」

「い、嫌よ！ わ、私は、私はこれで、あの方々に……アザゼル様とシエムハザ様に――」

彼女の言葉に構わず、先輩は右手をかざす。

レイナーレは焦るように辺りを見回し、イツセー兄ちゃんを見ると、途端にその足元にすがり付くように這いつくばり、媚びたような声を出す。

「イツセーくん！ 私を助けて！」

――は？

「この悪魔が私を殺そうとするの！ 私、あなたの事が好きよ、愛してる！ だから、一緒にこの悪魔を倒しましょう！」

——こいつ。

僕は無言で歩き出し、神機を頭上に構える。

——どうしてこいつは、ここまで僕を怒らせる。

しかし、振り上げた神機を降り下ろすことは無かった。

「やめなさい、ハルト。あなたが手を汚す必要は無いわ」

「部長、俺もう限界です…………。お願いします」

イツセー兄ちゃんがそう言った瞬間、レイナーレは顔を絶望に染める。

「私のかわいい下僕に近寄るな、ゲスが。消し飛ばせ」

グレモリー先輩の手から放たれた魔力の一撃は、堕天使を跡形もなく吹き飛ばし、教会に黒い羽が舞い散った。



「さあ、この指輪をアーシア・アルジェントさんに返しませうか」

レイナーレが死んだ後、回収した神器セイフリッド・ギアを手にグレモリー先輩が言う。

「で、でも、アーシアは、もう……………」

そうだ。

確かに神器は取り返せた。でも、それで彼女が生き返ることなんか無いんだ……………。

「イツセー、これがなんだかわかる？」

落ち込む僕らにグレモリー先輩が見せたのは、赤いチエスの駒。

グレモリー先輩の「イツイル・ピリス悪魔の駒」だ。……………あ、その手があったか！

「これで、この子を悪魔として転生させるわ」

「ほ、本当ですか、部長！」

「……………この子の回復能力、私が欲しいと思ったの。だから別に、この子の為じゃないわ」

……………んー？ なんぞ今のツンデレは。

するとグレモリー先輩は僕の視線に気がついたのか、恥ずかしそうに咳払いをした。

「んん！ それとイツセー。突然で悪いけど、あなたの神器についていくつか分かった事があるわ」

「へ？ 俺の神器って、ありふれた物なんじゃ？」

「私も最初はそう思ったわ。けど、それじゃあなたの駒の数が割りに合わないのよね」「駒の数？」

「何でも、イツセー兄ちゃんは【ポーン兵士】の駒を八つ全て使いきったそうで、ポテンシャルとしては【クイン女王】である姫島先輩に次ぐんだそうだ。

そして、ありふれた神器でそのポテンシャルは出せず、イツセー兄ちゃん本人にも、そのポテンシャルを見いだせなかったんだと。

うん、軽くdisられたね、兄ちゃん。

「イツセー、あなたの神器は、神すらも滅せる道具………つまり【ロンギヌス神滅具】と呼ばれる、最強の武具よ」

マジで？ 兄ちゃん神さま殺せるの？

何それチート？ しかもなんかデザインカッコいい。

「名前を【ブリステッド・ギア赤龍帝の籠手】。最強と呼ばれたドラゴンの片割れよ」

………それともう一つ。兄ちゃんは血の力を手に入れている。

まあ、それはまた今度の機会にだね。
今は、アルジエントさんが最優先だ。

「グレモリー先輩」

「わかっているわ。この話は一旦ここまでね」

そう言つて、グレモリー先輩は駒をアルジエントさんの胸の上に置く。

途端、駒から紅い光が発せられ、アルジエントさんの体を包み込んだ。

「蘇りなさい。私の新たな眷属として」

先輩のその言葉に呼応して、より一層強くなつた光と共に、駒はアルジエントさんの中に沈み込んでいく。

同時に、彼女の神器も光となつて、体に入つていった。

それは、紅と緑の光が入り乱れる、どこか幻想的な光景で、僕たちは無意識に息を飲んだ。

——これで、アルジエントさんは……………。

光が全て収まると少しして、アルジエントさんの臉が持ち上がる。

「あれ？」

ちよつと気の抜けた、彼女の声が聞こえる。

それになにより……………

「アーシア！」

「アルジエントさん！」

「…………イツセーさん、ハルトさん、私はいったい……………」

なにより、そう、言葉が解るんだ。彼女の。

僕たちは無意識に、彼女の体を抱き締めた。

「よかつた……………うん、本当によかつた！」

「は、ハルトさん……………言葉が……………」

アルジエントさんの声も震えている。

だんだん、頭も状況に追い付いて来たのだろう。嗚咽も聞こえ始める。

僕とイツセー兄ちゃんハルトさんから体を離し、互いに顔を見合わせる。

そして、

「帰ろう、アーシア」

「僕たちと一緒に」

彼女に手を伸ばした。

さつきは届かなくて、掴めなかつた手を、今ここで、僕たちは伸ばしたんだ。

「……………はいっ！」

そしてその手を、彼女は泣きながら嬉しそうに取つたのだつた。

第26話

あれから数日たった日の朝、僕は学校へダッシュしていた。

なぜなら僕は、今日と言う日をなによりも楽しみにしていたのだから！

「イツセー兄ちゃん！」

通学路の途中、同じく学校に向かっている兄ちゃんと合流する。

そして、おはようの挨拶も適当に、僕らは校門をくぐり、部室を目指す。

「おはようございませす！」

部室のドアを勢いよく開けると、そこにはグレモリー先輩以外の部員がおらず、静まり返っていた。

もつとも、そうなることがわかって、僕らは早めに家を出ただけ。

「あら、結構早いわね、二人とも」

「勿論ですよ部長！」

「だって今日は特別な日ですから！」

「ふふ、なら二人には、皆より早くお披露目しなくちゃね」

グレモリー先輩は笑つて、奥の扉に手をかける。

「二人とも、あんまりはしゃがないように……と言っても、無駄でしょうけどね。開けるわよ?」

そして開け放たれた扉の向こうには――、

「あ、あうう……スカートの方が短いです……は、恥ずかしい……」

この学校の制服を身にまとつた、友^{アルシエントさん}達の姿が。

「……なるほど、これが聖女か」

僕らは二人揃つてそんな事を呟いた。

正直、聖女という言葉すら彼女には役不足だ。

聖母? いや、女神?

あ、でももう悪魔だから何て言うんだらう?

……何でも良い。とりあえず一つ言えることは、

「似合つてるよ、アーシア」

「うん、凄くね!」

それに尽きる。

僕らに声をかけられた事でこちらに気づいた彼女は、ビックリしたように飛び上がり、顔を朱に染めながら振り返る。

うん、尊い。

「いい、イツセーさん、ハルトさん……………」

僕らを見ながら恥ずかしそうに、小さな声で僕らの名を呼ぶ。

「おはよう、アーシア」

「おはようございます、アルジエントさん……………いや、先輩？」

そうそう、彼女、年上だったんだ。イツセー兄ちゃんと同じ年。

「は、ハルトさん！ できれば、その……………これまでのように……………いえ、できるこ

とならイツセーさんと同じようにアーシア、と呼び捨てで……………」

「え？ ……………うーん、じゃあ、アーシア先輩？」

「ううう……………」

「じ、じゃあアーシアさんでー！」

なんだ今の顔は。涙目で上目遣い。

逆らえる訳無いじゃないか。

うん？ なにさイツセー兄ちゃん、その目は。

するとアルジエ……………アーシアさんは手を会わせて祈りのポーズを取る。

「ああ、主よ。私にこのような友人を、このような幸せを与えて下さり、心より感謝します……………あうっ！」

だけど、途端にそんな悲鳴を上げる。

「頭痛がします」

「当然よ、悪魔なのだから」

へー、悪魔ってお祈りもダメなんだ。初詣行けないね。

「うう、そうでした。私、悪魔になっちゃったんです」

「後悔してるの？ アーシアさん」

僕がそう訊くと、彼女は首を大きく横に振る。

「こ、後悔だなんてとんでもないです！ ……私、感謝こそすれ、後悔や恨みだなんて」

「どうして？ もう神様にお祈りできないんだよ？」

ぶっちゃけ、元々敬虔な信者にとつて、お祈りが出来な状態つてのがどれだけキツいことなのかは、無宗教である僕にはわからない。

わからないけど、相当辛いことなのだろうという事は何となく理解できる。

それでも彼女は、笑顔でこう言った。

「確かに、祈ることが出来ないのは悲しいです。でも、それ以上に、こうしてイツセーさんと一緒にいて、ハルトさんと言葉を交わせる。その事が、たったそれだけの事が、私にはなによりも幸せな事なんです」

今、ここに在ることこそが幸せなんだと、アーシアさんはそう言った。多分、信仰心は残っているのだろう。

いや、確実に残っている。当然だろう。でも、それでも今が、友達僕達と一緒にいられる現実今が幸せなんだと、アーシアさんはそう言ってる。

だったら――。

僕と兄ちゃんは顔を見合わせて、笑いあう。

「これから、もつと沢山の事をして」

「もつと沢山楽しんで」

「楽しく過ごそう！ アーシア（さん）！」

その言葉に、アーシアさんは相好を崩し、眦から涙を溢す。

「はいっ！ イッセーさん！ ハルトさん！」

僕らのやり取りを見ていたグレモリー先輩も、優しそうに微笑んでいる。

「さて、皆も来たようだよ」

入り口に目を向けると、そこには他の部員が立っていた。

「やあ、おはよう」

爽やか笑顔の木場先輩。

「あらあら、微笑ましいですわ」

ニコニコ顔の、どことなく黒いオーラの姫島先輩。

「…ハルト、デレデレしないで」

そして膨れっ面の小猫ちゃん。

あれ!? 何で小猫ちゃん怒ってるの!? あと姫島先輩も! ニコニコしてるけど、あ

のオーラ絶対怒ってる! なんで!?

「ふふふ、これから楽しくなりそうね。ね、アーシア?」

「はい! 部長さん!」

いや、あの雰囲気見て楽しそうって……………これだから悪魔は。

……………いや、二人の隣にいる木場先輩の顔がひきつってるから、あの二人がおかし

いのか?

でも確かに面白くなりそうって思ってる辺り、僕もここに慣れてきたって事かな?

「さて、新しいメンバーも揃ったことだし、ささやかなれど盛大なお祝いといきましょう

?」

グレモリー先輩がどこから取り出したケーキを見て、皆のテンションが上がる。

主に僕と小猫ちゃんとイツセー兄ちゃんが。

本当に、楽しくなりそうだ！
これからもよろしくね、アーシアさん！

閑話

閑話 とある三神の談話

ここは、一言で表すなら精神世界。

複雑に言い表すならば、現世にして夢幻、夢現ゆめうつの世界。

彼らの宿主である神結ハルトが未だ気づかぬ、彼らの棲み家。

宿主が気付いていないが故に、本来なら語られることも、認識されることも無かつたであろう。

だが時として、それは誰かの時間かせ作者g………気まぐれによつて、その法則は覆される。

これは、そんな覆された法則によつて垣間見られる、神々の対話の記録である。



「さて諸君。突然だが我輩は、諸侯らに一つ、とある議題を呈したい」

ふと、そんな言葉が白狼王の口から放たれる。

「ほう、議題とな、白狼王？」

「して王よ、その議題とは？」

それに応えるのは魔女王と鋼騎士。

彼らは一ヶ所に集まり、顔を見合わせる。そして、その二神二人にじつと見られている白狼王は、不敵に笑う。

「我輩が呈示する議題……………それは」

ごくり、と固唾を飲む音を出したのは、果たしてどちらか。

「それは、我らが宿主にして主、神結ハルトを如何様に愛でるか、だ！」

「なん……………っ！」

「ですって!？」

驚愕する二人に、白狼王は声高に唱える。

「諸侯らも見たであろう！ 我輩らが主の愛くるしさを！ 戦闘時における猛々しさを

！ あれをギャップと、萌えと呼ばずしてなんと呼ぶ！

普段は頼りなく、愛玩動物が如き愛くるしさを誇る主！

だが一度我輩らを手に取り、倒すべき対象を前にした主のあの猛々しさ！

……………素晴らしかろう？ 尊かろう？ のう、魔王王、鋼騎士よ！

怒濤の勢いで捲し立てた白狼王は、満足げに息を吐き、二人に問いかける。

本来ならドン引きしても已む無しな内容であるが、しかし、二人の反応は違った。

「ふ、ふふふ！ そうか、そうであるか！ ようやくそなたも気付いたか！ 我が君の真価に！ 無論、妾は初めから気付いておったとも」

「さ、流石ですぞ、白狼王、魔王王！ 若輩者である拙者、つい先頃まで思いもよりませんでした！ しかし、確かに言われてみれば、一理あるものです！」

「一理？ 一理とな？ 鋼騎士よ。汝は我輩らを、否、我輩らが主を愚弄する気か！」

「い、いえ！ そのようなことは決して！」

「我が君の愛くるしきは、一理などという矮小な理に収まるわけが無かろう！」

「あれを真理と、万象の理と呼ばずして、なんと呼ぶ！」

たつた一人を議題に、彼らは白熱した議論を繰り広げる。繰り広げてしまふ。

端から見れば変態の集まりなのだろう。

だがここは精神世界。

彼ら以外に存在するものは、形と言葉を持たぬ《紡ぎ手》のみ。

故に彼らは止まることを知らない。止まろうとしない。

議論はなおも繰り広げられている。

「ああ、妾、あの方の笑顔も好みであるが、あの泣き顔もまた捨てがたく……………」

「馬鹿者め、それよりも、戦闘時のあの凛々しく雄々しい、まさに戦士然とした表情とのギャップである、普段の頼りなさであろう！」

「いえ、しかしやはり、寝顔ではないかと！」

「……………?!? なんたる不覚っ!!」

彼らの議論は止まらない。

彼らにとって、新たな主であるハルトは、宝の宝庫であり、共に過ごせば過ごすほど、彼に対する情愛が募っていくのである。

「嗚呼、早く我が君が覚醒し、妾達とまともに言葉を交わせる日が来ないだろうか

……………」

「そう逸るな、魔王王」

「そうですとも。いずれ、時が来れば……………」

「「「「「「「「」」」」」」

ハルトが彼らの本性を見るのは、まだ先の話である。

戦闘校舎のフェニックス

第27話

「……………なんだろう、変な夢を見たような気がする」

思い出せそうで、思い出せなさそうで、何となく思い出しちゃいけないような夢だった。

おもに身の危険的な理由で。

「今何時……………って、まだ五時過ぎじゃないか」

目覚ましのセットは六時半。対して、時計の短針は五をほんの少しだけ過ぎ、長針は一と二の間くらい。

「うーん……………でももう目が覚めちゃったし……………暇だし……………」

流星に朝からゲームをするのは気が引ける。

って言うかお母さんに見つかったら怒られる。それだけは勘弁願いたい。

「たまには散歩でもするかな」

この時期の早朝の空気は、たとえば住宅街でも中々心地が良い。

うん、そう考えるとちよつとワクワクしてきた。

僕はぱぱつと着替えを済まし、部屋を出る。

「そういえば、イツセー兄ちゃん、特訓してるって言ってたな……ちよつと冷やかしに行こうつと」

グレモリー先輩曰く、イツセー兄ちゃんの神セイクリッド・ギア器は、兄ちゃんの身体能力が高ければ高いほど意味があるそうだ。

……いや、良く考えてみたら、それ普通じゃない？ 兄ちゃん的能力に関わらずさ。

「場所は……確か公園だっけ？」

ま、とりあえず行ってみよう。



散歩がてら公園を目指す中、僕は思考の海に沈む。

考えるのは先日の事だ。

「血の力、か……………」

それは、イツセー兄ちゃんが目覚めた力。本来なら、ゴッドイーター、それも、ブラッドしか使えない特殊な能力。

なぜ偏食因子すら持たないイツセー兄ちゃんがそれを得たのか。

考えられる要因としては、兄ちゃんが悪魔であったこと。そして多分、

「僕の『喚起』かなあ……………」

僕はゲームの装備を引き継いだ。ゲームの装備ということはつまり、主人公の装備だ。

そして、ブラッドアーツが使えるってことは、僕も血の力に目覚めているという証。

ということは、僕が仲間の覚醒を促す『喚起』の力を引き継いでいてもおかしくはない。

「予想としては、この世界で偏食因子に当たるものが悪魔の細胞か、駒か、それに準ずるなにかで、目覚めたきっかけは多分、十中八九僕の『喚起』……………」

うーん、あのときはイツセー兄ちゃん感情が高ぶってたつてもあるんだろう。

「あれ？もしかしてこれ、皆にも目覚める可能性があるってこと？」

イツセー兄ちゃんの神セイクリッドギア器は特別な力を持つっていつてたし、血の力が目覚め

た時もある籠手から出ていた。

………悪魔だから目覚めるのか、それともあの籠手だから目覚めたのか、はたまた、人間以上の強さなら皆目覚めるのか………。

「あー、ダメだ。わかんない。頭破裂しそう」

まあこれは追々考ええるとして、問題はイツセー兄ちゃんがなんの力に目覚めたか、だ。これに関してはあらかじめ予想は付いてる。

多分、『鼓吹』か、それに準ずる何か………。

あのとき、籠手の音声はなんて言っていたかなあ。

えっと、『じ、自演カレー時』？

なんじゃそら。

んーと、『ジエンカレッジ』？ 違うな。『ジエンドカレー』？ すごく辛そうだ

………『ジ……エンカレッジ』？

あ、わかった！ ジってあれか！ ザか！ The!

んで、あとは『炎カレー時』を検索つと。頼んだ、Goo^グgri^リgori^ゴ先生！

『エンカレッジ 英語 意味』つと。

あれ？ 出ない。

なら、『エンカレッジ 英語 意味』は………よし、出た。

……なるほど、『Encourage』、意味は励ます、鼓舞。

『鼓舞』、かあ……。イツセー兄ちゃんにピッタリだ。

と、考え事してたら公園に着いちやった。とりあえず今ここまでにしておう。

「ん？ あれは………」



「あ、いたいた、おーい！」

腕立て伏せの姿勢のまま、そんな声が聞こえた方へ顔を上げると、

「あう！」

と思いつきりすつ転ぶ金髪シスター（悪魔）と、それを見て慌てる弟分がいた。



「お茶です、イツセーさん」

「あ、ああ、ありがとう、アーシア」

アーシアから手渡されたお茶を飲みながら、一息着くと、ハルがタオルを渡してくる。
「最近毎日こんなことしてるの？」

「そうだなあ……………最近ちよつとメニュー量が増えたかも」

渡されたタオルで汗を吹きながらそう答え、ふと、思い付いたことを言ってみる。

「なあハル。お前も一緒にトレーニングするか？」

「え、やだよめんどくさい」

即答か！

「でもハルト？ あなたも鍛えた方が良くわよ？」

部長からもそう提案されたハルは、今度はしばし考え込む。

「なら、イツセー兄ちゃんが僕と同じくらいになったら始めます」

「え？」

「ハルト、それはどういう……………」

曰く、神機の影響で、身体能力がかなり強化されて、むしろ今は手加減の練習中なんだそうだ。

実際、俺がやったメニューをやらせて見たところ、息を切らすどころか、汗一つかかずにこなして見せやがった。

「これのおかげで、体育の時間が一番大変になっちゃったんですね」

くっそコイツ、俺が体作りで苦労してるつてのに………おいコラ、そのドヤ顔やめろ。

と、そんな俺達のやり取りを見ていた部長が、ふと立ち上がる。

「ん？ どうしたんですか？ 部長？」

「いえ、そろそろ丁度良い時間だなんて」

「丁度いい？」

なんの話だ？

「もう荷物が届いている頃だろうし」



グレモリー先輩に引き連れられて、僕も兄ちゃんの家に行くことになった。そこで僕が見たのは……………。

「……………、これはいつたい」

イツセー兄ちゃんが驚愕している。まあそれもそうだろう。

だって、玄関先に何も書かれていない段ボールが積み重なっているんだもん。

「あの、部長、これは……………？」

「これ？ アーシアの荷物よ」

……………へ？

「え？」

「アーシアの荷物!？」

僕の驚愕の声と、兄ちゃんのそれが出たのは同時だった。

そんな僕ら、特にイツセー兄ちゃんを狙って、追い討ちの一言が言い放たれる。

「そうよ。今日からアーシアはあなたの家に住むの」

「ええええええ!!」

イツセー兄ちゃんのそんな叫びに、アーシアさんは顔を赤くして恥ずかしそうに言う。

「ふ、不束者ですが、よろしくお願いします、イツセーさん！」

.....。

あれ？

なんか今、変な感じがした。

こう、胸がモヤモヤするような.....。

なんだろう、この感じ。

少し、ヤな感じだな、これ。

第28話

アーシアさんがイツセー兄ちゃんの家で暮らすようになってから数日後。

「おはよー、イツセー兄ちゃん、アーシアさん」

二人は毎日一緒に登校していた。

もうデキてんじゃないの？　って疑惑がかけられるくらい毎日、同じ方向から来て、同じ方向に帰っている。

そして考えても見てほしい。

片や校内一の変態、片や金髪美少女。

その絵面たるや、まさに美女と野獣。

そりゃ、イツセー兄ちゃん恨まれもするよ……………。

「おつす、ハル」

「おはようございます、ハルトさん」

ただどこも最近、アーシアさんは本当に嬉しそうに、幸せそうに、イツセー兄ちゃんと言葉を交わす。

その光景は、端から見たら好奇、嫉妬、羨望の対象だが、あの出来事を知ってる僕たちからしたら、本当に微笑ましい光景だ。

「それじゃ二人とも、一年生僕こっちだから、また放課後ね！」

校舎に入るなり、僕は急ぐように二人にそう声をかけた。

「お、おう。また放課後な！」

「はい、放課後に」

そして僕が二人から離れたあとも、あの二人の楽しいな会話が所々聞こえてくる。

「……………ふう」

それに対して、僕は小さくため息をついた。

——ああ、なんだってこう、モヤモヤするんだろう。



「…どうしたの？ ハルト」

「え？ 何が？」

その日の放課後、イツセー兄ちゃんとアーシアさんが自転車でチラシ配りに行っている夜、小猫ちゃんが僕の顔を覗き込んできた。

「…なんか、変な顔してるよ？」

「変な顔って……………」

頬に手を当ててみるが、特に違和感を感じられない。

「…なんか、少しイライラしてる？」

そんなことを言って、小猫ちゃんは僕の目元に手を添える。

「んー、そんなことは無いと思うけどなあ……………って小猫ちゃん！ 近い近い！」

軽くおでことおでこが当たるような距離じゃないか！

そんなに顔近づけられたら恥ずかしいって。

でも、イライラって言うか、なんかよくわからないモヤモヤならしてるんだけどね？

「…ぐ、ゴメン」

言うのと、小猫ちゃんは少し顔を赤くしてスッと顔を離して僕の隣に座る。

と、そこへ、

「ただいま戻りました！」

イツセー兄ちゃんが元氣よく部屋に入ってきた。当然、その後ろには同じくチラシ配りに行っていたアーシアさんもいる。

「やあ、夜のデートはどうだった？」

なんて、木場先輩が言うと、

「最高に決まってるだろ？」

イツセー兄ちゃんがそう返した。

……………。

なんてかな。

僕はみんなの事が大好きなのに、今のやり取りで凄くモヤモヤした嫌な気分になってしまった。

最近、こんなことが多くて、ヤだなあ。



ここ最近、ハルトの様子がおかしい。

話しかけても上の空の事が多いし、今日だって、いつもより食べるお菓子の量が少なかった。

さらには、自分のお皿の上にもうケーキが乗っていないのにフォークで突ついたりしたほどだ。

どうしたんだろう？ 朱乃先輩も心配していた。

ハルトの様子がおかしくなったのはいつ頃からだろうか？ 考えてみると、割りにあっさり思い出せた。

ハルト、顔に出やすいから。

様子が変わったのは、アーシア先輩が部活に、眷属に加わった辺りからだ。

もっと正確に言うなら、そう、アーシア先輩がイツセイ先輩の家と一緒に過ごし始めた辺りからだろうか？

確か、部長もその辺から上の空になっていたはず。

……………まさか、ね。

だってハルト、アーシア先輩のこと友達だって言ってたし、二人の事を応援するって言ってたし。

……………でも、ハルトはアーシア先輩と話すとき、とつても楽しそうで、そのときはいつも通りのハルトで……………。

やっぱり、アーシア先輩のことが……………。

悔しいなあ。

しかも多分、ハルトの事だから自覚が無いんだ。

その事が、無意識にハルトから好意を向けられている事が、羨ましくて、悔しくて。

だから私は、隣に座るハルトの腕を掴んで凭れかかる。ハルトがなんか慌てたような声をあげるけど、知ったことか。伝えてないけど、私の想いに気付かないハルトが悪い。なにより、自分の想いに自覚がないハルトが悪いんだ。

「……………ハルトの、ばか」

さっさと自分の想いに、気付いてしまえ。

ばかハルト。

第29話

次の日、僕と小猫ちゃんがが部室へ行くと、姫島先輩とグレモリー先輩が銀髪の美人さんと喋っていた。

あの服は、メイドさん？

「あら、小猫にハルト。丁度良かったわ」

「お嬢様、こちらの人間がお話の？」

「ええ、そうよ」

僕らに気付いたグレモリー先輩にそのメイドさんが問いかけ、先輩が頷く。

……………えつと？ 話が飲み込めないんですけど。

「申し遅れました。私はグレモリー家に仕える者で、グレイフィアと申します。以後、お見知りおきを、神結ハルトさま」

ほへー、コスプレじゃなくて本物のメイドさんかー、初めて見たなあ。

つて、ちよつと待つて。いま、グレモリー家に仕えるつて言つた？

と言うことはこの人、

「も、もしかして……………悪魔ですか？」

「ええ、当然ですとも」

「やっぱりかー」

「きゆう…………」

あ、意識が……………。

最近無くなってたと思っただけ、やっぱりオカ^み研^な以外の悪魔には条件反射でこうなっちゃうのか。

なんて、他人事のように考えながら前に倒れる僕を、誰かが受け止める。

「だ、大丈夫ですか？ ハルトさま」

受け止めたのはなんと、とうか当然、真正面にいた悪魔メイドさんだった。

「「あつ」」

グレイフィアさんに抱えられる僕を見て、グレモリー先輩、姫島先輩、小猫ちゃんの三人が同時に声を出す。

「お」

「お？」

「落ち着け落ち着け餅突け落ち着け落ち着け餅突け落ち着け餅突け落ち着け落ち着け落ち着け餅突け落ち着けk……………」

「は、ハルトが壊れたわ!」

「この人でなし!」

「…そもそも人じゃないです」

そうだ、落ち着け僕。所々餅突いてる場合じゃない。

とりあえず深呼吸だ。

「コヒュー、コヒュー」

あれ? なんでもこんなに息苦しいの?

「あ、あの、お嬢様、この方はいったい……………」

「とりあえず離してあげなさい。あなたの胸で窒息しかけてるわ」

「え? あ、失礼しました」

「ぷは! 死ぬかと思った……………って痛い痛い痛い! 小猫ちゃん耳引つ張らないで

! 取れちやう!」

「…ばかハルト」

えー、なんでいま僕怒られたの?

あと小猫ちゃん、そんなに胸元触って、どしたの?

「…うるさい。……………やっぱり大きい方が……………」

「え? なんて?」

最後そんなに小さく言ったら聞こえないよ。

「こんちわー！　って、あれ？」

僕が小猫ちゃんに声をかけるより早く、イツセー兄ちゃん達2年生が入ってきた。

「ハッ！　なんかついさっきここでラッキースケベがあつたような空気が！」

「……………どんな空気なんだい、それ」

「よくわからんがこう、甘酸っぱそうな気配がだな」

またこの兄ちゃんは訳の分からない事を。

「これで全員揃つたようね」

グレモリー先輩が一人一人確認するように僕らを見ながら口を開ける。

「部活が始まる前に、少し話があるの」

「お嬢様、ここは私が」

「大丈夫よ、グレイフィア。実はね——」

しかし、グレモリー先輩の言葉を遮るように、部室の床が強く輝き出し、そこに魔方陣が浮かび上がる。

「これは……………リアス」

「ええ」

魔方陣に描かれている紋章は、先輩達が使うグレモリーの物ではなく、なんだろう？

鳥？

イツセー兄ちゃんも気になったのか、その魔方陣に近付いて行く。

「あ、イツセーくん、そんなに近いと……………」

「え？」

次の瞬間、魔方陣から膨大な炎が巻き起こった。チリチリと肌を焼くような炎は当然、近くにいた兄ちゃんにも燃え移る。

……………ふあっ!?

「あちやちやちやちやああ!!!」

「に、兄ちやああああん?!?!」

メーデー！… メーデー！… これ結構な大惨事！… 水！… 誰か水をおお！

「い、イツセーさん！ ああ、ええつと……………水です！… えい！」

「あんぎやあああああ！」

「え？ ええ!?! イツセーさあああん!!!」

「…アーシア先輩、何かしました？」

「これは……………はうっ！… せ、聖水でしたあ！… す、すみません！」

「朱乃！」

「はい」

結果、兄ちゃんに燃え移った炎は姫島先輩によって鎮火され、炎と聖水に焼かれたイツセー兄ちゃんは、アーシアさんの光に包まれながら、グツタリとソファァーへ沈み込んだのだった。

「……………炎が無ければ即死だった……………いやほんと、聖水は洒落にならん……………」

「あうう、本当にごめんなさい……………」

「ああ、もう大丈夫だから、気にしないでくれよ、アーシア」

すると、今だ燃え盛っていた炎が薙ぎ払われ、その中から一人の男が出てくる。

男は胸元が大きく開いたホスト崩れ見たいなスーツの襟を直し、こう呟いた。

「ふう、人間界は久しぶりだぜ……………っておろ？ これはどういう状況だ？」



「ライザー！ あなたと言う人は！」

「まあまあ、落ち着きなよ、愛しのリアス」

「いったい何度言えばあの炎を消してくれるの!? お陰で部室が滅茶苦茶じゃない!」
「良いじゃないか、こんなみすぼらしい小部屋の二つや二つくらい」

冗談じゃないわ! こういう考え方だから私は彼が嫌いなもの! 悪魔至上主義で、純血至上主義の思考に凝り固まった彼の言動すべてが腹立たしい。

そしてその思考から来る、私の眷属を見下すあの目。確かに私の眷属は全員転生悪魔よ。だからといって見下さないで欲しいわ。

こんな男と結婚しなくちゃならないなんて、鳥肌が立ってしまふ。

「さてリアス、早速だが式場を見に行こうか。日取りは決まってるんだから、早め早めがいい」

「……………触らないでくれるかしら」

ライザーの手を振り払った私は、彼を睨み付ける。

「おい、あんた。部長に対して失礼だぞ! つーか、誰だよ」

いつの間にか復活していたイツセーが案の定、ライザーに突っかかっていく。

「おいおい、俺の事を眷属に教えて無いのかよ、リアス」

「必要が無かったからよ」

「相変わらず手厳しいね」

目元を引き付けながらライザーは苦笑し、そしてイツセーとその隣のハルトを見や

る。

「あん？ リアス、なんでここに人間がいるんだよ」

「彼は《こちら側》よ。セイクリッド・ギアホルダー神器保持者なの」

「へえ、こんなひ弱そうなガキがねえ」

その視線は、やつぱり見下したような物で、気に食わない。

それを向けられたイツセーは不快そうに顔を顰め、ハルトはイツセーの後ろに隠れた。

「いいだろう、下級悪魔に下等種族。この俺が直々に名乗ってやる」

彼の物言いは、悉く私達の神経を逆撫でする。

ここまで人を怒らせることに長けた者は、そうそういないのでは無いのだろうか。

「誉れある上級悪魔にして、七十二柱が一つ。フェニックス家の三男、ライザー・フェニックスだ。」

よく覚えておけよ？ 下級悪魔の小僧。俺は直にお前の主様の、旦那様になるんだからな」

尊大に、傲岸に、傲慢に、彼はそう言い放った。

それに対する反応は二人から二種類。と言うか、容易に想像出来るものだった。

「え、ええええええええ!!?!? こ、婚約者あ!?!」
「き、きやああああああ!!、あ、悪魔あ!?!」

そんな二つの悲鳴が、旧校舎中に響き渡ったのだった。

ただ、

「悪魔………怖い………きゆう………」

「お、おい小僧? 小僧おおお!!」

倒れたハルトを見てライザーが慌てたのは意外だったけれど。

第30話

「う、ううん……………」

あれ？ 僕いつの間にソファで寝てたんだろう？ 確か、部室に来て、それから、それからえつと……………あ、そうか、悪魔のメイドさんとホスト崩れさんが来たんだった。

「目が覚めたかい？ ハルトくん」

優しく声をかけてきたのは木場先輩だ。隣にアーシアさんと小猫ちゃんもいる。

「…大丈夫？ ハルト」

「どこか痛いところはありますか？」

「うん、大丈夫だよ、小猫ちゃん、アーシアさん」

ソファから体を起こし、頭を少し振る。

いきなり倒れて心配かけたんだ。謝らなくちゃ。

そう思っ僕が振り向くと、そこには……………

「増えてる!？」

炎の中に佇む十五名の美女美少女たちと、それに囲まれるフェニックスさん。

そしてそれを見て血涙を流すイツセー兄ちゃん。

「ねえ小猫ちゃん、今どういう状況？　なんか雰囲気怖いよ？　グレモリー先輩も姫島

先輩もなんか怖いし……………」

「…一触即発、一縷千鈞、刀光劍影、危機一髪」

「凄く物騒だ!？」

え？　僕が寝てる間に何があつたの？

なにになに？　フムフム、なるほど、

つまり、フェニックスさんの眷属が美少女ハーレムで、それを羨んだイツセー兄ちゃんに、フェニックスさんが挑発して、それに怒つて飛びかかったイツセー兄ちゃんが軽くぶつ飛ばされた、と。

……………なにやってんのさ、イツセー兄ちゃん。

「そうか、フェニックスさんは種蒔き鳥だったか（ボソ）」

「小僧！　聞こえたぞ！」

oh…ヘルイヤー……………」

「あ、や、今のは言葉の綾と言うか、真実と言うか、なんと言うか……………」

「……………喧嘩売ってるなら買うぞ」

「ひいうつ！ 今のはその、違くて……………っ！」

ああああ、テンパって何を言っても自爆してしまう……………。

誰か助けて！

すると、その声が届いたのか、倒れてたイツセー兄ちゃんが立ち上がる。

「お前！ 部長と結婚するってのに、それは無いだろ！」

「ふん、英雄色を好むと言うじゃないか。確か、この国のことわざだよな？」

出典は明らかじゃないけどね。確か中国説が濃厚だったはず。

って違う違う。論点そこじゃないよ、僕。

「は！ 何が英雄だ！ 笑わせるな！ この種蒔き鳥の焼き鳥野郎！」

「なんだと!? 貴様、言うに事欠いて！ 下級悪魔如きが、上級悪魔に対しての礼儀が

なつてねえな！」

うわー、なんか口喧嘩が始まっちゃった。

て言うかコレ結構ヤバくない？ 立場的に見てイツセー兄ちゃんが特に。

「良いだろう！ ならばゲームで決着を着けてやる！」

ゲーム？ ゲームって、テレビゲームやらポータブルゲームやらの事？

「小猫ちゃん、ゲームって？」

「…名前はレーティングゲーム。悪魔同士の決闘試合、みたいなの？」

「格付け試合？」レイトニングゲーム なに？ 関東ジャニーズⅨの番組？」

「……うん、違う」

「あ、やつぱり？」

なるほど、下僕同士を戦わせる試合か。

うん、そうなるって僕にはあんまり関係ないかな？ 下僕でも眷属でもないし。

でも、そうなるって僕、応援とかできるのかな？

できる事ならしたいなあ……………。

「おい小僧。お前にも参加してもらおうぞ」

「あ？」

あ、アイエエエエエエエエ！ ナンデー！ フェニックスⅡサン、ナンデー！ ア

イエエエエエエエエ！

「え、ちよ、え？ 僕も出るの？」

「当然だ。お前が最初にオレを種蒔き鳥って呼んだんだ。その仕返しくらいはさせて貰

おうか」

なに？ 仕返し？ ほんのちよつと口を滑らせた仕返しが悪魔が行う戦闘試合に参

加？ なにそれ、なんで倍返しどころか、100倍返しくらいになってるの？

まあ、確かに僕が悪いんだけどさ！ ちくせう。

「ハルトくん、別に無理をする必要はありませんわよ」

姫島先輩がどこか不機嫌な声音でそう言ってくる。目が笑ってないよ、先輩。怖いで
す。

………うーん、状況を纏めるに、この人……じゃなかった、悪魔だった。とりあえず、フェニックスさんはグレモリー先輩の婚約者で、グレモリー先輩自身はその婚約が心底嫌で、そんでフェニックスさんは種蒔き……ゲフンゲフン、女の人にだらしが無く
て、グレモリー先輩の前でも他の女の人とチューをした、と。

うわ何コレ、人じゃないけど、人として最低と呼ばれる部類じゃん。

そりや、グレモリー先輩も嫌がるよ。

よし、決めた。

「僕、やります！」

「ハルト？ お前………」

「ハルト、あなた悪魔が……」

イツセー兄ちゃんとグレモリー先輩が少しの驚きと、心配の表情で僕を見つめる。

「悪魔はまだ少し怖いけど、グレモリー先輩にはいつもお世話になってるから、恩返しし

たいんです」

僕に向けられた視線に、真っ直ぐと向き合い、見つめ返し、そうハッキリと答えた。グレモリー先輩には、イツセー兄ちゃんやアーシアさんを助けてくれた大恩がある。こんなものじゃ返せないだろうけど、できるだけの手助けはしたい。

「ふふふふ、そう来なくてはな」

「グレイファイア、ハルトの参加ってできるのかしら?」

フェニックスさんが不敵に笑い、グレモリー先輩がグレイファイアさんに質問をする。

「システム上は問題ありませんし、今回のそれは非公式の物ですので、特に問題は………あつ」

「どうしたの?」

「……………いえ、魔王さまの許可をとらねば、と」

「それなら私に任せてもらえるかしら?」

「了解しました」

えーっと、今なんか凄い事を聞いたかもしれない。

グレモリー先輩って魔王様に直談判できるくらい名家の出身なんだ。

「リアス、お前にハンデをくれてやるよ」

「ハンデですって?」

「ああ、ハンデだ。今すぐやっても良いんだが、それでは面白くないではないか」
フェニックスさんは僕たちを見下すような目をこちらに向けながら、そう言つて笑う。

「……………」

「嫌か？ 屈辱か？ だが、自分の感情だけで勝てるほどゲームは甘くないぞ。下僕のを万全に引き出してやらなければ即敗北だ。王の技量が試される」

「それは！」

「俺はもうプロとして何度も試合をして、場数を踏んでいる。そんな俺が、今回が初戦のお前に何のハンデもやらずに戦えば、それこそ結果は見えているというもの。これは俺からのせめてもの温情だ。受け取っとけ」

フェニックスさんの意見に、グレモリー先輩は唇を噛みしめ、目を閉じる。

そして深く深呼吸し、口を開く。

「わかつたわ。そのハンデ、受けます」

「素直でよろしい。では、リアス、お前に十日間の猶予をやる。その間に、眷属共を使えるようにしておけ」

フェニックスさんの視線がイツセー兄ちゃんに移される。

「リアスに恥をかかせるなよ？ リアスの『兵士』^{ボーン}。下僕の一撃が主の一撃と知れ」

その言葉を聞いて、この人はグレモリー先輩の事を想って、そう言ったんだなって思った。

少し好感度を上方修正しよう。ちよつとだけ。

「それじゃあな、リアス。次はゲームで会おう」

そう言い残すと、フェニックスさんは踵を返し、眷属の人達と魔方陣で帰って行った。

第31話

ベッドで眠った筈なのに、気が付くと辺りは白一色に染まっていた。

空も地面も見当たらず、上下左右前後、その全てに果てしない白が続いていた。

「ここは、どこだろう?」

発した声は、跳ね返す物など何もない空間で、不自然なくらいに反響した。

『目が覚めたか、主よ。と言っても、体が眠っている状態で目覚めると言うのも、妙な話だな』

不意に、後ろから厳かな声が響いてくる。

振り向くと、そこには、

「……マル、ドワーク?」

巨大な、白い狼がいた。その姿は荒々しく、猛々しく、しかしどこか威厳があり、恐怖よりも先に、畏怖が湧いてくる。

その白狼が口を開く

『如何にも。我輩はマルドワーク。そなたの神機に宿る、白狼王マルドワークである』

そう言った彼は、どこか誇らしげに鼻を鳴らす。

『このようにお会いするのは3度目でございますね、主君』

今度は違う声が左隣から聞こえてきて、顔を向けると、そこには騎士がいた。

鋼の体を持つ、蠍の騎士が。

『鋼騎士ボルグ・カムラン。今はそう呼ばれております、我が王よ』

騎士は、四本の足と二枚の盾を器用に使い、騎士の礼を取る。

『まさか、こんなにも早くあなた様が自力でここまで来られようとは』

右隣からの声はどこか妖艶な響きを含んでいた。

その声の主は、一言で言えば蝶だ。妖艶な蝶。

『魔女王サリエル。ここに馳せ参じました。以後、お見知り置きを』

自らのスカートを上品にたくし上げ、礼をした彼女は、艶やかに笑う。

「君達は………そっか、いつも君達が、僕を見ていてくれたんだね」

彼らの事は知っている。

グレモリー先輩を助けた時も、レイナーレを斬った時も、彼らは僕に力を貸してくれ

た。

「どうして、僕はここにいるの？」

『………なるほど、無意識か。だが、無意識とは言え主が自力でここまで来れたと言うこ

とは、つまりそれだけの力が身に付いた、と言うことだ』

「力が、身に付く？」

確かに戦いは何度か経験したし、精神的にも強くなつたと思うけど………。

『自覚が無いならば、まだ良いのです、我が君。いつか、自覚ができるまで、妾達は待ちましよう』

『そして主君。その自覚は、主君が自らの想いに気づいたとき、生まれる事でしょう』

僕の、想い？

なんだろう？ 全く想像できないや。

『焦らずともよい。いずれ時が来たれば、否が応にも分かつてしまうことだ』

マルドゥークがそういうと、サリエルとボルグ・カムランも頷いた。

時が来たれば？ それはいつたい、何時なのだろうか？

それに、僕の想い、かあ。

最近のモヤモヤに何か関係があるのかな？

と、僕が思考を巡らせていると、彼らの会話が聞こえてきた。

『さて、堅苦しいのはここまでにして……準備はよろしくて？ 白狼王、鋼騎士！』
『はっ！』

『愚問であるぞ、魔王王！』

……………ん？

『それでは、まずは妾から………はああああ、カッ！』

『次は我輩ぞ。こおおおお、ぬんっ！』

『拙者が最後でありますね！ おおおおお、ハッ！』

次の瞬間、ただでさえ眩しい白い空間の中に、より一層眩しい光が放たれる。

「なにここと？」

驚いて振り向くと、そこには、三人の人影が。

「我が君!!」

そのうちの一人、露出度の高い青いドレスを着たスタイル抜群の女の人が僕に抱きついてくる。

「え、ええ!!? だ、誰!!? も(ま)も(ま)も(ま)」

む、胸に顔を埋めさせられて喋れない！ あ、でも、いい匂いだなあ。しかも柔らかくて(ぎゅぎゅ)。

「これ！ 主が苦しそうであろう！ 離さんか、魔女王！」

魔女王!? つまりこの人はサリエルってこと!?

て言うか、今の声はまさか……………

「何を言うか白狼王。さては貴様、自分ができないからと妬いておるな？ だが断る！

これは『大人』な女である妾の特権ぞ！」

マルドゥーク!? アラガミ状態と違ってやたら声が高いよ!?

「な!? だ、誰がやるか馬鹿者！ だが主を汝が独占するとは言語道断！」

「そして何時までその様にしておられるおつもりか！」

ってことは、今の凜とした声は消去法で、ボルグ・カムラン、かな？

……………待つて、どうしよう。全く状況についていけない。

とりあえず、サリエルの胸から顔を離さねば。……………イツセー兄ちゃんじゃないけ

ど、鼻血出そう。

「ぶはー！ ふう、苦しかった……………じゃなくて!! え？ これどういう状況!! なん

で君ら人間になつてゐるの!？」

「おおー！ 主よ、無事か！」

「ご無事でなによりです！」

「むう、妾が悪役のようでは無いか」

「話聞いて!？」

ああもう、何がなんだか判らなくなってきた!

訳がわからないよ!

「妾達がなぜ人化しているか? ふふふ、それは愚問と言うものですわ、我が君」

その言葉に、他二人も頷いた。

「じゃあなんでさ」

「それは——」

「「愛故に!!」」

どーん、と。

そんな効果音が付きそうなくらいに堂々と、ドヤ顔で彼女らは言い放った。

「ええー……………」

誰もが見惚れるようなスタイル抜群で黒蒼髪の美女、サリエル。

赤と白のゴスロリ服を着ている狼耳と尻尾を生やした銀髪ツインテールの美少女、マ

ルドウーク。

爽やかなスマイルが似合う、長身で鎧を身に纏った黒髪美少女、ボルグ・カムラン。そんな三人に囲まれた僕は、ちよつとだけ身の危険を感じたのだった。

「やはり！ 主の最たる魅力はこの、愛くるしさだと我輩は思う！」

「愚か者！ 白狼王！ それは万象の理ぞ！ 今は如何にそれ以外の魅力を見出だすかの場ぞ！」

「愚か者は汝よ、魔女王！ 新たな魅力を見出だすにはまず、その万象の理を再確認せずして何とする!!」

「落ち着き下され、王、女王。主君が怖がっておられまする！」

「そう言いながらなぜ貴様が主（我が君）を肩車しておるのだ!!」

されるがままに肩車の姿勢になったけど、本当、ついていけない……………。

もうキャラ崩壊のレベルじゃないんだよ!!

なんでこんな事になってるのさ!

「「愛故に!!」」

……………もうそれで良いよ……………。

……………どうしてこうなった。



ジリリリリリリリ!

目覚まし時計が鳴り響く。

「……………酷い夢だった」

そうだ、あれは夢だ。そうに決まって——。

《夢ではありませんよ、我が君》

——オーマイガッ！

あ、胃が痛い。

第32話

「ひー、ひー……………」

今、俺は文字通りひーひー言いながら、山を登っていた。背中には我がオカ研女子メソンの全荷物が背負われている。

とは言っても、俺一人で持つてゐる訳じゃないんだけどな。

「部長、山菜があつたので摘んできました」

「ありがとう祐斗。今夜の食材にしましょう」

なんて涼しい顔でそんなことを言つてのける木場の背中にも巨大リュックは背負われている。

『やつほー』

どこかから山彦が聞こえてくる。ちくしよー、呑気な登山者だぜ。こちとら体力的に死にかけてるつてのに。

「いいいいやつほー!!」

『いいいいやつほー!!』

……ああ、ここにも一人、お気楽で呑気な奴がいたや。

ハルのやつ、ありや完全に登山を楽しんでやがる。

「(荒) 神のバカやろおお!!」

『神のバカやろおお!!』

「いやなんつう叫びだよハル」

「気にしないで兄ちゃん。ちよつと胃に穴が空きそうなだけだから」

「何があつた!?!」

っっていうか、

「ハル、お前、なんでそんな元気なんだよ………」

兄ちゃんさっきのやり取りで疲れたよ。

ちなみに、ハルの背中にもやはり巨大リユックが。

「だって兄ちゃん、山だよ!?! テンション上がるでしょ!?!」

「体力が残ってればな」

「ほら! 兄ちゃん早く早く!」

軽い足取りで、というより、もはやスキップ状態でスイスイとハルは山道を登っている。
く。

く、くうう、弟分に負けられるかよ!

「おりやああああ!!」

意地と根性だけで体を動かし、一気に山道を駆け登る。

ヤバい、死にそうなくらい疲れる。

そうやって、体力をひたすらに削りながら俺達が別荘に着いたのは、太陽が真上付近まで上った時間帯だった。



別荘に辿り着いて小休止を取ったのち、僕らは修行を開始した。

初日は実戦経験が圧倒的に少ない僕とイツセー兄ちゃんを鍛えるそうさ。

というわけでレッスナー、木場先輩との剣術勝負!

「ぬん! りやああああ!!」

「よつと」

「ぎゃん!!?」

最初は一對一との事なので、兄ちゃんと先輩の勝負だったのだが……………。
「こなくそー！」

「やみくもに振っちゃダメだ！　ちゃんと視野を広げなくちゃ！」

なんて木場先輩のアドバイスも虚しく、兄ちゃんの刃筋の通っていない剣戟は、先輩によつていとも容易く弾き飛ばされたのだった。

「次はハルトくんだね？」

「ハル……………バトンタッチだ……………」

「はーい、お疲れさま」

イツセー兄ちゃんから手渡された木刀を持って木場先輩の前に立つけど、そこで僕は握った木刀を見て少し振ってみる。

うーん、やっぱり何と言うか、軽いなあ。

「ははは、フイーリングが合わないかい？」

「はい、重さは仕方ないとして、もう少し長い方が良いかなくて」

僕の言葉に頷いた先輩は、ちよつと待ってねと言うと、

「ソードベース【魔剣創造】！……………よし、刃は潰してあるから、これでやろうか」

「おー、木場、お前も神器持ちだったのか」

「そうだよ。さ、始めようか、ハルトくん！」

おお、造って貰ったこの剣、長さも重さも丁度良いや！ 流石イケメン。

「はい！ 行きますよ！」

結論。僕の剣術は対人戦向きじゃなかったよ。あと木場先輩強い速いつおい。



木場先輩とのレッスンが終われば次は、レッスン2、姫島先輩との魔力修行！

は、割愛します。

だって僕人間（半アラガミ）だし、魔力なんか持ってないし。

ちよつとやってみたけど、魔力と血の力はやっぱり別物みたいだ。イツセー兄ちゃんでも米粒くらいは出来たのに。

魔術？ そんな幾何学な勉強なんてしたくありません。

つて、待つて姫島先輩。なんで他二人が自主練習だからつて僕の後ろから抱きついて来るんですか！

あなたがこうすると小猫ちゃんがなんか知らないけど、いつも怒るんです！

このあと小猫ちゃんとの修行なのに！

ああ、その大きな胸が僕の背中に……………ひやう!? いきなり耳を甘噛みしないで下さい！ ビックリしたあー。

ちなみに、この光景を見て悔しがったイツセイ兄ちゃんの魔力が暴走して、隣にいたアーシアさんの服が弾けとんだのは些細なこと。

大騒ぎになったけど。



……………うわああ、怒ってる。なんかもう、体全体から怒りのオーラが吹き出てるよ……………。無表情なのがまたより一層……………。

「……………イツセー兄ちゃん、ゴー！（ボソ）」

僕は小声で言いながら兄ちゃんの脇腹を小突く。

「はあ!? ふざけんな殺す気か!? お前が行け！（ボソ）」

「兄ちゃんはイタイケな弟を死地へ送り込むんだね!? 見損なつたよ！（ボソ）」

「元はと言えばお前が原因じゃないか！（ボソ）」

「違うよ！ 姫島先輩だよ！（ボソ）」

すると、コソコソとそんな会話を繰り返す僕らの後ろから、こんな一言が。

「……………二人とも、早く」

「いい、イエスマム！」

ああ、なるほど、これがあれか。底冷えする声って奴か。怖いよ、小猫ちゃん。

そんなこんなで、レッスン3、小猫ちゃんとの組手修行。

「……………どつちからする？」

「お先にどうぞ」

……………。

「最初はグー！」

「しやらあ！ やつたらああああ！ ……………へぶつ!？」

「に、兄ちゃあああん!!」

十数回引き分けた後、ジャンケンで負けたイツセイ兄ちゃんが半ばやけ糞に突っ込んで行ったのだが、小猫ちゃんのワンパンで沈められた。

いや、沈められたというよりはむしろ吹っ飛ばされた。

「…次、ハルトね」

……………あれ？ もう怒ってない？ 不機嫌オーラが消えてる。

「…全力で行くよ」

あつははー、僕ここで死ぬかも……………ぎゃー！

あとで謝ったら、なんかいつのまにか今度一緒に出かける約束してた。

まあいいけどさ、あそこで膝枕する意味ってあったの？



時間が来たところで伸びていた兄ちゃんを叩き起こし、今度はグレモリー先輩の元へ。

「二人にはこれを背負ってもらおうわ」

そう言つて、グレモリー先輩が魔法で取り出したのは……………。

ズウウウン……………。

「はい？」

いや、擬音おかしいでしょ。ちよつと地面揺れたんですけど。

目の前には今朝背負つたバッグの2、3倍はある大きさの岩。

え？ これを割れつてこと？

「背負うのよ。ほら、縄がここにあるでしょ？ あ、注連縄じゃないから安心して」

そういう問題じゃない！ 注連縄関係なくて！

やらされました。そして出来ました。

やー、うん、正直ビビりました。

いくらゴツドイーターとは言え、ついこの間まで人間だった僕があんなこと出来るなんて……………。

終わった後はイツセー兄ちゃんと一緒にぶっ倒れたけども。

『お疲れさまです、我が君』

ありがとう、サリエル。



一通りの修行を終えた頃には、日もとつぷりと暮れて、良い子はベッドインする時間になっていた。

リビングでは小猫ちゃんがお菓子を食べて、イツセー兄ちゃんがぐったりとソファア

に沈み込んで、木場先輩に団扇で扇がれている。

僕はと言うと、

「鶏肉焼けましたー、グレモリー先輩、煮込みはどうです？」

「もう少しね。朱乃、アーシア、そっちは？」

「デザート出来ました！」

「後は冷蔵庫にいれるだけよ」

グレモリー先輩、姫島先輩、アーシアさんと四人でチキンカレーを作っていた。

鶏肉は煮込めば煮込むほど固くなるから、皮がパリツとするまで香草とスパイスを使つてしっかりと香ばしく焼き上げ、ハチミツも加えてじっくりと煮込んだカレーの中へ。

これが美味しいチキンカレーの作り方（簡易版）

って、まあさつき調べたばかりの付け焼き刃なんだけどね。

「できたー！」

「ええ、良いできね」

「すごく美味しそうです」

「うふふ、ハルトくんの手作りですか」

「私も作つただけど、朱乃」

それにしても、皆元気だなー。僕が言えることじゃないけど。流石悪魔。夜に元気だ。

それじゃあ手を会わせて、皆一緒に、
『いただきまーす!!』

うん、やっぱり皆で食べるご飯は美味しいなあ。

第33話

「さて、お風呂にしましょうか。ここは温泉だから素敵よ?」

その瞬間、僕と小猫ちゃんは視線を交わす。

「…ハルト、任せた」

「うん、任せて」

頷き、僕は目を輝かせているイツセー兄ちゃんの肩に手を置く。

「兄ちゃん兄ちゃん」

「ん? どした、ハル。あ、もしかしてお前も——」

「女湯覗きは僕が全身全霊を持って止めるからね?」

「なん……………だと……………っ」

イツセー兄ちゃんに甘いグレモリー先輩や、アーシアさん、何考えてるかイマイチわからない姫島先輩ならもしかしたら許すんだろうけど、小猫ちゃんはきつと怒るだろう。

そして兄ちゃんはボコられるのだろう。

それは構わない。自業自得だ。

だけど、十中八九、僕にとぼつちりが来るハズだ。

僕はまだ死にたくない。

「兄ちゃんを止める。この命を賭してでも」

「俺を止めることに凄まじい決意を感じる!？」

すると、木場先輩が僕とは反対側の兄ちゃんの肩に手を置く。

「イツセーくん、僕と裸の付き合いをしよう。背中、流すよ」

.....

一瞬、空気が固まった。

慟哭の涙を流していたイツセー兄ちゃんですら、真顔で固まっている。

「あれ？ えっと.....?」

木場先輩が気まずそうに頬を掻く。

もしかしてこの人、そつちのケの人？

.....い、いやあ、まさかね、きつと天然なんだよはははは.....

.....だよね？



「うおおおおお！ 女湯を透視して見せる！」

「余計なことしなくていい!!」

「あべし！」



お風呂場でなぜか『勝手に』転んで気絶したイツセー兄ちゃんを引きずって僕らがお風呂から上がると、ほとんど同時に女性陣も女湯から出てくる。

「あら、イツセーどうしたの？」

「………ちよつと逆上せたみたいで」

「…ハルト、ナイス」

小猫ちゃんがサムズアップを向けてくる。

無表情のハズだけど満足そうだ。

最近、小猫ちゃんの僅かな表情を読み取れるようになってきた僕です。

「さて、このあとなのだけれど」

「あ、ちよつといいですか、グレモリー先輩」

「ええ、なにかしら、ハルト？」

グレモリー先輩や、他の皆の視線が僕に集中する中、僕は人差し指を立てながらこう言った。

「皆に、『血の力』って奴を説明しようかと」



僕がそう言った後、皆はジャージに着替えてリビングに集まっていた。

ちなみにイツセー兄ちゃんはアシアさんが神器で治癒したら目を覚ました。

「それじゃあハルト、説明を」

「はい」

皆が集まったのを確認したグレモリー先輩に促され、僕は一度咳払いをして、口を開く。

「えっと、まず思い出して欲しいのは、僕のこの神機を含めた力が、ゲームの物だったって事なんです」

その場に出現させた神機を指差しながら言葉を紡ぐ。

「ええ、覚えていますわ」

「そして、そのゲームを僕らは知らないし」

「一緒にしていたハズの俺も忘れていて、と」

姫島先輩、木場先輩、イツセー兄ちゃんの順で答えが聞こえ、それに頷く。

「そう。まあその異変は追々考えるところとして、まずは僕と、そしてイツセー兄ちゃんにも目覚めた、『血の力』を説明しようかと思えます」

一拍置いて、

「血の力って言うのは、意志の力とも言い換えられるんです」

「意志の、力？」

グレモリー先輩が疑問を口にする。

「はい。その人の強い思い、誓い、決意。そういった物を胸に秘めて、かつ感情が爆発した時、つまり、感情が昂った時、血の力は目覚めます。」

そして、血の力にはその人の本質が現れるんです」

「…本質って？」

今度は小猫ちゃん。

「性格や真相心理といった物のことかい？」

それに質問を重ねたのは木場先輩だった。

「少し違うけど、大体同じですね」

質問に肯定で答え、皆を見渡す。

「血の力は本来、僕みたいなゴッドイーターにしか目覚める事のできない力だった」

「けれど、イツセーさんはその力に目覚めたんですよね？」

「そうだよ、アーシアさん。イツセー兄ちゃんは血の力『鼓舞』を目覚めさせた。これは僕の推察だし、まだまだ証拠が足りないけど、きっと血の力に、悪魔の細胞か、それに類する何かが反応してるんだと思うんだ」

だから、と繋ぎ、

「皆に目覚める可能性がある。その可能性を踏まえた上で、僕は皆に聞いておきたいんです」

一人一人を見渡す。

皆、僕を真つ直ぐに見ている。

「皆は、なんのために戦うの？ 何を目指すの？ それを、自分で見つめ直して見てください。それだけで、目覚めへ一歩進めるはずですよ」

僕の言葉に、皆はそれぞれ、自分に問いかけているわように、黙りこむ。

………何と言うか、気まずい。

「つてまあ、知ったような口を聞いてますけど、これ結局ゲームの知識に持論を織り混ぜただけなんですけどね。僕自身、自力で目覚めた訳でも無いですし」
だから、ちよつと慌てたように、僕はそう誤魔化した。
すると、

「いいえ、ハルトくん。あなたの言葉、立派でしたわ」

「…うん、私達も、自分に向き合ってみる」

姫島先輩と小猫ちゃんが僕に微笑み、他の皆も、僕に笑いかける。

「そっか、それはよかった」

はあー、緊張でドキドキした。

『素晴らしかったですわ、我が君』

『うむ、我輩の主らしい、堂々としたものであったぞ』

『流石です、主君！』

ありがと、三人（？）とも。

……て言うか、声からして人型だけど、いつまでそうやってるの？

『うん？ できるようになった以上、これが基本体だが？』

……………ああ、そうなの。



「さて、と。皆、修行を再開するわよ」

と、グレモリー先輩がいきなりそんな爆弾発言をぶちかます。

「え、部長マジっすか？」

「ええ、マジよイツセー。だって私達悪魔は、元々夜の住人だもの」

へえ、大変だねえ……………。

あれ？ これ僕も参加するパターン？

僕もうおねむなんだけど？

「あ、ハルトは大丈夫よ？ あなたはゴッドイーターといつても、基本は人間だものね」

ああ、よかった。

僕が胸を撫で下ろすと同時に、皆がゾロゾロと玄関へ向かう。

ブーブーと文句を言っていたイツセー兄ちゃんもなんやかんやいいながら後をつい

ていく。

「じゃあ頑張ってるね、皆」

僕は玄関まで見送って、リビングに引き返したのだった。

「よし、僕も頑張ろうっと」



ちよつと小用で私が戻って来ると、まだリビングの電気が点いていて、そこに彼がいることを示していた。

「全く、いつまで起きているのでしょうか、ハルトくんは」

濡れた手をタオルで吹いて、私はリビングのドアを開ける。

そこには、

「あら？ あらあら、うふふ」

ソファアーに横になって眠っている彼の姿が。

テーブルの上には、一冊のノートが開いて置いてあった。

「うふふ、可愛い寝顔ですこと」

彼の頬をつつき、彼が何かを書いていたノートに目を向ける。

「これは……………」

そこに書いてあったのは、先程彼が言っていた、血の力に関する内容。きつと、口頭だといつか忘れてしまうからと、明文化していたのだろう。とても丁寧に書かれている。

そして、そのノートに書かれてある言葉が、やけに胸に響いた。

『自分に向き合って、自分を受け入れること』

その言葉は、私の胸を揺らした。

知っている？

いや、そんなはずは無い。教えていないもの。

これはきつと、血の力の発現に必要なことだから、皆に向けて書いた言葉なのだろう。

「ハルトくん……………」

彼への想いは、絶対に見せないと誓った。

何度かその決意が揺らいで、変なイタズラをしてしまったけれど、その度に、これまでの自分を思い出して、自己嫌悪した。

でも、こうして今、彼の寝顔を見ていると、どうしても胸が苦しくなる。

—— やっぱり、好きなんだ。

自分個人に向けられた言葉では無いけれど、このノートに書かれた言葉が、胸を締め付ける。

「今なら、良いよね？」

彼はぐっすりと眠っている。

きつと、私の声も聞こえていないだろう。

だからだろうか。

私は、

「ごめんなさい、小猫ちゃん」

彼の頬に、キスをしていた。

いつも彼に密着したり、いろんなイタズラで彼に触れているけれど、いつも以上に心臓がバクバクと高鳴っている。

「ごめんね、小猫ちゃん」

もう一度、そう謝る。

彼女の想いは、誰が見てもわかるもので、多分気付いていないのはハルトくんだけ。「本当に、ズルい女」

彼の体に毛布をかけて電気を消し、私はリビングをあとにした。



.....どうして？

どうして今、姫島先輩は泣いていたんだろう。

寝惚けてたから、声は聞き取れなかった。

でも、あの人が泣いていたのを、何となく覚えてる。

眠りから、ほんの少しだけ浮上した思考が、そんなことを考える。

ああ、もう眠いや。

「泣かないで、欲しいなあ」

勝手な思いだけど、あの人には笑って欲しい。

あの人だけじゃなくて、小猫ちゃんも、アーシアさんも、皆に笑って欲しい。

そんなことを考えながら、そして、頬に残る柔らかな感触を感じながら、僕は眠りに落ちていった。

第34話

……………数日間、この山で修行して、わかった事がある。

というよりも、前々から気づいてはいたんだ。ただそれを、俺が認めたくなかっただけ。

俺には、木場のような剣の才能がない。

小猫ちゃんのような格闘技の技量がない。

アーシアのような魔力の素質がない。

ハルのような、特殊能力の素養がない。

剣は握ったこともない。

喧嘩だってしたことない。

魔力なんか妄想の中だけの話だった。

でも、『血の力』は違う。

あれは俺だけの力だ。皆に目覚めるかも知れないけど、『鼓舞』の力は俺だけの力だ。なのに、上手くいかない。上手く使えない。

『血の力』も『ブラッドアーツ』も。

ハルは懇切丁寧に教えてくれる。

今だってようやく、発動確率が3割ってところだ。

正直、それだけ教えてくれるのに、上手く使えない自分が恨めしい。

恨めしくて、恥ずかしい。

俺は弱い。

この中の誰よりも、弱くて、役立たずで。

——— こんなんで、俺は戦えるのだろうか。



ドアが閉まる音で、目が覚めた。

隣を見てみると、右隣のベッドで寝ていたイツセー兄ちゃんの姿が見当たらない。

左隣のベッドでは、木場先輩がスヤスヤと眠っている。

僕が視線を向けたのと同時に、木場先輩が布団の中で身じろぎし、口を開く。

「うーん……………そこはダメだよ、イツセーくん……………」

……………。

僕、寝ぼけてるのかな？

とんでもなくえげつない寝言が聞こえた気がした。

『主逃げろ』

『主君逃げて下さい！ 超逃げて下さい！』

『我が君と木場祐人……………ふふ……………ハッ!? 我が君やつぱり逃げて!』

う、うん。

一瞬サリエルから不吉な物を感じたけど、そうするよ。

僕の中の神様達に従い、そそくさと音を立てないように忍び足で部屋をあとにする。

その際、

「……………ハルトきゅん」

なんて声は聞こえてない。

聞こえてないっいたら聞こえてない。

『あの男、いつか喰い殺してくれようか』

「ま、まあまあ、落ち着いてマルドゥーク」

いざとなつたら頼むからさ。

しかし、夜の山荘って暗いなあ。

悪魔の皆は夜目が聞くらしいけど、ゴッドイーターは悪魔ほど聞かないらしい。

なんか………オバケとか出そう。

「俺、部長のこと、部長として好きですよ」

ぶふお!?

び、ビツクリした! 二つの意味でビツクリしたあ!

いきなり暗がりから声が聞こえてきたのと、その言葉の内容がなんとも。

そそくさとリビングのドア前にいき、そこにしゃがみこんで、隙間からそつと中を覗き見る。

「グレモリー家のこととか、悪魔社会とかよく分からないし、けど俺にとつてリアス部長

目の前にいたのは姫島先輩だ。なんか顔が赤い。

後ろで僕を引つ張ったのは小猫ちゃん。無表情の不機嫌オーラが怖い。ん？ って今のもしかして僕、姫島先輩の胸に顔を埋めてた？

「(ぎょ)めんなさい!!」

できるだけ声を殺したまま、僕は姫島先輩に謝る。

「気にしなくていいわ」

うう、そう言ってくれるとありがたいです。

というか、小猫ちゃん。いつまで僕は君にホールドされ続けるの？

「……うるさい」

ぐええ……………。

痛い痛い！ アバラ折れる！

『……………待っている主。今すぐ具現化して、その小娘どもを喰い散らしてやる!』

『姫島朱乃と言いましたか？ 先程のは妾の仕事ぞ。滅してくれる』

君らなんか今日物騒だね!?

『お、王！ 女王！ お気を確かに!』

あ、頑張れカムラン。二人を止めて!

『お二方が手を汚す必要などありません！ ここは拙者が!』

カムラン、お前もか。

「そ、それで、二人はなんでここに？」

「…ハルトがいるから」

「たまたまですわ」

………小猫ちゃん、微妙に答えになってないよ。

「そ、それじゃ戻りましょうか」

正直いって、もう眠気が限界に近い。

その時、姫島先輩がこんなことを言った。

「あの二人、素敵ですわね」

うん、確かに。

あんな風に、真っ直ぐ好きって誰かに伝えるのは凄いと思う。

「いつか私たちも、あんな風に言われてみたいですわ。ね？ 小猫ちゃん？」

「………なんで私に振るんですか」

姫島先輩の言葉に、小猫ちゃんはプイツと顔を背けてしまう。

好き、ね。

「僕、二人のこと好きですよ？」

「え？」

もちろん他にも、イツセー兄ちゃんもアーシアさんもグレモリー先輩も、ちよつと身の危険を感じるけど、木場先輩も。

オカ研の皆が大好きだ。

「……………は、ハルト……………」

「ん？」

あれ？　なんか二人とも顔が少し赤い？

「どしたの？　二人とも顔が赤いけど」

「な、なんでもありませんわ！　さ、さあ、部屋に戻りましょうか」

どこか慌てたような二人に背を押されて、僕は寢室へと戻って行った。

「ふふふ、ハルトくん……………」

「ひっ!?　な、なんだ、寢言か」



翌朝、なんか朱乃さんと小猫ちゃんの機嫌が良かった。

ハルのカレーを少し多めにしてたり、お菓子を分けてあげてたり。

ハルはそれに無邪気に喜んでた。

朝食後、いつもなら修行に入るのに、今日は一旦皆集められた。

なんでも、経過を見るために、これまで使用禁止だった《ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手》を使って木

場と模擬戦をするらしい。

「イツセー、あなたに自信をあげるわ」

そう言って、部長は模擬戦開始の合図を告げた。

合図が出た瞬間、木場の姿が掻き消えたが、その直後、俺の目の端が何かを捉え、無意識に体がその方向へ防御姿勢をとる。

「っ!？」

その防御は見事成功し、木場は驚きに目を見開く。

「イツセー! 魔力の攻撃を放ってみなさい! 神器を発現したときと同じく、自分の

最強を思い浮かべながら！」

魔力の攻撃？

部長の言葉に従い、俺は辛うじて作り出せる米粒サイズの魔力球を手のひらに作り出す。

すると、

『Bloody Booster!! The Encourage!!』

と、籠手が赤く輝きだし、

『Blood Arts Operation!!』

技名が脳内に浮かんだ。

「ドラゴン・ショット」!!

次の瞬間、俺は度肝を抜かれた。

ほんの小さな魔力球から放たれた魔力は、そのサイズからは考えられないような極太のビームとなって、山を吹き飛ばした。

「なにあれ？ ブラスト？」

そんな呆然としたハルの眩きが聞こえる。

だが、驚いてるのはこっちだ。

なんだあれ!? ビビったー。

もしかして俺の攻撃、神器と血の力が合わされば凄まじい事になる?

「イツセー。あなたは確かに、この中じゃ一番弱いわ」

「は、はい」

「けど、それは神器を発動していない状態でのこと」

部長は先程吹っ飛んだ山の方を指差す。

「さっきの一撃を見たでしょう? 確かに速度こそまだ速くはないわ。けれど、あれが

当たって無事でいられる存在は、そういないでしょうね」

マジっすか!?! や、確かに凄まじい威力でしたけど。

「基礎体力も魔力操作も血の力も、あなたは少しずつだけ成長しているわ。

知ってる? 『一の才能より百の努力』。たしかにあなたの成長速度は他の人よりも

遅いのもかもしれない。

けれど、それでもあなたは確実に強くなっている。それを忘れないで」

部長はそう力強く俺に語りかける。

「それに、私の『兵士』の駒を全て使い切ったのだもの。弱いわげがないわ」

そうやって俺に微笑みかけた部長の笑顔が、何よりの励みになった。

よーし、やってやる！

待ってろよ、種蒔き焼鳥！
ブツ飛ばしてやる！

第35話

明後日は、ライザーとの試合。

そして今日は、修行の最終日。

緊張のためか、目が冴えてしまった私は、バルコニーから空を眺めていた。

ここは山奥で光が少ないから、星がよく見える。

こうやって月明かりの下にしていると、数日前のあの日、イツセーが私を真っ直ぐ見つめてくれた日を思い出す。

彼は強くなる。

今は弱くても、彼のポテンシャルは計り知れないものがある。

「あ……」

物音と共に、後ろから声が聞こえた。

「あら、ハルトじゃない。眠れないの？」

そこにいたのは、イツセーの弟分であるハルトだった。

思えば、彼も不思議な子だ。

神機と呼ばれる奇妙な武器を駆使し、墮天使を下した。

それだけじゃなく、『血の力』と呼ばれる、これまで見たことも聞いたこともすら乗っていないような力を使う彼。

そして、あの時私を助けてくれた恩人でもある。

——そして、小猫と朱乃の想い人。

朱乃は隠しているようだけど、幼馴染みの私に隠し通せるとでも？

「あの、お邪魔でした？」

「ふふ、そんなことないわ。ほら、こっちいらっしやい」

そう言っつて、私が座っている側の対面にある椅子を指差す。

そこに座った彼と、しばらく無言で星空を見上げる。

「綺麗な星空ですね」

「素敵でしょ？ 別荘（こじ）に来たときはいつも見てるの」

そしてまた訪れる沈黙。

お互いに何も言わないけれど、この沈黙はなんだか心地いい。

「ねえ、グレモリー先輩」

唐突に、彼が私を呼ぶ。

「なにかしら?」

彼は、まだ空を見上げています。

「先輩は、なんのために戦うんですか? 何を思って、戦場に立つんですか?」

投げ掛けられたのは問い。

問われたのは、戦う理由。

「先輩がフェニックスさんとの婚約を破談にするためにこの試合をするのは理解していません。」

だから僕は、この試合への理由は問いません。僕が聞いているのは、これから先、どんな想いをもって戦いに臨むのか、それを聞きたいんです」

視線は空に向けたまま、彼は言う。

「これから先……………」

正直、考えたことも無かった。

精々、グレモリーの名に恥じないゲームをすることくらいしか。

だから、彼への答えに少し詰まってしまった。

すると彼は、視線をこちらに向ける。

その顔は、少し申し訳なさそうに笑っていた。

「すみません。なら質問を変えます

先輩は、何を目指すんですか？ 何を目指して、どう在りたいんですか？」
今度は、目標と在り方を問われた。

「私は、王になりたい」

それにはハッキリと答えることができた。

「王に？」

「ええ。私はキングよ。皆のキング。そして部長でもあり、上級悪魔でもある」

私の言葉を、彼は黙って聞いている。

「私は、皆の王でありたい。皆の支えでありたい。皆の、道標でありたい。」

まだまだ未熟だし、何をすればいいのかも解らないけれど、私はそう在りたい」
言葉にして、自分で確認して、そして新たに決意する。

そう、私は皆の主なのだから。

彼らは、イツセーを除く彼らは皆一様に、凄惨な過去を持っている。

自身の血に忌避感をもつ女王。

肉親への不信感を抱く戦車。

聖剣に激しい憎悪を燃やす騎士。

虐げられ捨てられ、自信を無くした僧侶。

彼らはきつと、未だ救いを求めているはずだ。
だから私は、私の下僕達の支えになりたい。

仲間を想い、共に泣き、笑い、そして共に歩んでいく。

「それが私の歩みたい王道であり、目指す場所よ」

彼の目を見て真つ直ぐと言ひ切る。

すると彼は、

「やっぱり、先輩は優しいんですね」

と、そう言つて笑つた。

「先輩。これから先、何があつても絶対に、その想いだけは失わないで下さい。

その想いがあなたの、力になる」

それだけ言つと、彼はその場から立ち上がる。

「もう遅いですし、僕は寝ます。お休みなさい」

「ええ、お休みなさい」

一礼し、踵を返した彼は、ドアに手を触れる直前、何かを思い出したかのようにこちらを振り向く。

「言い忘れてました。

——先輩。あなたの目覚めは、もうすぐです。僕が保証しますよ」
それだけ言うと、今度こそ彼は部屋の中に戻って行った。

……………。

「目覚めって、血の力のこと？」

そう一人ごちて、私はもう一度、空を見上げた。



決戦当日。

部室にはすでにフルメンバーが揃っていた。

今日から授業に復帰したわけだけど、昨日までの欠席はなんか『オカ研の合宿』という、訳のわからない理由で公欠扱いになってた。

………なんだよオカルト研究の合宿って。それで申請が受理される辺り、さすが悪魔ばうあゝ。

さて、話を戻して、僕らは今、銀髪メイドことグレイフィアさんから説明を受けていた。

「開始時間になりましたら、こちらの魔方陣から戦闘フィールドへと転送されます。フィールドは異空間に作られた専用の世界なので、どんなに派手に暴れても構いません。使い捨てですのぞ」

おお、なんか大がかりだなあ。

悪魔って凄いい。間違えた、しゅごい。

「今回のレーティングゲームは非公式ではありますが、グレモリー、フェニックスご両家の皆様が観戦されており、さらに、魔王ルシファー様も拝見されております。くれぐれもお忘れなきようお願いします」

魔王!? 悪魔のトップじゃん!

なんでこんな非公式試合なんか見に来るのさ!

「そう、お兄さまも………」

え? お兄さん? グレモリー先輩の?

「あの、今部長が魔王さまのことをお兄さまって言ったような気がしたんですが

……………」

兄ちゃんが恐る恐る手を挙げながら質問する。

「そうだよ、イツセーくん。魔王サーゼクス・ルシファー様は、部長のお兄様だよ」

「ええええええ!?」

僕と兄ちゃんの驚きの声が重なる。

「こ、これが所謂さすおにか！」

「で、でもグレモリー先輩とは苗字が……」

「ええ、ルシファーとは言わば役職名のようなもの。ですから、魔王に選出された方は、ファミリーネームとして、魔王の名を名乗るのですわ」

僕の質問に、姫島先輩が丁寧に答えてくれる。

へえー、悪魔社会も複雑だなあ。

「それでは皆様、時間になりました。ご武運を」

グレイフィアさんがお辞儀をすると同時に、僕らの足元の魔方陣から光が発せられる。

視界が完全に光に包まれる瞬間、グレイフィアさんの声が聞こえてきた。

「完膚なきまでに叩きのめしなさい、リアス」

それは、先程までの堅苦しいメイドの口調ではなく、まるで家族に投げ掛ける姉のよ

うな口調だった。

その直後、視界の光は消え、目の前のグレイフィアさんがいなくなると、グレモリー先輩が呟くように答えた。

「わかつてるわ、義姉さん」

……え？ 姉さん？ 姉妹なの？

どうやら、彼女の呟きは僕にしか聞こえていなかったらしく、僕の疑問が置いてけぼりなまま、ゲームが開始されたのだった。



彼らを見送り、お辞儀から姿勢を戻した銀髪のメイドは、そのまま別の部屋に移動する。

移動した先の部屋には、紅の髪を持つ男が、興味深そうに画面を見つめていた。

「サーゼクスさま」

「おつかれ、グレイフィア。それで、彼はどうだった？」

「お嬢様のおっしやった通り、セイクリッド・ギア 神 器を持つだけの人間でしたが、ただ」
「ただ？」

「なにか人間ではない……………そう、神やそれに類する存在に近い気配を感じました」
「……………それは、彼が神の石柱、あるいは血族かもしれない、ということかい？」

「いえ、そうでないのです。半神や憑喪神のような、その魂に刻まれているような気配ではなく、混じり物のような気配でした」

「つまり、後付けされたような神性だったと？」

「はい」

「なるほど、どうやら、予想以上に興味深い人間のようなだね、彼は」

彼はその視線をもう一度画面へ向けた。

「リーアには悪いけど、僕は彼を観察するでしょう」

そう言って、彼は微笑みをその口許に浮かべるのだった。

第36話

部室を模して作られた部屋で、僕らはテーブルを取り囲むように向き合う。

グレモリー先輩が口を開く。

「皆には、二人一組で動いてもらうわ」

「編成はどうしますの？」

すかさず、姫島先輩が質問する。

「剣士同士、肉弾戦同士で固まってもらおうわ」

「つまり、僕とハルトくん。イツセーくんと小猫ちゃんの編成ですね」

「ええ。そしてアーシアは私と来なさい」

「あらあら、私が一人余ってしまいましたわ」

「わかっているクセに………まあいいわ。朱乃は遊撃奇襲として単独行動をお願いね」

編成を伝え終えると、今度は詳しい作戦を考える。といっても、確認のような物だが。

向こうは何度もゲームをしたことのある経験者で、こちらは毛も生えていないような

ド素人だ。

正直、こんな作戦が通じるかどうかとも判らないが、これが今の僕らの精一杯なんだ。
「皆、不安？」

ふと、グレモリー先輩がそんなことを言う。

「確かに相手は強いわ。ゲーム経験者で、不死のフェニックス」

そう、相手は不死鳥フェニックスなのだ。聞いた話によると、精神を折ってしまったか、蘇生の間に合わない攻撃をすると倒せるそうだが、それでも現状の僕たちでは難しいのではないのだろうか。

「それでも、信じなさい」

誰を、とは誰も聞かなかった。

「信じなさい、自分と、修行した時間と、そして——皆の【王】である、このリアス・グレモリーを。いい？」

堂々と。

まさに威風堂々という言葉が似合う立ち振舞いと共に、グレモリー先輩が言い放つ。

——つ、なんだろうね。不安なんか、一瞬で吹き飛んでしまったよ。『鼓舞』は兄ちゃんの力のはずなのに、一気に元気付けられてしまった。

だから、

『はい、部長!!』

僕らは一斉に返事をした。



「ハルトくん、準備は言いかい？」

「はい、木場先輩」

イツセー兄ちゃんと小猫ちゃんは体育館へ、僕と木場先輩はグラウンドへそれぞれ向かっていった。

僕らは、音を立てないように隠れながら移動し、物影からグラウンドを覗き込む。

と、そこで前を歩いていた木場先輩が止まれのジェスチャーをする。

「見つけた」

小声で言った木場につられて、僕も物影から確認する。

そして、そこで見た光景に疑問を抱く。

「あれは……………」

僕らの位置だと、彼女らは横向きだが、問題はそこではなく、

「隠れてない？」

隠れるどころか、グラウンドの真ん中に10名近い人数が固まって立っていた。

「多分、待ってるんだ」

「待ってる？」

「そう。奇襲なんか自分達には通じないから、真正面からかかってこい、つてね」

「良く分かりますね」

「ま、勘だけどね」

でも、当たっているような雰囲気、彼女たちは醸し出している。

「ふふ」

つい、そんな笑みが零れてしまう。

「ハルトくん？」

不思議そうな顔をした木場先輩が僕を見る。

「いえ、ただ………狙いやすいなあ、つて」

そう言つて、僕は神機を握り直す。

「木場先輩。少し、静かにしてもらっても良いですか？」

「あ、ああ、構わないよ。でも、いったい何を？」

「何つて、狙撃ですよ」

言つて、まずはスキルを発動させる。

「スキル発動。【サイレントキリング】」

これで、僕の音は誰にも聞こえなくなる。

そして、

「ステルスフィールド、展開」

神機を銃形態にし、フィールドを展開する。

そして、僕はそのまま物影から出る。

「……………っ!？」

いきなり姿を晒すような行動をした僕を見て、木場先輩が驚いたように表情を変化させるが、そこは流石、先輩は声を押し殺した。

右膝をつき、神機を構え、スナイピングの姿勢を取る。

「スコープ、倍率++。狙い、良し」

狙うのは、魔女っ子装束の女の人。

「フアアア！」

引き金を引けば、大きな音と共に、心地よい振動が僕に伝わってくる。

「きやあああ?!?!」

右肩を撃ち抜かれたその人は、一瞬にして光に包まれ退場する。

『ライザー・フェニックス様の【兵士^{ボーン}】一名、リタイアです』

グレイファイアさんの声でアナウンスがされ、それと同時に彼女たちは反応する。

「シュリヤー!? どこから?!」

「向こうですわ! 皆さん、構えて!」

「お嬢様は下がって下さい!」

何か騒いでいるようだが、こちらまでは声が聞こえない。

「木場先輩!」

「了解!」

僕の呼び掛けに、木場先輩は準備していたのか、即座に最高速度で飛び出す。

「もう一人!」

今度は、特に狙いも定めずに引き金を引く。

「イザベラ!」

「くっ!?!」

仮面をつけた人が反応して躲すと、その後ろにいる人に命中し、その人も一瞬でリタイアする。

『ライザー・フェニックス様の【兵士^{ポーン}】一名、リタイアです』

「マリオン!! くそ!」

されるとは思っていなかった奇襲で二人もやられたせいか、彼女たちは激昂した様子

で僕の所へ向かつてくる。

でも、

「実はそれが狙いだつたりして」

「僕を、忘れて持つちゃ困るな！」

僕を向く彼女らの死角、つまり後ろから、そこに回り込んだ木場先輩が斬りかかる。

『ライザー・フェニックス様の【僧侶^{レシヨット}】一名、リタイアです』

「後ろからだど!? 卑怯な！」

「生憎、こちとら数が少ないんでね! 少々狡い手を使わせてもらおう！」

「そう言うこと! 【サイレントキリング】解除! 【乱戦の心得】発動!」

僕と木場先輩は一度背中を会わせると、互いを確認することなく同時に飛び出す。

【魔劍創造^{ソードパース}】! 氷の魔劍よ! 凍てつけ!」

「ブラッドアーツ発動! 【波濤斬り】!」

2対多数という、圧倒的不利の中、僕らは信じられないくらいの快進撃を続ける。

最初に向こうのペースを崩したとはいえ、ここまで容易く瓦解するとは、驚きだよ。

その時、閃光と爆音が、僕らの視界と聴覚を覆い尽くした。

「な、なにこいつ!」

『ライザー・フェニックス様の【兵士】三名、【戦車】一名、リタイアです』

おお！ これは作戦通りに姫島先輩が決めてくれたと言うことか！

と、僕が喜んだのも束の間、続いて聞こえてきた爆発音とアウンスが、そんな浮わつた気持ちを打ち消した。

『リアス・グレモリー様の【戦車】一名、リタイアです』

「ッ！ 小猫ちゃん！」

「余所見をしている暇があるのか！」

しまった！ 今の一瞬で間合いに入られるとは！

僕に肉薄した鎧姿の女の人が、僕に剣を振るう。

このままでは間に合わない！

「させない！」

ガキン！ と、金属同士のぶつかる音を響かせて、僕に振るわれた剣を、間に入ってきた木場先輩が受け止める。

「後ろがから空きですわよ！」

しかし、僕と木場先輩が一ヶ所に固まったのを見計らって、上空から火の玉が投げ落とされる。

これが狙いか！

「しまった！」

「任せて下さい！」

——頼んだよ、サリエル！

《はい！ 我が身に代えても！》

装甲を展開し、真正面から火の玉を受ける。

直後、轟音と共に、凄まじい熱気と衝撃が僕らに伝わり、辺りを煙が覆い隠す。

「……………つ、はあ、はあ、大丈夫ですか？ 木場先輩」

「あ、ああ、なんとかね。……………でも」

「これはちよつと、ピンチですかねえ……………」

僕と木場先輩は、お互いの剣を構えながら辺りを見回す。

僕らを取り囲むように、フェニックスさんの眷属の人達が立ち、そして彼女らと僕らを区切るように、炎の壁が勢い良く燃え上がっている。

「やっば、二人はキツかったかなあ」

「泣き言言つても意味がないよ、ハルトくん。それより、僕が氷の魔剣で道を開く。そこから一気に離脱するよ！」

「はい！」

僕がその言葉に頷くと、炎の向こう側から声が届く。

「そう簡単には、逃しませんわ！」

先程炎を放ったドリルちゃんも、また炎を両手に溜める。

「……………ごめんハルトくん。ちよつとキツイかも。流石に、模造の魔剣じゃ、フェニックスの炎には届きそうにないや」

「なら、僕に任せて下さい」

苦笑いを浮かべる木場先輩の肩を叩き、僕が前に出る。

「燃え尽きなさい！」
【不死鳥の息吹】^{フェニックス・ブレイズ}！

真ん前から、巨大な炎が迫り来る。

本来なら、こんな避ける場所もないところでこんな攻撃をされたら、それこそひとたまりもないだろう。

本来なら、ね。

「これはむしろ好都合！　いくよ木場先輩！　着いてきて！」

「わ、わかった！」

迫り来る炎を見据えながら、神機を水平に構え、

「ブラッドアーツ発動！　【バリア・スライド】！」

目の前にできた不可視の障壁が炎を防ぎ、僕らを前に突き進ませる。

「おおおおお！」

「お嬢様！」

炎から抜け出し、神機を振り抜くと、この手に斬った感触を得る。

『ライザー・フェニックス様の【騎士^{ナイト}】一名、リタイアです』

抜けた！

そう実感した瞬間、僕らは駆け出した。

僕らが向かう先には、

『Dragon Booster second Liberation!!』

見た目に変化した籠手を構える、イツセー兄ちゃんの姿が。

「ハルウウウウ！ 木場ああああ！ 受けとれ！」

【赤龍帝からの贈り物】！

『Transfer!!』

兄ちゃんが僕らに触れた瞬間、体の底から力が沸き上がってきた。

「これは……………そうか！ 【魔劍創造^{ソドバース}】！」

先輩が叫びながら剣を地面に突き刺す。

すると次の瞬間、地面からいくつもの剣が生え、僕らを追ってきた人達は、空を

飛んでいるドリルちゃんを除いて、その全員がその剣の餌食となった。

「「「……………うわあ」」」

その一言が、その光景を目の当たりにした四人の素直な感想だった。

「あ、あなた方……………なんて酷いことを……………」

「そっだよイツセー兄ちゃん。酷いなあ」

「全くだね」

「ちよ!? おい木場てめえ! この実行犯!」

なんて、僕らは敵がいなくなったことに安心して、ついそんな言い合いを初めてしまった。

多分、と言うか絶対、それがダメだったのだろう。

僕たちは、上空にいる存在に、気づくことができなかつた。

「余所見は、嚴禁よ？」

『リアス・グレモリー様の【女王】^{クイーン}、リタイアです』

第37話

あの一瞬で、僕が認識できたことは僅かな出来事ばかりだ。

『リアス・グレモリー様の【女王】^{クイーン}、リタイアです』

そんな、絶望に近い宣告と、

「——危ない！」

僕よりも何かに一瞬早く反応し、目の前のイツセーくんとレイヴェル・フェニックスを突き飛ばすハルトくんの姿。

そこまで見た僕を襲ったのは、とてつもない轟音と衝撃、そして激痛。

何が起こったのか、理解することは出来なかった。

いや、正確には、理解しようとしたけど、理解するまで意識がもたなかった。

ただ一つ覚えてるのは、彼の声だった。

——彼の、獣のような雄叫びだった。



「——危ない！」

一瞬空を見やったハルが、俺と、隣にいたライザーの眷属を突き飛ばす。
そしてその直後——、

響いたのは轟音。

見たのは爆炎。

感じたのは熱風。

その三つが、ハルと木場を飲み込んだ。

——今の一瞬でハルが俺を突き飛ばさなかったら、俺もあの中に……………。
そう思うと、背筋が凍った。

「っ！ハル！木場！」

凍ると同時に、それに飲み込まれた二人の名を呼ぶ。

煙が晴れた先には、浅い呼吸を繰り返す木場と、血を流して呻くハルの姿が。

「——っ！」

その余りの痛々しさに、俺が絶句すると、隣から怒りの声上がる。

「ユーベルーナ！ これはどういうことですか!？」

「どう、とは？ レイヴェルお嬢様」

「とぼけないで！ 先程の攻撃、明らかに私にも当たる物でしたわ!!」

「あら、勘違いなされては困りますわ、お嬢様。私はただ、確実に倒せる相手を攻撃した
までです」

「……………ええ、それは正しいわ、理論としては。だけど、フレンドリーファイアを

……………」

「貴女なら大丈夫かと」

「は?」

「いえ、お嬢様が不死だから、などと、そのような理由ではなく、お嬢様なら避けられて
当然かと思いましたが」

「……………よくも、ぬけぬけと……………っ！」

おい、じゃあなにか？ あのケバいオバさんは、味方が巻き込まれるかもしれない攻
撃をしたってことか？ それも、何の打ち合わせも無しに？

「それではお嬢様。その二人はいずれリタイアするでしょう。ですから、その赤龍帝をよろしくお願いします」

「貴女は——っ！」

そこで女の子——レイヴェル・フェニックスの声が途切れた。

怒りで声がでなかったとか、俺から攻撃を受けたとかじゃない。

ただ、動ける筈の無い人間が、立ち上がったただけだ。

「は、ハル?」

ハルの纏う、その尋常じゃないオーラ、それこそ、悪魔になって日の浅い俺ですら感じ取れてしまう程のオーラを感じ取って、俺は恐る恐る声をかける。

——知っている。

この気配は、知っている。

そうだ、あの日。

俺がレイナーレに殺されたあの日、化け物の姿になっていたハルから感じた気配。

怒りのような、喜びのような、悲しみのような、荒ぶる気配。

「な、なんですの、この気配は!？」

レイヴェル・フェニックスが狼狽えたように質問を投げ掛ける。

「んなもん、こつちが知りたくらいだ!」

ゆつくりと、ハルが顔を上げる。

「――」

その目には、なにも映していなかった。

なにも映していなかったが、その表情は、憤怒にまみれていた。

口を開く。中が切れているのか、血液が一筋、顎を伝う。

「おおおおおあああああああ!!!」

その口から飛び出したのは雄叫び。

まるで獣のような、雄叫び。

そして、その背には――、

「光の、片翼?」

黄金と黒で彩られた、片翼の光の翼が広げられていた。



「あれは！」

「……………」の気配」

僕はその光景をモニター越しに見た瞬間、椅子を蹴飛ばして立ち上がる。

「見ろ、グレイフィア！　これが君の言っていた力かい!？」

「……………ええ。確かにあの翼のような物を出して気配は強くなりました。ですが、あの傷です。早くリタイヤを」

「わかってる。木場くんはリタイヤさせてやれ。ただ彼は……………」

「ルシファーさま。お戯れも程々に」

グレイフィアのその言葉に、僕は冷静に答えを返す。

「グレイフィア、僕はなにもふざけている訳じゃない。ただリーア……………妹の近くにいる人間が、どれ程の者なのか見極めたいだけなのさ。害悪か、否かをね」

「……………畏まりました。ではそのように」

うんうん、どうやらわかってくれたみたいだね。

さあ、見せてもらおうか、神結悠斗くん。

君の力って奴を。



「なんだ、この気配は!?!」

「これは……………」

ライザーとの戦闘中、フィールド全体を覆い尽くすような異様な気配に、私たちは互いに動きを止める。

「この感じ……………ハルトさん?」

後ろにいるアーシアが思い出したようにそう呟く。

そうだわ、これはハルトの気配。

彼の、あの神に近い、けれども神とは違う、混じり物の気配。

それが、大きく膨れ上がっている。

「……………リアス。お前の小飼にしているあの人間はなんだ。おおよそ人間が持つてていい気配じゃねえ」

ライザーが、まるで苦虫を噛み潰したような顔をしながら冷や汗を流している。多分、私も似たような顔をしているのだろう。

なんせこの気配、まるで全てを壊しつくそうという意思すら感じる、狂暴な物だ。後ろにいるアーシアが、顔を青くさせて小刻みに震えている。

「あの小僧。見た目はまるで犬のようだが、存外狼かも知れんぞ」

少し震えているその声に、私は震える体を誤魔化して不敵に笑う。

「ええ、そうかもしれないわね」

そして私たちは、気配の方向を見続けた。



「…ハルトー！」

不意を突かれてリタイアした私は、序盤でやられたこともあり、意識を取り戻していた。

隣では、まだ目を覚まさない朱乃先輩と、さきほど転送されてきた祐斗先輩。だから、ここで彼を見ているのは私一人。

「……なに、この感じ？」

モニター越しでも伝わってくる、荒ぶる気配に身を竦める。

怒り、悲しみ、喜び。

そんな感情が、猫^{白音}?である私の中に流れ込んでくる。

でも、

「……ハルトの感情じゃ、ない？」

そう、本能が告げていた。



『我が君!』

『主君！』

『主！』

三体の神が、同時に叫ぶ。

『おのれ忌々しい女悪魔め、我が君になんと言うことを
！』

『食いつくしてくれる！』

痛みに呻く宿主を見て、王と女王が怒りを露にする。
だが、その時、

—— スキル発動。

『なに？』

そんな音声か、精神世界に響き渡る。

—— スキル発動。

『なっ!? これはどういふことだ!』

『わかりません! ただ、これは……………』

『我が君のスキルが、暴走している?』

—— スキル【劍聖】発動。

—— スキル【穴熊】発動。

—— スキル【死中の一撃】発動。

—— スキル【飛将】発動。

—— スキル【スタウトフアイト】発動。

—— スキル【乱戦の心得】発動。

『まずい、これはまずいぞ!』

『早く、止めなくては!』

『はい、このままでは、主君の体が!』

これまで、ハルトのスキルが二つ以上同時に発動しなかったのは、発動出来なかったのではなく、彼女らが押さえていたからだ。

未だゴッドイーターになって日が浅く、まだまだ未熟な彼が12個ものスキルを使うとなれば、当然その体に負荷がかかり、【自動治癒】のスキルでも補うことが出来なかったからだ。

—— スキル【インフィニティ】発動。

—— スキル【捨て身の剣】発動。

—— スキル【砲撃手】発動。

—— スキル【超越者】発動。

『止まれ！ 止まりなさい！』

『女王！ 落ち着いて下さい！』

『だが、このままでは我が君は！』

そこで、白狼王が別の事に気づく。

『これは……………っ！』

遅れて、他二体も気づく。気付いてしまう。

『これはどういふことだ！ 《紡ぎ手》よ!!』

白狼王の怒号が響く。

『なぜ、なぜ我々の封印が……………【拘束フレーム】が解放されている！ 主はまだ、己のスキルですら十全に発揮できぬのだぞ！』

彼らの怒りの声に、届いた声は一つ。

否、それは声と呼べるような物ではなかった。

届いたのは、言わばテレパシーのような、声ではない、信号のようなもの。

『限界を超えられぬ者に、意味は無い』だと？ そんな理由で、貴様は！』

その返答が気に入らなかつたのか、魔女王が激昂の声を上げる。

だが、最早答えることなど何も無いと言わんばかりの沈黙が返ってくるのみであった。

『……………主君』

鋼騎士のその眩きと共に、彼らは意識の底からハルトを見上げた。



「ああああがああああああ!!」

そんな雄叫びを上げて、ハルは跳び上がった。

狙うはただ一人と言わんばかりに、一直線に向かうの「女王」を狙う。

「くっ、この！」

【女王】が手を振るうと、ハルの周辺が爆発する。

「ハル！」

だが、爆炎が晴れると、そこには蝶のような盾を広げたハルの姿が。

さらによく見ると、少しずつだが、ハルの傷も治り始めていた。

「ふふふ！　いくら攻撃を受け止めて切れても、所詮は人間。飛べる私たちには勝てないのよ！」

……………その台詞、レイナーレも言ってたぞ。

つまり、それはこの場においてはフラグであり、

「なに!？」

ハルは当然のように空中でジャンプをして見せた。

「……………ブラッドアーツ【韋駄天】」

空中でハルが回転したかと思った次の瞬間には、すでに【女王】の後ろまで通りすぎていた。

早い!?　正直、目で追いきれなかった。

けど向こうは辛うじて見えたのか、少しだけ反らした顔の横、つまり左肩から血飛沫が飛び散る。

「お、のれえ！ 人間の分際で！ 爆ぜろ!!」

怒りの表情を見せた【女王】は、両腕を同時に振るう。

先程とは比べ物にならないほどの爆裂が起き、ハルの体全てを飲み込んだ。

「は——!」

「ブラッドアーツ、【エアリアル・キャリバー】

ハル、と叫ぼうとした俺の声を掻き消したのは、音ではなく光景。

爆炎を切り裂くように飛んできた複数の光の刃が、【女王】の服を切り裂く。

「きゃああ!!」

服が避け、肌を露出させた【女王】が体を押さえたその瞬間、

「ブラッドアーツ【I-E伍式・照射】」

一条、というには太すぎる光の筋が、【女王】の体を貫いた。

「が、ふ……………おのれえ!」

リタイアの光に包まれ始めた【女王】は、最後の見舞いとばかりに、両手を降り下ろ

す。

狙いは俺。

本来なら俺はこの瞬間にリタイアするはずだった。

でも、

「……………お嬢様、なぜ……………」

「別に、貴女のやり方が気に食わなかったただけですわ、ユーベルーナ」
俺は、レイヴェル・フェニックスに守られていた。

『ライザー・フェニックス様の【女王^{クイーン}】、リタイアです』

『カミユイハルト様、リタイアです』

そんなアナウンスを聞きながら、俺の胸中は悔しさで溢れていた。

——何も出来なかった！

——敵に助けられた！

——守^ハる^ルべき弟^トに守られた！

「ふん、お兄様たちのところもそろそろ終わりがしらね」

レイヴェル・フェニックスのその一言で、俺は我に帰る。

そうだ、まだゲームは終わってなかった！

自覚すると、いても立ってもいられず、俺は目の前の彼女を無視して走り出した。

待っててください、部長！ 今行きます！

「ちよ、無視しないで——ま、良いですわ。どうせお兄様には勝てないのですし」

そんな、勝ち誇ったような声は、俺には届かなかった。

第38話

走る、走る、走る。

「プロモーション！　【女王】！」

校舎に入り高らかに叫ぶことで、俺の体に力がみなぎる。

駆け上がる、駆け上がる、駆け上がる。

屋上に向けて、俺は階段を駆け上がる。

体力は殆ど残っていない。立ち止まれば倒れそうだ。今だって、震える足を無理やり動かしてる。気を抜けばきつと転んでしまうんだろう。

それでも立たなきやいけない。向かわなければならぬ。

朱乃さんも、木場も、小猫ちゃんも、ハルも、皆やられてしまった。

だから今、部長を守るの俺だけなんだ。俺が残ってしまったから、俺が守るんだ！

何度も転びながら、それでも上を目指し、対に辿り着いたその扉を、勢いよく開け放

つ。

「部長オオオツ！ 兵藤一誠、ただいま参上しましたッ！」

張り上げた声は少し掠れている。呼吸も荒い。

「だけど幸い、掠り傷程度のダメージしか受けていない俺の気力は、いつも以上にみなぎっている。」

「ふん、来たか。ドラゴンの小僧」

「申し訳ありません、お兄様。逃してしまいました」

「構わん。だがお前は下がっておけ」

「はい」

ライザー兄妹が言葉を交わすなか、俺は部長とアジアの元へ駆け寄る。

「すみません、部長……俺以外、皆……」

「あなたが謝る必要は無いわ、イツセー」

「無事で良かったです、イツセーさん」

そんなやり取りを交わし、俺はライザーを見据える。

向こうも、俺を見下すような目付きでこつちを見ている。

そんな奴に向かつて、俺は左手の籠手を突き出しながら叫ぶ。

「俺がお前をぶちのめす！」

「ほう?」

ライザーは片眉のみを上げて、ニヤリと笑う。

「お前ごとき転生したての下級悪魔が、純血であり上級悪魔であるこの俺に勝負を挑むとっ。」

「ああ、そうだ!」

「……………くつくくく、あつはははははは!!」

俺の返答を聞いたライザーはいきなり、腹を抱えて大声で笑う。

「ははははははっ! そりゃいい! 冗談としては傑作だぞ、小僧!」

「なんだと!」

「おいおい、リアス。お前んとこの「兵士」^{ホーン}は少し、ここが足りてないんじゃないか?」

嘲るように笑いながら、ライザーは自分の頭を人差し指でつつく。

「うるせえ! 行くぞ、ライザー!」

拳を握りしめ、ライザーに殴りかかる。

「ライザー『様』だ、下級悪魔」

だが、俺の攻撃は、冷たい声音でそう言ったライザーに片手で防がれてしまう。

くそっ! 倍加がたりねえ!

『Boost!!』

「おっ？」

「うらあー！」

俺の考えに答えるように倍加の音声が響き、俺に力を与える。

その与えられた力を使って、俺の拳を握るライザーの手を弾く。

そのまま、攻撃モーションに入る。

『Blood Arts Operation!!』

「食らえー！【ドラゴンショット】！」

放たれた極大のエネルギーは、ライザーをも呑み込みそうな大きさで、俺にとっての全力の一撃だ。

しかし、山の一角ですら消し飛ばした俺のその攻撃を前にして尚、奴は顔色ひとつ変えず、微動だにしない。

そして、

「赤龍帝と言えども、所詮は下級の転生悪魔か」

そんな失望の声と共に弾き飛ばされる。

「この程度の攻撃に、不死の力はおろか、不死鳥の炎を使うことすら勿体無い」

何でもないという口調で、奴は自らの左手の甲を擦る。恐らく、その手で弾いたのだろう。

どこかに着弾したらしい【ドラゴンショット】が爆発した音が辺りに響き渡る。

「魔力の量からして延び白も少ない。体格から見て肉弾戦の素養もない。正直、何でお前なんかには神器そとが宿ったのか不思議な位だぜ」

涼しげな表情で言い放たれる言葉を受けて、俺の脳裏には『絶望』の二文字が浮かび上がる。

けどすぐに首を振って振り払い、ほどけた拳を再び握り込む。

「まだだ！ おおおおおお！！」

そう自分を叱咤し、俺は奴の下へ駆け出す。

『Blood Arts Operation!!』

籠手からそんな音声が響き、赤い光が放たれる。

拳を引き、狙いを定める。

【破撃ノ拳打・龍】！

鋭く力の限り踏み込む。

思い出すのは、小猫ちゃんとの修行で教わった、パンチの繰り出し方。

突き出す拳と引く拳は、背中が紐と滑車で繋がっているイメージで同時に動かす。

踏み込む足の親指が内側に来るように大地を踏み、その勢いを殺さないまま腰をひね

り、力を上半身に伝える。

そして当てるのは、人差し指と中指の頭、つまり『拳頭』のみ！

修行の間、何度も繰り返した動きを脳内と体を使って再現する。

【破撃ノ拳打・龍】は、堕天使ですらも一撃で吹き飛ばした拳だ。それに加えて修行の成果を重ねれば——！！

「言っただろう？ お前ごときじゃ、俺には届かんと」

鋭く放った拳はしかし、いとも容易く、片手で受け止められてしまう。

「くっ！」

「逃がさん！」

すぐさま離脱しようとした俺の左手を、ライザーは右手で掴み込む。

それだけで、俺はこの場から動けなくなってしまう。

なんて馬鹿力だ！

「は、離せ！——ぶっ!?!」

一瞬、何が起きたのか解らなかった。少しして、痛みと共に何が起きたのか理解した。殴られたんだ、と。

「小僧、調子に乗るなよ？」

左手を掴む力が強くなる。籠手越しても分かるほどの力だ。

「俺とお前では、生まれも！」

顔を殴られる。

口内が切れたのか、鉄の味が広がる。

「育ちも！」

腹を蹴られる。

体が浮き、息が止まる。

「血筋も！」

持ち上げられ、地面に叩きつけられる。

骨が碎ける音がした。

「年季も！」

止めと言わんばかりに、顔を蹴られる。

もう、意識も朧気だ。

「何もかもが違うんだよ！ 小僧！」

そして最後には上空に投げられる。

その軌道にあつた貯水タンクにぶち当たり、貫通し、水を撒き散らす。

そんな俺を見ながら、ライザーは右手に炎を宿す。

「特別にくれてやる！」
【不死鳥フエニツクスの——】

「もう止めて！」

突如、そんな金切り声が辺りに響き渡る。

俺が声の主を確認するよりも早く、柔らかい何かに抱き止められる。

「投了リザイン、するわ」

部長の声は震えていた。

声だけじゃない。体も、震えていた。

「ぶ、ちよ……………」

「もう、もういいのよ、イツセー」

ダメだ。

そんなのダメだ！

そう叫びたい。叫んで、アイツをぶつとばしたい。

なのに、声がでない。体が動かない。

「私の、負けよ」

——
ああ。

——
負けた。

俺が弱いから、何もできなかつたから、負けた。

泣かせてしまった。守れなかつた。

そんな顔を見たく無かつた。

あなたの涙なんか、見たくなかつた。

もう誰かの涙なんか見たくなかつた。

誰も泣かせないって誓つたのに。

それなのに、俺は——……………。

部長の泣き顔を見ながら、悔しさと自らへの怒りを抱きながら、俺の意識は暗闇へと落ちていった。

《力を、欲するか？ 相棒》

最後にそんな声が聞こえた気がした。



「リアス、俺は先に冥界に帰ってる。行くぞレイヴェル」

「はい、お兄様」

俺はそれだけをリアスに告げ、踵を返す。

そこで不意に、後ろから声をかけられる。

「お兄様、その左手……………」

「あん？」

レイヴェルに言われて左手を見てみれば、

「お兄様の左手が、震えてる？」

俺の手が、まるで力が入らないかのように小刻みに震えていた。

「もしや、彼の攻撃を弾いたときに？」

そんな言葉を聞き、一瞬そうなのかと考えるが、すぐに首を降る。

「まさか。殴りすぎたんだよ」

そうに決まってるとも。

そう結論つけた俺は、右手を炎に纏わせて傷を癒したのだった。

「……………まさか、な」

第39話

「……ト……ハルト」

誰かが僕を呼ぶ声がする。

その声に導かれるように、暗闇に沈んだ僕の意識が少しずつ浮上する。

「……………」

浮上した朧気な意識が僕の臉を持ち上げ、周囲を確認する。

そこで、目の端に写ったのは白色。

小柄で、綺麗な真つ白で、猫みたいな……………

「ハ、ね？」

かつて家で飼っていた白猫の名を呼ぶ。

「帰って、来てたの」

あの時の癖で、小猫を抱き寄せる。昔はこうやって一緒に寝たもんだ。

……………ん？　なんか、猫にしては大きくないか？

「……は、ハルト……………いきなり、そんな……………」

腕の中の猫（と思っっているもの）が身じろぎをする。て言うか今の声、ものすごく聞き覚えがあるような？

「……………」

そこまで考えて、臆気だった意識が覚醒し始める。

同時に、脳内も高速で動き出す。主にパニック面で。

お、おお落ち着け、c o o ーだ！ k o o ーになるんだ前ば r ……神結ハルト！
ま、まずは状況の整理！

Q 1. ここはどこだ？

A. 僕の部屋だ。

おーけいおーけい、把握したぞう。

Q 2. 僕は何で寝てた？

A. 戦いで負けて気を失ってた。

うんうん、徐々に思い出してきたぞう。

Q 3. さて、腕のなかで抱えてるのは誰でしょう？

A. ……小猫ちゃんです。

マジかあたやも19#7@pm※◎※△★●▽!!!

………えへへ、ちよつと発狂しちゃった☆!

「ごめんなさい小猫ちゃん! ちよつとお詫びに飛び降りてきます!」

僕がすぐに手を離し、すぐさま窓枠に手をかけ足を乗せた瞬間、後ろから抱き止められる。

「……ハルト……ハルトお……ぐずつ」

う、うえええ?!?!? 泣いた!? なんで!? 僕が抱き締めたから!? そうなんだな! それしかない!

「……良かった……無事で良かった……っ!」

湿った声でキツく抱き着きながら、僕の背中に顔を埋める小猫ちゃんは、震えていた。しばらくして、背中になにかじんわりとした温かみが広がっていく。

「あ、えつと……小猫ちゃん?」

相当強い力で、なおかつ僕には負担にならないよう器用に抱き締められているせいで、僕は後ろを向くことができず、困惑したまま小猫ちゃんに声をかける。

「…無茶、しないでよ」

「(ご)めん」

「あんまり、怪我しないで……」

「う、うん」

その問答が終わると、彼女は僕を離し、自分のところを向かせる。

意識が覚醒して初めて見た彼女の顔は、目は涙で濡れて赤く、頬も怒ったのか少し朱に染まっていた。

そして少し膨れっ面である。

……………なにこの可愛い生き物。

「……………なに？」

ずっと見ていたためか、彼女は怪訝そうな顔で僕に理由を問いかける。

「ううん、何でもない。ただ、小猫ちゃんの分かりやすい表情って、なんか可愛いなあつて」

「……………ッ！ ………………ッ！」

「痛たたたたた！」

突然、顔を片手で隠しながら僕の脇腹を抓る小猫ちゃん。痛いです。

「あらあら、小猫ちゃんつたら」

不意に部屋の扉が開き、入ってきたのは姫島先輩。

「よかったですわ、ハルトくんが元気になって」

優しく微笑むその姿はまさに天女。あるいは慈母と言った方がしっくり来るかもしれない。

「…むう、朱乃先輩」

それを見てなぜかむくれる小猫ちゃん。

って待って？　なんでこの二人が僕んちにいるの？

その質問を皮切りに、僕が気を失ってる間の出来事を聞かされた。ゲームには敗北し、グレモリー先輩の結婚が決まったこと。

イツセー兄ちゃんもまだ目を覚ましていないこと。

今日、結婚式があること。

「え？　でも僕人間ですよ？」

「魔王ルシファー様からのお誘いなんです。妹の友人だから、と」

そっか……………。

「イツセー兄ちゃんは？」

「…目覚めれば多分、来るはず」

「そう……………」

辛いだろうな、イツセー兄ちゃん。

俯いた僕の思考を断ち切るように、姫島先輩が手を叩く。

「さ、準備しましょうか。ハルトくんのスーツはこちらで用意しましたわ」

言った姫島先輩の手にはいつの間にか黒のスーツが。

それを受け取り、部屋に残ろうとする二人を（特に姫島先輩）追い出して着替え始める。

むう、ネクタイは自分で結ぶ奴か………中学は金具で止めるやつだったから、絞め方が解らないや。

「あの〜」

とりあえずネクタイ以外の着替えを済ませて、部屋からでる。

「ネクタイってどうやって絞めるんですか？」

「あらあら、私にまかせて」

尋ねると、姫島先輩は僕からネクタイを受け取り、結び始める。

「あれ？先輩、小猫ちゃんは？」

「御手洗いですわ」

………そういえば、この二人どうやって家に入ったんだろう？

いや、うちの親の事だから、何回か面識のある姫島先輩なら通すだろうけど、小猫ちゃんは………。

そんな疑問を持ったとき、下の会から声が聞こえてくる。

——いやあ、まさかハルにあんな可愛い彼女が二人もいるなんてな。

——そうねえ。でもあなた？ 日本は一夫一妻制よ？

——む、それは困ったな。ま、なんとかなるだろ！ はははは！

——そうね、ふふふっ。

——ハルトは考えるのを止めた。

ダメだあの親！ 早くなんとかしないと！

「うふふ、できましたわ」

「あつくと、僕のネクタイを結び終わった姫島先輩が、なんだか上機嫌で笑っていた。あの、どうしたんですか？」

「うふふふふ、男の人のネクタイを結ぶなんて、まるで夫婦見たいじゃないですか」

「ぶふっ!?! ふ、ふう……っ!?!」

いきなり何を言い出すんだこの人は！

「あら、私ってかなりの優良物件だと思うのですが？ こう見えて、料理裁縫掃除は得意ですよ?」

「いや、それは割りと見た目通りでお似合いですけども！」
と、そこで僕は後ろから気配を感じた。

……………、これは……………殺気!?

「…朱乃先輩、こんなことしてる場合じゃないです。早く行きましょう。ばかハルト」
怒りを声に滲ませながら、小猫ちゃんが僕らを促す。最後になぜか怒られたけど。

部屋の中で姫島先輩が書いた魔方陣の上に乗って、光に包まれ始めた時、隣からポツリと、言葉が聞こえた。

「私だって、料理できるもん」

「え、なんて?」

あんまりにも小さすぎて、何を言ってるかまでは聞き取れなかったけど。
そしてなぜか拗ねられた。ごめん。

そうそう、冥界に行くのにグレモリー家御用達の、というかグレモリー家所有の電車に乗ったんだけど、なんか凄かった。

言葉にできないくらいに凄かった。

だって！ 窓から見える次元の狭間って所に、とつても大きな赤いドラゴンが見えたんだもん！

これが冥界では普通なのかなって思ったけど、皆驚いてたから、結構珍しい光景ではあるんだね。

確か、グレモリー先輩が言うには、最強のドラゴンなんだって。

名前は確か………あ、アポ………アポなんとかドラゴンだつてさ！

そのドラゴンがこつちを見たときは皆ビックリしてた。

その時、気のせいかも知れないけど僕、あのドラゴンと目が合った気がしたんだ。だから手を降つてみたら、なんか驚いたように見えたんだけど………ま、気のせいだよ
ね。

カツコ良かったなあ。また見たいなあ。



ハルトが目を覚ました。

最初、メデイカルルームに運ばれてきた彼は傷だらけで、私たちの誰よりもボロボロだった。

それも当然で、私や祐斗先輩が一撃でやられた攻撃を何度もその小さな体を受けて、それでなおかつ、あんなまさに力の激流と呼ぶべき光の翼を使ったんだ。無事な訳がない。

でも、目覚めた。

それだけでも嬉しかったのに、

「ハ、ねハ？」

目覚めてすぐに、私の名前を呼んだ。

いつも見たいな『小猫ちゃん』ではなく、かつてのように『小猫』と。

しかも、それに加えて、彼はあろうことか私の腕を取り、引き倒し、抱き締めたのだ。それはまるで、かつて私がこの飼ひ猫だったときに、彼がよくやっていた事。

彼はいつも、私を抱き締めて眠っていた。

最初は苦しかったけど、彼の温もりが心地よくて、いつの間にか私もそれが好きになっていた。

けどそれは猫の時の話。

今のこの姿でいきなりそんなことをされたら、当然というかなんというか、私は硬直してしまった。

彼の体温を感じるだけで顔は熱くなるし、鼓動を聞くだけで心臓は高鳴るし、寝息を聞くと、尻尾や耳が出そうになる。

そして頭を撫でられると、ちよつとここでは表現するのが憚られる大事な部分が大変なことになりかける。

卑怯だ、こんなの。

しかも、私の事、可愛いって。

もう一回言おう。

卑怯だ、こんなの。

それなのに、ハルトは朱乃先輩にデレデレするし……………私だって家事くらいちゃん
とできるんだからね！ ばかハルト。

それにしても、どうしてあのドラゴン、アボカリユプス・ドラゴン【真なる赤龍神帝】は、あの場所に現れたのだ
ろうか？

何となくだけど、なにかを探しているような感じだった。

しかも、ハルトが無邪気に手を降ると、なんだか驚いたように動きを止めた。

もしかして……………グレートレッドは、ハルトを見ていた？

でも、
なんで？

第40話

「お集まりの皆様！ 本日はこの私ライザー・フェニックスと、この度我が妻となるリアス・グレモリーの式にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます」

舞台の上で、正装をしたライザーさんが仰々しくお辞儀をする。

「些か性急すぎる事ではありましたが、これから私たちは晴れて夫婦となります」

その表情は、なんだか勝ち誇ったような物で、幸せよりも優越感に浸っているような顔で。

「これからはこの冥界の為に、純血な悪魔の為に一層、愛を深めて行きたいと思いません」

嘘つけ。心の底から誰かを愛したこともないくせに。

「それでは、ご紹介いたしましたでしょう！ 我が妻となる、リアス・グレモリーです！」

ライザーさんの呼び掛けで、舞台の下手側から出てきたのは、赤いドレスを身に纏い、髪をアップに纏め上げた、美しい花嫁装束のグレモリー先輩。

『……………ぎりっ』

誰かの歯軋りする音が聞こえた。

それはもしかしたら僕だったのかもしれないし、眷属の誰か、あるいは皆かもしれない。

悔しい。あの先輩が、あのグレモリー先輩が、あんなやつの花嫁衣装を着ていることが。

いつも堂々として、皆の主であろうとするあの先輩が、あんな悲しそうな顔で俯いているんだ。

悔しくない訳がない。

拳を作り、きつく握りしめる僕の服の袖を、小猫ちゃんが摘まむ。

「…ハルト、落ち着いて」

「うん、大丈夫。僕は落ち着いてるよ」

「…でも」

「信じてるから」

「…え？」

「きつと、ヒーローは来てくれるってさ」

そうだ、僕は信じてる。

だってあの人は、自分がやるって決めたことを諦めない人だから。

それに、耳を澄ますとほら、聞こえてくる。

「部長オオオオオツ!!」

この状況をぶち壊してくれる、ヒーローの足音が。



「ましてー!」

ドアを蹴破つて会場に乱入した俺の後ろから、近衛らしき兵隊の一人が槍を振りかざして取り押さえようと飛びかかってくる。

しかし、それは叶わない物となる。

なぜなら振りかざした槍は碎け、その瞬間を小猫ちゃんが吹き飛ばす。

振り向いた先には、神機を銃にして構えるハルの姿が、そこにはあった。

「…遅いです」

「でも、ナイスタイミングだね、イツセイ兄ちゃん」

「へっ、どつちだよ」

しかしハルのやつ、あの一瞬でこの人垣の向こうから狙い撃ったのか……………すげえ。

「イツセーくん、ここは僕らに任せて！」

「早くリアスのところへ！」

周りの兵隊を押さえるように、皆が俺の周りに立つ。

俺はそれに、領き、部長の下まで駆け出す。周りの悪魔達は突然の事でパニックっているのか、俺を止めようとはしない。

「ぎ、貴様ッ！」

ライザーがひきつった表情で俺を指差す。

「いいか、この焼き鳥野郎！ 部長の、リアス・グレモリーさまの処女は、俺のもんだ！」
言った、言つてやった！

たとえ勢いに任せたものとはいえ、これでもう後には引き返せない。

「ら、ライザー殿、これは一体……………」

その場にいた関係者の一人が狼狽えた様子でライザーに話しかける。

しかし、それに答えたのはライザーでは無かった。

「ああ、驚かせてしまつて済まない。私が用意した余興ですよ」

「魔王さま!？」

問いかけた悪魔の男性が驚いた声を出す。

そうか、この人が魔王サーゼスク・ルシファーマ………部長のお兄さんか。

「あの時見れなかったドラゴンの力が見たくて、ついつい呼んでしまったよ」

「ルシファーマさま! いくら魔王さまでも、そのような勝手は………!」

ライザーが少し控えめに、けど憤慨した様子で魔王さまに食って掛かる。

「良いではないか、ライザーくん。先日の戦い、私も見させてもらったが、あれはなかなか楽しめたよ」

「それならば何故!」

「ただし、それは彼のことだ」

「彼?」

「この場で唯一の人間であり、あの場で最も活躍した少年」

それって、ハルの事か? ハルのやつ、魔王さまに目を掛けられるなんて裏山………じゃない! あいつ魔王に目え付けられたら死ぬぞ?! 多分!!

「つまり私が言いたいのは、今度はしっかりと見たいのだよ。不死鳥フェニックスとドラゴンの、全力の戦いが」

「……………それは、あの時俺にボロボロにされたこいつが、全力を出していなかったと

？」

「いや、きつと全力は出したのだろう。けれど彼は、全霊覚悟までは出していないように見られたのでね」

何も考えずに乗り込んだけど、なんだかトントン拍子で話が進んでいく……………俺を残して。

え？ つまりなに？ これもしかしたらリベンジマッチなパーティーン？

「と言うわけで兵藤一誠くん、ライザーくん、私と、そしてこの会場の人達のために、もう一度戦ってくれるかな？」

……………ッ！

その言葉を、待ってました！

「いいでしょう、わかりました。魔王さまがそこまで仰られるのなら、このライザー・フェニックス。全身全霊、全力でご期待に答えられる炎の宴をお見せしましょう！ いいな、小僧！」

「おう！ 望むところだ！ 今度こそぶっ飛ばしてやる！」

俺たちが互いににらみ合い、啖呵を切ったところで、魔王さまが俺に声をかける。

「兵藤一誠くん、もしも君が勝てた場合、対価は何がいい？」

「サーゼスクさま!？」

「なぜこのような輩に!？」

周囲の悪魔から批判の声が上がるが、魔王さまはそれを片手で抑える。

「彼も悪魔なのだから、頼み事をする以上、こちらも対価を支払うのが道理でしょう。さて、何が欲しいのかな、君は」

俺が欲しいもの? そんなもん決まってるあ。

「俺は部長が、リアス・グレモリーさまが欲しいです」

真つ直ぐと目を見て、臆すること無く、恥じること無く、堂々と言い切る。

「俺たちの部長を、返してください」

その言葉に、周囲が大きくどよめく。

少し視線をずらして、魔王さまの奥にいる部長をみれば、彼女は手袋に覆われた手で口許を押さえ、目には涙が光っていた。

「良いだろう。君が勝てれば、連れていくといい。それで構わないかい? ライザーくん」

「ええ、もしも勝てれば、の話ですがね」

言ったなこの野郎。その言葉、撤回なんかさせねえからな!



「出来ることなら、神結ハルトも戦わせたかったな……………などとお考え
ではありませんか？ ルシファーさま」

「たははは、顔に出ていたかな？ グレイファイア」

「いえ……………あなたの事などお見通し、と言うだけです」

「おお、それは怖い」

「それで、なぜあのような事を？ お嬢様のご結婚が嫌だからって、いくらなんでもあれ
は……………」

「違うよ、グレイファイア」

「え？」

「確かにリーアのこんな結婚は、できれば破棄してほしかったし、丁度都合よくあの子を
慕う私の強い子もいたから使わせて貰ったけど、本当はそれだけじゃないんだよ」

首を傾げ訝しめな彼女の視線を受けながら、僕はモニターを見る。

モニターの前、最前列にはリーアの眷属と神結ハルトが、モニターの向こうには、兵

藤一誠くんとライザー・フェニックスくんが対峙している。

「僕はね、知りたかったんだ。悪魔と天使と墮天使の戦線を壊滅させた、それこそ世界を崩壊させうる力を持った彼の、覚悟つてものを」

理由を述べると、彼女は理解したのか頷き、そして呆れたのかため息をついた。

「全く、あなたのその探求心にはいつも困った物です」

「とかいって、実は君も楽しみなんだろう？」

茶化しを入れて訪ねると、彼女は無言でそっぽを向いてしまう。

そして、それこそがこの問いへの答えである。

「ははは、全くもって、僕らは似た者夫婦だよ、グレイフィア」

「……………もうすぐ始まります。お静かに」

そう、どこか懽然とした表情で言ったその頬が朱に染まっているのを見れたのは、僕の役得だと思うね。

第41話

「小僧、本当に俺に勝てると思ってるのか？」

「んなもん、やってみなきゃわかんねえよ！」

巨大な闘技場の真ん中、俺とライザーは十メートルほどの距離を開けて対峙する。

「はっ、あの時まさに文字通り、手も足も出せなかつたお前がかな？ 笑わせる」

「うるせえ！ 行くぞ！」

走り出すと同時に、籠手が赤く輝く。

実戦で使い続けて、ようやく使い方がわかってきたぜ。

「血の力！ 【鼓舞】！」

『Bloody Booster!! The Encourage!!』

『Blood Arts Operation!!』

「喰らいやがれ！ 【ドラゴン・ショット】オ！」

「ふん、下らん！」

俺の放った魔力を、ライザーはこの間のように左腕のみで弾こうとする。

だが、

「なに!？」

「っしー!」

ライザーはそれを弾くことができず、左腕が消し飛んだ。

「もういつちよー!」

「(威力が上がっているだ?!)」

——小賢しい!

フエニツクス・プロテクション
【不死鳥の防翼】!」

ライザーから放射状に放たれた炎が、俺の魔力と競り合う。

だが、魔力面では俺は圧倒的に劣っているため、あの競り合いも長くは持たないだろう。

ならばどうする?

決まってる。

「真正面から、ぶん殴る!」

魔力の衝突で、今は俺もアイツも、互いの姿を見ることは出来ない。

「おおおおお!!!」

雄叫びを上げて、俺は魔力の中に飛び込む。

ヤツは強い。俺よりも遥かに強い。

実力で劣っている。

経験で劣っている。

才能で劣っている。

家柄で劣っている。

でも、

「これは、これだけは、劣負つていたくねえ！」

この挑戦が、この行動が、例えどれだけ無謀で、無茶で、愚かな事だとしても！

「覚悟だけは………この覚悟想だけは!!!」

叫びと共に力強く踏み込み、体を焼かれながら炎を突き抜ける。

「中から!？」

「吼えろ龍帝! 【破撃ノ拳打・龍】」

「ちっ!？」

赤い龍の光を纏った左拳を降り下ろすが、咄嗟の判断でバックステップを行ったライザーには届かず、地面に当たる。

直後、殴った部分を起点に、辺りが砕け陥没する。

「身の程を、弁えろ!？」

地面を砕いたことで俺に生まれた隙を逃さず、ライザーが顔面に回し蹴りを叩き込ん

でくる。

「がっ!？」

【不死鳥の息吹】！

吹っ飛んで壁に叩き付けられ、そこに炎が追撃で打ち込まれる。

「ああああああ!!」

骨の髄まで焼き付くしてしまいそうな業火の灼熱が俺を襲い、包み込む。

『イツセー!!』

モニターで見ている部長の悲鳴が聞こえる。

「ぶ、ちょ……………」

体から煙を上げながら、弱々しく呻き声を名前を呼ぶ。

大丈夫です。

今度こそ、俺が貴女を救いますから……………ツ!

「お、おとお……………」

痛みに震え、力の入らない体を叱咤し、無理やり立ち上がる。

「……………ぶ、長、俺は」

「ほう、まだ立ち上がるか」

「俺は……………勝ちます。勝って、貴女を取り戻します」

俺のその言葉に、ライザーの眉がピクリと反応する。

「俺には、何もありません。」

実力も、経験も、才能も、誇れるものも、何も。

でも、これだけは譲れないんです。この想いだけは、何があっても！」
恋心なのか、憧れなのか、俺にはわからない。

これは押し付けだ。俺の理想の押し付けなんだ。

だけど、あの人には、俺の王には常に、

「笑ってて、欲しいんです。泣いて欲しくないんです。部長には、威風堂々と、笑顔でいて欲しいんです……………」

あの人の笑顔を見るだけで俺は元気になる。強くなれる。努力できる。

「貴女の笑顔を守るためなら、俺は……………兵藤一誠はッ!! 例え神様だろうと、ぶっ飛ばして見せる！」

俺の唯一つの武器^拳で、想いで!!」

——覚悟は決まったか? 相棒。



『俺の唯一の拳で、想いで!!』

モニターの向こう。闘技場の中で、イツセーが声高に叫ぶ。

私に笑っていて欲しいって。私を救うって。

そのために、何もかもで自分に勝る存在と戦っている。

どんなに痛め付けられても、どんなに力の差を見せつけられても、彼は諦めようとし
ない。

どうして、そんなに一生懸命でいられるの？

どうして、そんなに真っ直ぐでいられるの？

私にはできなかった。皆がやられて、イツセーまでボロボロにされて、私の心は屈し
た。だからこうして、諦めていたのに。

なのに、彼のその姿は、屈した私の心に火を灯す。

「グレモリー先輩」

不意に、横から声がかけられる。

「イツセー兄ちゃんを、信じて下さい」

「え？」

「イツセー兄ちゃんは、自分がやるって決めた事と約束は、何があろうとも決して諦めな

「いんです。やり遂げるんです」

声の主——ハルトは、私を真っ直ぐに見つめ、そう語る。

「だから、グレモリー先輩……いや、キング【王】は、何があっても信じて下さい。

それが、あの人の強さに、引いては貴女の力になるのですから」

彼を、信じる……か。

「ええ、そうね。信じるわ、私のイツセー【兵士】を」

『俺の左腕なんかくれてやる！ 持っていけ！ その代わり、俺に力を寄越せ、

セイクリッド・ギア 神器 アアアア!!』

『Welsh Dragon over Booster!! and Bloody

Reinforce!!』

イツセーの掛け声と共に、セイクリッド・ギア 神器から眩い赤が溢れ出した。

「あれは!？」

「……………まさか、バランスフレイク 禁手化?」

後ろから、そんな会話が聞こえてくる。

この土壇場で、この短期間で、イツセー……………あなたは……………。

『十秒だ! 十秒でてめえをぶつ飛ばす!』

『抜かせ小僧! そんな未完成なバランスフレイク禁手化で何ができる!』

『少なくとも、さつきよりは戦える！』

体はボロボロ。体力ももうほとんど残っていないのだろう。

それでも彼は立ち上がる。ハルトが言ったように、自ら定めた目標に手を届かせる為に。

「イツセー……………聞こえる？」

だから私は、呼び掛ける。

画面の向こうで、もがき、あがき、命を懸けて戦っている彼に。

私の、【最高の下僕】に。

胸が高鳴る。

心臓が激しく脈打つ。

血の流れが早くなる。

それらすべてが、私に力をくれる。

「私は信じているわ。あなたが、今度こそ私を守ってくれるって。だからねイツセー……………」

——勝ちなさい！ 絶対に！」

『はい！ 部長！』

届いた。

私の声が、願いが……………想いが。

彼のもとに、彼の心に、届いた。

『』

その時だった。

私の中で、何かが目覚める音がしたような気がした。

「リーア……………その、光は？」

「イツセー様と、同じ光？」

「え？」

お兄さまとグレイファイアが、少し困惑したような雰囲気、私を見ている。

言われて、自分の体を見てれば、

「この、光は……………」

赤い光。

血のように鮮やかな赤い光。

イツセーやハルトと、同じ色。

「ハルト、これって！」

すぐさま振り向いて、そこにいる少年に顔を向ける。

すると、その少年は笑っていた。

満面の笑みで、喜びを表していた。

「はい。今、グレモリー先輩の「血の力」が、目覚めました」

「これが……………」

この感覚が、血の力。

体の底から溢れてくる、想いの力。絆の力。

「さあ、グレモリー先輩。貴女のその血を、イツセー兄ちゃんに」

「ええ」

わかる。この力で何ができるのか、そして、この力の名前が、脳裏に浮かんでくる。

「私は王よ。みんなの主。だから私が支えるの！ みんなの標となって、灯火となって

！

辛いのなら『支』えるわ！ 皆に、私の力を『配』つてあげる！」

そう。これは私の在り方が顕現した力。

皆のための、私のための力。

「血の力【支配】！ さあ、征ゆきなさい、イツセー！」



『血の力【支配】！』

ドクン。

1拍だけ、心臓が高鳴る音がした。

同時に、温かく優しい力が、俺の体内を満たしていく。

「これが、部長の……………」

【支配】の力。

その言葉のような、傲慢な物ではない。皆のたれを想った優しい力。

「へへ、部長にびったりだ」

カツカツだった魔力が満たされていく。

——力を『配』るって、そういう意味か。

上級悪魔の家系の、純血故の莫大な魔力量。

それが、戦闘における消滅以外の部長の強さだった。

その魔力を俺たち下僕に配っているのか。

「なるほど……………行くぜ！」

——喜べ、相棒。この魔力のお陰で、もう十秒ほど、時間が延びるぞ。

そいつはありがてえ!!

「決着だ、ライザああああ!!」

「よかろう！ 兵藤一誠！ 引導を渡してやる！」

俺もライザーも、同時に動き出す。

けど、空中戦は、飛びなれていない俺では不利だ。

「だから速く！ 誰も追いつけない速度で！ それこそ、木場の^{ナイト}ように！」

『Blood Arts Operation!!』

「疾く駆けろ！【翔天龍】！」

『Maximum Jet!!』

背中のスラスターから勢いよく魔力の光が吹き出される。

「部長の魔力だけど、出し惜しみは無しだ、ドライブ！」

—— 応ッ!!

「速い!! これ^{バランスブレイカー}が禁 手の力だと言うのか!？」

「余所見してる暇は無いぜ！」

『Blood Arts Operation!!』

俺も認識しきれないような速度で、ライザーよりも高度から、俺は加速する。

イメージはあの蹴りだ。

あの特撮の、必殺技。

【破撃ノ蹴打・竜】!!」

突き出した右足を赤い竜の光が纏い、そして全身を覆う。

その姿はまるで、赤い隕石のようだったと、後に皆が言っていた。

「なに!? ……………ぐうつ!!」

驚いたことに、ライザーはこの蹴りを両腕を犠牲にして受け止める。

「舐めるなあああああ!!」
【不死鳥フェニックスの羽撃き】!!」

巨大な炎の翼が広がり、俺の勢いが削がれる。

「おおおおおおおお!!」

俺とライザーの雄叫びが重なる。

「負けられねえんだよ! お前には!」

「それは、俺とて同じことだ! 兵藤一誠!」

「部長を守るために!」

「種の誇りの為に！」

「負けられない!!」

叫ぶと同時に、互いの技の発動時間が切れ、共に地に落ちる。

「……………認めよう、兵藤一誠。お前は強い。ああ、強いとも！」

立ち上がりながら、ライザーがそう言う。

「……………」

「だがな、お前が今やろうとしていることは、ともすればこの会場にいる方々を、敵に回すようなものだ！」

「……………それでも尚、リアスを欲するか？」

「当たり前だ！」

即答すると同時に、時間切れとなり鎧が解かれる。

「俺はバカだし、悪魔になって日も浅いから、そんな小難しいこととか、純血の重要性なんか、これっぽっちも解りやしねえ」

「だけど、

「だけど！ あの時、部長が泣いていた！俺の主が、泣いていたッ！ その涙を拭うた

めなら、その笑顔を守るためなら、何を敵に回すことになろうとも構わないッ！」

それが、その覚悟が、

「ようやく見つけた、俺の道標歩みたい道なんだ！」

俺には何もなかった！ 夢も、目標も、歩みたい道も！

だけど部長にであって、皆とであって、ようやく見つけたんだ！ 俺の道を！」

だからこそ、

「俺がお前をぶっ飛ばす理由は、そんな俺の我儘だ。

でも、それでも！ 俺は自分の願いを、諦めたりなんかしたくねえんだよ！」

叫ぶ。

有らん限りの、残された力を振り絞って。

あと一発だ。あと一発殴ればそれでいい。

その一発に、持てる全てを注ぎ込むから。

——ハハハハッ！

いいぞ相棒！

赤龍帝俺達はそうでなくてはな。自らの望むま

まに、我儘に、傲慢に、誇り高く。

——相棒、お前は正しく赤龍帝さ。だから受けとれ、取って置きだ。

『Blood Arts Operation!!』

「そうか、これが……………」

——一撃だ。一撃で決めろ。

「わかつてる。轟け赤龍帝！」

駆け出すと同時に、両手両足に赤い光が纏われる。

「鎧がなくとも、正面から来るか。その意気やよし。ならば俺も、全力で振じ伏せてやろ

う！」

ウエルシュ・フイニツシュ
「**【赤天竜破咬崩】!!**」

フエニツクス・エンド
「**【不死鳥の炎武】!!**」

向こうの最大火力の一撃と、こっちの全身全霊の一撃。

ぶつかり合い、拮抗したのは一瞬だった。

「バカな!?!」

「龍の炎は、もっと熱いんだよ! ライザー・フエニツクス 不死鳥!!」

俺の拳は、炎を突き破り、ライザーの腹に深々と突き刺さった。

「が、ふ……………」

血反吐を吐きながらライザーは前のめりに倒れ伏した。

「俺の、勝ちだ、ライザー!!」

それを見届けた俺は、高らかに拳を上げて勝利宣言をするのだった。

第4 2 話

イツセー兄ちゃんがトドメの一撃を入れ、ライザーさんが倒れると、会場には沈黙が訪れた。

沈黙する悪魔の人達の殆どはその顔に驚きを浮かべていたけれど、僕たちオカ研メンバーはむしろ誇らしげな表情をしていたと思う。

「部長、帰りましょう」

沈黙した空気の中、戻って来たイツセー兄ちゃんが、ボロボロの笑顔でグレモリー先輩に右手を伸ばす。

「……………つ、イツセー！」

途端、涙を堪えきれなくなつたグレモリー先輩は、イツセー兄ちゃんに抱きついて、その胸に顔を埋める。

それを見た僕らオカ研メンバーが苦笑いを浮かべて顔を見合わせると、後ろから拍手が鳴り響く。

「はははは！ 素晴らしかったよ、兵藤一誠くん。まるでお伽噺のお姫様と騎士のよう

だった」

そこにいたのは、グレモリー先輩と同じ紅髪の男の人。グレモリー先輩のお兄さんだ。

グレモリー先輩のお兄さん、ルシファーさん……さま、の方が良いのかなあ……とありえず、ルシファーさんを見たイツセー兄ちゃんは、直ぐに頭を下げた。

「魔王さま！ 勝手な真似をして申し訳ありませんでした。でも、この人は連れて帰ります！」

「ああ、もちろんだとも。それが君との約束だからね。それに謝る必要はない。君を呼んだのは私だからね」

「でも……」

「君がここに来るために使った魔方陣、いったい誰が作ったと思ってるんだい？」

そういつて笑ったルシファーさんの顔は、悪戯に成功した子供の様だった。

「ほら、早く行きたまえ。お姫様を助けたのならとつと立ち去る。それが物語の終わり方だろう？」

「は、はい！……つて、どうやってですか？」

「………仕方ない、これを貸してやろう」

ルシファーさんが手をかざすと魔方陣が表れ、その魔方陣から、なにか生き物が出て

きた。

「グリフォン……」

会場の誰かからそんな言葉が聞こえる。

兄ちゃんと先輩がその上に乗ると、グリフォンは羽ばたきを始め、宙に舞い上がる。「先に部室で待つてるからな!!」

兄ちゃんのその言葉に、僕たちは笑顔で見送るのだった。



イツセー兄ちゃん達を見送ったあとは特にする事もなく、僕らは帰る支度を始めていた。

いや、だって今回の主役であるはずのライザーさんは伸びてるわ、グレモリー先輩は
いないわで、事実やる事が無いんだよね。

本来なら叱られても可笑しくない僕らだけど、そこは魔王さまのお達しということで責められることも無い。

精々が、なんだか居心地が悪くてそそくさと帰るくらいかな。

「……………なんで皆そんなに堂々としてるのさ？　僕はさつきから居心地が悪くてたまらないんだけど。」

あと、これで他の悪魔に話しかけられようものなら、一瞬で気絶する自信があるね。

……………今思えば、きっとこれがフラグだったんだらう。

「少しいいかな？　神結ハルトくん」

ぼくに　はなしかけてきたのは　まおうさま　だった。

「……………きゆう」

「は、ハルトくん!？」

「う、迂闊でしたわ！　ただでさえ悪魔が苦手なハルトくんが魔王さまに会ったらこうなることは予想できて今したのに!？」

「で、でもさつきまでは……………」

「……きつと、緊張が解けたせいで………」

曰く、相当な大騒ぎだったらしい。

なんせあの姫島先輩すらもが慌てふためいたというのだから。

「……………えつと、僕なにかしたかな？」

「いえ、ご心配無用ですわ、魔王さま。彼は少々人見知りなので」

「ひ、人見知りで気絶するのかい？」

「そ、それで魔王さま？ ハルトくんになにかご用がおありで？」

「ああ、それなんだけど、彼が目を覚ましたらこれを渡してくれないかな？」

「これは……………」



「それで渡されたのが、このチョーカーですか？」

「そうだよ。それと、魔王さまから君に伝言」

「伝言？」

電車の中で木場先輩から渡されたチョーカーを首に着けようと格闘しながら、僕は先輩に目を向ける。

「んん、……『この間のゲームは楽しませて貰ったよ。これはそのささやかなお礼だ、受け取ってくれると嬉しい。そのチョーカーには我々悪魔と同じ能力、つまり、言語同時通訳機能が備わっている』………だつて」

「同時通訳………つて、それまさか、これをつけてる限り僕、世界中の人とお話できるつてこと?」

「そう言うことだね」

なにその未来こんにやくに付与されてそんな機能。すこぶる便利。

それにしても………

「ほつ、やつ………あれ? 着かない………こうかな? つだだだだ!! 皮挟まった!!」

なにこれ、すごい着けにくいんだけど。

さつきからこんな調子で苦戦しまくり。チョーカーつてこんな着けづらいもんなの?」

「…貸してハルト。着けてあげる」

「ありがとう、小猫ちゃん」

「…よし、着いた」

カチリ、と小さな金属音がなり、小猫ちゃんの満足げな声が聞こえてくる。

首にそつと手を触れてみると、布の帯が首についていて、後ろの金具でびつたりとくつついている。

「ど、どう？ 似合うかな？」

「「……………」」

同じ車両に乗っている小猫ちゃん、姫島先輩、木場先輩に訪ねてみると、三人とも固まったように沈黙する。

「え、えつと？」

「「……………」か、かわいい」

「ほえ？」

「…魔王さま、ぐっじよぶー！」

「こ、これは凄まじい威力ですわね……………」

「元々子犬っぽかったけど、チョーカーが加わることでより一層……………」

……………あ、鼻血が」

木場先輩の言葉に身の危険を感じたのは僕だけではないと信じたい。

《おのれ魔王、我らが主に首輪など着けおつて……………》

《これではまるで、主君が魔王に飼われているようではないですか!》

《首輪……緊縛……じゅるり……………ハッ!? おのれ木場祐斗!》

三人とも落ち着いて! それとサリエルはいつたどこを指して突っ走ってるの!
!?

《しかしまあ、よく似合っておるぞ、主よ!》

《ええ、本当に》

《もういつそのこと、妾達で監禁したいくらい》

ねえもう誰かサリエルを止めて! ちよつと今の本気で身の危険を感じたよ!? サリエルの目に光が灯つてないし!

《安心せい、主よ。いざという時は我が輩がついておる》

……………本当?

《う、うむ! 主の笑顔の為ならばそれくらい——》

だったらさ、

《うん?》

「この先輩どうかして! 鼻血出して貧血起こしてるんだけど!」

そうなのだ。とうとう鼻血を堪えきれなくなった木場が、滝のようにそれを流し、たった今血の海に沈んでいる。

《《《そのまま死んでしまえばいい》》》

どうしてこうなった。いくらなんでも急展開過ぎる。

「つ、ついに抑えきれなくなりましたわね、彼」

「…はい。早くハルトを引き離して、祐斗先輩を隔離しましょう」

と、二人がこんな会話をしているなか、血の海に沈んだ木場先輩が動き出す。

いろんな意味で怖いです。

「だ、大丈夫です………ちゃんと、世間体と言うものは、知ってます、から………」

「いやその状態で世間体って言われても………」

時既に時間切れ感が半端ないです。

『姫島朱乃さま、木場祐斗さま、塔城小猫さま、神結ハルトさま。もうまもなく駒王町に到着いたします。お忘れ物の無いようにご注意下さい』

と、そんなアナウンスが流れ、列車の速度が心なしか落ちていく。

「…安心して眠って下さい、木場ホモ先輩」

小猫ちゃん、なんて辛辣な子!!

そして、未だ血の海に沈む木場先輩は列車の中に放置されたまま、僕らは、と言うか二人は僕を引きずって列車から降りるのであった。

………ちなみに、部室に戻ったらグレモリー先輩とイツセー兄ちゃんがイチヤイチャしてて、なんか腹がたつたからアーシアさんと呼んで意図的に修羅場を作り上げたのはここだけの話。

爆ぜろリア充。ペっ!

でも、グレモリー先輩が戻ってきてよかった。これでまた明日からいつも通りだね!

部室から見上げた空には、満月から少し欠けた、半月よりも膨らみのある月が煌々と夜の町を照らしていた。

……その月に爽やかかスマイルを浮かべた木場先輩が見えたのは、きっと僕だけのはずだ。

あの人は……うん、多分もう手遅れなんだろうね。強く生きて、木場先輩。

閑話2

猫と少年の休日 その1

フェニックス、グレモリー両家のお家騒動から数日が経ったある日の土曜日、僕は駅前で人と待ち合わせをしていた。

相手は小猫ちゃん。理由は前々から約束していた、「二人でのおでかけ」だ。

そしてそれが、なぜ今日だというと、事の始まりはそう、お母さんから頼まれたお使いだった。



「えーっと、頼まれてたのはこれで全部だね」

渡されたメモ帳を見ながら、買ったものにチェックをしていく。

「……………ん？」

ふと顔を上げると、視界にはデカデカと書かれた「駒王町商店街抽選会」の文字が。「抽選会？ ……あ、レシートと一緒に付いてきたあれか」

買い物袋から財布を取り出して、レシートと一緒に付いてきた抽選券を取り出す。数は三枚。

「まあ、当たらないだろうけど、ダメ元だよね」

そう誤魔化しつつ三回ガラガラを回す。え？ 正式名称？ 知らないよそんなの。やってみた結果。

一回目。白・ハズレ。ポケットティッシュ。

二回目。赤・六等賞。猫さんキーホルダー。

うん、ここまでは妥当だよ。

そして三回目。ここで奇跡が起こった。

出てきた玉の色を見たとき、最初は五等賞の黄色かと思った。ちなみに景品はタワシ。すごく要らない。

けど、雲の切れ間から差し込んだ日の光に、その玉はキラリと反射した。

抽選ブースの空気が固まる。ついでに僕も固まる。

そして、

「お、おめでとうございます！　いつとーしょー!!」

カランカランとベルが鳴らされ、周囲からはおおー、といった声も聞こえてくる。

そうして僕は、金色・一等賞。映画「司教と悪魔」のチケット二枚組を手に入れるのだった。

っていうか普通、一等賞っていったら旅行券じゃない？　って思ったけど、後日、商店街会長曰く「そんな金があったら自分で行くわ!」とのこと。

それでいいのか経営者。



そしてその次の日の学校で、

「ねえねえ小猫ちゃん。今度の土曜か日曜、暇?」

「…どうしたの?」

「いやね、この間一緒に出掛けようって話したでしょ？ だから二人で映画でもどうかなって」

そういつて僕が二枚の映画チケットを取り出すと、それを受け取った小猫ちゃんが固まる。

「小猫ちゃん？」

「…は、ハルト、この映画の内容、知ってる？」

「ううん？ 名前は聞いたことあるけど、さっぱり」

「…そ、そう」

なにやら顔が赤かったけど、どうしたんだろう。

「…〔司教と悪魔〕。悪魔の女に恋をした法王の息子と、法王の息子に恋をした悪魔の悲しいラブストーリー……これをハルトとかあ……あ、ヤバイ、顔ニヤける。どうしよう……つと、そうだ、忘れる所だった」

一人モジモジして、なにやらニヤニヤしながら顔を赤らめてた小猫ちゃんは、ふと何かを思い出したように自分の鞆をガサゴソ漁る。

「…土曜日なら丁度良かった。ハルト、これも行く？」

そう小猫ちゃんが出してきたのは……

—— ケーキレストラン「セラフオール」一日食べ放題券。

今度は僕が固まる番だった。

手に持った紙を凝視する。

食べ放題？ あ、「セラフオール」で？ この紙切れ一枚で？

駒王町名物、ケーキレストラン「セラフオール」

この町に住む存在なら誰もがその名前を知っているくらい有名なケーキレストランだ。

ケーキレストランと名の通り、その形態は他のケーキショップとは違い、基本的にテイクアウトはできず、店内オンリー。

そんな、本来なら誰もが面倒臭がる形態ながら、駒王町名物とまで言われる由縁は、ズバリその質と量だ。

単純な種類も去ることながら、とある評論家……「神のタン」を持つとされる女の人、食べた瞬間服を脱がされたかのような美味しさと評し、その量は種類、質量共に大食い弓道美少女さえも満足させる量らしい。

そんなケーキレストランの唯一のネットクは、一言で表すのならば「値段」だ。

あの質量、味、種類となれば、それは当然この不景気、材料費がバカにならないらしく、相当抑えてなお、高校生には少々高い敷居となっている。

けれど今の僕は違う。

僕の手にはそんな敷居すらも打ち砕く宝具が握られている。ランクはA+。

あのセラフオールで食べ放題？

なにそのアヴァロン。まさに桃源郷、理想郷、酒池肉林のユートピア、アルカディア。

こんなにも僕を魅了するなんて……甘味は人類の至宝だ、財産だ。

人類皆甘いものを食べて戦争なんか無くしてしまえばいいんだ。

人類平和最高、甘味は至高。人類の業は深かったカルマ」

「……は、ハルト？ 大丈夫？」

おっと、どうやら無意識に声に出していたらしい。

「大丈夫大丈夫。別に嬉しさのあまり世界平和を願う望み叶えようなんて大それたことを考えてただけだから」

「……全く大丈夫じゃなかった！」

「それで、小猫ちゃんこれどうしたの？」

「…リアス部長から貰ったの。ハルトと一緒に行きなさいって」

「僕と？」

「…お礼だつて。ゲームとかこの間の事とか」

「別にお礼なんてしなくて良かったのに……………ま、行くけどさ」

むしろこれを渡されてキャンセルする方が解らないね。

「…ところでハルト」

「うん？ なに？」

「…朱乃さんは……………」

「姫島先輩がどうかしたの？」

「……………ううん、なんでもない」

「？」

「…じゃ、じゃあ土曜日の……………八時半に駅前集合ね」

「はい。ふふふ、楽しみだね！」

そんな感じで僕は予定を決めていったのだった。

……………朝の教室で。その日一日の視線が痛かったのは言うまでもないはず。



ポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、現在7時55分。
ここに来て10分が経過したことになる。

……………べ、別に楽しみすぎて早く起きて45分前行動したとか、そんなんじゃないんだからね！

なんてツンデレって見るけど、まあ、あれだよね。

「早く来すぎた。ぶっちゃけ暇過ぎる」

せめて本かなんか持つてくれば良かった。

ネット小説は……………更新されてないか……………かといって新しいのを探したとして、
今面白いのを見つけたら続きが気になってケーキや映画どころじゃ無くなりそうだし
……………ぐぬぬ……………。

と、そんな僕の肩を叩く感触が。

つられて振り向けば、

「…お待たせハルト。早いね?」

私服姿の小猫ちゃんの姿が。どうやら早く来たつもりが、自分が遅れていたことに気付いて少し困惑気味だ。

「ちよつと、楽しみすぎて……………にしても、可愛いね」

今の小猫ちゃんの服装は、上からベージュのキャスケット(猫冠バッチ付)、白いフリルの付いた肩出しのトップス、デニムのホットパンツにピンクと黒の横縞が入ったニースックス。そして脛の半ばまである茶色のブーツ。荷物はリュック。

まさにTHE・現代っ子なスタイル。

「…か、かわつ?! ……………ハルトも、カッコ…………可愛いね」

え? 僕の服装? そんなの教えたって誰に需要があるのさ。木場先輩? やだよ。

あ、そうじゃない? サービス? それなら……………ん? なに? メタい? そんなの僕の知ったことか。

僕は上から、チョーカー、シャツ、七分丈のズボンにスニーカー。特筆するところ無いと思うんだけどなあ。確かにシャツは女物だけどさ。

母曰く「胸元が開いててなんかエロくてイイね! フェロモン! フェロモンがバンバン出てるよ!」とのこと。あんたそれでも母親か。

「少し……っっていうか開店までまだあと一時間あるけど、どうしようか？」

セラフオールの開店時間は9時から。現在あれから5分が過ぎて8時ジャスト。

「……じゃあ、ゲーセン？」

「早速……けど、開いてる？」

「……ここはこの時間から開店だから」

「詳しいね？ 良く行くの？」

「……………」

あ、目逸らした。顔赤い。

「ふふふ、じゃあ行こうか」

本日のおでかけ、急遽入ったゲーセンも含めて、予定はこうなってる。

8時・ゲーセン。

9時・ケーキ食い倒れ。

13時30分・映画。

15時以降・シヨッピング。

シヨッピングは小猫ちゃんの要望。欲しいものがあるらしい。

「あ、そうだ小猫ちゃん。これあげる」

ふと思い付いて鞆から取り出したのは、この間の抽選会で手に入れた猫さんキーホルダー。

「…え？」

「いや、使わない僕が持つてもなんだし、それにこの猫、なんだか小猫ちゃんみたいだ
なつて。あ、要らなかつたら良いけど」

「貰う！」

うおう、ビックリした。

小猫ちゃんの大声つて割りとレアじゃないかな？ 心なしか、いつもの「…」すらも
無かつた気がする。

「それじゃ、行こうか」

「…うん。驚かせてごめんね？」

「あはは、むしろ珍しい小猫ちゃんが見れてラッキーだったかな」

「……………つ、ばか！」

「痛い痛い、脇腹つねらないで」

「…むー」

まあ、そんなに力入ってないからホントは痛くないんだけどね。

今日は楽しくなりそうだ。



そんな二人を、物陰から伺う人影が一つ。

「あらあら、うふふ。これは、リアスに連絡しなくては……………ふふふふ」

その人物は、一人いたずらっ子の笑みを浮かべるのだった。

猫と少年の休日 その2

駒王町駅ナカのゲームセンター。

そこに名を刻む、一人の伝説ゲーマーがいた。

登録名は『WhiteCat』

格闘、射撃、音楽等々、ありとあらゆるゲームで驚異的なハイスコアを叩きだし、コアなゲーマーからは神と崇められ、その姿を知る一部のゲーマーからは『女神さま』と崇め奉られる。悪魔だが。

ゲームに挑むその姿はまさに武神。射撃ゲームや格ゲー、パンチ力測定器でハイスコアを叩き出すその姿はまさに鬼神。しかしその容姿は花も恥じらう可憐な乙女。まさに天使。悪魔だが。

その『WhiteCat』の正体こそ、今僕の隣で鼻唄歌いながら楽しそうにゾンビを銃で薙ぎ倒していく少女である。

「あつれ!?　なんか思ってたのと違う!!　もつとこうさ、女の子らしくプリクラとかクレーンゲームに興じるかと思ったら!　さつきから殺伐としたゲームばかりだ!

しかも上手いし！」

使用する銃はスナイパーライフル。狙いは違わずヘッドショット。その白髪とも相まって、かのゴッドイータースナイパーを思い浮かべてしまう。胸部装甲は比べるべくもないが。

あ、でも、あの嘆きのh……………じゃなくて、防衛班の紅一点とは同じくらいかな？

「…なんか失礼な事を思っていない？」

「そ、そそそんなことないよ！……………あつ」

言い訳をするために目を離れたその一瞬の間に、僕のライフが一気にゼロへ。恐るべし、最終ラウンドのゾンビ。序盤のボスより強い雑兵って怖くない？

っていうか、

「この手のゲームにラストステージなんてあったのか……………」

「…ほら、時間はまだまだあるんだし、次いくよ」

「あ、うん」

ちなみに、僕が抜けても小猫ちゃんは危なげなくクリアしました。

僕がここまで食いつけた理由？ ぶっちゃけ後半ほとんど何もしてません……………つか出来てませんでした。アサルトライフルなのにスナイパーライフルよりも撃破数が少ないって、ある意味凄いなと思わない？

「ちよ、まつ、小猫ちゃんドライビングどんだけ上手いの!？」

「……ふうぶん」

次にやったのはレーシングゲーム。僕に合わせて一番難易度の低い奴んだけど、小猫ちゃんがちよつとヤバイ。なんかこう……一度もぶつからないどころか、減速してないんじゃない？ って疑うレベルのテクニク。

小猫ちゃん、すっごい楽しんでるなあ。



「はー、楽しかった」

小猫ちゃんには驚かされっぱなしだったけど。

つい、と不意に服の袖が引っ張られる。後ろを向くと、小猫ちゃんが上目遣いで僕を見上げてくる。

「……………ホントに楽しかった？　なんか私ばかり楽しんでたような……………」

「こんなことで嘘なんか吐かないよ。僕もゲーム好きだしね」

楽しそうな小猫ちゃんも見れたし。

そう言ったらまた脇腹を抓られた。解せぬ。

「…じゃあ、そろそろ行く?」

「その前に、小猫ちゃん、どっちが欲しい?」

小猫ちゃんにそう言っ僕が鞆から出したのは、黒猫と白猫のぬいぐるみ。

何を隠そう、これはさつき、ゲームで早々にリタイアしてしまったため、その暇な時間をクレインゲームで潰したのだけど、二つ同時に取れてしまったんだ。あれは奇跡だった。

ちなみに、一プレイ二百円で六百円を消費して取れました。

「…え? でも、今朝も貰ったし、なんか貰ってばかりなもの……………」

「いいのいいの。二つ持っても嵩張るだけだし、記念にと思ってさ」

「……そ、そういうことなら……………こっち」

彼女がとつたのは黒猫のぬいぐるみ。珍しいな。彼女なら白猫を取ると思ったんだけど。

「…じゃあ、行く?」

「——」

ぬいぐるみに口許を埋めて小さく首を傾げた彼女が可愛くって見とれてしまったのは僕だけの秘密。



「ふふふ……ふふふふー！」

「……ついに来た。この時が」

「さあ行こうか、小猫ちゃん」

「……うん、行くよ、ハルト」

僕たちの目の前には、僕たちのパライゾである『セラフオール』が。

その店先には神々しく、それでいて艶やかで鮮やかなケーキの見本が立ち並ぶ。

僕と小猫ちゃんのゴクリ、と無意識に溢れる唾液を嚙下する音が重なる。

僕らは顔を見合わせ、重々しく頷く。その表情はまさに戦場へ向かう戦士のそれであり、多分、ライザーさんとの試合の時よりも気合いが入っていたのかもしれない。

「いざ、僕達のエデンへ！」

そして僕たちは、楽園^{戦場}への一步を踏み出したのだった。



その日、ケーキレストラン『セラフオール』に、一つの伝説が打ち立てられた。

曰く、『一組の小柄なカップルが食べ放題の招待券を手を訪れ、そして、彼らの姿が見えなくなる程に山積みになされた種々のケーキを全て美味しそうに、それはもう幸せに満ちた顔で全て平らげ、さらには特製の特大ケーキ(5kg)すらも、クリームも残さず食いつくした』

と言うものだった。

いずれは都市伝説として真しやかに駒王町で囁かれるこの出来事が真実か否かは誰にもわからない。

ただ一つ言えることは……………

「はー、美味しかったねー、小猫ちゃん」

「…うん。でも、もう少し食べたかったな」

「確かにそうだけど、仕方ないよね、他のお客さんの分も残さなくちゃ」

「…そうだけど」

「まあまあ、また今度来ようよ」

「……二人で？」

「その方が良いならそうする？」

「…二人でがいい」

満足そうに、けれど少し物足りないと言った表情のカップルがその店から出てきたとき、後ろにいる店員たちが本当に申し訳なさそうに、それでもどこか安堵した表情で頭を下げている光景がお昼前の駒王町駅前の商店街で見られたという。

余談だが、その二人がケーキを食べるとき、その量から周囲の人間が見てるだけで胃もたれを起こし、さらにはバカツプル特有の甘々な空間を作り出し、二人で食べさせ合いつつこなどしたものだから、周囲の人間が胸焼けと砂糖吐きを起こしたのは、本当に余談である。

「映画までもう少し時間あるね」

「…お昼ご飯、どうする？」

「え!? まだ食べるの!？」

「…食べないの？」

「流石に無理ですごめんなさい」



楽しそうなハルトと小猫がケーキレストランから出てきたところを見ている人影が5つ。

そのうちのひとつが物陰から二人を見つめ、黒い笑みを浮かべる。

「あらあら、本当に楽しそうですね、うふふ」

「あのー、朱乃さん？ オレらが呼ばれた意味ってありますか？」

五人のうち、二人いる男性の一人が小さく手を上げて質問するが、答える声は無い。

「ハルトきゅんはあはあ……………おっと、鼻血が」

「あの、部長。木場が怖いです」

「大丈夫よ、イツセー。あなたとハルトは私が守って上げるわ……………ええ、絶対に」

「祐斗さん、大丈夫ですか？ 今治しますね？」

「ダメだアーシア！ このまま逝かせてやれ！」

「え？ あの、どう言うことでしよう？」

「あなたが理解しなくてもいいのよアーシア」

彼らは上手く隠れているつもりなのだろう。

だがしかし、考えて欲しい。

五人中、日本人に多い黒髪を持つのは二人。そのうちの一人は誰もが振り向く美女で、残りの三人も金髪二人に珍しい紅髪が一人、そしてその三人とも美男美女と来た。

正直言つて目立たない訳がない。

事実、すれ違う全ての人々が彼らを見つめ、その奇行に驚きの表情を浮かべている。

中には子供の目を隠す母親まで現れる始末。

それほど目立つ集団に、ハルトはともかく小猫が気づかない訳もなく。

かといってその二人は逃げることもせず、

「は、ハルの野郎が、小猫ちゃんと腕を組んで……………だどっ!？」

「ういふいふいふ……………」

「あうう、朱乃さんが怖いです、部長さん」

「あ、朱乃、落ち着きなさい。ね？」

「少し黙ってて、リアス」

「あっはい」

その集団を一言で表すとすればまさに……………カオスであった。

彼らのデートと尾行はまだまだ続く。

猫と少年の休日 その3

『うふふ、私を呼んだのは、貴方かしら?』

『いえ、人違いです』

『……………あれ?』



『君の名前を教えてください』

『……………嫌よ。つて言うか、そもそもあなた教会の人間でしょ? なんて悪魔わたしに構うのよ?』



『……………やっぱり、僕は君が好きみたいだ、エミリア』

『私は悪魔よ?』

『関係ないさ。心からの愛なら、主もきつと許してくれる』



『どうして? どうしてなのエドワード! どうしてあなたは悪魔である私を助けようとするの!?!』

『そんなの、僕が君を愛しているからに決まってるじゃないか! エミリア!』

『でも、私は悪魔なのよ!? 対してあなたは血の繋がりは無いとはいえ法王の息子なのよ!?!』

『それがどうしたというんだ!』

『あなたは教会側、私は悪魔! 相容れるはずが無いの!』

『それでも、僕は………っ!』



『法王さま………いえ、父上! 僕は、彼女と共に在りたいのです!』

『………それが、どれ程の業だとしてもか?』

『はい』

『そうか………ならば私は、貴様を異端とし、この教会より放逐する！』

『………はい』

『エドワードよ。私は、たとえ血の繋がりがなくとも、お前を息子として愛していた』

『僕もです。父上………いえ、法王さま』

『逃げるのならば、日本へ行きなさい。あそこは、世界でも類をみない多神教の国だ。たとえ悪魔と人間といえど、きつと祝言を挙げられるだろう………私たちが

カトリックでは、挙げてやれぬからな』

『父上………ありがとうございます』



『エドワード！ 嫌！ エドワード!!』

『エミリア………無事、かい？』

『ええ、ええ!』

『それは、よかった………』

『良くない！ 良くないわよ！ なんで私なんか庇うの？ 鉛弾なんか、私には効かな

いのにー!』

『ダメだよ、エミリア………枢機卿の弾丸には、十字が掘られて、聖の力が込められてる………君が触れれば、一瞬で消え去ってしまう………』



『エミリア………そこに、いるのかい?』

『ええ、いるわ』

『手を、握ってくれないかい? もう、目が見えないんだ………』

『エドワード………っ!』

『ねえ、エミリア』

『………なあに?』

『今度、生まれ変わったらさ、今度こそは、普通の人間か、悪魔として出逢ってさ、普通に恋をしてさ、そして、幸せになろうね………』

『ええ、もちろんよ! でも、それはまだ先なの! だから、そんなこと言わないで!

私はまだ、あなたに何の恩も返せてない! 悪魔なのに、貴方の願いを一つも叶えてない!』

『そんなこと無いよ……………君がいたから、僕は幸せだった。たとえ20年と少しの人生だったとしても、僕は君と出会うために、生まれて来たんだと思うんだ』

『たったの20年しか生きていないのに、何を言ってるの！ 貴方とであつてまだ……………まだ一年しか経っていないのよ!?!』



『ありがとう、エミリア。君と会えて、君を愛して、君に愛されて、僕は幸せだった……………ありがとう、エミリア……………』

『エドワード……………？ 嘘よね？ 冗談よね？ エドワード、目を開けて？ エドワード……………エドワードオー……………!!!』



『こんにちは、エド……………いえ、アシガミレイヤ葦神怜夜君。君にとっては初めましてになるのかな？』

『お姉さん、だあれ？』

『私はエミリア。100年も前から貴方人間の魂を愛してしまった、独りぼっちの愚かな悪

「これを泣かずに、何で泣くと言うんだ!!」

「…面白かった?」

「あれは歴史に残って然るべき名作だね」

「…そこまで!?!」

そりやもちろん。

さて、とここで……………。

「ねえねえ、小猫ちゃん、あれはなに?」

つい、と僕が指差した先には、

「うおおお……………エミリアのおっぱいでかかったあ……………ぐずつ」

「そうね、同じ紅髪で、なんだか親近感が……………ぐずつ……………イツセー、揉むなら私の揉みなさい」

「はううう、やはり教会側の人間でも、悪魔と恋をしてもいいんですね……………部長さんばっかりズルいです……………んずつ」

「ううつ、ずず、エドワード……………イイオトコだった」

「ハルトくんと手を繋いだハルトくんと腕を組んだハルトくんの隣に座った……………」
小猫ちゃんが羨ましい羨ましいいうらやましいいうらやましいウラヤマシイ……………」

……………。

「…見ちゃいけません」

スツと、小猫ちゃんが僕の視界を手で覆い隠す。

本当に見ちゃいけないものを見た気がする。

特に最後の二人。あれはヤバかった。

一人は鼻血出してるし、もう一人は目から光……………いわゆるハイライトが消えた状態だった。

って言うかみんな何してんの!?! ん? なに小猫ちゃん? え!?! あの人たち最初からいたの!?! なんで教えてくれないのさ! みんなの反応が面白くて? うん!
面白いね! 面白すぎてある意味ホラー状態だよ! 小猫ちゃんってば結構なSっぷりだね!

「……僕は何も見ていない。見てないっただら見てないんだ！ ほら、小猫ちゃん次いこ次」

「……あ、ちよつと待って、ハルト」

僕の提案に、小猫ちゃんがストップをかける。

そして、ポケットからケータイを取り出すと、全く音を立てない見事な忍び足で、彼らの元へと歩いていく。

そしておもむろにケータイを構えて、

カシヤ！

あの子、し、写メを撮りやがった！ なんて恐ろしい子!!

………僕も撮つところ。カシヤ！



続いてやって来たのは、映画館に隣接しているシヨツピングモール『S i r・z X』。僕は特に買いたいものは無かったんだけど、小猫ちゃんが雑貨を買いたいそうさ。

洋服は買わないの？ と聞いてみたところ、一辺に詰め込みすぎると後々閑話に困りそうとか何とか、良く分からないことを言っていたけど、とりあえず洋服はまた今度の事らしい。

「それで、何を買うの？ 小猫ちゃん」

「…それはもう決めてあるの。ちよつとここで待ってて」

「わかった」

そう言って、小猫ちゃんは雑貨コーナーの奥へと入って行く。

それから待つこと数分後……

「ねえねえ、その可愛い君！ 今一人かい？」

僕が店内のベンチに座ってケータイを弄っていると、割りと近くからそんな声が聞こえて来た。

「今暇なんですよ？　ならば、オレらとお茶しない？」

今時この手の、それこそ漫画や小説内でしか見ないようなナンパをするような奴がいるとは……………。

て言うか、絶対成功しないって。下手したらセクハラになるだろうし。

「ちよつとく、無視は無いいんじゃない？　そこまで無視されると、オレらかなしいなあ」

だったら諦めれば良いのに。

「そんなケータイばっか見てないで、少しはこつちを見てよ。なあ」

しかしこのナンパ野郎の声、やけに近いなあ。

それにしても、顔すら見ないなんて、凄い無視の仕方だよな。一体どんな子なんだろう？

そう思って、僕が顔を上げると……………。

「お!!?　やーつと顔を上げてくれた！　ねえねえ君！　オレらとお茶しようぜ！」

やたらとチャライ、恐らく大学生とおぼしき男5人が、僕の目の前に立っていた。しかも、その5人ともが僕を見ている。

「え？ 僕？」

状況が掴めず、ついそんな声が零れてしまう。
すると、

「僕っ娘キタアア！」

「リアルでの僕っ娘がこんなに可愛いとは思わなかったぜ！」

「しかもチョーカー着けてるし！ なんだらう、この性欲とは違う愛くるしさ！」

「それなのに胸元が開いてて鎖骨がばっちり見えるあの艶なまめかしさ！」

「ズボンと靴は男物つてのがまたギャップをそそる！」

いきなり5人は円陣を組み、小声で何やら議論を開始する。

つか、丸聞こえです。

って待つて？ この人たち、もしかして僕に声かけてた？ なんで？

そりや確かに子供の頃は女の子によく間違われてたし、小学校を卒業するまでは水着の上からシャツ着せられてたし、変声期が過ぎてもまだ声は高めだし、喉仏無いし、中学の時男子に告白されたこともあるし、今着ているものも女物だけど……………。

え？ もしかしなくても僕、今ナンパされてた!? うそ?! いやでも、この人たち、僕

に声かけてるっぼいし、周りの野次馬もチラツチラこつち見てるし！
僕が、ナンパ……………？　このお兄さん達に？

……………。

「ふ、ふえええ……………」

やだなにそれ怖い。

そう考えると、途端に涙が溢れてくる。

『主君！』

『おのれ！　下衆な人間どもめ！　我輩の主をよくも！』

『喰い殺してくれましょうか！　それと白狼王！　先程の発言は許せませんね！　我が君は貴女だけの物ではありません！』

「え!?!　あ、ちよー！」

「お、おい、泣き出しちまったぞ！」

「お前の顔が怖えからだよ！　この筋肉ダルマ！」

「そうだそうだ！」

「ンだとゴルア!」

「お、落ち着いてみんな! 泣いてる君も、ね?」

ちよ!? なんかカオス!

確かにビツクリしすぎて少し泣いちゃったけど、周りが慌てすぎて逆に落ち着いて来ちやつたよ! あとアラガミ三人は一番落ち着いて!? すこぶる物騒だよ!!

……………はっ!? 殺気!?

あああうしながら狼狽えていると、どこからともなく濃密な殺気を感じ取った僕は、辺りを見回す。

すると、

「ハルトきゆんにナンパしたハルトきゆんを泣かせた許さない赦さないゆるさないユルサナイ……………」

「き、ききき木場! おおお餅突け! じゃなかった、落ち着け!!」

「ふふふふふふふふ……………あの人たちに雷撃を落としたり、こんがり焼けるかしら?

うふふふふふふふ……………」

「それは止めて。ほんと冗談でもそれだけは止めて。ね? お願いだから朱乃その魔力

を引つ込めて!!」

「はううう、お二人が怖すぎますう!」

……………僕は何も見ていない(二回目)

それからも暫くこのカオスは続き、むしろその混沌さを増して行った。
しかし、そんなカオスに今ようやく、一条の光が差し込んだ。

「……なにこのカオス……ハルト大丈夫?」

「救世主、降臨」

「…え? な、何事……ああ、そういうこと」

どうやら小猫ちゃんは、オカ研メンバーの闇を見て理解してしまったようだ。いや、諦めたっばいな、これ。

「…それで、この人たちは?」

「僕をナンパした人たち」

「…ナンパ!? ハルトを!」

「女物の上着のせいで女の子に間違われたっぽい」

「…ああ」

納得した!? 納得しちやっただよこの人!

そこで、僕たちの会話を聞いていた人たちが僕らに声をかける。

「ね、ねえ君……今随分と男っぽい名前と呼ばれてたけど……」

「あ、僕男ですよ?」

『な、何イイイイイイ?』

「うわあっ!?」

!!!!???

「きゃっ!」

ビックリした! 5人どころか周りのお客さんも一緒に驚くんだもん! 心臓飛び

出すかと思った!

「…ハルト、行くよ! ほら、走って」

周りが混乱した隙に、小猫ちゃんが僕の腕を取って走り出す。

「わ、わかった!」



「はあ、はあ、はあ……………」

「……、……なら大丈夫……………かも」

あそこで走り出した僕らは、そのままショッピングモールを抜け出して、近場の公園まで来ていた。

ちなみに、兄ちゃんが殺されたり、アジアさんが拐われたりした公園とは別の公園です。

「ビックリしたねえ、さっきのは」

「…うん、ホントにね」

そう言つて、お互いに頷き会う。

「……………」

そこで、会話が途切れる。

黄昏の茜に染まる公園で、二人きり。遊具にはまだ子供たちがいるけれど、僕らの近くには誰もいない。

そんな中で、僕らはベンチに隣り合わせで座っている。

「……………」

先ほど見た映画のせいもあって、どことなく気まずいと言うか、気恥ずかしいと言うか、とにかく、そんな感情が僕の中を埋め尽くす。

「……………あのっ！」

声をかけようとして、同時に喋ってしまう。

「あ、いや、小猫ちゃんからどうぞ」

「…いい、いや、ハルトが早かったし、ハルトから……………」

そこから、「そっちが先に」「いやいや、そっちから」と、譲り合うループが少し続き、そしてまた沈黙が訪れた。

「……………ぷっ」

しかし、それも一瞬の事で、僕らはなんだか可笑しくって、互いに笑ってしまう。

「あっはははは！ なにこれ、こんなお手本みたいな台詞かぶりとか、僕始めて見た……はははっ」

「……………ふふふ、確かにそうかも」

ひとしきり笑い合うと、小猫ちゃんが僕をまっすぐと見てくる。

「…ね、ハルト。手を出して？」

「うん？ いいよ？」

僕が手を出すと、小猫ちゃんは鞆から一つの小袋を取りだし、僕の手の上に置いた。

「これは？」

「…プレゼント」

「え？」

「……今日、ハルトと一緒に遊べて楽しかったから、そのお礼」

「お、お礼だなんて！ 僕だって楽しかったし！」

「…それに、ぬいぐるみやキーホルダーも貰っちゃったから」

そう言つて、僕があげたぬいぐるみとキーホルダーを鞆から取り出す小猫ちゃん。

「…ハルト、開けてみて？」

促されて、小袋を開けてみると、そこに入っていたのは、僕が小猫ちゃんにあげたキー

ホルダーと、色違いのキーホルダーだった。

「キーホルダー？」

「…うん。ホントはアクセサリーにしようと思つたんだけど、ハルトがくれた奴の色違

いがあつたから………あ、でもハルト、今朝キーホルダー使わないつて言つてたよね

………」

「そんなこと無いよ！ 小猫ちゃんからのプレゼントだもん！ ちゃんと使うよ！ あ

りがとう。でも、なんでおんなじの?」

僕がそう聞くと、小猫ちゃんはなんだか拗ねたような顔をして、ぬいぐるみに顔をうずめる。

「…(気づいてよ、バカ)そ、それは」

「それは?」

「……っっっ!」

「い、痛! え? なんで今つねられたの!」

「…お」

「お?」

「…お、お揃い……だから……」

小さな、それこそようやく聞き取れるくらいに小さな声で小猫ちゃんはそういった。

その時の顔は、夕陽も相まって凄く赤くて、それでいてとても綺麗で可愛いかった。

「……ふふっ」

「…な、なんで笑うしっ!」

「いや、ちよつとね。ありがとう小猫ちゃん! 僕、大事にするね!」

「…う、うん」

そう返事した時の表情も可愛かったと、ついでに追記しておこう。僕の心の日記に。

そのあと、僕らは日が暮れるまで、ベンチに座ってお喋りを続けたのだった。

ついでに、初めは荷物が置けるくらい距離だったのが、気がついたら肩が触れ合う距離まで縮まっていたことも、追記しておく。



小猫ちゃんを駅まで送り届け、僕が帰路につく頃には、既に陽はとつぷりと沈み、夜の帳か空を覆い、月の無い夜空に星が瞬いていた。

「ううう、怖いなあ……早く帰ろ」

『ニャアーオ』

「うっひい!! ……つて猫か、ビツクリしたあ。ただでさえ今日ビツクリしすぎて心臓に悪いのに、またビツクリするなんて」

そうぼやきながら辺りを見回すと、少し離れた塀の上に、キレイな金色の瞳を持った黒猫が、僕の事をジツと見ていた。

「黒猫?」

いつもなら、暗闇の黒猫にどこか不気味さを覚えると言うのに、その黒猫にはその不気味さを一切感じることは無く、むしろ触れてみたいとまで思ってしまった。

こちらをジツと見つめるその金の瞳には、警戒する猫独特の観察するような雰囲気を感じられなかった。

その証拠として、僕が近づいても逃げるところか、むしろ塀の上に座り込むほど、警戒なんかしていないかった。

「お前、どこかで見たことあるような?」

答えが帰ってくるはずの無い問いを口にしながら、僕が猫の頭に手をやると、その黒

猫は喉をゴロゴロと鳴らしながら気持ち良さそうに目を細め、僕の手顔全体を擦り付ける。

「な、なんか僕、懐かれてる?」

それから暫く猫を撫でていると、どこかからともなく、ピイーつと、指笛独特の音が響いてくる。

すると、その音に反応したのか、黒猫の動きはピタリと止まり、そして立ち上がり、背を向ける。

「なんだ、もう行くのか?」

少し名残惜しくて、そう問いかけると、僕の言葉が通じたかのように立ち止まり、一度だけこちらを見る。

しかし、それも少しの事で、すぐに走ってどこかに行ってしまう。

「あ……行っちゃった……あの猫、触り心地良かったなあ……どこかの飼猫なのか?」

眩きながら、猫の去った方を見ていると、もう一度鳴き声が聞こえてきた。

『ニャアーオ』

——またね。

不意に、そう聞こえた気がした。

……………いやいや、

「いやいやいや、猫の鳴き声が人の声に聞こえるとか、僕の重症じゃね？ 疲れてんのかな？」

今日は帰ったらさっさと寝よう。

そう決めた僕は、少し早歩きで自宅へと向かうのだった。だって暗いの怖いし。

月光校庭のエクスカリバー

第43話

「…ハルト、打ち取る」

「やれるもんならやってみなよ、小猫ちゃん！」

空は晴れ、夕日は傾き雲は茜に染まる中で、僕と小猫ちゃんは向き合い眼光を飛ばしあっていた。

僕は今、頭部に防具を着用し、両手には剣ではなく、鉄の打撃武器を持ち、対する小猫ちゃんの装備は左手に防具、右手に投擲武器だ。

「……………」

暫しの沈黙が、僕らの間に訪れる。しかし、その静けさは謂わば嵐の前のそれであり、これから始まるのは、お互いがそれぞれに欲するものを賭けた真剣勝負。

「……………」

先に動いたのは予想通りと言うか当然と言うか、自明の理で小猫ちゃんだった。

両手を合わせた状態で頭の上に持っていき、それに引つ張られるように彼女のスレン

ダーな左足が、頭の上までほぼ180度になるくらいに振り上げられる。

その姿勢を取った数瞬後、スムーズな重心移動から振り上げた左足を踏み込み、彼女は右手の投擲武器を勢いよく投げた。

その速度やまさに豪速球。並大抵の人なら反応すら難しいだろう。だが、

「並大抵の”ならね”

小猫ちゃんが動き始めた時、僕もほとんど同時に動き始めていたんだ。

左足を引き、タイミングを見計らい、そして踏み込み、右足を捻りその反動で腰を回し、その勢いを殺さぬまま武器を振るう。

「…しまった！ ど真ん中！」

「ジャストミートおお!!」

カキーン！ と甲高い音を響かせて白球は高く跳ね上がる。

え？ 何やってるのかって？ そんなの野球に決まってるじゃないですか全くもう。

「よっしゃあ！ ナイスバツティングだぜ、ハル！」

「裕斗！ そっちいったわ！ お願ひ！」

くそ、ホームランにはならなかったか……………さすがオカ研一の強肩！

「…よし、打ち取った」

と、小猫ちゃんがガッツポーズをした瞬間……………

「あいた！」

「ぼけー、とつつ立っていた木場先輩のおでこに見事ボール（硬球）がぶち当たる。

「裕斗！ しつかりなさい！」

「え？ あ、はい、すみません、ぼーっとしてました」

「……………あれが当たって平気とか、悪魔つてすごいなあ……………あつ。

「はい、ハルトくん、アウトね」

「なん……………だど!?」

「わ、忘れてたあああ!! この人めつき動き早いのが忘れてたあああ!! まさか投球じゃなくてタッチプレイで来るとは思わなかったよ！」

「ん？ タッチプレイ？」

「木場先輩、悪魔の力を使うのはルール違反じゃ……………う！」

「あ、ごめん、忘れてた」

「んー、なーんか最近、木場先輩の様子がおかしいなあ。

「いや、変な行動は結構前からあったけどさ？ 例えばいきなり鼻血出したり、変なことを口走ったり、背筋が寒くなるような視線でこっち見てたりとか。

「でも、基本的にはなんでもあつさりこなす天才イケメンの筈なんだけど、ここ最近はやたら凡ミスが多いようない？」

なにかあつたんだろうか？



そんなこんなで。次の日のお昼休み、僕らは旧校舎に集まっていた。

て言うかグレモリー先輩は酷いと思いまーす！　なんで部活の集まりに部員である僕に来なくて良いつて言うんですかね!?

いいもん！　小猫ちゃんに付いていくもんね！

僕と小猫ちゃんが入ると、そこには見慣れぬ集団が。

「えつとー、どちら様？」

分からないので素直にそう訪ねると、その集団における唯一の男子生徒がため息をついた。

まるで、「なんだお前、そんなことも知らねえのかよ」って顔で。

「なんだお前、そんなことも知らねえのかよ」

失敬な。僕はまだ一年生だから学校のこととか良く分からないんですー。

「匙、そんなことを言う物ではありませんよ。彼はまだ一年生なのですから」

「す、すいません」

そう男子生徒をたしなめたのは、眼鏡にセミロングの、見るからに出来る女！ 女人。

「ハルト、彼らは生徒会よ」

「生徒会？ どうして生徒会がオカ研に？」

オカ研なんて怪しい部活動と生徒会がこんな時間に一緒に部屋にいるなんて

……………はっ！ まさか！

「イツセー兄ちゃんがまたなんかやらかした!？」

僕がその答えに行き着いた瞬間、扉が荒々しく開かれる。

「やらかしてねえよ!」

「あ、イツセー兄ちゃん。それにアーシアさんも」

「遅かったわね、二人とも」

「すいません」

遅れて来た兄ちゃんと僕らがそんなやり取りを交わしていると、先程の男子生徒がイツセー兄ちゃんをじつとみつめていた。

それに気づいた兄ちゃんが、その男子生徒に声をかける。

「ん？ なんだ？ 俺の顔になんか付いてんのか？」

すると、それを見た彼はまたため息をつく。

「はあ、この気配にも気付かない奴が俺と同期なんて、張り合いがねえな」

「同期？ 確かに俺らは二年だけど？」

「どうやらこの人、先輩だったようだ。」

「しかたありませんよ匙。我々は基本的に、『表』では干渉しませんし、何より彼らはここ最近はずいぶん忙しかったのですから」

「……………つまり、どゆこと？」

「あの一、話が見えないのですが？」

「ああ、ハルト、えっと、彼らはその、ね、えっと……………」

「悪魔です」

「ワッツ？」

「ちよ、ソーナー！」

「いいではありませんかリアス。というか、何をいい淀んでいるのですか？ あなた達と一緒にいるのですから、そう隠すことも……………」

「……………きゆう」

「え？」

「はあ、やつぱり……………だから来なくて良いつて言ったのに」

「あ、悪魔がひとりりふたーり……………わあい、最近僕の回りは人外だらけだー」

……っつて

「でりやあ！」

「…あ、耐えた」

「に、人間って、案外慣れるもんなんだよ小猫ちゃん……………いやいやそんなことよ
り」

1度深呼吸をして、

「えええええええええ!! 生徒会が悪魔の集団!?!」

「ええ、そうよ」

「この学校、悪魔だらけじゃないですかーやだー」

え? じゃあなに? 常日頃から一緒にいるクラスメイトや先生方のなかにも悪魔
がいたり?

やだなにそれ怖い。

「ああ、この学校の悪魔はオカ研と生徒会にしかないから安心して?」

そ、そうか、それはよかつ……………

「きゆう」

どうやらここが僕の限界だったらしく、そこで僕の記憶が途切れていた。

あとで聞いた話によると、これにより生徒会メンバーが大騒ぎし、危うく救急車を呼ばれる事態になりかけたそう。まあ確かに目の前でいきなり人が気絶したら、大騒ぎにもなるよね。

目を覚ました頃には生徒会の人達は引き上げていて、どうやらあの人達はうちの部に宣戦布告をしに来たらしく、それに触発されたグレモリー先輩がメラメラと燃えている。

姫島先輩曰く、グレモリー先輩はすごく負けず嫌いらしい。うん、何となく分かる気がする。

ところで、

「匙の野郎はぜってーぶっ倒す」

どしたの？ イッセー兄ちゃん。



そして球技大会当日、僕らは凄いものを見ている。

「はああ！」

「せえい！」

目の前を、緑の線が幾つも駆け抜ける。

種目はテニス。ラケットを握るは我らが部長、グレモリー先輩。

対するは生徒会長、支取蒼那先輩ことシトリ先輩。

どうやらシトリ先輩も、グレモリー先輩と同じく上級悪魔らしく、また、二人は幼馴染みでライバルらしい。

そりゃ、本気にもなるよ。

ところで、少し話は変わるけど、基本的にテニスのボールは黄緑色だ。この色の理由は、他の色だと屈折率の問題でボールが遠く見えたり近く見えたりするため、プレイしにくいから、という事らしいのだが……………

「……………えー」

先ほど、僕は目の前を緑の線が駆け抜けると表現した。

そう、“線”だ。プロの試合で、いくら球速が速かろうと、それが残像を残すなんてことは余程の事が無い限りあり得ない。

さて、なんでさっき僕が色の話をしたと思う？

テニボールの色は、目の錯覚を防ぐための物だ。でも、今僕の目の前で繰り広げられ

る試合は……………

「錯覚もなにも、これを目で追える人なんて、ごく少数なんだろうなあ」

速い。何が？ 球速が。

ボールが風を切るあの『シューツ』という音ではなく、まさに『ゴオオオ！』と表現するのが正しい音を出しながら、僕らの目の前をテニスボールが行き来する。

そしてそれを産み出しているのは、見るからに腕の線の細い二人。

「私は、負けられない！ 負けたくない！」

「それは、私も同じことよ、ソーナ！」

「はあああ!!」

その当人たちは、周囲の反応など気にもせず、お互いの譲れない物を巡って争いを繰り広げる。

「小西屋のトッピング全乗せうどんを食べるのは、私よ!!」

んん？

「庶民的過ぎない？」

「言ってやるなハル。お嬢様がたはきつと、そう言うものが好きなんだろうさ」

「……………グレモリー先輩らしいや」

ちなみにこの勝負、お互いのガットが同時に弾けとんだ為、引き分けとなった。だつてどちらも一セットも取らずにデューズばかりになってたんだもの。

「さすが私のライバルね、ソーナ」

「そつちこそ、リアス」

「約束、どうするの？」

「……………今度、二人で食べに行きましょうか」

「……………そうね」

あ、結局そうなるんですね。

さて、次は部活對抗の集団戦だし、僕も準備しなくちゃ！

第44話

「くそっ！ くそっ！ なんだつてこんなことに！」

俺、兵藤一誠は現在、四方から命を狙われていた。

「うおおおお!! 野郎共！ 狙うは兵藤一誠のみ！ タマを潰せえええ!!」

「ふざけんなああああ!!」

種目はドツジボール。

そしてジャンルは部活対抗戦。

「くっ、ちよこまかと、逃げるなあ！」

「逃げるわアホンダラ！ 死ぬわ！」

「死ぬ！」

ドツジボール。直訳すれば「球避け」

そして現在の俺はまさにドツジボールをしているわけだが、そのドツジボールで俺は今命の危険を感じている。

理由は簡単だ。

その理由を述べる前に諸君、一つ聞きたい。

幼少期、正確には小学校の高学年辺りくらい。

その頃体育や休み時間などにドッジボールをしたことは無いだろうか？　もしやっ
たことがあるのなら覚えがあるかもしれない。

いつの時代も、どの世代も、相手の身体能力に限らず、男子は女子に手加減をしな
ければならない、という不文律を。

そしてこんな覚えは無いだろうか？　ドッジボールにおいて女子に当ててしまつた
り、女子に人気の男子に当ててしまつた時のあの気まずさを。買ってしまつた顰蹙の居
心地の悪さを。

故に男子は女子や女子に人気の男子を狙わずに、その他の男子を狙い、女子は男子だ
ろうと女子だろうと構わずに本気で投げてくる。

今現在、俺に起きている現状は、つまりそういうことである。

「兵藤さえ潰せば、たとえ負けようとも勝てるんだ！　いいか!?　試合に負けても勝負
に勝つんだよ！」

部長——狗王学園の二大お姉さまの一人。大人気の学園マドンナ。当てられない

朱乃さん——部長と同じ二大お姉さまの一人。清楚な学園アイドル。当てられな
い。

アーシア——二年生No. 1の癒し系天然美少女。しかも金髪。当てられない。

小猫ちゃん——学園のマスコット。そのおみ足で踏みたい。当てられない。

木場——イケメン死すべし慈悲はない。つてやると女子の響感を買う。当てられない

そしてハルト——小猫ちゃんとならぶ学園マスコット。男子なのに男でも守りたくなる。当てたら可哀想。

以上の事から導き出される結論は、

兵藤一誠——羨ましい羨ましい裏山死。なぜこいつがおにやのこだらけの天国に入れたのか謎だ。理由はわからんがまあとりあえず狙え、当てろ。目標は股間だ、タマターゲットだ潰せ。さあ殺れ。いいから殺せ。慈悲など要らぬ。

という、悲しい消去法であつた。

「殺せええええ!!」

「死ねえ!」

「アーシアさんのために!」

「yes!! ロリータ! no!! タッチ!! ショタもあり!」

「狙い撃つぜ!」

「いいぞー！ もつとやれ！ 兄ちゃんに当てろー！」

くつ、ギヤラリーからもヤジが飛んできやがる……………つて、

「おいテメ、ハル！ どっちの味方だあ!!」

「面白い方」

「即答か!!」

と、俺とハルがそんなやり取りをしている間に、アーシアが投げたボールが向こうに取られてしまう。

ボールを取った奴（確か野球部エース）は俺とハルと木場をそれぞれ見て、暫しの逡巡の後、

「く……………う、恨まれてもいい！ イケメン氏ねえええ!!」

よっぽどイケメンに恨みがあるのか、女子のブーイングを受けながらも、そいつは木場を狙ってボールを投げる。

しかし、ボールを投げられた当の木場は、それに気づいていないのか、ポケットと空を仰ぎ見ていた。

「危ない！ 木場先輩！」

瞬間、俺の隣にいたハルトが駆け出した。直後、腕を引っ張られる感覚があった――

っ!?

響いたのは、なんとも言えない直撃音。

続いて衝撃。

最後に、これまでの戦いの中でもっとも辛い痛み。

「……………っ！ ………………っ！」

声にならない悲鳴が漏れる。

「あれ？ ハルトき……………くん？」

俺やハルの存在に今気がついたのか、木場はそんな間抜けた声を出す。

「大丈夫？ 木場先輩？ ………………ふう、イツセー兄ちゃんが……………いや、イツセーシルドが無かったら即死だった」

「は、ハルてめえ……………覚え、て、ろ……………」

俺の股間を見事に抉ったボールは地に落ち、周囲の大歓声を聞きながら、俺はそこで意識を失った。



球技大会が終わると同時に、元々雨模様だった空から、ついに雨が降り始め、今や土砂降りだ。

雨が部室の窓を叩く心地のいい音のなか、部室内にパンツと、乾いた音が響いた。

「目は覚めたかしら？ 祐斗」

音の原因は、グレモリー先輩が木場先輩の頬をひっぱたいたから。

グレモリー先輩は少し怒りを滲ませた声と眼差して木場先輩を見つめている。

「祐斗、あなた最近変よ？」

「申し訳ありません。少し調子が悪かったようです」

丁寧な言葉使いでそう答える木場先輩だけど、その口調はどこか面倒臭そうに答えていた。

「木場、お前マジでどうしたんだよ？」

イツセー兄ちゃんの質問に、僕も便乗してウンウン、頷くが、それを見た木場先輩はすぐに僕らに背を向けて、

「何でもないよ」

と答えた。

その言葉や態度はどこか不機嫌で、拒絶されたように感じてしまった。

だから僕は、何の考えもなしに部屋から出ていこうとする先輩の手を取った。

「何でもなくないよ！ だって木場先輩、いつも通りじゃないもん！」

いつもは確かに奇抜な行動の多い人だし、ちよつと身の危険を感じる視線を送つて来るけど、それでも皆に優しく、何でもそつなくこなす頼もしい先輩だ。

そんな人が今日みたいなことになって、心配しない訳がない。

「だから、何でも無いってば」

「ううん、そんなことない。見ればわかるよ。先輩、なにか悩んでるの？」

その言葉に一瞬動きを止めた先輩は、僕の手を振り払い振り向いて、

「だから!! 君には関係ないって言ってるだろ!! しつこいんだよ!!」

そう、怒鳴られた。

普段、声を荒らげる事のない先輩だからこそ、その形相と怒声に僕は身を竦めた。

他の皆も驚いたように身を竦め、固まっていた。

「……………失礼します」

そう言つて部屋を出ていく木場先輩を、僕らは無言で見送ることしかできなかつた。



降りしきる雨のなかを、僕はその身を濡らしながら歩いていく。

「最低だ」

最低だ最低だ最低だ！

僕はなんてことをしてしまったんだ！　いくら苛立っていたからって、よりにもよってあの子に怒鳴り散らしてしまうなんて！

感情の制御はできていると思ってた。望みの抑制もできていると思ってた。

けど、この様はなんだ！

大恩のある部長に対して失礼な態度をとって、僕を案じてくれたイツセーくんの言葉を拒絶して、引き留めようとしてくれたあの子の手を振り払って、挙げ句には怒鳴り散らしてしまうなんて！

ふと、そこまで考えて僕はあることに気がついた。

「ああ、そうか。やっぱり、僕は……………」

エクスカリバーに、復讐したいんだ。

それを目的として悪魔になったはずだった。

その為だけに生きているはずだった。

その為ならば、誰とも関わらずに生きていこうとまで、思っていたはずだった。けど、皆と出会って、彼と出会って、いろんな人と関わって、言葉を交わして、いつの間にか僕は、目的を忘れかけていた。

だってあそこは、あまりにも暖かくって、優しくって、居心地が良かったから。

そんなもの、僕には許されなはずなのに。求めてはいけなモノなのに。

「ああ、馬鹿だ僕は。本当に、大馬鹿だ」

歩くのを止めて壁にもたれ掛かる。

こんなはず濡れだ。雨宿りしても意味がないだろう。

「そうだ、僕はこんなことをしている場合じゃないんだ」

皆の、同士の恨みを晴らすまで、僕は——

「おんやあ？ おひさじやないの！ くそ悪魔っち！」

不意に、その声をかけられた。

こんな近くに来るまで気配を感じられないなんて、気が抜けていた。

だが、僕の知っている人物で、敵味方問わずこんな言葉使いな奴を、僕は一人しか知らない。

「……………フリード・セルゼン」

苛立ちと共に顔をあげると、気味の悪い笑みを張り付けたはぐれエクソシストが、そこになっていた。

第45話

「木場先輩、大丈夫かなあ」

土砂降りの雨と夕暮れで、既に夜のように暗くなった町中を、僕とイツセイ兄ちゃんは木場先輩の傘を持って歩いていく。

「まあ、悪魔だし、雨に濡れても風邪は引かんだろ」

「いや、そこじゃなくて」

「あ、その角を左らしいぞ………確かに、最近の木場、なんかおかしかつたな」

兄ちゃんが、木場先輩ん家の住所が書かれたメモを見ながら同意する。

最初は僕だけで行こうとしたんだけど、イツセイ兄ちゃんを始めとしたアラガミ含む全員に「一人で行く掘られるぞ」と止められてしまった。掘られるって、なんの事だろう？

「兄ちゃん、何か心当たりある？」

「んー……」

問うと、兄ちゃんは顎に手を当てて考え込む。するとしばらくして「あれか？」と、何か思い出したように顔を上げる。

「なにさ」

「いや、この間、みんなが俺ん家に集まった日があつたら？」

「ああ、うん。僕が家の用事で来られない日にみんなが集まってどんちゃん騒ぎして楽しんでたあの日ね」

「……………拗ねてる？」

「拗ねてない。で？ その日がどうしたのさ」

「あの時な、木場の奴、俺のアルバム見てからあんな感じになつたんだよ」

「そのアルバムになんかあつたの？」

「ああ、実はな……………」

そこまで聞いたとき、僕ら意識を会話から別の物へと切り替えなければならなくなつた。

「兄ちゃん、聞いた？ 今の」

「ああ、ハッキリとな」

僕らが聞いた音。

それは金属と金属がぶつかり合い、擦れ、そして碎ける音。

本来なら聞きなれない音だけど、ここ最近で聞きなれてしまった音は、微かだけど、確かに僕らの耳に届いた。

「木場の奴、誰かと戦ってるのか！」

その音とは、劍戟のそれだった。

そして、こんな町中でそんな音が響くなんて、尋常ならざる事態が起きていると言うことだ。

「急ごう、兄ちゃん！ 木場先輩もだけど、なにより無関係な人達が巻き込まれたら大変だよ！」

「わかつてる！ 行くぞ！」

僕らは濡れるのもお構いなしに、傘を畳んで全力で駆け出した。



「かつひやひやひや!! やっぱすげえなあ！ 速えなあ！ 【騎士】^{ナイト}の駒^{ピース}持ちの悪魔さんはよお！ ひやひやひやひやつ！」

僕らが音の元へ駆け付け付けた場所に誰の姿もなく、ただひたすら、劍戟の音だけが辺りに響いていた。

「つー！ 神機！」

ブリステッド・ギア
「赤龍帝の籠手！」

その音と光景で状況を察した僕と兄ちゃんは、それぞれの武器を、僕は黒い腕輪と神機、兄ちゃんは左手に赤い籠手を出現させて辺りを警戒する。

絶え間なく響いていた剣戟の音が唐突に止み、僕らの目の前に剣を構えて対峙する二人の姿が。

「イツセーくん!? ハルトくん!?!」

「ややつ!? やあやあ君たちは、あのとときのクソ悪魔なイツセーくんとクソガキくんじゃあないですかー!」

二人がこちらを認識し、それぞれがそれぞれの反応をする。

「フリード・セルゼン!!」

「そうだよイツセーくん! みんな大好きフリードちゃんだよ! つてか! ひやひやひや!」

……うわあ、この前は言葉が通じなかつたけど、分かつたら分かつたで、相当めんどくさいな、この人。

「フリード! お前のあの速さはなんだ! なぜ〔騎士_僕〕に着いてこられる!」

確かにそうだ。〔騎士_{ナイト}〕の特性はスピードだ。この僕_{ゴッドイーター}でさえも、気を抜けばすぐに見

失つてしまう速度。

なのに、目の前のあいつは、さっきまでそんな速さの木場先輩と打ちあっていた。それはつまり、それほどの速度が出せると言うことだ。

「んっんー、なあなあ木場ちゃん！ 普通そう聞かれて答える敵とかいると思う!? いるよね！ 説明がやたら長い漫画とかラノベとか！ そして僕は語りたい盛りの自慢野郎！ だから教えちゃう！ だつてその方が面白いもんね！ ついでだから余計なことも教えちゃうよ！ いい!? いい!? 行くよ！」

ホント、うるさい人だ。

木場先輩もイツセー兄ちゃんも、うんざりしたような顔で相手を見つめている。

「まずな、オレっち有能だから、この間上司になつたとある組織のすんげー偉い人がな、『貴様に任務を与える』とか言つてな！ 似てた？ ねえ今の似てた!?」

知らんがな。

「んでな、その人の命令と力で、チャチャイのチェイ！ つてこの辺りに防音と人避けの結果張つて、この町に赴任してしたエクソシストをぬつ殺してチョンバラリンしたあとに！ そいつが持つてた武器をスナツク……あ、間違えたスナツチしてからよ、さっきまであそこの家で試し切りしてたのよ！」

『Bloody Booster!! The Encourage!! Blood A

r t s O p e r a t i o n !!』

「【ドラゴンショット】!!」

「ブラッドアーツ!」【I E 伍式・照射】!」

「雷の魔剣よ! 迸れ!」

最後の言葉を聞いた瞬間、僕らは一斉に攻撃を放った。

「この、外道が!!」

僕らの思いを代弁して、イツセー兄ちゃんが怒鳴る。

その言葉に対して、煙の向こうからふざけた調子の声が響いてくる。

「おいおいおい、勘違いしちゃうやーよ? オレちゃん、なんでもない人間は殺さないよ?

僕たちがヌツコロすんのは、悪魔と接触したわあーるい悪人と! 教会側のわあーる

い偽善者だけよ? どうーゆうーあんだすたん?」

その台詞と共に煙の向こう側から歩いていききたフリード・ゼルセンは、気味の悪い笑

顔を浮かべながら、僕らに指を突きつける。

それも、無傷で。

「無傷?!」

「あの攻撃で?」

あり得ない。あの攻撃は、たとえ彼がもつ光の結界すらも打ち破る威力だったはず

だ。

それを受けて無傷？ どころか、あの結界を使ったような跡もないなんて。

「気を付けて、二人とも」

驚きに動きを止めた僕達に、木場先輩が鋭い口調で警戒を促してくる。

「木場、何か知ってるのか!？」

「あれは……………」

そこで一度、先輩は何かを躊躇うように口ごもったが、一つ息を吐くと、今度はしっかりとした言葉で、僕らに答えを返した。

「あれは、聖剣だよ」

「聖剣!？」 それってあれでしょ？ ゲームとか漫画に出てくるエクスカリバーとかバラムンクとかヴォーパルソードとか!」

「……………多分、ヴォーパルソードは聖剣じゃないんじゃないかなあ?」

聖剣……………実在したんだ。

いや、悪魔とか墮天使が実在する時点で不思議じゃ無いんだけどさ。

「御名答おめでとう! そのとおり! 今この手にある、ふつくしいまでに美しい剣こそが! 聖剣の中の聖剣! 知名度ナンバーワン! エクスカリバーでございます

!」

「エクス、カリバー……………」

「そしてこれは、砕けたエクスカリバーから作られた、エクスカリバー・ラビッドリイ【天閃の聖剣】！ 所持者の速度上昇が能力なのだ！ ひゃーひゃつひゃつひゃつひゃつ！」

その時、僕の横から風が一陣過ぎ去って行った。

僕がそう認識した次の瞬間、フリードが僕の視界から消え、甲高い剣戟が再び響き渡る。

「先輩!!」

「見つけたぞ……………やっと思つたぞ！ エクスカリバー！」

「お、おう!? な、なに怒つてのさ！ 木場っちゃん！」

「黙れ！ 今は貴様の声を聞くことすら煩わしい！」

姿は見えずとも、その声音や、普段あの先輩が使わないような荒々しい言葉使いに、僕と兄ちゃんは顔を見合わせる。

「に、兄ちゃん！ 先輩は一体……………」

「俺にもわかんねえよ！ ……………でも、あの木場があそこまで激昂するなんて、なんかあつたんだろうな。くそ！ 援護したくても、これじゃ近づけねえ！」

結局、駆け付けた意味も虚しく、僕らは何もできずにいた。

「それを寄越せ、フリード・セルゼン！」

「やだね！　そもそもお前じゃ使えねえーだろがい!!」

「使わないさ、壊すんだよ！　それこそが僕の生きる道なのだから！」

「……っ！　へっ、だが断るね！」

高速で動く彼らを目で追うことはできない。けど、その言葉はなぜかハッキリと、僕らの耳に届いてくる。

「そうか……だから木場の奴、聖剣を見てから様子がおかしかったのか」

その会話を最後に、しばらくは無言で剣戟が続いたが、

「んっんー、時間切れっぽいでござる！　遅れたら上司様にぶっ殺されちまうぜ！　血が舞ってぶっ殺され血舞うぜ！　ってーな訳で、そんならばいちゃー！」

突然、光が炸裂し、辺りを白く染め上げる。

「閃光弾かー！」

しまった！　あいつ、逃げるときいつもこれ使ってたんだった！

「さて、フリード・ゼルセン！　さて……さてよ、フリードおおおお!!」

一向に止む気配の無い大粒の雨が容赦なく体を打ち続けるなか、木場先輩の叫び声のみが、静かな闇夜に響いていた。



「聖剣を壊す、か……………」

俺は左手に持っているエクスカリバーを見下ろす。

「どうかしたか、フリードよ?」

「いえいえー、なんでもありませんよ、コカビエル様ー。ただ、これすんげー性能だなあつと思っただけですはい」

「ふつ、そうか。期待しているぞ、フリード・セルゼン。我々の目的『エクスカリバーの破壊』を達成するには、お前の力が必要なのだ、聖剣の担い手よ」

「ひゃは、担い手といっても、人工的な物ですけどねえ」

「そうだ、俺は復讐するんだ。」

「天使に、悪魔に、」

そして聖剣に。

聖剣計画なんてふざけた計画のせいで死んでいったあいつらの為にも、俺は、絶対に

エクスカリバーを、ぶっ壊す。

第46話

『聖劍計画』

兄ちゃんの部屋でグレモリー先輩から聞かされたその計画の内容は、余りに反吐が出るような内容だった。

聖劍に適合できなかったと言うだけで、人としての権利を奪われ、殺される。

確かに人体実験は人類の進歩に大きく関わっている。けれど、この『聖劍計画』とやらは非道にも程がある。

「被験者達はね、適合できなくても生きて行けるはずだったの。聖劍は魔劍と違って、適合できなくても呪ったり食ったりしないの」

それでも、殺された。

木場先輩も、その仲間達も、『不良品』として、あっさりと殺された。

「そ、そんな………主に遣える者が、そんなことをしていい筈がありません」

「でもね、アーシアさん。悲しいことに、心を持つ全ての存在には心がある筈なんだ。心があれば、必ず悪心と良心、その2つが存在する。アーシアさんにだって、欲とかある

でしょ?」

「それは……………」

僕の言葉にアーシアさんが口ごもる。

「……………そうか、だから木場の奴、あそこまで聖剣に執着していたのか」

兄ちゃんがポツリと溢した言葉に、僕らの空気がさらに重くなる。

あの日から、木場先輩は学校にすら来ていない。

「施設から命からがら逃げ出して、私の眷属になったとき、祐斗は教会への激しい憎悪と、聖剣に対する復讐心に囚われていたわ」

そう語るグレモリー先輩はとても悲しそうで、とても辛そうだった。

「だから私は、彼に普通の男の子として生きていて欲しかった。友達を作って、遊んで、笑って、恋をして、そうして、憎悪も復讐も全て忘れられたらと、そう思っていたの」

つい最近までは忘れてると思ってたんだけどね。

そう言って皮肉げに笑う先輩は、今にも泣き出してしまいそうだった。



「復讐、か」

翌日、部室へ向かう途中、僕は昨日聞かされたことを思い出していた。

あんな先輩は見たくない。けど、どうすれば良いのかもわからない。

「あー、どうしよう………」

自分の無力さと言うか、何もできない事へのもどかしさにそうぼやきながら、僕が部室のドアに手をかけると、ドアの向こうからくぐもった何かの音が聞こえてくる。

『、——』

………えつと？　なんで水の音がするんだろう？　しかも結構粘着性のありそ

うな音が。

「……………」

開けるの、怖いなあ。

なんか扉の向こうはピンク色のカオスな気配がすると、僕の第8感辺りが告げている。6と7どこいった。

よし開けよう。落ち着け、これは決してやけっぱちじゃない。ただの確認だ、そう、T

DN確認。

「そー……………」

「——んちゆ、はあ……れる、はむ………んん、ぷはあ………」

……………。

そうして僕は、そつと扉を閉めたのでした。

そしてダツシユ^{離脱}。

なんだあれなんだあれなんだあれなんだあれ!!

え? なに? なんで部室でR—18的展開が展開してんの!? なにこれエロゲ!?
そういえばRってAから数えて十八番目だよね! だからR—18なのかな! 考
えた人ってすげえや! ところでなんで部室で兄ちゃんと姫島先輩がががぎぐげ
くあwse d r f t t g y ふじこーぷ!

「ど、どうされたんですか、ハルトさん?」

「…ど、どうしたのハルト? ^{林のと真ん中} こんなどころで三点倒立なんかして」

「やあ、小猫ちゃんにアーシアさん。今日もかわいいね。僕は大丈夫、少しカオスがヘヴ

ンしてレッツぱーリーぴーぽーしただけだから」
 「……………なんて？」

おつといけないいけない。とりあえず落ち着け僕。

「いやあ、ごめんごめん、ちよつと発狂しちゃった☆ てへぺろ☆」

「発狂!? なにがあつたんですか!？」

「色んな意味で凄まじいものを見たせいでダイスロールすつぱ抜いてS A N値直葬しちゃったZ E ☆!」

「…とりあえず落ち着こうか。なに言ってるか全然わかんない」

「い、一応聖母トワイライト・ヒーリングの微笑みしときますね」

……………ああ、精神が落ち着いていく。聖母トワイライト・ヒーリングの微笑みには確か精神を癒す効果は無

いはずだから……………そうか、これが女神（悪魔）の力か。



「…それで、なにごと?」

「実は斯々然々で」

「…なるほど、右頬と左頬、どつちがいい?」

「(ゴ) (ゴ) (ゴ) めんなさい」

大分落ち着いてきたから、ついうっかり軽口を叩いてしまい、ついうっかり小猫ちゃん
のシャドーパンチを見せられてしまったでござる。

「じ、実は……………」

と、僕が口を開きかけた瞬間、

「いた! ハル! 朱乃さん! こつちです!」

ふあつ!

「ハルトくん!」

僕がビックリしたのも束の間。あつという間に視界が真っ黒に奪われる。ついでに
顔に柔らかくて暖かくて甘い匂いがあるものを押し付けられる。

「驚かせてしまいましたか? でも安心してくださいハルトくん。あれはそういうこと
ではありませんのよ? あれはただ、イツセーくんの左腕に溜まった龍の気を散らして
いただけですの。だからハルトくんが想像しているような事ではありませんの。確か
に私、この部活ではエロ要員ですが、そこまで尻軽なつもりはありませんもの。大丈夫

です、私はまだ処女ですよ？ ええ、それはもう紛れもない生娘。なんなら確かめて見ますか？ では私のお家に——」

僕の頭を撫でながら、姫島先輩が早口で捲し立てて来るけど、今はそれどころじゃない。

「ん—— んん——!!」

悪魔ばうわー（物理）で頭を押さえつけられてるせいで、さつきから息ができなくて死ぬほど苦しい。

……あ、これは死ぬる。

「……朱乃先輩、ハルトが苦しそうです離して下さい」

「———そうですね、まずは身を清めて、その後………あら？」

「ぶっはあ！ 九死に一生！ あ、危なかった………」

途中から意識が朦朧として危なかった。

て言うか、姫島先輩の様子がおかしいんだけど？ 顔を青ざめさせて、少し震えている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいハルトくん！ 本当にごめんなさい！ そんなつもりは無かったの！ ただ私は誤解を解きたただけで………ごめんなさい！」

「お、落ち着いて姫島先輩！ お、怒ってませんし、いま誤解とけましたから！ だからほら、落ち着いて！ 涙もふいて！ ね？」

……………どうしてこの人はここまで……………

このあと、落ち着けるのに30分位かかって、騒ぎを聞き付けたグレモリー先輩が来るまで、そうとうカオスだったと言っておこう。



違うの、そんなことがしたいんじゃないの。そう言うことが言いたいんじゃないの。ただ、私は――

「落ち着いたかしら？ 朱乃」

「……………ええ、リアス、お陰さまで……………みんなは？」

「もう帰らせたわ。それにしてもどうしたの？ 貴女らしくもない」

リアスはまだ湯気の立つカップを私に手渡してくる。中には私を落ち着けるためか、

ココアがなみなみと注がれていた。

「ハルトくんの、誤解を解こうとして……………」

「それで、あそこまで暴走したわけね」

「……………」

私がそこで黙ると、リアスはため息をついて、私の目の前の椅子に座る。

「朱乃、貴女がハルトに好意を持つてるのは、多分あの子以外の全員が知ってることだけど、あの子は多分鈍感だから、きつと口にしないとわからないはずよ？」

「……………ええ、わかってるわ」

「それなら、どうして伝えないの？ 小猫に遠慮してるの？」

「違うわ」

そういうことじゃない。

私が彼にこの気持ちを伝ええないのは、遠慮とかそんな事じゃない。

「私は、彼にそんな事を言っちゃいけないの。この気持ちを見せちゃいけないの」
「どうして？ あんなにいつも彼の事を見てるのに？」

リアスが私の顔を覗き込みながら、グイグイと質問をしてくる。

正直、鬱陶しい。

「なにが貴女をそうさせるの？ 何かあったの？ 相談に乗るわ！」

「……………放っておいて」

「そういうわけにはいかないわ。だって、あなたは私の家族だもの。幼馴染みで、親友で、眷属で、【女王】^{クイーン}で、私の家族。だから——」

「放っておいてって、言ってるでしょ！」

つい、そんな言葉が出てしまった。

その衝動に駆られるまま、ソファーから立ち上がる。

「貴女になにがわかるの!? ねえリアス! なによ、自分が好きな相手と同棲してるからって、そんな余裕そうにしちゃって、だからそんな上から目線なの!」

「あ、朱乃?」

リアスが困惑して、たじろぐ。

「だいたい何よ! 貴女だって告白してないじゃない!」

「そ、それは……………」

「貴女はまだ良いわよ! 何のわだかまりも無くて! 私はわだかまりだらけよ! ハルトくんの大切な物を壊したのは墮天使! そして私も墮天使! こんな私が、彼に意地悪もしていた私が、そんなこと言えるわけじゃない! 私は決めたの! この気持ち伝えるに! 一人で終わらせるんだって! そこに余計な茶々を入れないで!」

「ち、ちが！ 私は、ただ……………」

口ごもるリアスに背を向け、魔方陣を展開する。

「今日はもうほつといて……………一人でいたいのに」

「朱乃！」

リアス呼ぶ声でしたが、それに振り返ることもなく、私は自宅まで転移をしたのだった。

ああ、明日からどんな顔であるの二人とあえばいいんだろうか……………。

第47話

翌日。

今日はなんだか朝から皆がピリピリしていた。

小猫ちゃんに聞いたところ、なんでも今日、教会からの使者が来るのだそうだ。

……………でも、それだけじゃないような？ 部室で使者を待つグレモリー先輩と朱

乃先輩。

表面上はいつも通りなんだけど、何て言うか、こう、ギスギスしているような、気ま
ずそうな、そんな気配を感じる。

なんかあつたんだろうか？

不意に、ノックの音が部室に響く。それにグレモリー先輩が返事をする、
「失礼する」

という言葉と共に二人の女の人が入ってくる。

一人は茶髪だけど、見るからに日本人、あるいは東洋人の顔立ちの人、もう一人は青
髪に緑のメッシュが入っている。

「ハアイ、イツセーくん。昨日ぶり」

目が合ったのか、茶髪の人がこちら、というか、僕の隣にいるイツセー兄ちゃんに手を振ってくる。

「兄ちゃん、知り合い？」

「まあ、あれだ、幼馴染みって奴。お前と会う前に引つ越していった奴だよ」

そんなやり取りをする僕たちをよそに、先輩たちと彼女たちの会談が始まった。

「先日、教会からエクスカリバーが盗まれました」

兄ちゃんの幼馴染みの人が言った言葉に、僕とイツセー兄ちゃん、そして先程から鋭い視線を二人に向け続ける木場先輩が反応する。

「エクスカリバーって、まさか……………」

「ああ、木場、もしかして」

「そうだよ、イツセーくん、ハルトくん。あの時フリードが持っていた剣、あれがそうさ」
すると、僕らのやり取りが聞こえていたのか、青髪の人が僕らに声をかけてくる。

「ほう？ どうやら既に戦った後のようだな？」

「ああ、つい最近な」

「確か……………何て言ったっけ？ ら、らラピッツ？」

「エクスカリバー・ラピッツリイ天閃の聖剣」だよ、ハルトくん」

「あ、そう、それ」

その答えに、青髪の人も茶髪の人も同時に考え込む。

「ゼノヴィア、どう思う?」

「どうもなにも、イリナ、私たちじゃラピッドリイの速度に着いていけるかどうか」

「そう言うことでは無くて、相手方の聖剣保持者のことよ」

「どれくらいいるかってことか?」

「ええ、盗まれた聖剣は三本。エクスカリバー・ラピッドリイ天閃の聖剣とエクスカリバー・ブレッシング祝福の聖剣、そして

エクスカリバー・トランスベアレンシ透明の聖剣。うちの天閃の方は担い手がもういるみたいだけど、もう二本はどう

なのかしら」

どうやら、敵の戦力把握をしようとしているみたいだ。

イリナと呼ばれた茶髪の人が口に手を当てて思考を巡らせている。すると、隣に座る

ゼノヴィアと呼ばれた青髪の人がお茶をすすりながら、こんなことを言った。

「難しい話なら私はわからなくて、そういうのはお前の専門だ」

……………それで良いのか教会の使者。

多分、そう思ったのは僕だけではないはずだ。現にそれを言われたイリナさんが思考をやめて、ゼノヴィアさんをギョロリと睨み付ける。

「あなたね、たまにはその頭を使いなさいよ! 飾りなの!」

「なに、いざとなればデストラクションとアレを使えば良いだけだろう?」

「アレの使用には許可がいるでしょ! 全く、これだからカトリックは。古臭い考えに捕らわれ過ぎて頭まで固くなったの?」

「なんだと!?! カトリックは関係ないだろう! このプロテスタント!」

「ちよつと! プロテスタントを悪口見たいに言わないでくれる?」

あ、あれ? なんか喧嘩始まってない?

「え、あの、お二人とも、喧嘩は……………」

突然の事に面食らつてあうあう言いながらもアーシアさんが二人の喧嘩を止めに入る。

「む、誰かと思えば、もしや『魔女』アーシア・アルジェントか?」

……………はい?」

「え……………」

「そうなの? イッセーくんのお家で会ったときにまさかとは思ってたけど、ここにいたんだね、『魔女』さん」

『魔女』？ 今、あの二人は魔女って言ったのか？ アーシアさんを？

その瞬間、部室の空気が変わった。

話の重要性に対する緊張感から、戦闘時の緊張感に。

「癒しの力を与えられながらも、その力を悪魔にまで使った裏切り者。悪魔をも癒す、『魔女』。そんな君が今は悪魔か。これは傑作だな」

「ああ、安心して？ あなたが悪魔になっていたことは、上には黙つといてあげる。あなたを『聖女』として慕っていた人たちが傷つくだろうからね」

そんな言葉を言われ続けているアーシアさんは、下唇を噛んで、スカート裾を握りながら震えていた。

正直、見ていられなかった。

「しかし、なぜ君はいまだに信仰心を持っている？」

「それは……………」

「私はそういうのに敏感でね、君がまだ主を信仰していることくらい、見ていればわかる。だが、なぜだ？ 君は主を裏切り、魔女に堕ちた。それなのに、なぜ？」

「わ、私は、主を裏切つてなんか……………」

「ああ、いい、そういう御託は聞きたくないんだ。これはただの自問だからね。それで、これは提案だ。」

——君、私たちに斬られろ」

「——」

「信仰心を持っていているならば、そしてその背信が罪悪感となるならば、私たちが君を、この聖剣で斬ってやろう」

「そう言いながら、ゼノヴィアは背負っていた布を手を持つ。恐らく、あの中に聖剣があるのだろう」

「主は心優しい。ならば、君の事も赦してくれるだろう、魔女アーシア」

そこまでが、限界だった。

「ふぎけるな！」

そう叫んだのは僕で、同時に兄ちゃんや先輩たちが、アーシアさんを庇うように立ち

上がる。

「魔女？ 裏切り？ 背信行為？ ふざけるなよ！ お前たちにアーシアさんの何がわかる！ アーシアさんの優しさの、何がわかる!!」

アーシアさんは優しく、大人しい人だ。だからこそ、この二人に口答えなんかしなかった。

だったら僕がしてやる。

アーシアさんの代わりに、アーシアさんの為に。

「優しさ？ 悪魔を癒すのだから、卑しさの間違いだろうか？」

ゼノヴィアが嘲るように笑う。

「そうね、神から与えられた神聖な力を貶めたんですものね」

「黙れよ！ いくらイツセー兄ちゃんの幼馴染みだからって、僕は許さないぞ！ 何が

神聖な力だ！ 何が貶めただ！」

「事実だろうか？」

「違う！ 神セイクリッド・ギア器は、……………あの癒しの力は！

「神セイクリッド・ギア器で悪魔が癒せるってことは、それこそ神様の望みなんじゃないの!? アーシア

さんが優しくなったから、慈愛に溢れていたから、だから神様はアーシアさんに

【聖母トワイライトヒールンクの微笑み】を与えた！」

僕の言葉に、二人は少し面食らったような顔をする。

「アーシアさんの光に触れたことがあるか？ 暖かいんだ、あの光は。柔らかくて、暖かくて、優しい光なんだ。それが卑しい力な訳がない！ きつと神様がそう願ったんだ。だから悪魔も、墮天使も癒すことが出来る！」

「そ、それは詭弁だ！ アーシア・アルジエントの心が穢れていたから！」

「それこそ詭弁だ！ あんたたちは、アーシアさんの力を、セイクリッド・ギア神器を否定した。神様が作ったセイクリッド・ギア神器を！」

そこまで言って、少し息を整える。

少し熱くなりすぎた。頭に血が上ると抑えきれなくなるのは、悪い癖だ。

「神様が作ったモの神器を否定する。それこそが背信行為なんじゃないの？」

僕がいい終えると、肩に手が置かれる。

振り替えるとそこには、親指を立てて笑っているイツセー兄ちゃんと、涙を流しながら、僕の腕の裾を握っているアーシアさんがいた。

「ふぎ、けるな……………私たちが間違っている？ 教会が間違っていると、貴様はそういうのか！」

「うん、そうだよ」

「……………そうか、そうか」

激昂したゼノヴィアにそう答えると、彼女は小さな口調でその言葉を繰り返す。

そして顔を上げると、その顔には激怒というか言葉でも物足りない、憤怒の表情が浮かんでいた。

その隣のイリナは、激怒とまではいかななくても、やはり納得の行かないような顔をしている。

「ならば私は、貴様を斬る！」

そう叫んだ彼女は、一息に剣を抜き放つ。

「貴様は私達はおろか、教会や、挙げ句には神すらも侮辱した！ 故に、斬る！」

そう言つて、聖剣の切っ先を僕に向けてくる。

『ほう？ 主に剣を向けるか、小娘が』

『あのようなちやちな剣で、我が君を傷付けようなど……………愚かな』

『では、愚か者にはそれ相応の罰が必要ですね？』

僕の中で、アラガミたちが怒りにドスの効いた声でそういつてくる。

「貴様、名はなんという？」

「……………神結悠斗」

「ならばハルトよ、外に出ろ。貴様を断罪してくれる」

そう言い残し部屋を出ていく彼女に、イツセー兄ちゃんが食つてかかろうとするが、

僕がそれを引き留める。

「ここは僕に行かせて、兄ちゃん。僕今、怒ってるんだ」

「けどよ！」

「なら、もう一人の方くらいは僕に任せてくれないかな？」

「木場先輩……………そうか、聖剣」

「そう言うこと」

僕が頷くと、木場先輩はその顔を歪ませて、獰猛な笑みを浮かべのだった。

三人とも、今回の敵は人間だけど、力を貸してくれるかい？

『ふっ、主よ、それは愚問と言うものだ』

『主君の身を守るのが、拙者たちの務めであり存在意義』

『あのような小娘が我が君を傷付けるなど、どうして赦せましょうか』

『『かならず喰い殺してくれる！』』

……………いや殺さないよ!?

第48話

「最初に言っておくが、私は貴様が人間だからと言って、手加減する気は毛頭ないからな」

校庭に下り、僕と向き合うと開口一番、彼女はそう言つて来た。

「望むところだね」

僕らの隣でも、木場先輩とイリナさんが互いの剣を手に向かい合っている。

「んー、私としてはイツセーくんと戦いたかったんだけどねえ。ま、君も聖剣には思うところがあるみたいだね」

「そんな御託はどうでもいい。始めるよ」

二人のやり取りを一瞥したゼノヴィアさんは、こちらに剣を向けながら笑みを浮かべる。

「さて、君も武器を取りたまえ。それくらいは待つてやろう」

「そうかい。………来い！ 神機！」

『主よ、蹴散らすぞ！』

『あのような小娘など、妾たちにかかれば』

『恐れるに足りません!』

剣形態のままの神機を見た教会組二人は、少し物珍しそうな表情で、神機見つめてい
る。

「おもしろい形の武器ね? 見たことないわ」

「それが貴様の神セイクリッド・ギア器か。まあ、聖剣には敵うまい」

……………って言われてるけど?

『ふん、なにも知らぬ小娘が』

『さあ主君! 行きましようぞ!』

『我が君に勝利を!』

互いに剣を構えて向かい合う。

剣と剣で戦うのはこれが初めてだ。試合のような、なんのセーフティも無いこの状況
じゃ、下手をすればただじゃ済まないのかもしれない。

けれども、心に迷いは無かった。

あるのはただの怒り。大切な友達を侮辱された怒り、大切な友達を泣かされた怒り。
結局、彼女の涙を止めてあげられなかつた怒り。

空気が緊張する。張りつめた糸のように、静かな水面のように。

さつきまで、僕を必死に呼んでいたアーシアさんの声も聞こえない。

この空気に気圧されて黙ったのか、それとも単に僕の耳に入っていないのか。

沈黙を終わらせるように、ゼノヴィアさんが声を張り上げる。

「では行くぞ、神結ハルト！ 懺悔の用意はできたか！」

「そつちこそ、アーシアさんに謝る準備はできたかな！」

動き出したのは同時。

飛び上がったゼノヴィアさんが上から、走り出した僕が下から、同時に剣を振るう。

と、ゼノヴィアさんが唐突に、その口に笑みを浮かべる。

「悉くを砕け！エクスカリバー・デストラクション【破壊の聖剣】!!」

「っ!？」

剣と剣が触れ合った瞬間、爆音が響いた。

僕を中心に地面はひび割れ、抉れる。

そんな剣を受け止めた僕には、予想だにできなかった衝撃が襲いかかる。

「ぐう……ブラッドアーツ！ 【斬鉄】！ っらあ!!」

その衝撃をしたに逃がしながら、なんとかブラッドアーツで対応する。

『主！ 無事か!？』

「そつちこそ！ 大丈夫!? マルドウーク！」

『なんのこれしき！ いくらでも打ち合つて見せようぞ！』

「……………今の一撃を食らつて無事とはな。予想以上の硬さだな、その剣」

「それは、誉められてるのかな？」

「それでどうかな？ エクスカリバーの威力は？」

「へんつ、大したこと無いね、聖劍つて」

「ふん、神の加護も受けられないような異教徒が！ 舐めた口を聞くな！」

あれくらい挑発に乗るなんて、沸点の低い人だ。……………僕も人のこと言えないけどさ。

『神の加護を受けていない、か……………』

「どしたの？ マルドウーク？」

「はあ！」

「くっ！」

『この娘が言うように、神の加護とやらが勝敗に関わつてくると言うのであれば

……………クククッ』

『それこそ、この娘に勝ち目などありません』

「ええい、ちよこまかと！」

「ソニック・キャリバー！」

「くっ！」

……………それは、どういう意味さ？

『主君、あなたが今使っている武器はなんでしょうか？』

神機だね。

『妾たちは、なんでありませんよう』

アラガミ、だね……………あ、そう言うことか。

『如何にも！ 我輩たちはアラガミなり！』

『厳密に神とは言えなくとも、その名に神話の名を』

『その総称に神の文字を持つ！』

『故に我輩は、我らは主を守ろう！』

『主君の加護となろう！』

『なぜなら妾達は！』

『『神にあらぬ神！ アラガミなのだから！』』

『たかだか一神のみの加護を受ける者に、主が負ける訳がない』



なんなんだ、この男は。

悪魔でもないのに、悪魔と一緒にいて、魔女を魔女と呼んだだけで怒り、そして私たちを、教会を侮辱した。

悪魔を癒せる力が神の望みだと？ ふざけるな。神と悪魔は相容れぬ存在。

なればこそ、神が悪魔を癒す訳がないのだ。神の愛は決して、悪魔と墮天使に向けられる物では無いのだから。

それなのにこの男はそれを否定した。

なにが優しさだ。悪魔に優しさなどいらぬ。悪魔は人を惑わす悪だ。私が出会ってきた悪魔は総じてそんな奴らばかりだった。

けれどもこいつは、それすらも否定するのだろうか。

ああ、イライラする。

なんだってこんなにイライラするのだろうか？

攻撃が当たらないから？ 奴の神器武器が壊れないから？

違う………と思う。

けど、ならばなんなんだ、この苛立ちは何？

「【波濤斬り】！」

「くっ！」

強い。

見た目からは想像できない強さだ。

神の祝福も、加護も受けていない癖に、なぜ聖剣に耐えられる？
だぞ？ 今まで壊せなかった物は無いはずなのに。

「小賢しい！ ああ、小賢しい！」

「そんな闇雲に振り回す剣で、僕に当たると思わないでよね！」

「調子に乗るなよ、異教徒が！」

鏢競り合う。競り合えてしまう。

壊れない。壊せない。

まるで剣に意識があつて、壊れることを拒否しているように。

【破エクスカリバー・テストラクション壊の聖剣】

そもそも、あの神セイクリッド・ギア器はいつたいたいなんなんだ？ あの形といい、あの不可思議な技といい、聞いたことが無い。

「落花ノ太刀・紅」！

「ちいっ！」

赤く伸びた刀身の降り下ろしを喰らい、その威力を殺すためにバックステップで距離を取る。

思った以上に吹き飛ばされてしまった。

だが、この程度の距離なら！

直後、私が認識したのは、まるで銃器の発砲音のような音と、何か当たって幹が砕け倒れる木の姿だった。

「なっ……………」

「ち、腕を狙ったんだけどなあ。外したや」

神結ハルトの方を向くと、奴は片膝をついて、自分の武器をこちらに向けている。

その武器の先端からは、硝煙のような煙が上がっている。

……………発砲した？ あの剣が？

いや、違う。

形が変わっている。あれは剣じゃない。

「銃、だど？」

呆然とする私をよそに、奴はなんでもないかのように、照準を私に向けてくる。

「くそっ！」

とつさに横に飛ぶと、先程まで私の右足があつた場所に風穴が穿たれる。

だが、第三射を許すほど、私は甘くはない。

あの姿勢、あの音からして、あの銃は恐らくスナイパーライフルか、それに類する単発特化のハズだ。

たとえリロードが早かったとしても、あの長さならば懐に入りさえすれば……………

「もらったー！」

案の定、リロードはできても、至近距離は狙えないようで、一瞬だけ奴の動きが止まる。

すぐさま剣の状態に戻した反応の早さには感嘆するが、それでも、この距離は貰ったも同然だ。

「ハルトさんっ！」

魔女の悲痛な叫び声が聞こえるが、もう遅い。

このまま振り抜けば、この聖剣が奴の上半身ごと持っていくだろう。まあもちろん寸止めくらいはするが。

「サリエル！」

「なにっ!？」

しかし、勝利を確信したのは一瞬の事だった。

金属と金属のぶつかる甲高い音が響いたと思うと、気がつけば私の剣はまたしても止められていた。

………まるで白銀の蝶のような、大きな盾に。

まさか、盾にもなれるとは。

ふと、顔を見上げる。

その瞬間、私の背中になんとも言えない怖気が走る。

なぜならその顔は、嗤っていたのだから。

この距離に入った私を嘲るように。獲物を捉えた餓えた狩人のように。

「……ブラッドアーツ【IE零式】——」

奴の剣の前、私と奴の間に、バレーボールサイズの光の球が浮かび上がる。

マズい。

本能が警鐘をならす。

これはマズい。危ない。殺される。

この男は、私を、殺s——

「——ぎゃ……っ!？」

「ハルトさん!!」

そんな奴を止めたのは、驚くことに魔女アーシアだった。

私が散々扱き下ろし、罵倒し、蔑んだ相手が私を助ける。

なぜだ？ 私は恨まれているハズなのに。

直面した死への恐怖と、魔女の不可解な行動への疑問で、私の体は動くことを止め、その場にへたり込む。

「ダメですハルトさん！ 殺しちやダメです！」

「アーシア、さん？」

「お願いです……………私の為に、私なんかの為に、ハルトさんが誰かを傷つけるなんて、そんなのダメです……………」

泣いていた。

その魔女は、私を殺すなど、誰かを傷付けるなど、泣いていた。

「なんなんだ、お前らは……………」



途中から、僕は意識がありながらも、無意識に行動していた。

アラガミ三人の力が流れ込んで、体が凄く軽くなって……………それと、少しお腹が空いている。

多分、アーシアさんが止めてくれなかったら、僕は目の前のこの人を殺してしまっ

いたのだろう。

アーシアさんが泣いている。

私なんかの為に人を傷付けるなど。その手を汚すなど。

「私なんか、なんてそんなこと言わないでよ、アーシアさん。そんなこと言われたら、僕が悲しくなっちゃう」

「ハルト、さん？」

僕の腕にすがり付いて泣いているアーシアさんの頭を撫でる。

周りに視線を配ると、隣の戦いは終わっていて、何故か木場先輩の姿が見えないし、小猫ちゃんといりなさんの服がビリビリに破けている。

……………あとで兄ちゃんには説教だな。

「アーシアさんが、私なんかかって自分を下卑したら、僕が怒った意味が無くなっちゃうじゃないか。まあ、確かにやりすぎだったとは思うけどさ」

「……………一つ、聞きたい」

座り込んでいたはずのゼノヴィアさんがいつのまにか立ち上がり、僕の方を見つめながら声をかけてきた。

「なに？」

「お前は どうして……どうしてその女のためにそこまで怒れる？ 情愛の深いグレ

モリー眷属ならまだしも、お前は人間じゃないか」

なんだ、そんなことか。

あまりに滑稽な質問に、つつい笑みが溢れる。

「な、なにが可ましい！」

「だって、あんまりにも愚問だったから」

「愚問だと？」

ああ、愚問だとも。

だって——

「大切な友達を侮辱されて泣かされて、怒らない理由なんてある？」

「——」

だから怒った。だから戦った。

アーシアさんは大切な友達だ。

—
僕の、
一番大切な。

第49話

「……………」

「……………」

「……………」

とあるファミレス。

そこに、尋常ではないくらいに不機嫌のオーラを放つ三人がいた。

「……………おい兵藤、何とかしろよ」

「……………俺に死ねと？」

「この発端はお前だろうが！」

「…ハル、落ち着いて」

正確には六人だが。

「えー、あー、その、うん、三人とも？」

とりあえず、その場を何とか修めるために、俺は恐る恐る声をかける。

「……………」

無言で見つめ返してくる三人。怖え。

「い、色々思うところはあるだろうけどさ、と、と取り敢えず飯にしようぜ？ な？」

俺の提案に、一応頷くハル、イリナ、ゼノヴィアの三人。

……………あー、ハル呼ばなきゃ良かったかなあ……………でもハブったらハブったで後々面倒だしなあ。

先日激しい口論の末に、決闘まで行った彼らがなぜ同じ場所に居合わせたか、その理由は数時間前に遡る。



「嫌だあああああ!! 俺は帰るんだあああああ!!」

「落ち着け匙! 大丈夫! エクスカリバーをぶっ壊すだけだから! 部長と会長に

黙って!」

「全然大丈夫じゃねえじゃねえかボケえええええ!」

「大丈夫だ、問題ない」

「大ありなんだよ!!」

天下の往来、人々の行き交う駅前で、恥も醜聞も機密も関係なく匙が悲鳴をあげる。周りの人達が何やら見てくるけど、そんなのは関係ない。

「はあ、そんなに嫌か？」

「当たり前だ俺まだ死にたくない」

「……………仕方ない」

「おおー！」

「小猫ちゃん、卍固め」

「…了解です」

「あんぎやあああああああ!!」

再び匙が悲鳴をあげる。バカめ、素直に頷いておけば良いものを。ふーっはっはっはっはっ！

「さて匙くん？ 会長の手によって（精神的に）死ぬのと、ここで俺たちによって（社会的に）死ぬの、どっちがいい？」

「悪魔か貴様?!」

「お前もな」

「鬼！ 悪魔！ 人でなし！」

「ふははは、誉め言葉だ」

そこに、小猫ちゃんがポツリと呟く。

「…匙先輩……………手伝って、くれないんですか？」

な、泣きそうな声音と涙目のコンボ、だど!?

流石小猫ちゃん！ 小悪魔的！ 恐ろしい子！

「搭城さん……………つて痛だだだだ!! 待ってそろそろ肩が限界！ 外れる！ 肩が外れちゃう！」

まあ、叩固めが全部台無しにしてるんだけど。



「うー、まだ痛えよ……………」

匙が体のあちこちを揉みながら恨みがましくぼやく。

「素直に協力すると言えば良いものを」

「お前ホントに俺と同期かよ……………悪魔過ぎる」

「まあ、ぶっちゃけ、ハルのやり方なただけだなこれ」

「……………あんな顔して中身悪魔かあいつ」

その後、目的の詳細を話し、平和的に（暴力が無いとは言っていない）協力を取り付け、今はあの教会組二人を探している最中だ。

「しかし、そう簡単に見つかるかね」

「あの二人、結構派手な格好してたからな、案外すぐ見つから……………」

「えー、迷える子羊にお恵みをー（棒）」

「どうか、天の父に代わって哀れな私たちにお慈悲をおお！（泣）」

「……………」

いた。

めっちゃ簡単に見つけた。

つかないように？ ゼノヴィアは棒読みだしイリナ泣いてるし！

そのあと何やら聖人だのペトロだのと口論が始まり、その流れから脅すだの襲撃だの

大道芸だのと話が転がり、また口論に発展する。

「これは……………」

目立つなんてもんじゃない。うるせえ。

そんな二人に声をかけた後、なんやかんやあって、匙の提案で何故か俺の奢りで昼飯を取る事になって（解せぬ）、何を思ったか俺はハルに連絡してファミレスで待ち合わせ、

そして冒頭に戻る訳だ。



「……………おかわり」

三人が同時にこちらに皿を突き出してくる。

「お前らホントは仲いいんじゃないの!？」

なんなのコイツら。胃袋どうなってんの？　なんで定食五回もお代わりすんの？
おかしくない？

止めて！　僕の残金はもう0よ！　小猫ちゃんに軽く借金するから実質マイナスよ
！

そう告げると、奴らは自分のお皿を者足りなさそうに見つめた後、

「なら、あれで」

指差したのはこのファミレス名物、『10kgパフェ。時間内に食べきれたら賞金諭
吉二人』

躊躇いなく、一糸乱れぬシンクロ率100%で同時に指を指す彼ら。

バケモンかよコイツら。

「…あ、これなら私も」

バケモン一人追加。

結局、話は四人がパフェを食べ終わるまで始まらなかった。

挙げ句途中には少し機嫌の治ったハルと小猫ちゃんがあーんしたり、イリナとゼノ
ヴィアがパフェに乗ってるイチゴやらチョコレートを取り合ったり。

ホントなんなの、お前らの胃袋。ブラックホールかよ。

……………嗚呼、斯くも儂き哉、男子高校生の御財布。

などと嘆いていると、俺の目の前に座ったゼノヴィアが口を開く。

「それで、私たちに接触した理由は？」

「おいおい、礼も無しかよ」

横柄にそう切り出した彼女にちよつとカチンと来て、俺はそう返した。

「む、確かにそうだな。悪魔に感謝するのは業腹だが、救ってもらったのは事実だしな」

「そうねえ、ああ、主よ、心優しき悪魔に感謝を。アーメン」

目の前で十字を切る二人。頭痛の走る三人。

「あ、ごめん」

イリナがてへつと、自分の頭を軽く小突く。

気を取り直して、俺はさっきの質問に答える。

「エクスカリバーの破壊に協力したい」

瞬間、二人の雰囲気ガラリと変わり、戦士のそれとなる。

「イツセーくん、それってどれだけ危ないことか、わかってる？」

「危ない？ そりゃ確かに聖剣は悪魔俺達の天敵だけどき」

「そうじゃない、兵藤一誠。問題は壊した後だ」

「壊した後？」

ゼノヴィアの言っていることの意味が分からずに首を傾げる俺に、二人は溜め息を吐く。

「まあ、悪魔になりたてなら分からないのも当然………かな？」

「つまりだな兵藤一誠、『悪魔』が『聖剣』を壊す。それが問題なんだ」

「………あつ」

俺以外の三人。ハル、小猫ちゃん、匙が同時に声を上げる。どうやら合点がいったようだ。

かくいう俺も、流石にここまで言われればある程度の予想はつく。

つまり、

「悪魔俺達が聖剣、ようは教会または天界の持ち物を壊したら、天界と冥界の確執が深くなるって事か？」

質問したのは匙だ。流石生徒会だけあって、頭の回転が早い。

「……それだけじゃありません。今回敵対するのは墮天使。これが墮天使の組織的な活動

だとしたら」

「その二つを、兄ちゃん達は敵に回すって事だね」

うーむ、そう考えると実に厄介だ。

「私たちは別に構わない。むしろ賛成だ」

「正直、私たち二人でコカビエルと戦うのは無理だからね」

「食事の借りもあるからな、出来るだけ擁護はするつもりだ。だが」

「墮天使がいちやもん着けてきたら、私たちにはどうしようも無いけどね」

確かに、これは余りにメリットが少なすぎる。

いや、損得で動いている訳じゃないけど、ここまで後々面倒になるんなら……………

「兄ちゃん」

思考に沈む俺の耳に、隣に座ったハルが声をかけてくる。見れば、ハルは何かを訴えるような強い意思の籠った眼差しで、俺を見ている。

……………バカか、俺は。

「なんで、ダチを助げんのにこんなグダグダ考えてんだか。」

「ああ、それでもやらせてくれ」

「良いのかい？ 君の主が不利になるぞ？」

「そんなときや、はぐれにでもなつて討伐されてやるさ」

「イツセーくん、そんな軽く……………」

「ダチを助けるんだ、これくらいどうつてこと無いね」

「そう言つて俺は笑う。笑つて見せる。」

「ハルも匙も小猫ちゃんも、危なくなつたらいつでも降りて良いからな」

「…先輩」

「兵藤、お前……………」

「これは元々俺の独断だ。そこまで付き合わせる必要は無い」

「なら俺は今すぐおら——」「バカだね、兄ちゃんは」

不意に、さつきまで黙つていたハルが口を開く。

「木場先輩は僕らにとつて大切な仲間でしょ？ その仲間のために行動するんだ。どんなに危険でも絶対に降りないよ。僕は」

「…私も、降りません。祐斗先輩に、いなくなつて欲しくないから」

ハルと小猫ちゃんの、一年生組二人がそう告げてくる。全く、良くできた後輩と幼馴染

染みだよ。

「なるほど、それが僕を呼んだ理由かい？」

不意に、後ろから声がかけられる。

「つてまあ、俺が呼んだんだけどな。」

「おう、木場。遅かったじゃねえか」

そこには、イリナとゼノヴィアを不機嫌そうに見つめる木場が立っていた。

「全く、イツセーくん、君って奴は」

「つせーな、良いだろ」

「良くないよ。僕の事情に君たちを巻き込むなんて」

「けっ、一人でカツコつけてんじゃねーよ、このイケメンが」

店員が持つてきた椅子に座る木場は、俺の言葉に少し戸惑ったようだ。

「べ、別にカッコつけてる訳じゃ……………」

「へっ、一人で抱え込んでシリアス気取って俺達に心配させる。これのどかがカッコ付けてないってんだよ」

「僕は、そんな」

「だー、ウジウジうるせえ！ いいから協力させろ！ 卍固めすんどオラ！ 小猫ちゃんが！」

そういうと、少し驚いたように目を見開いた木場は、そのあと何か眩しい物を見るように目を細めて、俺を見てくる。

「んだよ」

「…………いや、カッコいいなって」

「やめろ気色悪い！ それはハルにだけやれぶるふあ!!」

小猫ちゃんに殴られた。ついでにハルに蹴られた。死ぬほど痛い。

「…バカな事言うと殴りますよ、イツセー先輩」

「アホなことばかり言うて蹴るからね、イツセー兄ちゃん」

「……………はい」

床に倒れる俺を一瞥したあと、小猫ちゃんが木場に居なくならないでと、匙にやった

涙目涙声コンボよりも心の籠ったそれをやり、ハルが

「だって先輩がいなくなっちゃ、部活の楽しさが減っちゃうよ。皆揃つてのオカ研でしよ?」

と笑顔を見せ（ここで見た木場の鼻血は無かつたことにしてやろう）、結局木場は了承し、俺達とイリナ達との限定的な同盟が成立したのだった。

「……………あれ？ 何この雰囲気？ 何この、俺は降りる！ つて言えない雰囲気……………ええー」



『お兄ちゃん！』

木の上で昼寝していたオレの耳に、声が届く。

『あん？ んだよガキんちよ』

見下ろすと、そこには栗毛に眼鏡、そして白い服を着た少女が立っていた。

『ガキんちよじゃないよ！ 私にはキヤサリンって名前があるもん！』

『名前くらい知ってらあ。ガキはガキんちよで良いんだよ。で？ 俺に何の用だ？』

『用じゃなくてね、そんなところで寝てたら風邪引くよ？』

『けっ、鍛え方が違うんだよ』

そう言つて木から飛び降りる。

『やつぱり、聖剣が使えるから？』

『あん？』

急に声が小さくなった少女を、俺は上から見下ろす。

『私も、いつかなれるかな、お兄ちゃんみたいに』

『俺みたいって……………けっ、やめとけやめとけ、こんなロクデナシ』

『ロクデナシじゃないよ！ お兄ちゃんは凄いもん！ 私たちに色んな事教えてくれる

し、優しいし、強いもん！』

『……………』

やめろ。そんな目を向けるな。

そんな尊敬されるような奴じゃねえんだよ、俺は。

『……………ま、何にせよ、俺みたいには絶対になるんじゃねえぞ』

キャサリンの頭をグリグリと撫で付け、そのまま背を向ける。

『行つちやうの？ お兄ちゃん』

『おう。日本って国でお仕事だ。皆によろしくな』

俺がそう告げると、彼女は少し寂しそうな顔をする。

だから少し立ち止まって、振り返る。

『心配すんなよ。土産話沢山抱えて帰ってくるからよ』

『……………うん、わかった』

キャサリンが頷いたのを見届けて、今度こそ歩き出す。

『いってらっしゃい！ フリードお兄ちゃん！』

その声に、俺は振り返らずに手だけを上げて応えた。



「ふああ……………」

眠っていた布団から起き上がり、欠伸と背伸びをする。

外はもう真つ暗で、月明かりが電気の点いていない室内を照らす。

日中まともに外を出歩ける訳がないので、ここ最近昼間は寝てばかりだ。

ここは、コカビエルから与えられた部屋で、ベッドと机以外、枕元の聖剣しか無い小さな部屋だった。

「あいつら、元気にやってっかな」

先程まで見ていた夢の内容を思い出す。

あそこは、俺が良く行く孤児院で、コカビエル直轄の施設。

あいつらは、聖剣因子を持っているため、放っておけば教会につれていかれ、因子を取り出されてしまう。

因子を取り出せば、俺の同胞たちの様に殺されてしまう。それを防ぐために、コカビエルが施設をつくり、孤児を引き取っているのだ。

「ふう、今日も今日とて頑張りましょうかね」と

黒いコートを羽織り、腰に剣を携えれば準備完了。

こうして俺、狂ったはぐれエクソシスト、フリード・セルゼンは今日も、夜の町に繰り出すのだった。

第50話

「それで、遺憾ながら僕らは協定を結んだ訳だけど、まさか情報の共有はしない、なんて言わないよね？」

優雅に紅茶を一口飲んだ木場先輩は、挑発的な笑みを浮かべてゼノヴィアさん達に問いかける。

「無論だとも。だが、今回の首謀者が墮天使と言うところまではわかっているが、その名前までは特定できなかった」

「なら協力者は？」

「こちらはわかつている。皆殺しの大司教バルパー・ガリレイと、はぐれエクソシストのフリード・セルゼンだ」

「なるほど」

そう頷いた木場先輩の顔には、笑顔が浮かんでいた。でもそれは、いつもの爽やかな物じゃなくて、底冷えるような、憎悪と歓喜に溢れた笑顔。

「先輩」

「ん？ なんだいハルトくん」

「先輩、この戦いで死のう、なんて考えて無いですよね？」

「っ、何を」

「何となく思ったんです。責任感の強い先輩だから、今回の件でグレモリー先輩に迷惑がかかるからって、無茶なことしそうで」

「確かな理由はない。でもそう思うんだ。」

自分が暴走すればグレモリー先輩に迷惑がかかる。だったら自分が『はぐれ』になつて殺されれば、その心配は無くなる、なんて考えてそうで。

「……………大丈夫、そんなことはしないさ」

「約束ですよ？ 僕は嫌ですからね、部員の誰かが欠けるなんて」

「誰にもいなくなつて欲しくない。」

これは僕の偽らざる本心だ。誰かが死ぬのも、誰かが泣くのも、僕は見たくない。

——もう二度と、大切な人を失いたくないから。

……………ん？ 二度と？ 変だな、僕は誰かを失つた事なんて無い筈なのに。

「…私も、祐斗先輩にいなくなつて欲しくないです」

小猫ちゃんも、木場先輩の袖にすがりつく。

「…誰かがいなくなるのは、悲しいです。……………独りは、寂しいです。だから、居なくならないで」

小猫ちゃんが悲しそうな表情を浮かべる。

そしてそれは、決して作り物ではなく、小猫ちゃんが心の底から嘆願していることだつてわかる表情だった。

木場先輩は、困惑しながらも笑つて小猫ちゃんの頭に手を置いた。

「大丈夫だよ、小猫ちゃん。僕はいなくならない。たとえどんな罰を受けたとしても、君達の思いに答えてみせるさ。だから手伝つてくれ。」

エクスカリバーを倒すのをさ」

そう言つて、先輩はいつもの爽やかな笑顔を浮かべたのだった。

「あの……………」

僕らオカ研組が喜んでおると、横から控えめな声上がる。

みんなが顔を向けると、そこにはなんだか肩身の狭いような匙先輩がちよこんと手を上げていた。

「どうした、匙？」

「どうしたじゃねえよ兵藤。俺、全くの部外者だから話の流れがわかんねえの！何がどうなって木場とどう関係してんの!？」

「はあ……………」

「ため息つくな！ え？ これ妥当な質問だよね?」

兄ちゃんと匙先輩のやり取りはしばらく続いたが、木場先輩が紅茶を飲んで発した言葉で、みんなが静かになった。

「少し話そうか。イツセーくん達も、少ししか知らないだろうからね」



そうして語られたのは、『聖剣計画』と呼ばれたおぞましい実験内容だった。因子を持った少年少女。

苦痛を伴う非人道的な実験。

子供達の将来の夢、希望。

彼ら彼女らはいつもいつも楽しそうに語ったと言う。

いつかは立派なエクソシストになって、みんなを守るんだとか、司祭になるんだとか、お嫁さんになりたいなとか、はたまた、教会とは関係の無い、パティシエやパイロットになりたいと言う子までいたらしい。

けれども奪われた。

けれども殺された。

聖剣の為に。そのためだけに。

因子が聖剣を持つまでに届かなかったからと言う理由で。

「撒かれた毒ガスにもがき苦しみながら、みんなが僕に言ったんだ。まだ毒ガスの影響が薄くて、立っていられた僕に」

——あなたは逃げて。そして生きて、と。

「なんとか逃げ出せたけど、絶望的だった。苦しくて寒くて、血反吐を何度も吐いたけど、僕は歩き続けた。皆の為に、皆の願いの為に。」

神様は助けてくれなかった。何度も願ったのに、何度も祈ったのに」

そう語る先輩の顔は悲しみに染まっていて、膝に置かれた拳は強く握り込まれていく。今でも悲しい記憶なのだろう。

「だから僕は憎んだ。教会を、神様を、そして元凶である、聖剣を」

先輩は自分の右手を見つめ、その後強く握りしめて、自嘲気味に笑う。

「そうして僕の神セイクリッド・ギア 器は目覚めた。

ふふ、皮肉なものだね。聖剣を憎んで憎んで、その果てに手にしたのが悪魔としての生と、魔剣の力だなんてさ。あの頃目指していたものと、全くの正反対じゃないか」

「…後悔、してます?」

「後悔なんかするものか、小猫ちゃん。僕は悪魔になったからこそ、皆に出会えた。魔剣を手にしたからこそ、悪魔になれた。喜びこそすれ、後悔なんかするはずも無いじゃないか」

不安げな小猫ちゃんの頭に手をのせて、木場先輩はハッキリと言いつつ切った。

僕らの間に、沈黙が漂う。

皆、教会組の二人ですら、沈痛な面持ちで俯いていた。

そんな沈黙を破るように、僕の隣からすすり泣く声が聞こえてくる。

音の出所は、イツセー兄ちゃんを跨いで向こう側。匙先輩からだった。

「木場あああああ!!」

突然そう叫び声を上げた匙先輩は、ガシツと木場先輩の肩を掴むと前後に揺らしながら泣き叫ぶ。

「辛かったな……っ! 辛かったろう! チクシヨウ、俺はお前の事を誤解してたぜ! ただのいけすかねえ爽やかイケメンで、顔で世の中なんだって巧くいつてきた甘ちゃ

んだとばかり……………」

鼻水と涙で顔を汚しながら、本音を撒き散らす匙先輩。

「……………え？ 僕、そんな風に思われてたの？」

「俺は今、モーレッツに同情している！ そして憤っている！ ああ酷い話だ！」

肩に組ついて暑苦しく泣き喚く匙先輩に、流石の木場先輩も困惑気味のようにだ。

「最初俺は、この話を降りよう思ってた！ だが気が変わったぜ！ 俺はやる！ やつてやる！ ああ、会長の制裁を敢えて受けよう！ それでも俺は、お前に協力してやる

！ 聖剣をぶつ壊す？ 上等じゃねえか！」

「あ、ありがとう、匙くん」

「礼なんて要らねえやい！ 俺がやりたいからやるんだ！ それと、俺の事は元士郎って呼んでくれよな！」

おんおんと泣き叫ぶ匙先輩。

熱いのは嫌いじゃないし、協力者が増えたのも嬉しいことなんだけど……………」

「お、おい匙、あんまり大声で騒ぐな！ 周りに迷惑だろ！」

いや、兄ちゃん、もうこれ時既に手遅れだと僕思うの。

だつてさつきから、正確には匙先輩が大声で叫んだ辺りから、男の人（多分店長さん）がこつちめつちや見てるもん！

なにあの笑顔!? 怖いよ! 怒ったときの姫島先輩の笑顔以上にの怖いや!!



結局追い出されました。

あの店長さんが僕らに向かって「お客さま」と営業スマイル（阿修羅）で声をかけてきた時は、その場にいた僕ら全員の動きが止まったのだから。

僕は恐らく、あれ以上のプレッシャーを感じることはこれから先無いだろう。

あれは、これまでの何よりも恐怖を感じたね。危うくトラウマになりかけた。

「す、すまん、皆」

自分が原因だとわかっている匙先輩は、先程から肩を落としてシヨボくれている。

「いいって、気にすんなよ匙。これから俺たちは共犯者だ。仲良くやろうぜ」

そんな先輩を慰めるように兄ちゃんが声をかけ、肩を叩く。

そこへ、イリナさんが兄ちゃんへ声をかける

「ところでイツセーくん」

「あん？」

「エクスカリバーを探すつて、なにか手がかりとかあるの？ 闇雲に探すつてのは、なにかと効率悪いしき」

「そう言われてみれば、確かにそういうのは必要だ。」

「しかし、どうしたものか……………」

「フリードなら、悪魔がいればどこにでも来そうなモンだけだな。だけど墮天使は……………あつ」

「どうした兵藤一誠。なにか思い付いたのか？」

「い、いや、なんでもねえ」

「えー、気になるわね！ なになに？ 何思いついたの？ イツセーくん」

「とりあえず言ってみろよ兵藤」

「なにかを思い付いたらしい兄ちゃんが声を漏らし、その後咄嗟に誤魔化すが、皆がそれに食い付いたため、兄ちゃんは頬を掻きながらその案を口にする。」

「いやね、俺の知り合い……………つてかお得意様なんだけどき、そういうファンタジックな物に詳しいと言うか、鋭い人がいるんだよ。その人に頼んで見ようかなー、なんてさ」

「イツセーくん。そのお得意様と言うのは、やはり人間かい？」

「ああ、そうだよ木場。だから止めようかなくて」

「そうだね。一般人を巻き込むのは……………」

一般人は巻き込めない。そういう理由で案を脚下使用とした木場先輩とイツセー兄ちゃんだったが、そんな二人に待ったをかける人物が一人。

ゼノヴィアさんだ。

「待て、その人物に詳細を教えず、目撃情報だけを聞くつてのはどうだ？」

「ゼノヴィア？」

「そういうのに鋭いのだろうか？ ならばもしかしたら、と言う事もある」

「あ、そっか、どこかでそういうのを見たのかもってことね？」

「そういうことだ」

教会組二人が提案したそれは、情報だけを聞き出し、巻き込まない。

つまり聞き取り調査をすると言う事だった。

「なるほど……………そういう事なら、ちよつと待ってる、電話してみる」

そうして兄ちゃんが電話をかけて数分後、どうやら了承が取れたらしく、近くの公園で待ち合わせる事になった。

「じゃあ今から会いに行くけど、皆驚かないでくれよ？ 繊細なコだから」

「…女の子ですか？」

小猫ちゃんがそう訪ねると、兄ちゃんの動きが止まる。

その後、空を見たり手元を見たりを繰り返した後、どこか歯切れ悪くこういった。

「いや、そうじゃなくて、

繊細な漢の娘だ」

第51話

ふと思う。

よく漫画の効果音で『ゴゴゴゴゴゴ』と言う物があるけど、実際に現実で、そんな効果音が使われそうな場面にくつつ出会えるのだろうか、と。

漫画では圧倒的な威圧感や殺気を放ち、それを主人公達が感知した時に表現されることが多い。

威圧感。

凄み、風格、迫力と同義語。意味は周りを圧倒する存在感。

今、僕らは動けないでいる。まるで動くことを禁じられ、一本の木になってしまったかのように、足は地面に根を張り、腕は枝のように固くなり、胴すらも動かすことができない。

僕だけでなく、ここにいる皆。

いや、一人だけ、僕らの中に例外がいた。

「によ」

と、謎の鳴き声と共に片手を上げる巨大なネコミミUMA。

「久しぶりだな、ミルたん！」

少しひきつっているけれど、それでも笑顔を向けて片手を上げる僕らの兄ちゃん。

どうやら目の前のUMAの名前はミルタンと言うらしい。

と、そこで兄ちゃんが僕らを振り向き、その生命体を紹介する。

「かr……んんっ、彼女はミルたん。魔法少女に憧れる繊細な乙女だ。ミルは片仮名、たんは平仮名な」

「……………」

つつこみみたい。色々とすぐツツコミを入れたい。

でも声が出ないんだよお！ なんだよミルたんつて！

男の娘？ あ、違うそうか、漢かんの方の漢の娘か！

そしてこれで魔法少女!? 身に纏うピンクと白のゴスロリがはち切れんばかりに膨れ上がった大胸筋と、8つを越えて割れる腹筋、僕の胴体ほどもある脚筋とそれより少し細い腕筋。

……………絶対前衛でしょこの人。……………人、だよな？

「違うによ！ ミルトンは魔法少女に憧れてるんじゃないやなくて、魔法少女を目指してるんだによ！ この間も魔法に成功したんだによ！」

そこでさらつと爆弾発言。

結果、流石の歴戦、教会組の二人が体の自由を取り戻す。

「ど、独学で魔法の行使に成功したですって!？」

「そ、そんなことが……………いや、まさか先ほどまでの金縛りはもしや……………」

「いや、多分それは違うわよゼノヴィア。」

……………そ、それで、どんな魔法を？」

恐る恐る、その魔法の内容を訊ねるイリナさん。

すると、自分の言ったことが信じてもらえて嬉しいのか、ミルトンは輝くような笑みを浮かべた。

そしてその笑顔は、あり得ないはずなのに、純真無垢な天使を彷彿とさせるものだった。

「ミルトンが使えるようになった魔法はによ、闇のクリーチャーに対抗する攻撃魔法と防衛魔法なんだによ」

「なんだと!？」

「攻撃魔法は手に持った物が消える消滅の魔法。防御魔法は、体を固くしてあらゆる攻撃を跳ね返す鉄壁の魔法なんだによ」

「消滅魔法!？」

魔法や魔力に関しては全くの門外漢である僕には、名前からして強そうだな、と言う感想しか抱けなかったが、教会組や木場先輩はその発言に目を見開く。

「独学我流で消滅魔法を手に入れるなんて……………」

「いや、もしかしたらイリナ、彼……彼女？ とにかくコイツは幾千幾万もの戦場を切り抜けた歴戦の戦士なのかも知れないぞ」

「な、なるほど、つまりあの格好は戦闘服なのねー」

肩を寄せあい、顔を青ざめさせながらヒソヒソと会話を交わす二人。

ゴスロリネコミミで戦場を渡り歩く魔法戦士……………。

その言葉で僕の脳裏には、幾多もの鉛弾、砲弾、魔法、そして魑魅魍魎の化け物が行き交う戦場を、その手に持った木の枝サイズの魔法のステッキを持ったミルたんが悠々と歩き、笑顔と破壊と絶望を振り撒きながら敵を蹂躪していく姿が描かれる。

なにその世紀末。怖いよ。

「今から皆に、それを見せるによ」

「え？」

「友好の証だによ。イツセーによには既に見せてあるによ」

その言葉に、僕ら全員の視線が兄ちゃんに集中する。

「大丈夫、俺達に危害は加わらないから。……………俺達には」

なんで今そこ2回言った!?! 大事な事なの!?!

「消滅魔法には二つあるによ。一つは掌に触れたものを消滅させる静かな消滅【消静】^{ミュート}。もう一つが拳や足、ステッキで消滅させる激しい消滅【消激】^{ショック}。命名はミルトんの同志達だによ」

同志いるんだ……………世紀末かよ。

「イツセーによ、始めるによ。あれあるによ？」

「おう。任せろ」

そう言つて、兄ちゃんはその場を離れる。

あれつてなんだろう？

そう思つていると、兄ちゃんはすぐに戻つてきた。手には三つの空き缶（スチール）、そしてどこから持つてきたのか、ドラム缶二つを乗せた台車。

「これくらいで言いか？」

「十分だによ」

ミルたんにスチール缶三つを手渡す兄ちゃん。

「凄いい、ミルたんが持つと缶三つでも全然余裕ある！」

「じゃあまずは【消静】^{ミュート}から見せるによ」

「凄いいんだぜ、ミルたんの消滅魔法。いろんな意味で」

兄ちゃんがそう言つて虚ろに笑う。

あ、あれもう諦めて受け入れた顔だ。僕知ってる。死んだ魚の目つて言うんだよね。

突如、この公園を圧倒的な気配が包み込む。

発生源はもちろん目の前の魔法少女^{U^MA}。

コオオオオ、と言う呼吸と共に全身の筋肉が膨張し、ミチミチと言う音が鳴る。

「消滅魔法……………」

その口から発せられた声は、先ほどまでの裏声ではなく、それこそ魔王やそれに類するラスボスが発する声そのものだった。

ちよつと前にトイレ行つてて良かったよ。うん、ホントに。

「……………【消静】^{ミュート} オー！」

クワツと目が見開かれ、彼女が叫ぶ。

同時に空き缶を乗せた右手を握り込む。

それから数秒後、唐突にミルたんが大きく息を吐く。

「ふう、成功したによ」

言つて、僕らに見せるように開いたその右手には――

――何もなかった。

『……………』

僕らに沈黙が訪れる。しかしそれは、呆れや気まずさのそれではなく、絶句ゆえの沈

黙だった。

「……………え？ 魔法？」

「魔法だによ」

「え、でも今握り潰し……」

「魔法だによ」

「アツハイ」

匙先輩の疑問はもつともで、しかしミルたんは頑なに魔法だと言い切る。
「次も見せるにょ」

そう言つて、ドラム缶を片手で二つ持ち上げ、積み重ねるミルたん。
それを見て兄ちゃんが後ずさる。

「……………あれ、中に砂とか砂利が入つてんだぜ、一杯まで」
『……………』

もう驚かない。もうここまで来たら意地でも驚いてやるもんか。

足ガクブルしてるけど大丈夫、問題ない。

再び訪れる圧倒的な気配。

そして重苦しい呼吸と、膨張する筋肉の音。

「消滅魔法……………」
【消激】^{シヨック} ううらあああ!!」

豪ッ。

まさにそんな音だった。

力強く踏み込み、下からアツパースウイングされた魔法のステッキは、狙いを違う事なく正確にドラム缶に吸い込まれ、そして振り抜かれる。

結果はご覧の通り、ミルたんが踏み込んだ地面は陥没し、ステッキがフルスウイングされた地面は抉り取られ、ドラム缶は案の定、その姿を消していた。

「ふいー、やりきったによ」

とてもいい笑顔で額を拭う仕草をするミルたん。

と、そこで辺りを見回して、その惨状に気付き肩を落とす。

「によー、お師匠ならもつと綺麗に出来るのに……………」

師匠!?! これより上がいるの!?!

「師匠は凄いいんだによ。といつても、ミルたんはまだ同志の中では下っ端だけによ」

もはや誰も動くことができなかった。

いやむしろ、動いていいのかすらもわからなかった。

だって怖いんだもの。

なんか隣で小猫ちゃんがブツブツ言ってるけど、あんまり聞き取れない。

「…ネコミミ? 同族? いや、認めたくない……………でもあの能力があればもつと強く……………」

「あー、皆? 大丈夫か?」

ここの中で唯一動けるであろうイツセー兄ちゃんが僕らに声をかける。

「あ、ああ大丈夫だ、兵藤」

「む、無論だとも」

匙先輩とゼノヴィアさんがなんとか口を開き、動き出す。

それを皮切りに、僕を含む皆がようやく動き出す。と言うか僕が一番最後だったりする。



「さて、挨拶も済んだところで本題なんだけどさミルたん」

当然と言うか自明の理と言うか、ミルたんは直接やり取りするのはイツセー兄ちゃんとなった。

「最近、この辺で変な奴を見なかったか？ たとえば白い髪の外国人とか」

「によーん……………」

兄ちゃんの質問に、ミルたんは顎に小指を当てて考え込む。

驚くほど似合っていない。

「白い髪の外国人……………見てないによ」

「そうか」

がつくりと肩を落とす兄ちゃん。そんな兄ちゃんに、ミルたんが、でも、と言葉を繋ぐ。

「怪しい人達なら何人か見かけたによ」

「マジか!」

によ、と頷く魔法少女ミルたん。

「最近だと今日、なんかお慈悲をー、って叫んでる不審者が二人いたによ」

「うぐっ!」

イリナさんとゼノヴィアさんが胸を押さえる。

って言うかあんたらかよ!

「そ、それ以外は?」

「によーん……………あ」

「どうした?」

「そういえば、最近変な気配を持つ奴がいたによ」

「気配!?!」

え、なにこのネコミミさん。気配とかわかんの?

「例えミルたんのような下つ端でも、魔法少女を目指す者なら皆気配位はわからないと

生きていけないによ」

なにその修羅の世界。怖すぎる。

「ど、どんな気配だった？」

「んー、なんか、悪魔さん達とは違った気配だったによ。なんと言うか、神聖で邪悪、見たいな感じによ」

その言葉に一番に反応したのはやはり、教会組だった。

「墮天使ね」

「ああ、間違いなく」

「ミルたん、それはどの辺で感じた？」

「あっちだによ」

そう言つて指差したのは、町外れの山の上。

「あそこで修行してる時に気配を感じたんだによ」

曰く、触れず動かさず呼吸のみで岩を砕く攻撃魔法の修行中にそれを感じたらしい。

「によ？」

不意に、ミルたんのネコミミがピクリと動く。

あれ？ 飾りじゃないのそれ？

「皆、ちよつと伏せるによ。早く」

僕らにそう告げたミルたんは、おもむろに立ち上がり、魔法の準備を始める。

「コオオオオ……防御魔法【鋼はーふうくとほでいの衣】！ぬううん!!」

ミルたんがそう叫んだ瞬間、公園一体にキインと、金属と金属が強くぶつかる音が響き渡った。

「なああああ?!?!」

瞬間、悲鳴が響き渡る。

「ヒビ！ヒビ入った!?なにこれ堅あ!」

その声は、ここしばらくで聞き慣れてしまった物であり、そして初めて聞いた声音だった。

「フリード!?!」

声の主はフリード・セルゼン。

なにかとやりあうことが多い、白髪のはぐれエクソシスト。

「ちよ、イツセーくん、なにこの人………人、か？ 人だよな？ スッゲー堅いんだけど!? エクスカリバーにヒビ入ったんだだけど!?」

……………え？

『え?』

僕らの声が重なる。

え？ 入ったの？ ヒビが？ 聖剣に？

……………ミルたん怖っ！

「ノオオオオオ！ 何をやっておるフリード！ なぜ聖剣にヒビが入っているのだ！」

そこへ、もうひとつの唖れた悲鳴が。

「俺じゃねえ！ 俺は悪くねえ！」

「砕けたら農らがあの方に殺されるんだぞ！」

「わかってるよ！ でもよバルパーじいさん！」

「やかましいいくぞ！ 逃げるんじゃない！ あれに手を出してはならんぞ！ いや、ホン

トマジで！」

フリード。バルパー。

その名前に反応したのが三人。

それはもちろん言うまでもなく、木場先輩、ゼノヴィアさん、イリナさんだ。

「ま、まてフリード・セルゼン！　バルパー・ガリレイ！」

とつさにゼノヴィアさんが名を叫ぶが、呼ばれた二人は既に、と言うかおじいさんの方はフリードの襟を掴み逃げに徹しようとしていた。

「く、逃がさん！」

しかし時既に遅く、フリードの聖剣、ラピッドリイ天閃により二人は遙か遠くまで離れていた。

「イツセーによ、イツセーによ」

「どうした？　ミルたん」

「あいつら、なんだによ？」

「んー、悪者だな」

「っ!!」

その次の光景を目視できた存在は、恐らくここには存在しないだろう。

一陣の突風が吹いたと思った瞬間、僕らの近くにいたはずのミルたんがいなくなつて

いた。

あの巨体が、一瞬にして、だ。

『えー……………』

その光景に僕は、何度目ともわからないその声を上げるのだった。

あ、悲鳴が聞こえる。



「ごめんなさい、逃げられたによ」

『嘘お!?!』

申し訳なさそうに頭を下げるミルたんには、僕らの声が重なった。

この時ばかりは、あのフリードに拍手を送りたくなる僕らだったのは、恐らくきつと言うまでも無いだろう。



ふふふ、もう少しだ。もう少しで私の野望が叶う。

聖剣を作り、世界へ宣戦布告をする、私の野望が……………

「ふふふ、ふふふ、はははははは………げぼらあ!」



「ぜい、ぜい、ぜい、た、ただいま戻りました、コカビエル……………さ……………ま……………」
「し、死ぬかと思っただぜ……………我ながら良く逃げ切れたもんだな……………警察万歳、
通報ありがとう住民の皆さん」

農らは命からがら、ボロ雑巾のようになってアジトまで帰ってきた。

ここまで来れば安全だろう。多分。

と、そこで農は違和感に気付く。

「おい、フリード」

「あん？」

「コカビエル様はどこだ？」

「知らねえよんなこと」

おかしい。あの方は今日はどこにもいく予定など無かったはずだが……………ん？
考え込む農の視界の隅に、黒い羽根が写る。

「羽根？ ……………これはコカビエル様の？ ……しかしなぜこんなところに……………」

墮天使の羽は、滅多に抜けるものではない。

それも、幹部になればなるほど、抜けにくくなっていく。

「お、おい！ バルパーのじいさん！」

突然、フリードが大声で儂の名を呼ぶ。

「なんだフリード、うるさいぞ」

「ここ、これを見ろ……………」

そう言つてフリードが指差す先に目を向けると、

そこには、

血塗れで 倒れる 一人の 男性が。

「コカビエル様あああああ
!?!?!」

倒れるコカビエル様の横には、大きくひしやげ、中から砂やら砂利やらコンクリートが零れているドラム缶が二つ転がっていた。

「いったい、誰がこんなむごい事を……………」

その言葉と共に、私は膝を突くのだった。

「あ、まだ生きてる」

「なに!？」

第52話

翌日の早朝、僕らに緊急の召集がかかった為、朝早くに部室へ向かうと、既に僕以外は生徒会も含めて今回の関係者全員集まっていた。

「あ、すみません、遅れました?」

「いいえ、時間通りよハルト」

申し訳なくて謝った僕に、グレモリー先輩は笑顔で返し、座った僕の前に姫島先輩の紅茶が置かれる。

ソファアに座り、紅茶をすすり一息ついた僕は、改めて、グレモリー先輩に訊ねた。

「どうしたんです? こんな朝早くから」

僕の問いに、この場にいた皆の視線が、グレモリー先輩の方へ集中する。
すると先輩は、短く咳払いをして口を開く。

「昨夜、宣戦布告をされたわ」

その一言で、僕らの間に緊張が走る。

「グレモリー先輩！　せ、宣戦布告っていったい……………」

生徒会の一人が声を上げ、他のメンバー、特に、会長先輩や匙先輩ではない、事の顛末を知らないメンバーも何ごなんだかわからない、と言う顔をしている。

「言葉が足りなかったわね。」

正確には、墮天使幹部、コカビエルが私たちに戦争を吹っ掛けて来たのよ」

グレモリー先輩は感情を押さえているのか、抑揚すらも感じない淡々とした声音でそう告げる。

墮天使幹部。

その言葉の意味に、僕はまだ現実感を抱けなかった。どうやら生徒会のメンバーも同じようだ。会長先輩を除いて。

「コカビエル……………ですって!？」

「会長、知ってるんですか!？」

明らかに顔を青くして声を震わせた会長先輩。

「……………ええ、知っているわ。」

墮天使コカビエル。かつての大戦を生き抜いた、最強の猛者、その一角。人間に天体の兆を教えた、星座の天使だった存在。天体の観測者」

そこまで語った会長先輩の言葉を、グレモリー先輩が引き継ぐ。

「その力、特に星々と星座の名を持つ光は、それこそ流星に匹敵する一撃と言われている」

この空間にいる誰もが、息を飲んだ。

星の光、流星の一撃。

これを聞くだけでも圧倒的な強さを感じるのだ。実際あえば、どれ程の威圧感がある
と言うのか……………。

「……………リアス、彼の目的はなんなの？」

「戦争の再開……………だそうよ」

『……………』

重い沈黙が、狭い部室の中に流れる。

皆、顔を青く、あるいは白くして、震えている。泣きそうな人もいるくらいだ。

「そんな……………」

「砕かれたエクスカリバーを集めて完成させ、それを壊すことで戦いは再び訪れる。彼はそういつていた」

そうか、だから聖剣を……………」

「戦争……………」

ポツリと、誰かが呟いた。

たった一言。普段なら皆の声に掻き消されてしまうような呟きでも、今の部室には、嫌と言うほど響く。

誰もがうつむき、嗚咽を漏らし、帰りたいと、逃げたいと、怯えている。

それも仕方が無いことだと思う。なぜならここにいる大半が、戦争なんて画面の向こうでしか知らない社会で育って来たんだ。

僕だって怖い。

戦うこととはまた違う怖さだ。

だって、敵が一人なら目の前に集中すればいい。それなまだ頑張れた。

だけど戦争は違う。敵が沢山いて、どこから攻撃されるかもわからない故の、漠然とした、けれども圧倒的な死の恐怖。

怖い。嫌だ。死にたくない。

誰もがそんな感情に飲まれ、怯え、心が折れかける。

だけど、

だけどそんな中で、そんな中だからこそ、あの人の輝きが、眩しく見えたんだ。

「顔、上げろよ、皆」

震えていて、強がりだとわかる、それでも頼もしい声。

「なあ、聞いてくれよ皆」

いつも通りに、つとめてそうあるように振る舞う兄ちゃんの声に、皆の視線が集まる。「俺さ……皆も知ってるように俺さ、バカでスケベで、なんにもねえ空っぽな奴だったんだけどさ」

笑っている。その顔に、無理矢理の笑顔を張り付けて、それでも軽くないように。「大切な場所を見つけたんだ。大切な人がいるんだ。目指したい目標ができたんだ」語る内に、その表情から恐怖が消えていって、その目に光が灯り始める。

その光は段々と強く輝いて、僕らの暗闇恐怖を払っていく。「俺は逃げない。逃げたくない。」

だって、そんなことしたら、全部失うし、何も変わらないじゃないか。空っぽだったあの頃と。そんなのは絶対に嫌だ。

だから俺は、逃げない！」

兄ちゃんの言葉が、姿が、在り方が、僕らを『鼓舞』していく。

血の力も使わず、僕らを励ましている訳でもないのに、それなのに僕らの心に、その意思が染み込んでいく。

「そう、だよな。逃げらんねえよな。だって、後ろに大切なもんがあるから。前に目標が

あんだから、こんなことで逃げらんねえよな」

それに同調するように、匙先輩が拳を作り立ち上がる。

「生徒会長として、学園と生徒に手を出す輩には灸を据えねばなりませんものね」

「私の可愛い下僕が立ち上がったもの。私が立たずにどうするの」

「怖いです。でも、イツセーさんやハルトさん、皆さんと一緒なら！」

「…絶対に、負けない」

「証明しますわ。私は違うと」

「ああ、やっぱりカッコいいね、君は」

「ふん、悪魔が奮っているのに、何を呆けているのだイリナ」

「違うわよ！　これは武者震い！」

一人、また一人と、折れ曲がっていた心達が立ち上がる。

誰かは言うだろう。折れた枝は戻らない、曲がった鉄にはあとが残るって。

ならば僕は、そんなちやちな物にはならないようにしよう。

どれ程の苦しみの前で転んでも、絶対に這い上がって見せよう。

僕らならきつと大丈夫。
一人じゃ無いから。



「いい、皆。敵は強大よ」

皆が立ち上がり、その瞳に光を灯したとき、グレモリー先輩がそう切り出す。
「けれども、恐れないで。相手は少数。仲間を信じて、背中を託して、そして、

そして、守りましょう。私たちの学園を、町を、大切な場所を！」

それは、とても力強い、王の言葉。

皆を支え気を配る、【支配者】の言葉。

『はいッ！』

だから僕たちは、そう、力強く返事を返すのだった。



「ねえ、ハルトくん」

放課後、部室でグレモリー先輩と会長先輩が作戦を立てているのを見ながら、神機の調子確かめっていると、不意に姫島先輩から声をかけられる。

「はい、姫島。どうしたんですか？」

僕が返事を返すと、姫島先輩はすこしだけ笑って、僕の隣に腰を下ろす。

「少し、お話してもいいかしら？」

「? はい、いいですよ?」

どこか普段と様子の違う先輩に、首を傾げながらも、僕は頷く。

「……………ハルトくんは、堕天使は、嫌い？」

「え？」

突拍子もなく投げ掛けられた質問に、少し戸惑ってしまふ。

でも、そんなことは関係なかったらしく、先輩は訥々と語り始める。

「私はね、大ッ嫌い。堕天使は、この世で最も嫌いな存在なの」

「……………」

「あいつらさえ居なければ、あの人さえ居なければ。そう、いつも考えてしまふ。

だって、私の大切を奪う切欠を作ったのも、イツセーくんを殺したのも、あなたを傷

つけたのも、全部堕天使」

そう語る先輩の目は、なぜだかわからないけど苦しくて。

「だからね、ハルトくん。見せて。

私、頑張るから。堕天使を殺すために、私頑張るから。だから見てて？

あなたが見ていてくれたら、私はもつと頑張れるから。だから、お願い」

そう、まっすぐ僕を見て、僕の腕を握ってくる先輩。

その手に震えはなくて、その瞳に揺らぎはなかった。

「嫌です」

「だけど僕は、その手を解いた。」

「え……………」

途端に、先程まで強い意思を宿していた瞳は揺らぎ、か細い声が口から漏れる。

「どう、し、て……………」

僕の腕に添えられた手が震える。

不安に飲まれた幼子のように、か弱く震える。

「だって、先輩には、そんな風に笑ってほしくないから」

震える先輩の手を取り、強く握りしめる。

「あ」

「こんな時に笑って、なんて言いません。無理をしないでとも。ただ、そんな風に、泣きそうな顔で笑わないで下さい」

そんな笑顔は、もう見たくないから。

これまで沢山見てきたから。

守れなかった時も、救えなかった時も、間に合わなかった時も、何もできなかった時も、皆、そんな顔をしていたから。

だから見たくなかった。

そんな顔で許して欲しくなかった。納得して欲しくなかった。受け入れて欲しくなかった。

「僕は何も言いません。先輩が話してくれるまで、何も聞きません」

震える肩をしつかりと支えて、彷徨う視線をまっすぐ見つめて。

「ただ、無理はしないで下さい。心も、体も、無理だけは絶対に」

「……………あう」

そう告げると、口から小さく吐息のような声が漏れる。

しばらくするとそれは大きくなり、嗚咽となった。

僕の肩に顔を埋めて泣く先輩は何も言わない。墮天使の事も、自分の事も。

それでも僕はただ、静かに先輩の頭を撫で続けるのだった。



夢を見ている。

幻を見ている。

そこは、上も下も、左も右も、前も後ろも、すべてが真っ白の世界だった。ともすれば平衡感覚を失い、自我すらも忘れてしまいうような、無限果てしなくに続く夢幻ゆめの世界。けれども僕は知っている。この場所をよく知っている。

『主よ』

僕を呼ぶ声がする。

厳かに、気高く、誇り高い声。

振り向けば、そこには巨大な獣達の姿。

つい、苦笑が漏れてしまう。

「その姿を見るのは久しぶりだね、マルドゥーク、サリエル、カムラン」
アラガミ形態

『ええ、そうですわね』

目を閉じた無表情なのに、サリエルが優しく微笑んだような声で肯定する。

けれども、そんな穏やかな気配はすぐに霧散する。

それに気付いた僕は、居住まいを正して問いを投げ掛ける。

「僕がここに呼ばれて、そして君たちがその姿つてことは、大切な話なんだね？」

『その通りであります、主君よ』

問いに肯定で答えたカムランは、そのまま今度は僕に質問を問いかける。

『主君は、これからもその道を、闘争の道を歩むのですか？』

「え？」

質問の意味……いや、意図がわからない。

なぜ今、そんなことを聞く？

わからなかった。なぜそんなことを聞くのか。なぜ今さら、そんな質問をするのか。

でもそんな疑問は、すぐに晴れた。

『主が今、歩もうとしているその道は、決して優しい物ではないぞ?』
王が、低い声で脅してくる。

その圧力に、以前の僕なら震えて、腰を抜かしたかもしれない。

『いずれあなたを傷付け、あなたを泣かせ、あなたに絶望を与えるやもしれぬ、そんな道
なのです』

魔女が、優しく諭してくる。

その言葉に、以前の僕なら甘えて、辞めていたのかもしれない。

『それでも主君は、戦うのですか?』

騎士が、真っ直ぐ見据えてくる。

その眼力に、以前の僕なら怯えて、躊躇していたかもしれない。

でも、そうはならなくて、むしろ、

——ああ、そうか。

って思った。

「ふふ」

だからつい、笑みが零れてしまう。

『なにがおかしいのだ、主』

なにがって、そんなの、

「いや、だって、まさか君たちがそれを聞いてくるとは思わなくてさ」

『なに?』

「僕がなんのために、君たちに手を伸ばしたと思ってるの?」

『は?』

ポカんと、呆けた顔を晒す三人に、ついつい、また笑みが零れる。

——ほんと、なんて心配性な神様達だろうか。

僕に力を与えておきながら、僕に手を伸ばせと傲慢に言っておきながら、僕が本当に危なくなることには口を出す。

敵かさや恐ろしさ、人類の天敵アラガミとしての威圧感を出そうとしても、それでも尚、僕に対する慈愛を捨て切れなくて。

これが可笑しくなくて、なにが可笑しいって言うんだ。

でも、だから伝えよう。僕の想いを。

僕が戦う、その理由を。

「君たちが僕を心配してくれてるのは嬉しいよ、本当に。

でもね、譲れないんだ、この道だけは」

まっすぐに前を向いて、笑顔で語る。

「確かにこれから先、沢山戦う事になるだろうし、悲しいことや怖いこと、痛いことだつてきつと沢山ある。それに誰か、あるいは僕が大怪我をするかもしれない」

ずっと前からわかつていた事。ずっと前から、覚悟していたこと。

「確かに怖いよ。とつても怖い。現実感も実感もなくて、でも経験してきたからこそ、すごく怖い。」

「だけどね……………」

マルドウーク、サリエル、カムラン。

それぞれの瞳を、真っ直ぐにみつめながら、言葉を紡ぐ。

「一緒にいたい人達がいるんだ。背中を追いかけたい人がいるんだ。守りたい人達が出てきたんだ。

そして、ずっと居たい、そんな場所があるんだ」

思い浮かべる。

あの暖かい場所を、暖かい人達を、憧れた人を、守りたい彼女達を。

「僕は弱くてちっぽけで、弱虫で臆病で、それでも皆の後ろで泣いていられるほど、プライドが小さいわけでもなくて」

矛盾してる。

してるからこそ、僕は頑張れる。足掻いていられる。

「今諦めたらダメなんだ。今諦めたら、あの場所が壊れちゃう。大切になったあの場所が。」

それだけは止めたいんだ」

拳を握る。

強く強く、爪が食い込むくらいに。

「たとえここで諦めなくて、引き返せなくなったとしても、それでも構わない。

僕は失いたくない。なにも、もう二度と」

なにか二度となのかはわからない。

分からないことだらけだ。

でも、僕の心がそう言ってる。

守れと、今度こそ守れと。

そのために、力を得たんだ、と。

分からないだらけで、頭がぐちゃぐちゃになるけれど、それでも心は、ただそれだけを叫んでいて。

「怖い。守りたい。泣きたい。失いたくない。逃げたい。笑っていたい。

矛盾だらけで、情けなくて、張りぼてだらけの意志で、鍍金だらけの勇気だけだ」

でも、だけど、だからこそ、

「僕は君たちに、手を伸ばしたんだ」

『——ッ』

初めて神機を握ったあの日から。

初めて刃に殺意を込めたあの時から。

初めて誰かを救えなかったあの夜から。

僕の心は決定的に、固まった。定まった。

息を吸い、肺に空気を送り込んで、

「戦いは怖い。でも、恐れはない。」

たとえその道が茨道でも、その先が絶望だったとしても、皆と……そして君達と一緒に
だから、なにも恐くないんだ」

そう、僕は言い切った。



『ならば』

語り終えて暫くの沈黙ののち、口を開いたのはマルドゥークだった。

『ならば主は、これからも、戦い続けると』

「うん、そういうこと」

『そうか……………』

呟いた白狼は、深々と息を吐き、立ち上がる。

その動きに合わせるように、カムランも立ち、サリエルは浮かび上がる。

『よかろう。主がそれを望むのならば、我輩達にそれを阻む権利などない』

『我が君が征くその道を、妾達は霸道として支え尽くしましょう』

『主君が、それを望むのであれば』

「なら、僕は望む。力を貸して。この先、今のままじゃダメなんだ」

そういうと、その言葉に彼女達は苦笑した。

『貸すとはまた、何とも他人行儀なのだな、主よ』

『妾達は一度も、我が君に力を与えたことなどありませんぬ』

『拙者達は常にお返しするだけです。主君の力を』

「返す?」

僕が首を傾げると、カムランがどこか気まずそうにたじろぐ。どうしたんだろう。

『主君の中に眠る神喰いの力は、あまりにも大きすぎます故、僭越ながら我々が制限しております。特に負担の大きいスキルなどは』

ああ、だからスキルが一つずつしか使えなかつたのか。

『だが、先の戦いで予期せず主の枷が一つ外れて、不本意ながら、主は鍛えられた。』

それが《紡ぎ手》の思惑通りと言うのが業腹だが』

『故に我が君よ、今一度、我らをお求め下さい』

『さすれば、主君の望むままに、欲するままに、得られましょう』

「得られるって、なにが?」

『望むままに、力が』

『欲するままに、技が』

『求めるままに、血が』

『『汝の、衝動が』』

第53話

やつとだ……やつとどこまで来れた。

ここまで来るのに、どれ程の時間を費やしたのだろうか。どれ程の物を失って、殺して、捨てて、この手を汚して来たのだろうか。

今さら後悔するつもりはない。したところで似合わないし、そもそも赦されるわけがない。

でも、それでも構わない。たとえ俺の目的が果たされて、世界に戦火が撒き散らされる事になろうとも、たとえ多くの人が死ぬ事になろうとも。

あの日教会に騙されて、友を、仲間を、想い人を失ったあの日から、もう数十年。人間性を、倫理観を、良心を捨て去って、殺して、殺して、殺して、そして狂^殺つてきた。

教会に敵対し、信者を殺し、悪魔を駆除し、ただ一人各地を回った。目的はただ一つ。

——聖劍を破壊する。

その為だけに、劍を振るってきた。血を浴びてきた。

そして俺は、俺の目的を果たしてくれる上司——コカビエル墮天使にであった。

まあ、最初はレイナーレとか言う雑魚の下に付けられたが。

幸い、基準値に届きはしないものの、聖劍因子を持っていたが為に、コカビエルから渡された光力の武防具を扱うことができた。

そして次に、俺は被験者後輩に出会った。

木場裕斗とか言う、魔劍セイクリッド・ギアの神 器を持つ少年。

その後輩と、悪魔二人と人間にレイナーレが負けた後、俺は一度コカビエルに連れられて日本を離れた。

そこで出会ったのが、キャサリン達だった。

コカビエルが言うには、彼女たちも聖劍因子を持ち、そして教会のあの施設に入れられていた為、コカビエル達が拐ってきて保護しているらしい。

しばらくはそこで過ごすことになったのだが、子供と言うのはやはり苦手だ。

俺が既に捨てた物を、彼らは彼女らは持つていて、何も知らずに、無邪気に俺に懐いてくる。特段何かをしたわけでは無いが、なぜか懐かれる。

鍛練をすれば真似をし、飯を食うと同じものを食いたがり、昼寝をすると、気がつけば回りはガキだらけ。

そしていつしか、俺も笑うようになっていた。張り付けた狂気の笑みじや無く、ずっと忘れていた、もう二度と無いだろうと思つていた、心からの笑み。

『あそぼー、フリードにーちゃん！』

『フリードお兄ちゃん、大好き！』

『わたし、お兄ちゃんのおよめさんになる！』

『おれ、大きくなったら兄ちゃんみたいになる！』

楽しかった。

今は素直にそう思える。あのガキどもは、かつての俺で、俺が歩んだ道を歩みかけていた。

だけど、もう違う。アイツらだけは、外道俺のようにしてはならない。

それからしばらくして、コカビエルから呼び出しがかかった。

何でも、この間施設を襲撃したが、既に子供たちは事切れていて救うことができず、せめても研究成果を強奪してきたらしい。

それを見たとき、俺は一瞬呼吸を忘れた。

見せられたのは、白く発光する結晶と——聖劍。

俺はすぐに壊そうと手を伸ばし、そして弾かれた。

やはり、因子が足りないから、聖劍に触れることができなかつたらしい。

しかし、コカビエル曰く、この結晶さえあれば問題ないとのこと。

これは教会の研究成果で、因子を取り出して他者に与えることで、人工的に聖劍適合

者を作り出すという物らしい。

そして、本来なら因子を取り出しても被験者は死なないが、教会は用済みだからと殺すという。

……………そうか、こんな物の為に。

こんなちつぽけな結晶の為に俺は、俺たちは……………っ！

無言で結晶を受け取った俺は、それを自らの胸に押し当てる。

この因子の持ち主たちも、無念だったのだろう。苦しかったのだろう。憎かったのだろう。

ならば力をよこせ。俺がそれを果たしてやる。その憎悪を引き受けてやる。

俺が聖剣エクスカリバーを破壊してやる！

それからしばらくは、コカビエルが奪ってきた【エクスカリバー！ラビッドレイ天閃の聖剣】に体を慣らしながら、

もう三本の聖剣を盗み出す。

本心では、手に入れた瞬間壊してやりたかった。

でも、それだとまた復元されてしまうと、コカビエルは言う。故に、今一度一本に直し、その上で破壊するのだと。

残る聖剣あと三本。破壊と、擬態と、支配。

支配に関しては行方知れずのため、もしかしたら完全に失われているかもしれない。と、バルパーのジジイは言っているが。

そして今日、俺たちは後の二本を手に入れる。

あのメスガキどもから聖剣を奪い、そして目の前で破壊して、こう言ってやるのだ。天に向かって、神に向かって、

——ざまあみろ、と。



「準備はできたか、フリード」

「はいはいよー、俺っちはいつでもバッチリおーけーよ上司さま！
つてかあんた傷はもう大丈夫なのかよ、ズタボロになってたけど」

「ふん、あれしきどうと言うことはないわ」

「さいですか」

「さて、あやつらはどう足掻いて、私を楽しませてくれるかな？」

この道は地獄への一本道だ。

だけどそれでも、俺はこの道を進むしかない。

なぜなら、この手から今さら血は落ちる事は無いのだから。

はぐれエクソシスト、愉快な狂人フリード・セルゼン。

——いざ、参る。

第54話

指定の時刻がやって来た。

時刻は既に天辺を回り、辺りは闇に包まれている。

私は耳元の通信機に手をあて、皆に声を送る。

「皆、状況を」

その呼び掛けに、少しの間が開き、

『こちら生徒会。結界の展開用意は整っています。いつでもどうぞ』

『こちら裏庭、祐斗、小猫ちゃん、異常なし』

『こちら裏口、朱乃、イツセーくん、同じく異常なし』

『こちら校庭及び屋上、ゼノヴィア、イリナ、ハルト、異常なし』

四つに分けたチームそれぞれからの報告が届く。

その報告を聞き、言葉を返そうとしたとき――

『イリナさん！ 避けてっ！』

ハルトの叫びが、通信機から響き渡り、轟音が通信機のみならず、振動としての、部室の私たちにまで聞こえてくる。

『っ、きやあああっ!!』

『イリナ！』

イリナの絶叫と、ゼノヴィアの叫び。

すぐに皆に緊張が走る。

『イリナさんが負傷！ 皆校庭に早く！ アーシアさん、治療を！』

ハルトの毅然とした声が、驚愕に動きを止めた私の意識を呼び覚ます。

「みんな！ 校庭に急ぎなさい。私たちもすぐに行くから！」

『『はい！』』

そして、戦争をかけた戦いが始まった。



始まりは唐突だった。

そしてそれに気づいたのも、ただの偶然だった。

スキルが二つ使えるようになった僕は、「サイレントキリング」と「バックスタブ」の二つを発動させ、さらにステルスフィールドを展開して屋上に待機していた。

敵が現れてもすぐに撃ち抜ける様に、と。

けれども、先手を取ったのは僕ではなく、相手だった。

雲の無い満月の夜、何となく空を見上げた僕が見たのは、星のそれに良く似た光で、普段だったただの星だと思ったことだろう。

しかし、直感が告げた。
あれは攻撃だ、と。

直後、校庭に立っていたイリナさんに警告を飛ばす。

だがが遅れで、イリナさんは即死を防ぐだけで精一杯だった。

今でも、五体満足なのが不思議なくらいの重傷だ。

「くっ、今の光は！」

『墮天使だな、主よ』

次に、地面がめくれあがり、そこから三つ頭の怪獣、——グレモリー先輩曰くケルベロスというらしい——が姿を現した

『ハル！ 状況は！』

「イリナさん負傷、怪獣出現、敵三人、擬態の聖剣は強奪！ゼノヴィアさんは怪獣と交戦中。今から援護するところ！」

『了解！』

兄ちゃんとの通信を終わらせて、すぐさまスコープを覗き込み、怪獣ケルベロスに照準を合わせる。

「ゼノヴィアさん、そのまま引き付けて！」

『ハルト!?』

「怪獣退治は、ゴッドイーター僕 の役目だからね！」

「撃ち抜く！」

ケルベロスの横つ腹に狙いを澄まし、引き金に指をかける。

放つ弾丸は、これまでのような、ただのオラクルの塊ではない。

これから放つのは目覚めた力の一つ。目覚めた『血の力』

「Blood Bullet——内臓破壊弾【神狩・朱雀】！」

引き金を引けば、これまでのそれとは違う反動が訪れる。

放たれた弾丸は狙い変わらず、距離を行くごとに威力をまして、ケルベロスに着弾した。その弾丸から炎が放たれ、ケルベロスの内臓を焼き、それに怪獣が苦しみの声をあげる。

だが、それで終わらせるつもりはない。

すぐに照準をし直し、氷の属性を撃ち込む。

「【神狩・白虎】！ ……つと、オラクル切れか」

この弾丸はオラクル消費量が多い。

どうやら、二発で限界のようだ。

『惜しかったです、主君。トリガーハッピーさえ使えば撃てるのですが……………』

「そうだけど、今は無い物ねだりしてる場合じゃないよ！ 飛び降りる！」

柵に足をかけ、一息に飛び出る。

残念ながら、僕は空中ジャンプのスキルを持っていない。

でも、ゴッドイーターの能力として、剣を振るえば落下速度が消えると言う能力があ

る。

壁を蹴り、神機を構える。

「プレデターフォーム補食形態！」

これから使うのは、目覚めた力の一つ、新しい技。

「【滑空穿孔式・穿顎】！」

神機から一瞬で黒い口が現れ、僕は滑空してケルベロスの脇腹に食らいついた。

その激痛にケルベロスが咆哮を上げ、さらに暴れだす。

肉を食い千切り、その肉をオラクルへと変換して吸収すれば、神機がバースト状態となる。

「ハルト、今のは!？」

「話は後、一気に攻めるよゼノヴィアさん!」

「ああ、そうだな! こんな奴で手間取ってる暇は無い!」

共に剣を握り、同時に走り出す。

一度は激情のままに剣を交えた相手だけど、いや、剣を交えた相手だからこそ、何となく、相手の動きが把握できる。

「右は貫うぞ!」

ゼノヴィアさんが右の頭目掛けて飛び上がり、僕が左の下に滑り込む。

【破壊の聖剣】!
エクスカリバー・デストラクシオン

ブラッドアーツ! 【斬鉄】!」

上と下からの強烈な一撃に、ケルベロスの右左の頭が沈黙する。

それを確認する前に、僕は神機を構え、中央の頭に収納された銃身を押し付ける。

「トドメ! 【IE肆式・轟爆】!」

銃身からオラクルの爆発が放たれ、それを零距离で撃ち込まれたケルベロスは、断末

魔の叫びを上げることもなく倒れ落ちた。

『見事です、我が君』

「ありがとサリエル。いこう、ゼノヴィアさん！」

次は、隣で戦っている兄ちゃん達の援護だ。

不思議と、今は全く怖くない。

始まる前はあんなに怖くて、震えていたのに。

慣れたのか、興奮してるのか、それとも皆がいるからか。

それは解らない。でも、震えて無いから、ちゃんと剣を握れているから、僕は戦える。

皆を、大切なこの場所を守るために、戦える!!



すぐとなりだったのに、僕らはこの惨状に気付くことが出来なかった。

「滅びよ、悪魔。【英雄の光矢】」
オリオン・サギツタ

それほどまでに一瞬で、僕らが気づく間もなく皆がやられたと言うことだ。

降り注ぐ光の数は、およそ18個。

それは、オリオン座を構成する星の数と同じ数だった。

「ぐあああ!!」

皆、なんとか避けたり、防いだりしているけど、既に満身創痍だ。

回復役のアーシアさんはまだ、イリナさんの治癒に当たっている。

「あああ、待っててください！ いま、いま、行きますから！」

皆が傷つくこの状況に、彼女は涙を流していた。

「ふん、他愛の無い。こんなものか？ 貴様らの実力と言うのは？ ならば興奮めだな。

私が相手をする必要もない」

「みんな！ このっ！」

とつさに僕は神機を構え、回復したオラクルで弾丸を放つ。

「む？」

しかし、一撃も、コカビエルの光の矢によって弾かれてしまう。

強い。レイナーレなんかとは比べ物にならないくらいに、強い。

「ほう？ もうケルベロスのを倒したのか。存外にやる
。」

ほら、かかってこい、人間と聖剣使い。相手をしてやるぞ？」

空中で両手を広げ、僕らを見下ろすコカビエル。

その表情はいたって余裕そのもので、愉しそうな物であった。

「おおおおお!!」
エクスカリバー・デストラクション
【破壊の聖剣】!!」

僕の隣から跳躍したゼノヴィアさんが、コカビエルへと斬りかかる。

「ふん、軽い一撃だな。【獅子の咆哮】」
レオ・クラマーレ

だが、その一撃を素手で受け止めたコカビエルは、その手から光の砲撃を行った。

「ああああ!!」

「ゼノヴィアさん！」

それをマトモに受けたゼノヴィアさんが、悲鳴を上げながら地に落ち、そのまま動かなくなる。

「そら、フリード、最後の一本だ」

「はいはいりよーかい！　ところで俺たちの出番まだっぽい？」

「そう急くな。じきにくれてやるから、今はバルパーを援護している」

「あいあいつとー！」

倒れたゼノヴィアさんから聖剣を奪おうと、フリードまでもがこの戦場に入ってくる。

「くつそお、させるかよ！ 血の力【鼓舞】！」

『Bloody Booster!! The Encourage!!』

「部長！ 俺に魔力を！ ハル、やるぞ！」

それを止めるべく、立ち上がった兄ちゃんが僕らに声をかける。

「やらせるものか！ 【射手の^{サキッターリウス}——】

「それはこちらの台詞さ！ 【魔劍創造・火氷劍^{ソードパース}】!!」

「…やらせません！」

「雷撃よ！」

「ちい、小賢しい！」

僕らの妨害をしようとしたコカビエルに対し、三人の攻撃が同時に放たれ、その動きを阻害した。

「ありがとう、三人とも！ いくわよイツセー、ハルト！ 血の力【支配】！」

【鼓舞】と【支配】の二つの強化能力により、魔力と身体能力を得た僕らが、フリードの元へと駆け込み、技を放つ。

「破撃ノ拳打・龍！」

「【波濤斬り】！」

「うあつとおおい！ あつぶえねえな！ 死んだらどうするよ！ なんちて」

その攻撃すらも、【天閃】の加護を持つフリードの前では見切られ、躲される。

「おおつ、仲間を助けにいざ推参つてかあ!? ところがどつとこいザンネン！ 既に聖

剣は奪われた後だった！ 無念！ それじゃ、あーばーよー、とつつあん！」

「いかせるか！ 『Boost!!』【ドラゴン・ショット】！」

すぐさま僕らに背を向けたフリードに対し、兄ちゃんがブラッドアーツを放つが、

「ねえねえ、知ってる？ 悪魔の攻撃つて、聖剣で斬れんだぜ!!」

その言葉と共に剣を振り抜いたフリードによって真つ二つにされてしまう。

そして次の瞬間、後ろから爆音が響き渡り、コカビエルの相手をしていた三人の悲鳴

が聞こえてきた。

「小猫ちゃん！ 朱乃さん！ 木場先輩！」

振り向けば、三人が血まみれで倒れ伏し、それをコカビエルが哄笑と共に見下してい

た。

「ふはははは!! そんなものか、貴様らは！ そんなものか、グレモリーの悪魔よ！ 魔

王の妹と、その眷属たちよ！」

「ちくしょうが！」「ドラゴン・ショット！」

「温いわ、戯けが！」

苦し紛れに兄ちゃんが放った攻撃も、片手一本で握りつぶされてしまう。

「このような攻撃で私に届こうなど、烏滸がましいにも程があると言うもの！」

「……………なら、これはどうかしら！」

その言葉に返したのは、グレモリー先輩だった。

先輩は、自分の紅い魔力と、赤い血の光を放ちながら、その二つを手へと送り込んでいた。

「ブラッドアーツ！」「滅魔ノ戯曲・巨星！！」

先輩が両手を上に掲げると、頭上に巨大な滅びの球体が出来上がる。

「これで、滅びなさい！」

「ほお、この密度、大きさ、なるほどなるほど、流石純血の悪魔と言ったところが……………だがっ！」

先輩の魔力を見て愉しそうに嗤ったコカビエルは、その両手を広げ、中心に光の十字を作り出す。

「この程度で破れる程、私は甘くはないぞ、グレモリー！」

サザンクロス・エールブテイオー
「南十字星の煌めき！」

その十字星と巨星がぶつかり合った瞬間、眩い閃光と激しい爆音が辺りを包み込み――

——そして巨星が消し飛ばされた。

「ふむ、今のは凄かったぞ。流石に服が破れてしまったわ」

「……………嘘、でしょ」

コカビエルが笑い、皆が呆然とするなか、もつとも衝撃を受けていたのはグレモリー先輩だった。

血の力と魔力の全力を込めて放った一撃が、一瞬で、しかも相手に掠り傷一つ負わせられず、服を少し破くだけでとどまってしまったのだから。

「こっのおー！【滅魔ノ戯曲・流星】！」

次に放たれたのは、先程の巨大な一撃ではなく、魔力の連撃。

「まだ撃てるのか。流石だな。だが、あれ以上の魔力ではない限り、貴様の攻撃はもはや通ることはない。」

ゲミニー・インベトウス・サギツタ

【双子の連なる矢】

先輩の魔力連撃は、コカビエルの連撃によってすべて打ち緒とされてしまう。

強い。

想像以上の強さだ。正直、勝てるビジョンが全く浮かばない。それどころか、負けるビジョンのみがありありと浮かんでくる。

これが、本当の強者。

歴史に、否、神話に名を残す程の、本当の強者の力。

その圧倒的な強さの前に、笑いが出てしまいそうになるほどに。

「どうした？ もう終わりか？ もう足掻かぬのか？」

無理だ。

どんなにあがこうとも、どんなに立ち上がろうとも、また塵芥のごとく薙ぎ払われてしまう。

ならば立つ意味など無いだろう。

武器を掴む手が緩む。

心が折れかけている僕らに、これ以上戦うことは無理なのかもしれない。

「ふん、所詮は下賤な悪魔か……………期待した私がバカだった。もうよい、死ね」

コカビエルの前に、7つの光が浮かぶ。

「魂の欠片まで塵芥となりて滅べ、グレモリーとその眷属たちよ。

ウルサマヨル・サンクテイオ
【七星の制裁】

そして、僕らのすべてを滅ぼしうる覇光が、辺りを白く塗り潰した

第55話

極光が、視界を白く染め上げ始める。

ああ、終わる。負^{終わって}けてしまう。

何もできず、手も足も出せず、ここで――

『本当に、諦めるのか？』

『本当に、それでよろしいのですか？』

『貴方にはまだ、戦う力が残っていると言うのに』

――だから僕は、君達に手を伸ばしたんだ――

甦る。自分の声が。

ここを守ると、この戦いに勝つと決めた言葉が、誓った想いが、脳裏を駆け巡る。

目の前は絶望的で、

勝ち目なんか見えなくて、

心は折れかけているのに、

それでも、この魂は叫んでいる。

守れと。諦めるなど。

たとえ血反吐を吐いて、泥水を啜ることになろうとも、何度でも立ち上がって、何度でも守るために剣を握れと、そう叫んでいる。

「僕は——守りたい」

ならば立とう。

心は絶望に染まった。けれども魂が希望を渴望するから、だからこの心に喝を入れて、この体に気合いを入れて、立ち上がろう。

「僕は、諦めたくない——っ！」

スキル【穴熊】、発動。

「諦めたいけど、逃げ出したいけど、それでも——っ！」

スキル【超越者】、発動。

守るんだ。絶対に。

この、僕の力で！

皆とコカビエルの間になんとか駆け込み、神機の装甲を展開する。

直後、耳をつんざく轟音と、骨を激しく震わせる衝撃が、僕の体を襲い、突き抜けて行く。

「ハル!!」

「…ハルト!?!」

「ハルトくん——っ！」

兄ちゃん、小猫ちゃん、朱乃さんの呼び声が聞こえた。

その声を背に、さらに踏ん張る力を強める。

「う、おおおおお!!」

ここで全て止める！ 後ろへは一切溢さない！

僕の装甲はシールドで、このままだと後ろへの影響が出てしまう。

それなら、前に出るだけだ。なるべく前に出て、受けきって見せる！

盾から溢れた光が、僕の体を切り裂いていく。

けれども、足はしっかりと地に付き、歩を進める。

【鼓舞】！

【支配】！

後ろで倒れているはずの二人から、血の力の支援が届く。

『主よ』

「……………な、に……………いま、ちよつと、余裕が……………」

『今あの紅髪から送られてきた魔力、これを我輩らが補食して連結解放を行う。よいな？』

「まか、せた……………つ」

すると、その言葉の通り、僕の体が発光を始め、力が溢れてくる。

「バカな……………我が【七星の裁決】ウルサマヨル・サンクツアオの中を抜けてくるだど!? たかが人間が!？」

「たかが人間って、侮るなよ！」

神機使い達は、あの絶望に染め上げられた世界で、たった一粒の、米粒に等しい希望ひかりを掴まんと、世界に、神に抗う誇り高き人類の戦士達だ。

そして僕も、正規の物じゃなくても、その誇り高き力と武器を受け継いだ、一人の神機使いなんだ！

「この力が、この神喰らいの力が、お前に負けるなんて、許されないんだ！」

だから、この誇りにかけて、

「僕はお前を食い尽くす！」

雄叫びを上げて、更に一步踏み込む。

と、そこで盾にかかっていた強大な負荷が一瞬にして消え去る。どうやら相手の効果時間が切れたようだ。

光の力が消失したことにより支えを失った僕の体は、そのまま傾き倒れ始める。

「あ……………れ……………？」

体に力が入らない。

バーストの効果はまだ続いている。けれども、足がもつれ、腕が震える。

どんなに力を込めても、立ち上がろうとしても、それらは叶わず、僕は地に倒れ伏した。

「……………それだけか？ 人間？」

気がつけば、コカビエルは僕の前に立ち、冷たい目で僕を見下ろしている。

「私に負けられないだの、神話を打ち負かすだのと大きく出たわりには、なんともあつけないじゃないか、ええ？ どうした、さつきまでの威勢はどこにいった？」

そう言いながら、コカビエルは僕の首を片手で持ち上げ、そのまま締め上げる。

「ぐうう……あ、がああ………」

「ほら、足掻いてみろよ。その剣で、私を斬れよ、人間！ ほら、斬れよ！」

締め付ける力が更に強くなり、いつそう呼吸が出来なくなる。

「ハルトくん!!」

朱乃さんの悲痛な声が聞こえる。

「なあ、私を……俺を……俺を楽しませろよ、人間！ 抗えよ！ 足掻けよ！ 俺と戦えよ、俺と争えよ、なあ!!」

そんな怒声と共に、僕は校舎の方向へと投げ付けられる。

当然、抵抗力を失っていた僕の体は呆気なく吹き飛び、校舎へと叩きつけられ、その壁を突き破って、血反吐を撒き散らす。

「いやああああああつ!!」

そんな悲鳴を上げたのは誰だろうか。

意識の朦朧とした僕にはそれすら判別がつかず、その意識を暗闇へと落としていっ

た。



「いやあああああ!!!」

およそ普段からは考えられない大声で悲鳴を上げながら、小猫ちゃんがハルの元へと駆け出そうとするが、足が纏れたのか、その場で倒れ混む。

「いや、ハルトツッ！ ハルト、ハルト、あああああああつ!!」

涙を流しながら、ヨロヨロとハルの元へと向かうその姿は、とても痛ましかった。

そして、俺たちもあのハルが手も足も出せずにやられたことに沈黙し、悲痛な表情を見せている。

特に、朱乃さんのが酷く、ハルが飛ばされた方を呆然と、それこそ、表情が抜け落ちたと表現するのが正しい虚ろな顔で見つめていた。

「うそよ……あのハルトくんが、負けるなんて、そんなのうそよ……また、またあの子に守られて、また何もできないなんて、そんなこと……」

その光景に、俺は拳で地面を殴り付けた。

悔しくて、悲しくて、何もできない自分に腹が立つて。

「くそっ、くそっ、くそっ！」

立たなきや。

弟が立ったんだ。誰よりも臆病で優しく、強い弟が立ったんだ。なら兄貴がこんなところで寝ててどうする！

この前だつてそうだった。

レイナーレの時も、ライザーの時も、いつも最初に立ち上がったのは、臆病なハルトだった！

もう情けないところは見せないって思ってたのに！俺はまた、あいつを先に立たせちゃまった！

その上、挙げ句にはあんな大怪我までさせるなんて！
情けねえな、俺は。

「……………おい、ドライブ」

『……………どうした、相棒？』

「もう一度禁手あの姿になるには、次は何を捧げればいい？」

『正気か?』

「正気じゃなかったら、問答無用で捧げてらあ」

『くははははっ! 面白いなお前。だがダメだ』

俺がそう告げると、ドライグは愉快そうに笑う。笑うが、その案は却下されてしまう。

「なんでだよ!」

『確かにそれは楽しいだろうな、面白いだろうな。だが、それではお前が死んでしまう』

「っ!」

『お前は面白い人間だ。欲望にまみれながら、しかしその精神は真っ直ぐ。これまでの所有者のなかでも、希に見る精神性だ。ここでお前を失うのは惜しくてな』

「だけど、このままじゃ!」

その時だった。

俺達の前方、コカビエルの後ろから、強烈な光が炸裂した。

「コカビエル様! 全ての準備が整いました!」

バルパーと呼ばれるじいさんが、輝く円陣の中心から呼び掛け、その後ろにはフリードが無表情で控えていた。

「まさか……………完成したというのか!?!」

木場が魔剣を握りながら、そう叫ぶ。

「無論だとも、グレモリーの【騎士^{ナイト}】。……………ふむ、貴様、その髪を見るに、あの施設の生き残りか？」

「ああ、そうさ！ ……………ぐうつ！」

剣を杖にして、傷だらけの体を引きずりながら、木場は立ち上がる。

「お前たち墮天使と、バルパー・ガレイによって行われたあの実験にのって僕の同胞たちは皆、無念のままに死んでいった！ だから僕は、お前達を許しはしない！」

木場が剣を構え、コカビエルへと飛びかかる。

「フリード」

しかしそれは、コカビエルとの間に入ってきたフリードによって防がれてしまう。

「フリード、聖剣を渡せ。私はバルパーと共に聖剣を完成させる」

「えー、でもでも上司さまあ、コイツ光喰らう剣とかなんかチートクセえもん持つてんすよおー、あの光の剣じゃ無効化されちゃうっすよ？」

「ならば私が直々に光を込めてやる。それで文句はあるまい」

フリードは、人差し指を顎に当て、しばし思考する。

だが、その間も木場の剣戟を防ぎきっている。それはヤツが強いのか、木場が弱っているのか、それとも両方なのか。

「んーう、それならありオツケー? というわけでホイ、聖剣ぼいっと! 約束は守ってくんまし?」

「無論だとも」

手渡された聖剣を手に後方へ下がったコカビエルに対し、俺と木場、部長三人の攻撃が集中するが、しかし、

「あらよつと! ざーんねーん! バリア張ったからききましえーん!」

あの光の膜によつて悉くが防がれてしまう。

「ほらほらほらほらあ! 立つてるの木場つちだけ!? 他は!? ねえねえ、戦おうよお! ねえ、結局手も足も出ないとかぶゲラで抱腹絶倒なんですけど! ねえ今どんな気持ち? ねえねえ、今どんな気持ち? ねえねえねえねえねえ!」

うるさい。

相変わらずコイツは、うるさい。

「フリード・セルゼン! そこをどけ!」

「どけと言われてどくアホウがいるかい! 行かせねえよ! ヒヤツハー!」

「ああもう、うるさいな!」

「とーぜんよお! せつかく願いが叶うんだぜ!! そらもうテンションアゲアゲよ!」

そこで、いったん二人の剣戟が終わり、距離が離れる。

「いいか木場祐斗。聖剣を壊すのはお前じゃねえ。この俺だ」
「なに!？」

フリードから放たれた一言により、俺たちはその動きを止めた。

「なつ、お前の目的も、聖剣の破壊だつて言うのかよ!？」

「そーだよイツセーちゃん! 僕ちゃん、聖剣をチョンパするの!」

「なら何故、あなたは墮天使側にいるの?」

「はて? なぜと言われても? そらあんた、コカビエルに恩があるし、教会のあのやり方に真つ向から反対してるからだけど?」

「は?」

そこで、俺たちは違和感を覚えた。

「そっち側にいるつてのはガツツリこつちの台詞なんだけどあんだすたん? だつて、

聖剣計画は教会のもんだし、バルパーのジジイとコカビーさまがそんなんで人を殺すなあ! つて施設をぶつ壊ヒヤツハーして回つてんだだけど?」

「お、おい、ちよつと待て……………」

違う。明かに違う。

俺たちがゼノヴィア達から聞いた話と、今、フリードの口から語られる情報が、全く持って違う。

「天界が因子だけぬいて、被験者を殺してたから、俺ちん、こつちに回ったんだけど？
コカビエル達はそんな被験者達を助けてたし」

「……………これは、どういうことだ？ なぜ、こうも話が食い違う？」

「イリナたちは、墮天使とバルパー・ガリレイが内通し、聖劍因子を抜いた被験者を殺していたと聞いている。」

「だが、フリードの語るそれは、見かねたコカビエルとバルパー・ガリレイが子供達を救ったと言う。」

「どちらかが嘘を……………いや、コカビエル達だ。そうに違いない。」

「フリード！ お前、騙されてるぞ！」

「はあ？」

「俺の言葉に、フリードは心底「なに言ってるんだコイツ」なんて顔をやる。」

「聖劍因子をぬいて、子供達を殺したのはバルパー・ガリレイだ！ お前の後ろで、聖劍を合体させてるやつだ！」

「……………」

「バルパーは僕の仲間を殺した！ 因子を抜き出して、用済みとして、処分したんだ！」
俺に迫徒するように、木場も声を投げ掛ける。

「はっ！ そんなハツタリ聞くかよ！ どうせ後ろのエクソシストどもに聞いたんだろ
うがよ、所詮綺麗事だらけの天界だ！ 嘘でもついたんだらうよ！ 人間は嘘つきだか
らなあ！」

しかし、そんな言葉も虚しく、フリードは鼻笑いでそれを一蹴し、俺達に斬りかかっ
てくる。

「本当よ、フリード・セルゼン！ 私たち悪魔側でも確認済みなの！ 天界、教会は被験
者を殺してない！」

「悪魔の言葉なんざ、信じられるかよお！」

その時だった。

光が更にまし、神聖な気配が辺りに充満した。

「おお……………これが、聖剣……………」

バルパー・ガリレイの、感嘆の声が聞こえる。

「美しい……………七本のうちの一本が欠けているとはいえ、これは素晴らしい剣だな……………さすがは星の一振りと言ったところか」

コカビエルがその手に持つ長剣は、青白く神々しい光を放ち、煌めいていた。

「見よ、悪魔ども。これが聖剣の中の聖剣、エクスカリバーである！」

高く掲げられた聖剣は、月夜の中一際明るく輝き、辺りを包み込む。

そのあまりに神聖な気配に、下級悪魔である俺は足が震え、立つことが難しくなる。

後ろでは、小猫ちゃんや朱乃さん、ハルトの治療に当たっていたアーシアが、とても苦しそうな表情を浮かべている。

「あれが、統合されたエクスカリバーの光なのか……………」

「ゼノヴィア！ お前、大丈夫なのか!？」

「ああ、彼女の治癒の力は凄まじいな」

いつの間にか意識を取り戻し、俺の後ろまで来ていたゼノヴィアがそう言う。その表情はどこか複雑な物だった。まあ、無理もないか。

「は、はは……………はははははっ、ひゃひゃひゃひゃ！ 完成したのかよ、コカビエル様！ いいねえいいねえ、凄く憎たらしいよ、その光が！」

フリードが狂気的笑顔と笑い声を上げ、コカビエルを見上げる。

「さあ、コカビエル！ 約束通り、俺にそれをぶっ壊させてくれよ！」
「……………」

コカビエルは、フリードの言葉に無言のまま降りてくる。

「フリード、こっちへ」

そう言われたフリードは、喜び勇んでコカビエルの元へと駆け寄り、

「ひゃっほう——……………」

.....
「あ？」

その光景に、この場の誰もが言葉を発せられなかった。

「いっしょ.....」

血が溢れ、地面で弾ける音と、刃が肉を切り裂く音がした。

「.....なん、で？」

そしてフリードは、自分の腹に刺さっている聖剣を見て呆然としていた

第56話

フリードが、己の腹部を突き刺す聖剣とコカビエルの顔を交互に見る。

「……………おい……………なん、だよ、これは……………」

「貴様は良くやったよ。見事だ。お陰でこうも簡単に6本手に入れることができたのだからな。」

だが、統合さえしてしまえば、これを壊そうとする貴様はただただ邪魔なだけでな

「なんだ、と……………」

「だから貴様はもう、用済みだ」

フリードの胸を蹴り飛ばし、その反動で腹から剣を抜く。

飛ばされたフリードは、地面へと仰向けで倒れ、そこから血が広がっていく。

「こか、びえる……………っ！ きさまあー！」

口から血を流し、激しい憎悪の眼差しを向けながらフリードが叫ぶ。

「ふざけるなよ、てめえ……………ごぼっ……………はあ、はあ……………約束はどうした……………俺との

約束はどうしたんだよ、コカビエル！」

あれだけの傷を負い、血を大量に流しながらも、彼は立ち上がる。

その光景を見ていた俺たちは、あまりに唐突で衝撃的な展開に啞然とし、ただただ見ていた。

フリードの問いを聞いたコカビエルは、その口元に邪悪な弧を作り、こう言い放った。

「約束？ なんのことかね？」

あまりに白々しく、堂々と、奴はそう言った。

まるでそんなものなど、ハナから存在していないかのように。

「んだよ……………それ……………どういう意味だ、それは！」

「どういう意味もなにも、フリード、すべてはコカビエル様のご計画のうち。

あの聖剣計画その物も、貴様に教えた嘘も、全て」

「なっ……………」

バルパーが無慈悲にそう告げると、フリードの顔が絶望に染まる。

信じていた者に裏切られ、抛り所だった物が偽りだったと知り、その心が音を立て始める。

「じゃあ……………じゃあなにか!? あの聖剣計画も！ あの施設も！ 全部全部、

墮天使あんなたらの仕業なのかよ！」

「正確には、私とコカビエル様の、だがな」

「だったら、俺が今までやって来たことはなんだったんだよ！ 教会に反逆して！ 悪魔ぶつ殺して！ あんたの命令に従ってた、俺はいつたいなんなんだよ！ コカビエル！！」

「さてな。だが、実に面白い道化であったよ、フリード」

「——ッ!!」

その途端、フリードが咆哮を上げる。

咯血しながら、血の混じった涙を流しながら、怨嗟と憤怒の慟哭を。

そして、次の瞬間フリードは跳躍し、光の剣でコカビエルを斬りつける。

が、それはコカビエルの表面を撫でるだけで、傷を付けることは叶わなかった。

「バカめ。その剣の光は誰の物だ？ 私に私の光が効くわけ無いだろうー！」

上から振り下ろされた聖剣をフリードは光の剣で防ごうとするが、それはいとも容易く破られ、右肩から袈裟懸けに切り裂かれ、地面へと叩き落とされた。

「フリードー！」



「……………くそ……………が……………」

怨嗟の声を漏らしながら、痛む体に力を入れて立ち上がろうとするが、それは叶わず、自分の体だと言うのに、全く動く気配が無い。

骨はあちこちが砕け、傷口からは血が流れ、意識が少しずつ遠のき始める。

死ぬのか。

不意にそう悟った。

復讐も果たせず、聖剣も壊せず、無駄な殺しと狂気を積み重ねた自分の人生が、ここで終わると。

「……………ふざけんな」

掠れた声を絞り出す。

そんなこと、赦される訳がない。

何もできずに死ぬことなど、許されるものか。

俺は、なんの為にここまで罪を重ねてきた？

なんの為に、ここまで血を浴びてきた？

なんの為に、ここまで屍を踏み越えてきた？

全部全部、この時の為だろうが！

ここに辿り着く為だろうが！

ここまで来て死ねるかよ！ ようやくたどり着いて、易々と地獄に墮ちてたまるかよ！

なら立てよ、フリード！ てめえは、幾つもの命と言葉を踏みにじってきたじゃないか！ この時のために！

かつて切り捨てた司教が言った。

「お前の心は、復讐の闇に囚われている」と。
だからどうした。それが俺の生き様だ。

かつて惨殺した悪魔が囁いた。

「お前の復讐を私が果たしてやる。だから我が眷属となれ」

俺は、人間のままで復讐を果たす！

かつて犯した天使は謳った。

「復讐に囚われるのは悲しいことです。復讐からは何も生まれません」

そんなことはとうに聞き飽きた。これだけが俺の生きる道だ。

かつて見殺しにした聖女が語った。

「あなたの心が今にも壊れそうで、悲しくなる」

黙れ。心など最早どうでもいい。壊れるなら壊れてしまえ。

そうやって、何度も何度も何度も何度も殺して、屍を重ねて、血の海を渡り、そうして、俺は……………っ！

「ぐう……………っ！」

ふらつく体を、剣を杖にして痛みに歯を食い縛りながら立ち上がらせる。

だが、体のダメージは気合いでどうにかできるレベルを越え、もはや歩くことはおろか、立つことですらやつとだ。

「……………まだ立つのか。流石だなフリード」

コカビエルが、俺の目の前に降り立つ。

そして奴は、俺の頭上に剣を構える。

クソが！ 結局俺は、こんなところで！

「うおおおお！ 【破撃ノ蹴打・竜】！！」

【魔劍創造】！

「ぬう!？」

だが、次の瞬間、コカビエルは咄嗟にガードし、後ろに吹き飛ばされた。

「……………おま、えら」

それを成したのは、先程まで俺と相對していた兵藤一誠と木場祐斗だった。

「なんで……………」

「君と僕らの利害が一致したからだ、フリード・セルゼン」

「そう言うこつた。行くぞ木場！」

「ああ！」

木場祐斗がそつけなくそう答え、兵藤一誠とともにコカビエルへと向き直る。

と、その時、何か暖かいものが腹の刺し傷に触れた。

「こんな……………なんて酷い傷……………」

「アーシア、ちゃん」

かつて俺が虐げ、騙し、殺そうとした相手が、その原因となった神セイクリッド・ギア器で、俺を治療していく。

「わ、わたしは、あなたが苦手です、フリードさん」

俺の傷を暖かな光で癒しながら、アーシアがそう語る。

「怖くて、イツセイさんたちと敵対して……………」

「なら、何故」

聞くと、アーシアは顔を戦場へと向ける。そこには、コカビエルと、グレモリーの眷属達が激戦を繰り広げていた。

ただ、まだ意識を失っているのか、あの小僧や、聖剣を奪われた教会の二人は見当たらない。

その光景を見ながら、こちらを向かずアーシアは答える。

「人が傷つくのが、嫌だからです」

「……………」

「誰かが私の前で傷ついて、血を流すのが嫌だからです。たとえそれが、さつきまで敵対してた人だとしても」

「……………けっ、相変わらずのお人好しだ」

そう言つて、アーシアの手をどけて、前へと進む

「ま、待つてください！ まだ傷口は！」

「血は止まった。それで十分だ」

「でも！」

「黙れ。俺はそう言う無償の善意が死ぬほど嫌いなんだよ」

一歩を踏み出す。

正直、どうすればいいのかわからない。俺の持つ光の剣はあいつには効かない。それどころか、イツセーたち悪魔の攻撃すら殆ど効いていない。どうすれば……………。

「ふん、コバエが良くあがく。まあいい、バルパー、アレを」
「はっ」

通じない攻撃を何度も繰り返し、未だ倒れない俺たちを見て、コカビエルがつまらなそうに息を吐く。

そして、奴がバルパーから手渡されて俺たちに見せたのは、見覚えのある、白い結晶。

「——因子結晶！」

「因子結晶？」

俺の言葉に、近くにいた木場祐斗が反応する。

「そうだと、グレモリーの【騎士^{ナイト}】」。

これは、被験体から抽出し凝縮した聖剣の因子の結晶だ。

我々はこの技術を作り出すことで、人工の聖剣使いを産み出すことに成功した」

木場の、息を飲む音が聞こえた。

「それを作るために……そんなちつぽけな結晶を産み出すためだけに、一体お前は、
どれだけの命を踏みにじつてきた!!」

声を荒らげて、コカビエルへと食いかかるが、それをコカビエルは鼻で笑い、いい放
つ。

「知らんよ、そんな些細な事など」

「貴様……っ!!」

「だが、貴様の事は覚えておるぞ、木場祐斗。我々は、貴様のお陰でこの技術を見つけた
のだからな」

「どういう意味だ」

剣を周囲に産み出しながら、木場が静かに、怒気の声で問いかける。

すると、コカビエルとバルパーは、殆ど同時に笑い出す。

「貴様が処分から逃れたあの日、我々は焦ったよ。被験体が逃れたとなれば、ともすれば
教会の耳にこの施設のことを漏れるかも知れないと」

「故に儂らは、お前を探し回った。だが、結局は見つからず、施設に戻った時の事だった。

そこで儂らはあることに気づいたのだよ」

「それは、因子の流出」

コカビエルとバルパーが交互に語っていく。誇らしげに、邪悪な笑みを浮かべて。

「普段はすぐに焼却処分する死体から、聖剣にも似た気配を持つ白いエネルギー。私はすぐにこれが因子だと気付いた。

そしてそのエネルギーから作り出したのが、この結晶だ」

つまりだな、と笑顔をさらに邪悪に歪ませながら、コカビエルが嗤う。

「喜べよ木場祐斗！ 貴様の同胞はここにあるぞ！ 貴様の同胞から作り出したのがこの結晶が、第一の因子結晶なのだよ！」

「そん、な……………」

「だから例を言う。貴様が逃げなければ、我々がこれに気付くのはもつと遅れていたであろうからな！」

……………ほら、これをくれてやる。記念すべき第一因子結晶だ、受けとれ」

そう言って投げ捨てられた因子は、コロコロと地面を転がり、木場の靴に当たる。誰もが声を出せずにいた。

木場祐斗がその因子を手に取り、咽び泣くように崩れ落ちても、奴ら以外、誰も。

奴らの語りはまだ続く。

先程よりも楽しそうに、愉快そうに、邪悪に嗤いながら。

「そこから我々はさらにあることに気付いてな、さらに研究を続けた」

木場祐斗以外の全員が顔を上げる。

「なあ、フリード。貴様にくれてやった因子の調子はどうか？」

「どういう………つ、まさか！」

このタイミングで聞いてくると言うことは——つ！

「ほう、流石に察しいいな。

そう、まず我々が手につけたのは、因子との相性だ。いかんせん、他者の因子だ。拒

絶反応が起こって死なれては目も当てられない」

「そして見つけ出したのだよ、因子の安定した与え方を」

バルパーの言葉にコカビエルがうなずき、指を二本伸ばす。

「一つは赤ん坊の因子。

何者にも染まっていない、無垢な魂に宿る因子は、誰にでも適合する。

恐らく教会は、この方法で与えているのだらうよ。無論、殺すことは無いだらうが」

「……………なら、もう一度は……………」

声が、少し震える。

喉になにかが詰まったように息がし難い。

「我々とはある法則を見つけてな。」

それは、因子の持ち主の意識、自我……………いや、記憶と言うべきか。

それが、他者へ入ることを拒絶するのだ。故に、赤ん坊は誰にでも使える」

なら、なら、もう一つは、まさか……………本当に……………っ！

「それでもう一つの方法は……………」

「やめろ……………やめてくれ……………嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ！」

「……………最も親しい者への移植だ」

瞬間、すべてを理解した俺の思考が、真っ白に染まる。

「私が貴様を連れていった施設があつたらう？　そこで貴様は私の望み通りに、あの子供達と親しくなつてくれた！　貴様に与えた因子は、驚くほどにしつくり来ただらう？　なんら違和感無く自分に溶け込んだだらう？　つまりはそう言うことなのだよ、フリード！」

啜う。絶望した俺を見ながら、高らかに、啜う。

「子供達を殺すときのあれは見ものだったぞ！　どいつもこいつも、皆一緒に貴様の名を呼ぶのだ。助けてと、名を呼んで、祈りながら、血反吐を吐いて死んでいったよ！」

見てもいないのに、その光景が目には浮かぶ。

メアリーが、ジョンが、ユージーンが、セレスが……あの施設で、いつも俺にまわりついていてたガキ達が、あの毒ガスで苦しみながら、俺の名を呼ぶ。

「あ……あああ……あああ………」

「一人、また一人と絶命し、絶望が広がっていくなかで、一人だけ、皆を励ましながら希

望を持ち続けてたのがいたな……………名は何と言ったか？」

「被験No. 4 hope……………キャサリンです」

「だそうだ」

そして、心が折れた。

「あああああああああああッッ!!」

心が折れたのに、怒りに燃える。

憎しみに染め上げられる。

「コカビエルうううう!!」

光の剣を片手に、また走り出す。

『お兄ちゃん!』

アイツの声が甦る。

『そんなところで寝てたら風邪引くよ?』

施設内では一番の年長で、みんなの姉貴分だった、お節介焼きの女の子の声が。

『ガキンちよじゃないよ! 私にはキャサリンって名前があるもん!』

めちやくちやマセてて、お姉さんぶろうとして失敗して、みんなに笑われる。

毎日楽しそうだった。

『ロクデナシじゃないよ! お兄ちゃんは凄いいもん! 私たちに色んな事教えてくれるし、優しいし、強いもん!』

キャサリン。キャシー。

結局、どちらの名でも呼んでやれず。

『いつてらっしやい！ フリードお兄ちゃん！』

お帰りと、言わせて上げられなかった。

帰ってやれなかった………っ！

「殺す、殺す殺す殺す、殺す！」

飛び上がり切りつけるも、結果はやはり先程と同じ。

けれども、何度も何度も斬りつける。

憤怒のままに、絶望のままに。

「………ふん、結局、絶望してもこの程度か。やはり人間はつまらんな」

至極めんどくさそうに言ったコカビエルは、そのまま聖剣を振り上げ、今度は俺を両断すべく、力を込めて降り下ろす。

そして、俺は――。

第57話

振り上げられた刃は恐らく、いや間違はなく、人間の俺では反応できない速度で振り下ろされて、俺を容易く両断することだろう。

死を、覚悟した。

無念も恨みも怒りも、何もかもを果たすことのできないまま、無力な自分にうちひしがれながら、自分は死ぬのだと。

だけど、それなのに……………

——フリードお兄ちゃん。

声が、聞こえた。

光が、見えた。

温もりを、感じた。

「な、なんだ、この光は！　この、聖なる光は!?!」

俺を両断せんと振り下ろされた刃は、しかし俺に届くことはなく、俺とコカビエルを隔てるように発生した光の幕に防がれてしまう。

ふと、右手に温もりを感じる。

きつく握りしめ、爪が食い込み、血が滲んだ右の拳を、暖かく、優しく包み込む温もり。

小さな手の感触が、しつかりと伝わってくる。

それにつられるようにゆつくりと、その場所へ目を向ける。

「……………うそ、だろ」

——ううん、嘘じゃないよ、お兄ちゃん。

愛くるしい声で、もう聞けない声で、彼女が語りかけてくる。

彼女だけじゃない。

——兄ちゃんは僕が守る！

——へへ、兄ちゃんと一緒に戦うんだ！

——大丈夫？ お兄ちゃん。

——痛い痛い、飛んでいけー。

「……………お前ら……………どうして……………」

どうして、ここに？

その言葉は、喉を詰まらせる感情によって、声にすることはできなかつた。

——お兄ちゃん、みんないるよ。みんなみんな、ちゃんとここにいますよ。

彼女が微笑む。

いつの間にか、気付かない内に心の支えとしていた笑顔で、彼女が微笑む。
「キャサリン……………」

そつと、その名を呼ぶ。

ついで呼ぶことが出来なかったその名を、今、ここで。

すると彼女は、一度呆けた顔をした後、花咲くような笑顔を浮かべる。

—— やつと名前を呼んでくれたね！ お兄ちゃん！

「なぜだ、何が起こっている！ なぜ刃が通らぬ！」

コカビエルが声を荒らげて、何度も何度も、光の幕を剣で切りつける。
だが、それでも膜は斬れることなく、むしろその光を増していく。

—— 行こう、お兄ちゃん。

キャサリンが手を引く。

「行くつて、どこへ？」

問うと、横から赤毛の少年、ユージーンが飛び出してくる。

—— そりゃ、兄ちゃんがごめんなさいしなきゃいけない場所だよ！

「な……………」

驚きの余り、息を飲んだ。

なぜ、この子達がその事を……………」。

「私たちね、ずっと見てきたの。お兄ちゃんが私たちの結晶を取り込んだあの日から。」

「そして僕たちは見たんだ。兄ちゃんの中で、兄ちゃんの昔を。」

膝から崩れ落ちる。

この子達にあれを知られるなど、あつてはならないはずだったのに。

「お兄ちゃん、悲しかったんだね。」

「ッー」

項垂れる俺の頭を優しく抱き、囁く声をした。

「辛かったんだね。」

「寂しかったんだな。」

一人、また一人と、俺を抱き締めていく。

—— だからいつも、泣きながら笑って、

—— 苦しみながら、歩き続けて、

—— 悲しみながら、恨んで来たんだね。

溶かしていく。

司祭の威厳ある説教にも、聖女の慈愛の言葉にも、悪魔の甘い囁きにも、天使の清らかな歌声にも頑なで、溶けることを、自分を曝すことを否とした俺の心が、容易く溶かされていく。

頑丈にかけた心の錠が、一つずつ開いていく。

その度に、言葉が溢れ出す。

誰にも打ち明けたことのなかった、俺の本音^{こゝろ}が。

「誰かを傷つけるのが、苦しかった！ 狂気で在り続けるのは、辛かった！ この手を何度も何度も血に染めて、心が壊れそうな位に悲鳴を聞いて！ 嗤って、狂って、錠を掛けて！

—— そうやって狂わなきや、やってられなかった！」

「何度も立ち止まろうと思った！ 何度も投げ出しかけた！ でも、その度に聞こえる

んだ、殺したやつらの怨嗟の声が！ 甦るんだ、聖劍への終わりの無い憎悪が！」「この身が、血と憎しみにまみれたこの俺が、立ち止まれるわけ無いと、歩き続けなければと、そんな強迫観念にただただ突き動かされて、そうやって屍を重ねてきた！」「ただ恨みを晴らすために、聖劍を壊す為だけに、そうやって生きてきた！」

どんなに間違つていても、どんなに苦しくても、たとえ最期に地獄に墜ちても！ それで願いが叶うのならと、それで目的が果たされるなら、それでも言いと、そう自分に言い聞かせてきた！」

「だけど出来なかった！ 果たせなかった！ 幾百もの屍で作った俺の道は、ただただ空虚な物だった、根本から間違つてたんだ！」

一度口を開いてしまえば、心のままに叫んでしまえば、もはや止まることなど出来なかった。

溢れてくる。自分すらも認識していなかった、自分自身の声が。

声が掠れるほどに叫んで叫んで、溜め込んでいた物を吐き出せば、その最後に残るものは、俺の心からの言葉^想だった。

「もう……………もう、嫌なんだ、誰かを傷つけるのは……………もう嫌なんだ、誰かを殺すのは！」

それは、どうしようもなく自分勝手に、救いようがなくて、それでも本心だから、誰かに伝えたくて。

「もう、誰も殺したくない……………俺は……………僕はもう誰も、傷つけたくない！」

叫んだ。魂の底から、身勝手な自分の願いを、高らかに。

——うん、うん。頑張ったね、辛かったね。だけね、お兄ちゃん。お兄ちゃんはきつと許されない。

「……………っ」

キャサリンの言葉が心に突き刺さる。分かってた筈なのに、覚悟していた筈なのに、痛くて、苦しい。

——でもね、お兄ちゃん。お兄ちゃんはそれでもやっぱり私の………ううん、私達のヒーローだから。

だから、と彼女は俺の手を引く。

——行こう？ あの歌が聞こえる場所へ。お兄ちゃんが、私達のヒーローが、誰かを守る、あの場所へ。

歌が、聞こえる。

大嫌いで、なのになぜか安らぎを感じてしまう、清らかな歌が。

「ああ、行こう」

間に合わなくても、もはや償うことは不可能でも、それでも、この心に従って、俺は行こう。

この子達と共に。



落ちた結晶を拾い上げ、きつく握りしめ、僕は涙する。

「皆……………っ！」

怒り、悲しみ、後悔、罪悪感。

様々な感情が胸中を渦巻き、心がぐちゃぐちゃになって、ただひたすらに涙を流す。

「皆、すまない……………すまない！」

僕だけが生き延びてしまった。

僕だけが、平和な日常を享受してしまった。

そんな言葉が、口を衝いて零れてくる。

そつと、頬に触れる暖かな感触があつた。

—— 泣かないで。

—— 謝らないで。

—— 僕たちは君に、笑つていて欲しいんだから。

涙に濡れる顔を上げ、そしてその光景に目を疑う。

「どう……して……」

問いかける。

—— 君の声が聞こえたから。

—— 君の悲しそうな声が。

僕の問いに、彼らはそう答える。

「みんな」

—— ああ、そうだよ、僕たちだ。

—— 久しぶり、祐斗。

光はいつしか人の形となり、僕の回りに降り立つ。

その姿を見た途端、言葉が溢れてくる。

ずっとずっと、抱いていた感情。笑顔の奥底でずっと燻っていた物。

「僕は、僕は君たちに、ずっと謝りたかった！」

「ずっと考えてた！ 僕だけが生きてて良いのかって！ 僕だけが幸せを享受して良いのかって！」

ずっと疑問に思ってた！ なんであの時、僕だけを逃がしたの!? なんで………なんで皆と一緒に居させてくれなかったの!？」

叫ぶように問いかける。

あの日、部長出会ひ、悪魔になったあの日から、抱き続けてきた思いを。

—— 僕たちが、それを望んだから。

だけど帰ってきたのは、とても簡単な言葉だった。

——君に生きていて欲しいと、笑っていて欲しいと、私たちが願ったから。
「なんで、僕なんかを！」

——私たちは、君が大好きだから。

「……………っ」

——君はいつも、僕たちを気にかけてくれた。

——僕たちが笑顔で居られるように、いつも気を配ってくれた。

——君がいたから、僕たちは明日を望むことができた。

——君がいたから、私たちは夢を抱くことができた。

「だけど潰えた！ 君達みたいに、大切な夢を持つてる人たちが死んで、何も持っていない僕だけが生き残った！ 生き残らされた！」

——それでも僕たちは、君に恩返しがしたかった。

「恩返し……………？ たったそれだけの為に、君達は命を！」

——明日を望んで欲しかった。夢を抱いて欲しかった。

「明日……………夢……………」

そんなもの、抱いたことが無かった。

あの頃は、あの苦しい実験を耐えるのに精一杯で、悪魔になってからは、そんなこと許されないと、ひたすらに自分を虐め抜いた。

——もういい、もういいんだよ。

——いつまでも、死者私達に囚われないで。

——今の君には、やるべき事があるはずだから。

「やるべき、事……………」

視線を落とし、両手を見つめる。

何も握っていない、空っぽな両手。僕みたいに空っぽな。

でも、傷だらけだ。

剣を振り続けてできたマメや、悪魔や魔獣との戦いでできた傷。

——その手にまだ何も持っていないなら、これから沢山持てるね。

誰かがポツリと、そう呟く。

目を閉じれば、色んな景色が浮かんでくる。

悲しかったこと、苦しかったこと、辛かったこと………。

そして、オカ研の皆と出会い、過ごしたあの日々。

—— 祐斗、君は、なに？

「僕は、悪魔だ」

—— それだけ？

かぶりを振る。そんなわけない、と。

「僕は、悪魔だ。リアス・グレモリー様の眷属にして、最速の【騎士】！」

—— そっか。それなら君は、どうしたいの？

「守りたい。大切な皆を。大切なあの場所を」

—— うん。

「だから、ごめん。僕はもう、君たちの為には戦えない」
謝ると、彼らは気にするなど笑う。

—— ううん。それよりもありがとう。

—— 僕たちの事を忘れないでいてくれて。

—— 私達のために、泣いてくれて。

—— ありがとう。

僕を囲んでいる皆の輝きが増していく。

—— 君が、僕たちの大好きな君が道を見つけたのなら。

—— 明日を望んで、夢を抱いたのなら。

—— 私たちがその背中を押して上げる。

—— 見守ってて上げる。

—— だから怖がらないで。

歌が聞こえてくる。彼らが歌う歌。

それは聖歌のようで、少し違って。

—— さあ、歌おう。

—— 僕たちの友の、門出だ。

—— 歌おう。祝いを。

—— 歌おう。道を照らす歌を。

彼らはいつしか光となり、一つの光球へと形を変える。

—— 僕たちは一人じゃ聖剣を扱えなかった。

—— だけど、皆一緒なら、大丈夫。

光が、僕の中へと入ってくる。

祝福するように、闇を照らす光が。

「ああ、行こう、皆」

——行こう。たとえ神がいなくても。

——たとえ神が見ていなくても。

——この歌が、光がある限り。

——僕たちの心はいつだって。

「——一つだ」

一層強い光が辺りを照らし、僕を包み込んだ。

そして、何かがカチリと、嵌まるような音がした。



『相棒。あの【騎士】は……………至ったぞ』

至る……………？ どういう事だ？

『セイクリッド・ギア神 器は、所有者の成長や思いに応じて、その力を変化させていく。

その中でも、世界の流れに逆らう程の変化を見せたとき、セイクリッド・ギア神 器はその姿を大きく変える』

つまり、何が言いたいんだよ？

『——あれは、紛れもなく禁じ手……………バランスブレイク禁 手だ』

バランス、ブレイク……………って、マジか!?

「すげえ、すげえぜ、木場の野郎!」

『む? ……………ほう、それだけじゃ無いようだ』

あん?!

『意識を集中してみろ。お前にも解るハズだ。お前も持っているのだからな』
俺も持っているって……………まさか！

『ああ、そのまさかだ！ ははははは！ あの小僧、至るだけでなく、発現までさせやがった！』

この感じ……………ああ、知っている。覚えている。

自分が目覚めたとき、そして部長が目覚めたとき、俺はこの感覚を味わった。

「そうか……………木場のやつ、とうとう……………」

昂る感情を押さえ込みながら、俺は木場のところを見やる。

すると、木場の声が聞こえてくる。

「僕は、剣となる。大切な皆を、あの子を守る、そんな剣に、騎士に、僕はなる！
だから応えてくれ！ 僕のこの想いに、誓いに！ 【魔剣創造】 ツ!!!」

剣を作るべく木場が構えた両手から、それぞれの力が出てくる。

魔剣の闇と、聖剣の光。

その二つが折り重なり、束なり、組み合わせあって、一つとなる。

そして彼の手には、一本の剣が握られていた。

禍々しいオーラと、神々しい輝きを纏う、美しい剣が。

「^{バランズブレイカー}ソッド・オブ・ビトレイヤ

「禁手。【双覇の聖魔剣】……………そして、」

剣を右手に握った木場が、左手を上にかざし、そして叫ぶ。

「皆、見ててくれ。これが僕の誓いだ。血の力だ！」

木場から赤い光が発せられ、辺りを照らす。

「邪悪を打ち払う力を！ 血の力【祝歌】ほきうた!!」

希望が、輝きを取り戻した瞬間だった。

第58話

声が聞こえた。

喪失に慟哭する声。己が道に懺悔する声。

歌が聞こえた。

友の嘆きを慰撫する歌。その門出を祝う歌。

——そしてずっと、僕を呼び続ける声。

『まだ、眠り続けるおつもりですか、我が君よ』

『あなたにはまだ、成したいことがあるのでしょうか？』

成したい、事……………

『それでも主は、ここで眠り続けるのか?』

ううん。そんなことはしない。

だって僕はまだ、誰も守れていないから。何も成せていないから。

『ならば立たねばなりません、主君』

うん、分かっているよ。

だけど、足りないんだ。何かが。

『足りない?』

今の僕じゃ、あの敵に届く気がしない。

『だから、立てぬと申すのですか?』

ううん。立つよ、僕は。

何かが足りなくて、その足りないものが何かは解らないけど、心が知っているんだ。

何をすれば良いのか。何を課せば良いのか。

だから、僕がもう一度立ち上がって、剣を握れるように、力を貸してくれるかい?

『無論だとも、我輩の愛しい主よ』

『妾たちは常に、あなたの味方であると言うのに』

『なにを躊躇われる必要がありますか』

そっか……………そうだよね。

君たちはいつも僕の事を想ってくれていた。
だったら僕も、それに応えなくちや。

『さあ主よ、征ゆこうか』

『あなたが望む結末答えを掴むために』

『主君の守りたい者達を守るために』

だから、そのために、僕は

「誓約を、ここに」



誰もが、その光景に目を奪われていた。
フリード・セルゼンの嘆きと懺悔に。
その身から発せられる、聖なる光に。
祐斗くんの、同胞達との再会を。
その力の覚醒を。

私の双眸から無意識に涙が零れ落ちた。
私だけじゃない。

リアスも、アーシアちゃんも、小猫ちゃんも、その眦から涙を溢している。

「木場祐斗」

光に護られたフリード・セルゼンが、祐斗くんの隣に立つ。

「今回だけだからね、フリード」

「当然だ」

彼の隣に立つフリードの目には最早狂気は無く、ただ決意と闘志だけが輝いて見えた。

——ああ。

なんと、眩しい光景なのだろうか。

私達^{悪魔}にとって毒であるはずの聖なる光は、血の力と共に私達の心を優しく包み、安らぎを与えてくれる。

——君は立てたのですね、祐斗くん。

憎んでいた力と共に。忌み嫌っていた光^{もの}と共に。

私には、まだその決心が着かない。

でも、立たなくちや。

後輩^後が、イツセーくんや祐斗くん達が守ると誓った子が、まだ、目を覚ましていないから。

私達の心の支えで、私の大好きな子が、まだ目を覚ましていないから。

だから立たなくちや。目を覚ました彼が心配しないように。いつまでも、護られてばかりにならないように。

リアスが、小猫ちゃんが、アーシアちゃんが、ゼノヴィアさんが。

皆が立った。その目に意思の炎をたぎらせて。

そして、私達が皆立ち上がり、コカビエルと向かい合ったその時だった。

また新たな光が満ちた。

聖剣の光でもなく、血の力の光でもない、新たな光。

その、黒と金で彩られた光は、まるで帯のようになり、一ヶ所から放たれている。

「この、輝きは……………」

私はこれを知っている。

実際に見た訳じゃない。映像で見ただけだ。

でも、この光を誰が放っているのか、私達は知っている。

皆が一斉にその光の出どころ、後ろを振り向いた。

そして振り向いた先には、剣を杖に立ち上がる、一人の人物が。

「…ハルトー！」

「ハルトくんー！」

私と小猫ちゃんが動いたのはほとんど同時だった。

私達はすぐに彼のもとに駆け寄り、その方に手を添える。

「大丈夫だよ、二人とも。僕は大丈夫」

その言葉の通り、一度立ち上がってしまえば、先程までの弱々しさは消え、いつもの彼がそこにいた。

普段は小動物のように臆病で、愛くるしくて、けれどいざ剣を握ると、うって変わって強く頼もしく見える、その小柄で華奢な体躯。

「ごめんなさい、皆。心配かけてばかりで。僕はもう、大丈夫だから」

黒と金の光を纏い、彼は危なげの無い足取りで歩いていく。

自然と、私達の立ち位置が変動する。

ハルトくんを中心に、祐斗くん、フリード、イツセーくんと並んでいく。

「……………あれほどのダメージを受けてまだ立つか。人間……………神結ハルト」
コカビエルが忌々しそうに、ハルトくんの名前を呼ぶ。

そんなコカビエルへ、彼は剣の切っ先を向ける。

「ただの人間って、侮ってもらっちゃ困るよ、神話^{墮天使}」

「なに？」

ハルトくんは不敵に笑って剣を構える。

それに合わせて、皆も戦闘体勢に入る。

「さあ、行くよみんな！——神話を喰らう時間だ」

その途端、光が炸裂した。



『誓約を』

「二つ——僕は敵を捕食する」

『誓約：【解き放つ本能】——承認。残存する怪物ケルベロスの魔力を確認。これをもつて誓約履行とする。拘束フレームパージ』

「二つ——僕は自分の命を大きく削る」

『誓約：〔挑戦者の選択〕——承認。そして現在の状態を誓約と認識。誓約履行。拘束
フレームパージ』

「三つ——皆の傷を癒したい」

『誓約：〔捕食者の渴望〕——承認。こちらと同じく、現在の状態を誓約と認識。誓約
履行。拘束フレームパージ』

アラガミ達が、僕の立てた誓約を、どんどん承認していく。

曰く、どうやら誓約の履行内容が多少変質しているらしい。

どちらにせよ、こっちとしては願ったり叶ったりだ。

「以上を以て、誓約を履行する！」

『『全誓約履行確認。これより、我々の力を解放・顕現する！』』
アラガミ

その途端、白一色だった世界に、黒と金の光が走る。

『主よ。そなたがこれから歩むのは、これまでよりも辛い道となろう』

『ですが、忘れないで下さい』

力が溢れる。

止まること無く、金の光がまるで、僕を祝福するように。黒の帯がまるで、僕を守るように。

二つの光が僕を包み込む。

「さあ、行くよみんな！——神話を喰らう時間だ！」

言つて、神機を中心。コアの部分に手を当てる。

説明は受けなかった。でもわかる。

さあ、解き放とう。

これが僕の力だ。

僕の想衝動いだ！

「解き放つ！ 僕の大切を守る、その為に！

誓約解放——【ブラッドレイジ血の衝動】!!」

瞬間、僕自身すらも眩む光が辺りを包み込み、形を成し、そして、

「光の、片翼……………」

ポツリと、誰かが呟いた。

「……………なんだ、それは……………」

コカビエルが、僕の光を見て呆然と呟く。

「なんだその光は……………なんだその翼は……………私は知らぬぞ、そんなもの！ 大戦中はおろか、私が生来てきて、一度も見ることがないぞ！」

呟きはだんだんと大きくなり、対には叫びとなる。

「なんなんだ貴様は！ 先程からの技といい武器といい！ その光といい！ 貴様はいつたい何者なんだ、神結ハルト!!」

「言っただよ、コカビエル。」

僕は人間だ。人間の、「神を喰^{ゴツ}ら^ドうもの^{イーター}」だ」

そして僕は、荒ぶる衝動のままに、剣を携え、地面を蹴りだしたのだった。



「神喰いだど？ 神話を喰らうだど？ 人間が？ は、ははは……ハハハハハハハハハハッ！ 思い上がるなよ、人間風情が！ 消えろ！ ウルサマヨル・サンクテイオ【七星の裁決】！」

俺達を吹き飛ばしたあの極光が放たれる。

それも、見る限り先ほど以上の出力を持つてだ。

「ハル！」

とつさに俺はハルの名を呼ぶ。

しかしハルはその足を止めず。剣を前に構えて、叫ぶ。

「【IE肆式・轟爆】！」

次の瞬間、神機から放たれたのは紫色の光を放つ眩い爆発。

一度で光を削り、二度目で動きを止め、そして三度目の爆発が、あの極光を吹き飛ばしてしまふ。

「小僧がああああ!!」

猛り叫んだコカビエルが、聖剣に光を纏わせて剣を振り上げる。

「死ねえ！」

だが、

「させるものか！ ブラッドアーツ【ブレード・シールド】！」

コカビエルとハルトの間に突如として現れた数本の聖魔剣が折り重なり、エクスカリ

バーを受け止め、弾き返す。

「バカな！ たかが神セイクリッド・ギアの剣に、本物の聖剣が負けるなど！」

弾き返された事が信じられないのか、コカビエルが聖魔剣を何度も叩きながら激昂する。

すると、それに返答したのは、未だ剣を持たぬフリードだった。

「わからねえか？ コカビエル。」

聖剣は、因子があれば絶対に使えるって訳じゃねえんだ」

「……………どういことだ」

「聖剣も、持ち主を選ぶってことだよ！」

そう言うや否や、フリードは右手をかざし、叫ぶ。

「さあ、来いよ。最強と謳われた聖剣よ！ 憎くて憎くてたまらねえクソつたれ！」
エクスカリパー

その瞬間、コカビエルの手に握られていた聖剣は、まるでコカビエルを拒むようにその手を弾き、真つ直ぐとフリードの手元へ飛んでいく。

「バカな……………バカなバカなバカな！」

聖剣を奪われたコカビエルは、ひどく激昂し、翼を広げて飛び上がる。

「バルパー！ あれを使う！ 下がっている！」

しかし、その言葉に答える声はなかった。

「何をしている、バルパー！」

「聖と魔の融合………？ そんな、バカな………そんなこと、神が許すわけ………」

コカビエルが振り向いた先には、膝を付き、まるで何かに絶望したような表情をした老人の姿が。

「教えてください、コカビエル様………神は………神は一体どうなったと言うのですか！ なぜ、聖と魔の融合などという禁忌がこうも容易く！」

「ええい、黙れ！ 神はとうの昔に死んでおるわ！」

「なっ！」

バルパーが驚いたような声をあげる。

けど、それはこつちだって同じこと。現に、部長や朱乃さんは目を見開いている。

「そんな………主が、もういないというのか………」

「う、ううう………」

特に、アーシアとゼノヴィアの表情は、驚きを通り越して、絶望に染まっていた。

「そうか、神はもう、死んで………嗚呼、死んでいたのか………ひ、ひひひ、ひひひやひやひや!!」

突然、バルパーが狂ったように笑い出す。なんだってんだ？

「ああ、死んだのですね神よ！ 私が復讐するでもなく、侵すでもなく、とうにあなたは！ ひひひひひ！ ならば、ならばならば、私のこの想いはなんだというのですか！」

泣きながら笑う老人の姿に、俺たちは動くことができなかつた。
ただ一人を覗いて。

「ちい、役立たずが！」

「おお、神よ！ ……ごぶつ……か、み………よ………」

コカビエルが投げた光の槍は、あつさりとバルパーの胸を貫き、老人は何も理解しないままに息絶えた。

「まあいい。これでいつでも使えるわ！」

空高く舞い上がったコカビエルが両手を天に掲げる。

「凶に乗った悪魔と人間どもよ！ 後悔と共に感謝するがいい！ 我が最大の光で葬ってくれるわ！」

そして、その言葉と共に、夜空が明るく照らし出さるのだった。

第59話

「限り無き我が権能たる星の光よ、最果てに煌めけ！」
ステラ・ファイニス・エールフティオ「終　星　崩　却　光！」

放たれた光は、僕が盾で辛うじて防いだあの光よりも大きく、荒々しく、莫大な質量を持って、僕らを押し潰そうとしてくる。

でも、怖くない。

だって、

「血の力【鼓舞】！」

「血の力【支配】！」

二つの、頼もしい声と光。

真つ先に動いたのは、兄ちゃんだった。

「いくぜドライブ！　ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手！　ブラッドアーツ！」

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! And Blood』

Arts Operation!!』

「食らいやがれ、【ドラゴン・シヨット】オ!!」

セイクリッド・ギア神器によって強化された赤い龍の一撃は、光の中心に当たり、その勢いを若干だが

押し返す。

「私たちもイツセーに続くわよ、皆！ ブラッドアーツ【滅魔ノ戯曲・巨星】！」

「ええ、リアス！ 雷撃よ！」

グレモリー先輩と姫島先輩の攻撃。

そして、それに続くのは僕……………ではなく意外な人物だった。

「……………次は私だな」

「ゼノヴィアさん!? でも、武器は……………」

「案ずるな神結ハルト。ちゃんと自前がある」

そういうと、ゼノヴィアさんは虚空に手をかざし、

「私の声に答えてくれ、デュランダル！」

その虚空から、一本の大剣を取り出した。

「それは……………」

「元々、私はデュランダルの担い手でね。まだ未熟だから使っていないだけさ」

軽く説明をしたゼノヴィアさんは、その剣を大上段に構える。

「輝け、最硬の聖剣よ！ 邪悪を打ち払え！ 【不壊剣の煌輝】」

降り下ろした聖剣から、莫大な聖のオーラが放たれ、コカビエルの光をさらに削る。

「おのれ……………小賢しい足掻きを！」

コカビエルの吠える声が聞こえ、光の威力が少し回復してしまう。
 まだ、余力があるのか！

剣を握り直し、迫り来る光を見据える。

「俺を選んだのなら、俺の意思に従えよ、エクスカリバー！」
エクスカリバー・ベネトレイト 【星造剣の刺突】！」

後ろから声が聞こえたと思ったら、僕の横をフリードが駆け抜け、その助走から繰り出した刺突により、エクスカリバーから光が迸り、また削る。

「聖剣よ、魔剣よ！ 僕の想いに応えてくれ！ ブラッドアーツ！」
ビトレイヤール・オブ・キャリバー 【背信者の斬撃】
 !!」

次に、木場先輩の放った、黒と白の折り重なった斬撃が光を大きく削り、放たれた当初に比べて随分と小さくなる。

だが、

「削り、切れない！」

グレモリー先輩の叫びが聞こえ、コカビエルの嘲笑が響く。

「ふはははは！ 所詮はこの程度なのだよ貴様らは！ まあ、十分に楽しめたぞ、雑魚どもー！」

既に勝ち誇った声をあげるコカビエル。

全く、

「僕を忘れてもらっちゃ、困るよ」

神機を構える。

あそこまで削れたのなら、今の僕なら切り裂けるはずだ。

「ブラッドアーツ……………」

僕の体内のオラクルを凝縮し、珠を作り出し目の前に浮かべる。

放つのは、単発において一、二を争う秘剣。

「【IE零式・斬】!!」

そしてその一撃が、ついにココビエルの光を切り裂くのだった。

「バカ、な……………バカなバカなバカなバカな、そんなバカなああ！なぜだ、なぜ私の光が敗れる!?! 神話の光だぞ、私が神から星座を篡奪した、原初の光ぞ！それが何故!」

ココビエルが、信じられないと言うように神を振り乱しながら叫ぶ。

だから僕は、それに答えた。

「だから言っただろう、コカビエル。神話を喰らうってさ。ブラッドアーツ【ソニック・キャリバー】！」

牽制として斬撃を飛ばす。

「くそつたれがあああ!!」

コカビエルが投げたのは、技でもなんでもない、ただの光の槍。

一本だけなら、「ソニック・キャリバー」は負けなかったが、雨霞と投げつけられた光により、僕の攻撃は無効化されてしまう。

「クソ、クソクソ、クソクソクソ！」

自棄になったのか、コカビエルはただ技も何もなく、がむしやらに光の槍を投げつけてくる。

そこに最初の余裕は無くなっていた。

「くっ！」

だが、それが功を奏し、がむしやらな光には規則性がなく、僕らは回避に集中するか無くなった。

「くそ、このままじゃ埒があかねえ！」

兄ちゃんが舌打ち混じりに光槍を避ける。

兄ちゃんの言う通りだ。それに、この状態も、ブラッドレイジそこまで長く持つ訳じゃない。

………勝負時か。

「兄ちゃん！ あいつを叩き落とす！ 手伝って！」

「ハル!? ……へへ、了解！ 行くぞ！」

僕と兄ちゃんは同時に走り出した。

と、そのとき、兄ちゃんに当たりかけた光が、紅黒い魔力によって打ち消される。

「皆、イツセーとハルトの援護を！ 小猫はイツセーの射出台に！」

『了解！』

皆が一斉に動き出す。

降り注ぐ光を、聖剣や聖魔剣、雷撃、魔力等が打ち払い、僕らの道を拓く。

「僕から行くよ！」

両足に力を込めて、飛び上がる。

ブラッドレイジによって強化された脚力は、一度でかなりの高度を稼ぎ、コカビエルの元まで到達する。

「スキル【飛将】！ ブラッドアーツ【夢想ノ太刀・黒】【無尽ノ太刀・蒼】！」

空中戦のスキルを発動させ、さらに二つのブラッドアーツを同時に発動し、剣を振るう。

前までなら、こんなことをしたらすぐ気が来たり血塗れになったのだろうが、今

の僕ならやれるはずだ。

空中で何度も剣を振るう。

ゴツドイーターの、空中で剣を振っている間は滞空する、という特性を生かし、コカビエルを光ごと叩ききる。

「……………ぐうう……………神結、ハルトオ！」

血反吐を吐きながら僕の名を叫び、光の槍を直接振るうが、それをジャンプの二段目を利用して避け、そのまま背後へ回り込む。

「ブラッドアーツ解除！ スキル「バックスタブ」！」

二つのブラッドアーツを解き、背後攻撃スキルを発動させ、次のブラッドアーツを選択する。

選択するのは、安定した攻撃力と攻撃範囲を持つブラッドアーツ。

「朧月！」

一撃目で、左の三枚を切り落とし、もう一度で、右の三枚を切り落としした。

「ぎゃあああああ！！」

絶叫が響き渡る。

翼を失ったコカビエルは、空中でのバランスを崩し始める。

そしてそこに、小猫ちゃんによってぶん投げられたイツセー兄ちゃんが到着する。

「もう一度墮ちろ、墮天使。てめえの負けだ。ブラッドアーツ【破撃ノ拳打・龍】！」
その赤い拳を勢いよく叩きつけられたコカビエルは、そのまま地面に激突し、クレール
タワーを作り上げた。

もうもうと土煙が上がリ、振動と爆音が当たり前に響き渡る。

「負けるはずが無いんだ……………この俺が、負けるなど……………そんなこと……………」
っ！ まだ立つのか！

着地しながら前を見ると、虚ろに眩きながらコカビエルが立ち上がっていた。

「消えろ消えろ消えろ！ 【光槍四散】！」

次の瞬間、奴を中心に光の槍が展開され、一斉に射出される。

僕は咄嗟に盾を開き、近くにいた兄ちゃん、小猫ちゃん、姫島先輩の前に出る。

「スキル【穴熊】！」

くっ、なんだこの密度は!?

さつきまでののがむしやらかな攻撃と違って、攻撃の間隔が短すぎる！

向こうでは、グレモリー先輩が消滅の魔力で生成した壁で光を防いでいた。

……………あれ？ 木場先輩とフリードは？

「木場ああああ!! フリードおおお!!」

その疑問を抱いたとき、兄ちゃんが叫んだため、兄ちゃんの視線の先に目をやる。

するとそこには、聖剣と聖魔剣で光を叩き落としながら駆け出している二人の姿が。「行け！ 行けえええ！」

兄ちゃんが、二人の後押しをするように、鼓舞する。

……………そうか。この戦いは、あの二人にとつては何よりも意味のある物なんだ。

だったら、決着を着けるのはあの二人に他ならないはずだ！

「…祐斗先輩！ 行つてください！」

「行きなさい、祐斗！ フリード！」

「二人とも、行つて！」

兄ちゃんに続くように、皆が二人を後押しする。

「うおおおおお!!」

その言葉に応えるように、二人は雄叫びをあげ、光を切り裂きながら駆け抜けていく。

そうだ、行け。行つて、全てを終わらせて！

貴方達が囚われていた過去を！ その元凶を！

乗り越えた刃で、辿り着いた力で、その未練を、妄執を、後悔を……………

「断ち斬れええええええええ!!」

「おおおおおおおおお!!」

そしてとうとう二人は、その光の弾幕を乗り越え、コカビエルのもとへと辿り着いた。

「認めるものか………認めるものか! この俺が負けるなど、そんなふざけた事など、認めるものかああああ!!」

「いいや、僕たちの勝ちだよ、コカビエル! ブラッドアーツ【聖魔ノ劍舞・煌月】!!」
「人間俺と悪魔たを、なめるなよ!」

そして、二本の剣が同時に振り下ろされる。

その斬撃は、両肩から真つ直ぐ下に切り裂いた。

「認め………ん………」

斬られたコカビエルは、よろよろと数歩後ずさり、そこで俯せに崩れ落ちた。

辺りが静寂に包まれる。

「終わった、のか……………?」

ポツリと零れたゼノヴィアさんの眩きが、やけに大きく響き、そして実感が徐々に沸いてくる。

「勝った……………勝ったんだ、俺たちは!」

「本当に、神話に勝つなんて……………自分の事なのに、未だ不思議な気分よ」

「わ、私もです……………」

兄ちゃんがガッツポーズから雄叫びをあげ、グレモリー先輩とアーシアさんは力が抜けたように座り込んでいた。

「…ハルト! やった!」

「勝ちました、私たち勝ちましたわ!」

そして小猫ちゃんと姫島先輩は、何故か僕に抱きついてくる。

「うん、うん、勝ったんだよ、僕たち!」

いつもなら緊張で動けなくなる僕も、この時ばかりは高揚のあまり、そのまま二人を抱き締めてしまう。

あとで悶死するかもだけど、今はこれでいい。

ふと目をやれば、木場先輩とフリードが、倒れたコカビエルを無言で見つめている。

「とうとう勝ったね、僕たち」

「ああ、確かに勝った……………けど」

「うん。何か、虚しいね」

そうか、二人は道は違えど、見つめた物が光と闇であれど、どちらも復讐を心の支えに生きていたから、それが果たされた今、二人の心は……………。

「なあ、フリード」

「なんだよ」

「僕には仲間がいる。この虚しさを埋めてくれる仲間が」

「おう」

「だからさ、君も……………」

「けっ、断る。誰が好き好んでこれまで殺してきた悪魔になんかなるかよ」

「……………」

「……………ちっ、そのやっぱりって目、腹立つぜ」

けど、その虚しさはいつか消えるだろう。生きている限り、出会いがあるのだから。

「ふぎ、けるな……………」

その時の僕らの動きは自分でも驚く程に機敏だった。

倒れていたはずのコカビエルから言葉が発せられ、動き出す。

「そんなー！」

あれだけの攻撃を浴びせてまだ立てるだなんて!?

心のなかで盛大に舌打ちし、駆け出すために脚に力を入れた瞬間、

『ダメだ主ー！ これ以上はー！』

「……………なっ！ この、タイミングで!？」

体から力が抜け、光の片翼が霧散する。

膝を着く。体に上手く力が入らず、立つことも覚束ない。

これは、ブラッドレイジ強制終了……………だけじゃない。きつと、ブラッドアーツを二

つ同時に使用した反動と、蓄積されたダメージによるもの。

「くそー！ また、僕は!？」

大事なときに、選択を誤ったのか!

あの時、一つにしておけば……………。自分の愚かしさに腹が立つ。

けど、今はそんな自責をしている場合じゃない!

「俺は、負けぬ……………俺が負けるなど、あり得ぬ……………思い上がるなよ、下等種族

どもが！」

先程までと同じ言葉を繰り返したコカビエルが、その手に何かを召喚する。

あれは……………

「注射器？」

「これはあまり使いたくなかったが……………っ！」

注射器を握ったコカビエルは、何の躊躇いもなく自分の首筋に刺し、その中の薬品を体内に注入する。

「なにを!？」

「なんだかはわからねえが、させるかよ！」

木場先輩とフリード、そしてイツセー兄ちゃんが同時に駆け出し、コカビエルにトドメを刺そうとする。

が、

「くははははは！ 無駄あ！」

コカビエルの周囲に展開された光の障壁により、受け止められてしまう。

「くくく、はははははは！ 溢れてくる……………力が溢れてくる……………凄まじい……………これが『魔人薬』の力か！ これで試作品とは恐れ入る！」

まじん、薬……………？ つまり、ドーピング剤のような物か？

「死ねえ！」
サキッターリウス・テンベスタース
 【射手の矢滅雨】！

奴が腕を振り下ろすと、上空からいくつもの光の矢が降り注ぐ。

それは、一発一発は軽いものの、触れた瞬間爆発を引き起こすものであった。

「ああああ！」

「ぐう！」

「きやあああ！」

結果、受け止めた僕たちはその光に吹き飛ばされ、地面に倒れた。

「ははは！ 思い知ったか人間！ 思い知ったか悪魔ども！ これが至高の力！ 我々
 墮天使の力だ！」

倒れた僕らを見て、コカビエルが哄笑をあげる。

悔しさに、僕は地面を握りしめる。

勝てない、のか？

その時だった。異変が起きたのは。

「ぐつ!? な、なんだこれは……………なぜだ、なぜ力の奔流が止まらぬ!? ま、まで、よ
 せ！ これ以上は俺が、た、耐え……………たえぶるあ」

コカビエルの形が崩れた。

まるで奴が粘土で出来ているとでも言うように、内側からグニヤリと、ねじ曲げられて。

「や、やべろ………ゴデ以上は………体、潰れ——」

コカビエルの言葉はそこまでだった。

残りのすべては、コカビエルの言葉ではなく、化物の咆哮そのものだった。

なんだ、これは。

それが多分、この場にいる僕ら全員の思ったことだろう。

圧倒的な力の波動は、僕にも伝わってくる。

けど、そこに意思は感じられない。

意思無く、言葉無く、ただ無秩序に力を振るう。

それは正しく獣……いや、化物そのものだった。

だが、そんな暴力でも、当たれば死ぬだろう。

もうどうにも、出来ないのだろうか………。

唯一、援軍として希望できそうな生徒会組は、この惨劇を外に気取られまいと、今必死に結界を維持しているはずだ。

『!!』

化物が咆哮を上げ、上空に光の珠が作り出される。

あれは、僕が盾でギリギリ防いだやつか。

ここまでなのか。

誰もがそう諦めた時だった。

『D i v i d e !!』

無機質な声が響き渡る。

その途端、光の大きさが半分になる。

「え？」

『Divide!! Divide!! Divide!!』

音声は鳴り響く度に、光は縮小し、遂には消滅してしまう。

その声の元を探して、僕は空を見上げる。

——白銀。

月明かりに照らされた夜空に、白銀が浮かんでいた。

僕はその美しさに、思わず見とれてしまう。

そしてその白銀は、イツセー兄ちゃんの赤い鎧と、とてもよく似ていた。

白銀が、コカビエルだった物の前に降り立つ。

「不様な物だな、コカビエル。あれほど力と闘争を求めながら、そんなもの魔人薬などに頼るから、力に飲まれて自分を見失うんだ」

化物に歩み寄りながら、白銀は語る。その間にも、体の宝玉からは無機質な声が響き渡っている。

「ほう？ 少しの意識は残っているのか？ なぜ触れなければ半減出来ない俺が、お前を半減できるのか不思議そうな顔だ」

くつくつ、と白銀が静かに嗤う。

「無論触れたさ。俺の鎧の一部が」

そういうと彼は、化物の懐に手を突き刺し、銀色の塊を取り出す。

「お前は要注意人物だったからな。アザゼルにに言われて、お前の体内に仕込ませて貰っていたよ」

化物が弱々しい声を上げながら倒れると、白銀は僕らに目をやる。

「そう睨まないでくれよ、悪魔たち。うっかり戦いたくなってしまう。」

安心してくれ。こちらに敵対の意思はないし、今回の権もコカビエルの独断で、墮天使の総意ではない。そこんところよろしく頼むよ。こいつはうちで裁くから、持つていく。追々、墮天使側から悪魔側に謝罪があるはずだ」

一方的にそう語った白銀は、コカビエルを俵持ちにして翼を広げて飛び立とうとす

る。

その時、

『挨拶も無しとは随分と冷たいじゃないか。え？ 白いの』

『なんだ、起きていたのか赤いの』

兄ちゃんから……いや、兄ちゃんの籠手、赤龍帝ブレステッド・ギアの籠手が輝き、そこから声が響くと、それに応えるように白銀からも先程とは違う声が出た。

『あまりに貴様の気配が弱々しかったのでな。てつきり眠っているのかと思ったわ』

『はん、言ってる』

どうやら、兄ちゃんの籠手に宿る、『赤い龍』というのと、あの白銀に宿る存在は、何らかの因縁があるらしい。

『それよりも赤いの。今回は随分と敵意が無いじゃないか』

『それは貴様にも言えた事だろう？』

『……ふつ、今はお互い、決着よりも興味のあるものがある、ということか』

『そのようだな』

そこで、鎧と、籠手からの光が消える。

「もういいのか、アルビオン？ ……そうか」

白銀はなにかしらを鎧とやり取りし、そのあと兄ちゃんの方を振り向く。

「君の名を教えてください？ 赤龍帝ブリステッド・ギアの籠手の所持者くん」

そうやって彼はフェイスマイルを外し、素顔をさらす。

「俺は君の神セイクリッド・ギア器と対をなす神セイクリッド・ギア器、【白龍皇の光翼】デイベイン・デイベイングの所持者、ヴァーリだ」

「……………兵藤一誠」

「そう警戒しないでくれよ宿敵くん。今の君は弱いから、戦っても楽しくないよ。早く上ってきてくれ」

——俺の領域まで。

そうやって白銀…………いや、ヴァーリさんは僕たちに背を向け、コカビエルを連れ去っていった。



激戦の終わりは、何とも呆気ないものだった。

けど、残された激闘の傷跡は、凄まじいもので、校舎は半壊、地面は抉れ、見るも無惨な状態と成り果てていた。

校舎だけでなく、僕らもポロポロで、アーシアさんが滝のような汗を流しながら、みんなを懸命に治療して回っていた。

もつとも、途中から疲労が酷かった為、無理やり休ませただけ。

無防備なまま、攻撃をほとんどともに食らったイリナさんは、結局目を覚ますことはなく、ゼノヴィアさんに背負われて、教会直轄の病院へと運ばれていった。容態が悪化しなかったのは、一重にアーシアさんのお陰だろう。

あのあと、設置型の結界を張った生徒会組が到着し、僕たちの治療をしながら、遅れて到着した冥界からの援軍と協力して校舎を直していた。

その時、援軍の隊長らしき人が、何度もグレモリー先輩に頭を下げ、遅れた事情を説明していた。

なんか色々言ってたけど、要約すればこうだ。

「大王派の老害どもが何をとち狂ったか、やたら地味に面倒な妨害をしたため」とのこと。

どこの世界も、権力闘争は厄介な物だね。

空が朝日によつて瑠璃色へと変化した頃、僕らはようやく、学校の修復を終えた。明日……いや、もう今日か。とにかく、今日が日曜日で本当によかった。

と、そこで僕はある人がいないことに気がつく。

「あれ？ フリードは？」

今回の主役である一人。複雑な心境と立ち位置ではあるけれど、彼だつて立派な立役者だ。

その彼の姿が見当たらない。

みんなも僕の言葉で彼がいないことに気付き、辺りを見回す。

それでも彼は見つからなかった。ただ、フリードが持っていた聖剣は、学校の昇降口前に突き立てられ、夜明けの曙光に煌めいていた。

第60話

あの戦いから二日後。

「……………」

部室で僕と兄ちゃんは開いた口が塞がらない、と言う言葉をまんま体现していた。

「いや、あの……そんなに見つめられると、照れるな」

「いやいやいや………」

照れるとかそんなじゃなくてね!?

「なにか、変だろっか?」

「変だよ! おかしいところしか無いよ!」

僕らの叫びに彼女——ゼノヴィアさんは苦笑を浮かべながら頬を掻く。

「ていうか、え? 転生? なんで? うえええ!」

驚くことに、ゼノヴィアさんの背中にはなんと、悪魔の翼が生えていたのである。

それはつまり、彼女が悪魔になったと言うことであり、教会を裏切ったと言うことだ。

「……………いや、な。神の死を知ってしまった私は、どうやら教会からすれば異分子、或い

は危険分子そのものらしくてな、放逐されてしまったよ」

「それで、破れかぶれで彼女は私の眷属、【騎士^{ナイト}】になったというわけよ」

ゼノヴィアさんの言葉を継ぎながら、グレモリー先輩が部室に入ってくる。

「それにしても、教会もバカなことをしたわね。天然の因子保持者、それもデユランダルの担い手をアツサリと手放すなんて。まあ、そのおかげで私たちが得をした形だけだね」

そう言つて、ふふ、と先輩は微笑む。

「まあ、あのアーシアさんをアツサリ裏切るような連中ですからね。おつむがきつと頗る軽いんですよ。案外中身はスカスカ何じやないですか？」

「お、おう、いつになく辛辣だな、ハル」

全く、教会の人達つて本当はバカなんじや無いのだろうか？

僕の言葉に、グレモリー先輩とゼノヴィアさんは苦笑を浮かべ、互いに顔を合わせていた。

「だが、そうだな。これで私もアーシア・アルジェントと同じになってしまったわけだ。………これでもう、彼女の事を悪く言うこともできないな。あの蔑みの目、結構堪える物だな」

ゼノヴィアさんが自嘲気味に笑うと、グレモリー先輩が「ともかく」と、話を戻す。

「これでうちの【騎士^{ナイト}】が二人揃ったことになるわね。皆、異論は無いかしら?」
そう先輩が問いかけ、皆の顔を見渡す。すると、誰もが頷き、異論は無いと意思表示をした。

僕を除いて。

「異議あり!」

僕が声を上げながら人差し指をゼノヴィアさんに向けると、周囲が困惑したように僕に視線を向ける。

「……………ふむ、やはり君から出るか」

「なにかしら、ハルト?」

ゼノヴィアさんの納得したような言葉と、グレモリー先輩の優しい問いかけが僕にかかると。

「ゼノヴィアさんが僕らの仲間になるのは良いです。でも、そうなる前に着けなきやならないケジメがあるはずですよ」

僕がそういうと、兄ちゃんが「あつ」と声を洩らす。対してアーシアさんは、何の事かわかっているのか首を傾げている。

「いやいや、アーシアさん。貴方が一番関係あるんですが。」

「ケジメ、か……………いや、分かっている。ケジメを着けなくてはな」

その一言で理解したゼノヴィアさんは、僕らの横を抜け、アーシアさんの前に立つ。

「あ、あの、ゼノヴィアさん？」

いきなり目の前に立たれてわたわたとするアーシアさんに、ゼノヴィアさんは一瞬微笑んだ後、勢いよく頭を下げた。

「アーシア・アルジェント、初めてあったとき、君の事を魔女などと罵倒してすまなかった！ 私も異端として放逐されたときに味わったよ、あの悲しみを。それなのに、何も知らない私があのようなこと……………本当にすまなかった！ 君の気がすむのなら、殴ってくれてもいいし、罵倒しても構わない！」

突然のことに、アーシアさんは目を白黒させる。

「そ、そんな、殴るなんてそんなこと……………」

「いや、せめて一発でいい！ でなければ私は私が許せない！」

ゼノヴィアさんの懇願に、アーシアさんは困ったような顔をし、こちらに助けを求める視線を向けるが、僕らは敢えてそれを無視した。

「あ、あううう……………え、えいつ！」

困ったアーシアさんは、悩んだ末にペチンと、軽くゼノヴィアさんの頭を叩いた。

「え……………アーシア・アルジェント？」

叩かれた衝撃の弱さに、ゼノヴィアさんはポカンとした表情で顔を上げる。

「いいんです。そもそも、もう怒ってませんから。それに、私の事はアーシアと呼んでください。そしてできれば、私の友達になつてください」

そう言つて彼女は微笑む。その微笑みはまさに……………

「聖母だ……………聖母がいる……………」

ゼノヴィアさんが呆けたようにそう呟く。

わかる、その気持ちは凄くよくわかる。

なんせアーシアさんは心身ともに我がオカ研の癒し担当だからね。

え？ なに小猫ちゃん？ 私も？ いやあ、小猫ちゃは癒しと言うよりマスコット

……………いたたた！ わき腹抓るのは痛いって！

僕と小猫ちゃんがそんなやり取りをしていると、ゼノヴィアさんが僕らの方に振り向く。

「神結ハルトに兵藤一誠。二人もすまなかつたな」

「いいよ、気にすんな。あと、俺の事はイツセーって呼んでくれ」

「そうですね。あ、僕もハルトでいいです」

「そうか……………ありがとう」

僕らがそう返すと、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

「それじゃ、新たな眷属【騎士^{ナイト}】として、これから世話になるゼノヴィア・クアルタだ。みんな、これからよろしく頼む」

そしてその日、僕らの仲間が一人増えたのだった。



「僕の歌を聞けええええ!!」

僕の声が部屋一杯に広がる。

「待ってましたー!」

「合の手は要るかー!?!」

松田先輩と元浜先輩のヤジも響き渡る。

あの後、僕らは前々から計画していたカラオケに来ていた。

お祝いにゼノヴィアさんも誘ったのだが、転入手続きやその他やることがあると断られてしまった。

面子は僕、兄ちゃん、アーシアさん、小猫ちゃん、松田先輩、元浜先輩、桐生先輩。そして意外なことに、木場先輩が来ていた。

「きーみーがーよーはー、ちーよーにー………」

「なぜその選曲!?!」

僕の曲が始まり、歌い始めると兄ちゃんからの良いツツコミが入り、笑いが起きる。

「よっしや木場! ハル! トリオ行くぞ!」

「え、え? い、イツセーくん!?!」

「らじゃ! セーの!」

その後は、代わる代わるマイクを交換しながら歌い、時には奪い合い、時には僕の腹パンが兄ちゃんに炸裂し、時には肩を組んだ木場先輩と兄ちゃんの画像がばらまかれたり、僕と小猫ちゃんとデュエットしたりなど、その日のカラオケは、今までに無いほど

のどんちゃん騒ぎだったと、ここに記しておこう。

あと、後にトリオの画像が流出し、僕らの『禁断の三角関係』と言う噂が流れたのは、まことに遺憾である。



「ぐっぐっ………！ げほっ、げほっ！」

口から大量の血が溢れ、思わずむせてしまう。

「くっそ、だりい………」

再び血の滲み出した腹を押さえながら、俺——フリード・セルゼンは一人、森の中を歩く。

あの戦いの後、集まってきた悪魔達に囚われないように、コカビエルから渡されていた長距離転移魔札トランスフアー！ゲートを使って、その場を離脱した。

特に行き先も指定せずに転移したため、自分がどこの国の、どこの森に出たのかは分からない。

ただ、理由もなく今は歩き続けている。

俺にはなにもない。

木場祐斗のように仲間も、これからの目標も、居場所も、生きる意味も……………。

「……………へっ、ここまでかよ」

森の少し開けた場所に出て、手頃な木の根本に凭れかかる。

見上げれば、夜明けの近い空にはまだ星があり、その星座から、日本からはさほど離れていない場所なのだとわかる。

星座、か……………。

俺の仇敵であり、上司だった墮天使がかつて司っていた物。

……………なんか、複雑だな、おい。

意識が朦朧とし、少しずつ遠ざかっていく。

……………少し、疲れた。ちよつとだけ眠ろうか、ちよつとだけ……………。

重たい瞼に逆らわず、俺は瞼をとじた。

頬を撫でる、暖かい感触があつた。

俺の名を呼ぶ、愛らしい声でした。

「……………」

瞼を持ち上げる。

すると、そこには——

「よう……………お前ら」

あの戦いの時、俺の元に現れた少年少女——キャサリン達だった。

『お疲れさま、お兄ちゃん』

前より、声がハッキリ聞こえる。

『やっぱり、カツコ良かったぜ、兄ちゃんはさ』

「そうかい」

子供達の言葉に、力無く笑う。

『お兄ちゃん、眠るの?』

「ああ、少しだけな」

『そっか』

「少しだけ休んだら、俺、頑張るよ」

『うん』

「これから行くところは、地獄って所だろうけどさ」

空を見上げる。空は夜明けの光に照らされ、瑠璃色と白色に変わり始めていた。

「多分、すつげえ時間かかるけどよ、絶対に、お前らの場所に帰るからさ」

——だからさ、

「もう少しだけ、待っててくれや」

俺の言葉に、応える声はなく、彼らはただ、優しそうに微笑むだけだった。

無意識に、手を伸ばす。

最期に彼らに触れたくて。

その温もりを感じてみたくて。
けど、

『じゃあ、待ってるね、お兄ちゃん』

『ずっとずっと、お兄ちゃんが来るまで』

『だから、寄り道しちゃダメだぜ?』

そう言つて、彼らは霧のように消えていった。

伸ばした手は何にも触れることもできず、ただ、宙を彷徨う。

「あっ……………」

情けない声が、不意に零れてしまう。

夜が明ける。

木々の葉に付いた朝露が、曙光に反射し、キラキラと輝く。
その光景は、あまりに無垢で、美しくて——

「——ああ、綺麗だ……………」

薄れ行く意識のなかで、俺はそう、最期に溢したのだった。

光に照らされた青年が、その体から長く長く息を吐いて眠りに付いた。

二度と目覚めることのない、安息の眠りに。

その顔は、何処までも安らかで、少し、微笑んでいるように見えた——。

閑話3

風邪引き少年と看病 その1

「……………あー」

頭がズキズキと痛くて、喉もヒリヒリと焼け付くような痛みを発している。

ベッドの上で体を起こして外を見つめるも、体が怠く、思考も上手く纏まらず、ボーツとする。

「……………これは風邪ですわ……………」

その日、僕は風邪を引いた。



「休みなさい」

「いや、でも割りと平気……………けほつ…」

「休みなさい」

「今日は午前中で終わる」

「休みなさい」

「おかあさ……………」

「休みなさい」

「はい」

なんてやり取りが朝の居間で繰り返り広げられ、僕は今ソファに座ってボケツと天井を見ている。おでこに貼られた熱〇まシートと、着こんだ半纏のおかげで、風邪の苦しさも和らいでいるような気がしなくもない。

しかし、お母さんも強引だよなあ……………確かに食欲が無くて体の節々が痛くて頭痛も酷くて寒気がして、ただちよーつと目が虚ろなだけで、後は何ともないってのにさ。

僕、ゴツドイーターだよ？ この程度の風邪、微熱に決まってるよ。

ピピピ、と電子音が聞こえて来る。

僕はその音の発信源………腋の下から体温計を取りだし、その温度を読み取る。

「……………げ」

そこに書いてあった体温は、【39.6】。

完全にヤバめな風邪のそれであった。

それを自覚した途端、体から力が抜け、意識が遠退いていく。

『あ、主！ 気をしっかり持て！』

『なんてこと！ この我々が、我が君の不調に気付けないなんて！』

『ダメです主君！ 主君お気を確かに！』

あ、ムリ、倒れる。

『あるじいいいい！！』

『我が君いいいい！！』

『しゅくううん！！』

遠退く意識のなか、アラガミたちの焦った声がガンガンと頭に響く。彼女たちは僕が

心配のあまり叫んだのだろうけど……それが追い討ちをかけたことは言わないでおこう。



あのあと、なんとか持ちこたえた僕は、病院で診察を受け、お医者さんから「風邪と疲労ですよ。インフルエンザじゃなくて良かったですね」と言うありがたいお言葉とお薬を貰った。

そしてそれを飲んで眠ったのだが、そこからが苦しかった。

嘔吐感に苛まれても胃には何も無いし、熱と寒気のせいで寝苦しくて、嫌な汗が出る。

うんうんと甍されながら睡眠を取り、意識が浮上してきたのは時計が天辺を大きく過ぎた午後後の事だった。

目覚めた原因は、僕のおでこに置かれた濡れタオルの感触と、首もとや顔の汗を拭う感覚だった。

「う……………ん？」

ぼんやりとした頭で最初に認識したのは、鼻腔を擦る甘い芳香と、さらさらとした黒髪。

最初はお母さんかと思ったけど、考えてみればお母さんは黒髪だけどこここまで長くないし、そもそもこんな良い匂いなんかしない。

段々と意識がハッキリしていき、それに伴って目の前の人物が誰なのかを僕の頭が理解し始める。

長く艶やかな黒髪をポニーテールで纏め、豊かな胸と優しげなたれ目が印象的な美人。

「あらハルトくん、おはようございます」

—— 姫島先輩である。

「ッ?!?!」

なんでここにいるのか? とか、学校は? などの疑問は浮かぶが、それよりもまず拭いている場所が問題だった。

「ひ、ひひひ姫島先輩!?!」

彼女が拭いている場所、それは僕の腹部だった。

いや、それだけならまだ良い。けど、気がつけば僕の上半身は裸で、その上半身を姫島先輩が鼻唄を歌いながら隅々まで拭いていく。

「ななな、なん!?!」

慌ててベッドから飛び降りて距離を取ろうとするが、それが叶うことは無かった。

「ダメよ、ハルトくん。病人がそんなに暴れては」

ガツチリと。

上からのし掛かるように僕の両肩を押さえ、動きを封じる。

あ、力強い! さすが悪魔!

「ち、ちか……………けほっ、けほ……………」

「あらあら……………はい、君のお母様から頼まれた汗拭き、終わりましたわ」

何頼んでるのお母さん!?!

と叫びたかったが、掠れた喉ではそれすらも苦しく、僕はただ呻くしか無かった。
「うふふ。あ、体、起こして下さいな」

もう抵抗する気力も無くなった僕が言われるがまま体を起こすと、姫島先輩は僕にパジャマを着せ始める。寝る前に着ていた物とは違うものだ。

パジャマを着せられた後は体を支えられながらゆつくりと横になる。

なんだか見られてるのが恥ずかしくなって、僕はお布団を掴み、口許まで持ち上げる。

「……………風邪、伝染りますよ」

「大丈夫よ、悪魔ですもの。それよりも、まずはハルトくんですわ。ちよつと待つて下さいね？」

そう言つて、姫島先輩は僕の頭を撫でたあと、額に濡らした布を置いて、部屋を出ていってしまう。

「……………」

一瞬だけ寂しさを感じたけど、それも部屋に向かつてくる足音で吹き飛んだ。

ドタドタドタ、と複数人の足音が響き、話し声も聞こえて来る。

『こんなに大勢で押し掛けて大丈夫でしょうか……………う？』

『案ずるなアシア。彼ならきつと喜んでくれるさ。付き合いは短いが、私でもわかる

ぞ』

『はあ、はあ、ハルトきゅん、大丈夫かな?』

『誰かその祐……変態を止めなさい!』

『……朱乃さん、雷お願います』

『あらあら、うふふ……えいつ』

『アツーーー!』

『ちよ、お前から押すな騒ぐな!』

……うん、途中のカオスちつくなやり取りなんて僕は聞いてないヨ。

布団の中でついつい笑みを溢しながら、扉に目を向けていると、足音がそこで止まり、ゆっくと開かれる。

「よーつす、ハル。無事か?」

「おはよう兄ちゃん。生存確認の意味なら無事だよ」

「よし、それくらい返せるなら大丈夫そうだな」

最初に顔を見せた兄ちゃんは頷くと、扉を大きく押し開けた。すると、予想した通りの皆がそこにいた。

……まあ、約一名、なぜか黒焦げの上に縄でグルグル巻きにされてはいるんだ

けどね。

この間のカツコ良かった木場先輩は幻だったんだ、きつと……………泣きたい。

「疲労で風邪を引いたそうだな、ハルト」

真つ先に話しかけてきたのは、この間眷属になったばかりのゼノヴィアさんだった。彼女を先輩と呼ぼうとしたら、「君からそう呼ばれるのは何だか気恥ずかしいな。今まで通りに呼んでくれ」と、笑いながら言われた事がある。

「ま、人間の身であんな戦いを引つ張ったんだ。疲労も出るさ。聞いたぞ？ 短期間で下級墮天使や上級悪魔ともやりあつたそうじゃないか。倒れない方が可笑しいくらいだ」

なんて良いながら、彼女は僕のベッドの隣に座る。

「フム……………華奢ながらも引き締まった体をしているな……………あれだけの大きさの得物を振るうんだ。妥当か」

僕の腕を取って何やらぶつぶつ呟くゼノヴィアさん。

それだけなら戦士としての癖なのかな、つて思つただけど、なんだろう、この視線。まるで、肉食獣が獲物を見つけた時のような？

「な、なんですか？」

少し身を振りながら問いかけると、彼女は気にするな、と言いながらニヤリと笑い、腰を上げた。

「…朱乃さん。あれ」

「分かっていきますわ小猫ちゃん。要注意人物ですわよ」

何やら奥の方で姫島先輩と小猫ちゃんがヒソヒソと何やら会話しているが、生憎ここまでは聞こえないため、何を話しているのかは分からなかった。

と、そこでイツセー兄ちゃんとアーシアさんがやって来る。

「ようハル。具合はどうだ？」

「薬飲んで寝たら、少し楽になったよ……あ、ありがとうアーシアさん」

アーシアさんに濡れタオルを交換して貰いながら、兄ちゃんの質問に答える。

「あ、そうそう、お見舞持ってきた来たんだぜ。……なんだと思う？」

「エロ本とかだったら、次イツセー兄ちゃんが風邪を引いたときのお見舞いに百合と椿の花を持っていくよ」

「不吉過ぎる！　つか違うわ！」

それならよろしい。

去年のクリスマスプレゼントの恨みは忘れないからな。何が嬉しくて『JK』熟した

彼女ら』だの『おっぱい百選』京都編』を隠れて見なくちゃいけないんだ全く。あのときは全力で逃げた。

いや、別に興味が無い訳じゃないんだけど、なんか嫌だったからとりあえず。

「さつき、俺たち全員で買った果物の詰め合わせ、おばさんに渡してきたからよ」
「え、やった！　ありがとう」

果物は大好きだ。

特に柑橘系とリンゴが。

僕がお礼を返すと、皆が苦笑を浮かべ、その代表として兄ちゃんが苦笑を浮かべながら口を開く。

「いいって。日頃から何かとお前には迷惑かけてるしな。あと、お前がいなくて小猫ちゃんと朱乃さんの元気が無くてな」

「ちよ、イツセーくん!？」

「…黙ってください先輩」

途端に、小猫ちゃんと姫島先輩が何やら慌てたような様子を見せる。

「ともかくだ、今日は俺たちがハルに日頃の恩を返そう、と言うわけで、お前を全力で看病することにした」

「え?？」

兄ちゃんはいつも唐突に物事を始める人だけど、流石に今回ののは反応がろくにできなかった。

「え、なんで？」

「言ったら、恩を返すって」

「いやいやいや」

返すも何も、僕皆に恩返しされるようなこと、何もしてないような？

と、口にするのと、兄ちゃんが深いため息を吐き、両手を腰に当てる。

「そんな謙遜……………じゃないんだよなあ、コイツの場合。本気で言ってたんだから質が悪い」

兄ちゃんのぼやきに皆の苦笑が入り、それから僕を見る。

「とにかく！ お前は今日絶対安静な！ 絶対だからな！」

「……………フリ？」

「洋服崩壊かますぞ」

「鬼畜!？」

いまいち釈然としないものの、僕が了承すると、女性陣が勢いよく立ち上がる。

「買い出しに行くてくるわ」

「部長、私も付き合おう」

「あらあら、では私と小猫ちゃん、アーシアちゃん、ハルトくんのお母様のお手伝いですわね」

「は、はいー！」

「…頑張る」

意気込む女子達は、僕に声をかけた後に、パタパタと慌ただしく部屋を出ていく。

と、そこで兄ちゃんが立ち上がり、いつのまにか拘束から逃れた木場先輩と肩を組んで何やらコソコソと話し合っている。

「……今回……特別……女そ……襲う……いいな？」

耳を澄ましてみれば、所々聞き取れないものの、そこはかと無く危険な単語がちらほら。

なんだろう、すごく嫌な予感がする。

僕、この風邪を無事に乗り越えられるのだろうか……。

——
そして僕の、
波乱の一日が幕を開ける。

風邪引き少年と看病 その2

買い出し組として、グレモリー先輩、ゼノヴィアさん、イツセー兄ちゃん、木場先輩の四人が出掛け、残りの姫島先輩、小猫ちゃん、アーシアさんの三人がお母さんのお手伝いとして台所へ向かって早数分。

その間僕が一人だったのかというと、案外そういうわけでもなく、台所へ向かった三人が数分おきに交互に様子を身に来てくれた。

ちなみにお母さんは一度も来ていない。おい母親。

「ぷはあ」

水分補給にと小猫ちゃんから渡されたスポーツ飲料『水瓶座』を飲みながら、枕元に手を伸ばす。

そこに置いてあったのは、青と白のカラーリングがなされた、某 シエムハザコンピュータ S C

E 販売の携帯ゲーム。

僕はそれを手に取り、スイッチを入れてベッドに寝転ぶ。

表示された画面には、知る人ぞ知る名作。ポポ○クロイスのポスター。

これを見るたび、なんでアニメ化もされたのに知名度低いんだろう、と欲ってしてしまう。
それはともかく
閑話休題

スタート画面からメニュー画面へと移動し、そこからメモリーカードのデータを確認する。

「……………やつぱり無いなあ」

探したのはゴッドイーターのセーブデータ。

ソフトの方は前に部屋をひっくり返す勢いで探したが結局見つからず、部屋を散らかして怒られた。

そして今回はダメ元でデータの方も探してみたが、案の定見つかることは無かった。

「なんなんだろうなあ、これ」

ゲームをしていた記憶はある。コードネームやキャラネーム、キャラデザを思い出すことができるレベルで。

けど、そのゲームは存在していないと言う。ゲームショップやネットでも探してみたけど、それでも見つからない。

おまけに、僕自身がゴッドイーターとなり、ゲーム内のスキル、装備を手に入れてしまった。流石に容姿は違うけども。

なにより一番不思議なのは、誰もそれを、それこそ僕自身でさえ、最優先で考えるべ

き事項としていないことだ。

あつたはずなのに無くなったゲーム。この世には（多分）存在しない武器と能力。本来なら皆から警戒され、僕はもつと理由を探求しなくちやいけないはず。

それなのに、今こうして考えているにも関わらず、それをしようと言う気が起きず、他人事のように考えている。

これは、まるで……………、

「…めっ」

何か大事な事に気付きかけた瞬間、目の前に掲げていたゲーム機を何者かに取られてしまう。

「あ、小猫ちゃん……………」

取り上げた相手の方へ視線を向けると、ゲーム機を右手でもって、ちよつと怒つたような顔をした小猫ちゃんが腰に手を当ててこちらを見ていた。

「…病人なんだから、ゲームしちや、ダメ」

「えー」

「…めっ」

「あらやだ可愛い……………じゃなくて！ 暇なんだよう、小猫さあん」

めつ、とか久々に聞いたなあ、とか考えながら、小猫ちゃんに向けていた視線を天井に向ける。

「…え、かかわいつ!？」

「あーあ、風邪もアーシアさんの神セイクリッド・ギア器で治れば楽なのに」

天井の木目を数えながらそうぼやく。

さつきちよつと試して貰ったんだけど、どうやらアーシアさんの《トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み》は傷は治せても病や疲れには利かないらしい。

「ねー、小猫ちゃん」

そう言ってもう一度彼女に目を向けると、何故か顔を真っ赤に染めてあうあう言っている姿が。

「どしたの?」

「…な、なんでもつ、ない」

所々噛み噛みになりながら答える小猫ちゃんに、僕は理由が分からず首を傾げる。

「…（風邪は仙術ならもしかしたら……………ううん、私はあの力に頼らないって決めたの。だから……………でも、姉様ならきつと……………だめ、それこそダメ。きつとハルトを取られちゃう）」

「小猫ちゃん？」

「……うん、何でもない。それより、もう行くね？ 身に來ただけだし」

「あ、うん」

「……じゃあ、また後で」

小猫ちゃんが僕の部屋から出ていくのを見送った後、結局することもなくて暇になった僕は、もう一度眠ることにした。

……………夜眠れるかなあ？



「ハルトさん、起きてますか？」

そんな囁くような声と、ゆっくりと扉を開ける音で目が覚める。

時計を見ると、そんなに時間は経っていないようだ。精々15分程度だろう。

このくらいの音で目覚めるってことはやはり、眠りが浅かったらしい。

「ん、おはようアーシアさん」

「あ、起こしちゃいました？」

「ううん、もう起きそうだったし、大丈夫」

「それなら良かったです」

僕の返答に、安心したように笑ったアーシアさんは、そのまま僕の枕元までやって来て、僕のおでこに触れる。

「大分熱が下がって来ましたね。体調はどうですか？」

「最初のような吐き気はもう無いかな。まだダルいですけど」

「そうですか。お粥と野菜スープがあるんですけど、食欲の方は……」

その質問には、僕の口から返答が出ることは無かった。お粥と聞いた瞬間、その日ほとんど何も口にしていなかった僕の胃袋が、猛烈に自己主張を始め、盛大に「くうう………」という音を鳴らした。

「ふふ、わかりました、持ってきますね」

そう言って笑ったアーシアさんが、一旦部屋を出る。

それを見計らい、僕は一言漏らす。

「そうかあれが聖母か」

悪魔だけだ。

ナース服を着てたら完璧だった。異論は認めない。

そこでもう一度部屋がノックされる。

返事をする、扉が開けられ、入ってきたのは三人だった。

「うふふ、丹精込めて作りましたわ、ハルトくん。召し上がれ」

「…アーシア先輩に教えてもらいながら作ったの。だから多分美味しいと思う」

「はい、良くできてましたよ小猫ちゃん」

三人はそれぞれに笑顔を浮かべながら僕のベッドの両サイドに座る。

お粥を持った姫島先輩が右隣に、野菜スープの入った深皿を持った小猫ちゃんとアーシアさんが左隣に座る。

そして姫島先輩と小猫ちゃんがおもむろに匙とレンゲでお粥とスープを掬い、ふうーと冷やした後、ずいっと僕の目の前に差し出す。

「はい、召し上がれ」

そして見事にハモらせるのだった。

「……………」

瞬間、僕は二人の間に火花が散るのを幻視した。

「あら小猫ちゃん。スープだと零れないかしら？」

「……いきなり固形物だとお腹がビククリします。だからスープからです」

「お粥だから大丈夫よ」

「……でも重たいです」

「……お粥私のからよ」

「……いいえス私のープからです」

あ、あれ？ おかしいな？ 着込んでる筈なのに寒気がするよ？ 風邪のせい？
でも冷や汗が止まらない………に、兄ちゃん！ 早く帰ってきて！

「あ、あの、お二人とも？」

匙とレンゲを差し出したままの二人を見て、アーシアさん聖母が恐る恐る声をかける。

「少し、落ちつい……」

「あらあら、私は落ち着いてますわよ、うふふ」

「……アーシア先輩、これは譲れない戦いなんです」

「あう……」

なんてことだ。あのアーシアさんが負けるだなんて………。

アーシアさんを撃破した二人は、笑顔で僕にそれぞれの料理を差し出す。どちらも零

れやすい代物の筈なのに一滴すら零れないその見事な静止は驚嘆に値する……………
 等という現実逃避も虚しく、僕の胃がマツハでヤバくなってきた。

これどっちか選んだら後々怖いやつじゃんかあ！

どうする!?! 逃げるか……………!?!

いいや否！ 断じて否！ それは僕のために料理を作ってくれた二人に対する侮辱。
 最悪の悪手！

ならば、僕の取るべき行動は……………つ、

「い、いただきます！」

「あら」

「…あつ」

覚悟を決めた僕は、二つを同時に啜える。

少し冷めたとは言え、熱々のお粥とスープだ。おまけに匙とレンゲという、二つを啜えるのは形的に難しい二つ。

結論。死ぬ。

「もがつ!?! ……………んが(ご)……………んぐ、ぶあ……………はあ、はあ、熱かった……………」

ゴッドイーターじゃなかったら舌を火傷していたところだった。

「だ、大丈夫ですかハルトさん！」

「…はい、水」

「うふふ、食べてくれるのは嬉しいけれど、ムチャはダメよ？」

「うう、はい……」

アーシアさんの癒しの光を受けながら、小猫ちゃんが差し出してくれたスポーツドリンクを飲みつつ、姫島先輩から頭を撫でられつつ軽いお叱りを受ける。

そのあと、姫島先輩はおもむろに頭を下げた。

「私たちの方こそごめんなさいね。無理強いさせちゃって」

「い、いえ、そんなこと……」

僕が慌てて頭を振りながら答えると、姫島先輩は小猫ちゃんの方を向き、妥協案を唱える。

「という訳で小猫ちゃん。交互に行きましょう」

「…わかりました」



「はい、あーん、ですわ」

「あむ、むぐむぐ………ひ、姫島先輩、いつまでこれを………」

「あらあら、全部食べるまで、に決まっていますわ。ね、小猫ちゃん」

「…はい、朱乃さん。ハルト、あーん」

左から出された匙に乗せられたお粥を食べ、次に右から出されるレンゲのスープを飲む。

それを繰り返してかれこれ10分ほど。

それぞれの器の中身はそこそこ減ったが、まだまだ残っている。

「いや、あの、自分食べられます、から………」

「はい、あーんですわ」

「いや、だから」

「あーん、ですわ」

「………はい」

僕のささやかな抵抗も虚しく、結局押し負けた僕がおとなしく口を開けると、程よく

冷まされたお粥が入れられる。

先輩曰く、このお粥は『トマトお粥』と言うものらしく、塩分とトマトの酸味が互いに旨味を引き出し、さらにトマトのリコピンが風邪にどうたらこうたら………あんま良く覚えてないけど、体に良いのは覚えてる。

「…ハルト」

「あむ」

次に、小猫ちゃんからのスープ。コンソメに刻んだ野菜や生姜などを入れた、アーシアさん直伝の養生野菜スープ。生姜だけでなく、胡椒やベーコンもマッチしていて、とても美味しい上に、体がポカポカと芯から暖まって来る。

「どうかしら、私たちの料理は？」

「とっても美味しいです。僕なんかには勿体無いくらいに」

「…そんなことない。ハルトのお陰で私たちはあの戦いを切り抜けられたもの。お礼くらいさせて」

そう言って、小猫ちゃんは器を横のテーブルに置き、手を握る。

「そうですね。あなたに自覚が無くとも、あなたが私たちに与えてくれたものは、沢山あるんですよ？」

姫島先輩も、僕の頬に手を添えて微笑む。

……………僕、そんなにお礼をされるような事をしたのだろうか？

確かに僕は、皆を守るために戦った。皆が傷つくのを見たくなくて。悲しませたくなくて。でも、僕だって皆から助けられてばかりで……………

なんて、ほんの少しネガティブになってしまいが、それを遮るように、

「ただいまー!」

と言う兄ちゃんの声と、扉の開く音、そして皆がぞろぞろと部屋に入ってくる音でかき消された。

「よう、見ろよハル、この、くだ……………も、の……………を……………っ!」

手にもった袋から、果物が詰め合わされた籠を取り出した兄ちゃんは、僕の方を見た瞬間、膝から崩れ落ちた。

ちなみに、その時落ちた果物は木場先輩が地面につく前に回収していた。

「び、美少女に両サイド挟まれたのあーん、だと……………っ?! なんて事だ……………ぐふっ、オレが体調を崩す度に毎回妄想する夢のシチュエーションではないか……………っ!!」

「む、その光景は知っているぞ! ………………ん? だがそれは男同士でやるものでは

無いのか？ アイカが貸してくれた『びーえる本』とやらにはそう描いてあったぞ」
兄ちゃんが吐血した。なんか知らないけど、悔しそうに吐血した。

そしてゼノヴィアさん、その道はいけない。行っちゃいけない道だよ!?

しかし、そんな状況を意にも介さぬ人が二人。

「…はい、あーん」

「うふふ、ほら、ハルトくん」

「え？ いや、え？ この状況でも続けるの!？」

「食べ終わるまで、ですわ」

ちよ、待って、人いるから恥ずかしいんだけど!?

しかも皆出ていくどころか温かい目でこつちを見るんですけど!?

何この羞恥プレイ!?! だ、誰かー！ へるぷみー!!



「あの子の看病かあ……私もしたいにやあ……」

「昼下がりの住宅街、その中の公園でふと、隣の痴女……おっと、失礼。色ボケ黒猫がそんなことをぼやきだす。」

「ちよつとアーサー？ 今失礼なこと考えたにや？ 痴女とか色ボケとか」

「いえいえ、そんなことありませんとも。デリカシー皆無の美猴ならまだしも」

「エスパーかこの黒猫は。仙術は極めると心まで読めるのだろうか。」

「おうおう、そこで俺に喧嘩売るとあいい度胸だなアーサー。買うぞ？」

「止めてください美猴さん。そんなことしたら隠密の意味が無いじゃないですか。それと、美猴さん？ 黒歌姉さまは痴女なんかじゃありません！ ちゃんと身持ちの固い歴とした処……」

「にゃー！ にゃー！ ありがとルフェイ！ だからシヤラップー！」

「つか痴女つったの俺じゃねえよ！」

はあ、まったく、彼女たちは本当に騒がしい。まあ、その騒がしさが好きで彼らともにいるのだから。

それより、

「もうすぐリーダーが到着するそうです。皆さん、いきますよ」

いまだ言い合いを続ける彼らに声をかけ、私はコルブランドで空間に裂け目を作る。

「グリゴリの施設から直接『向こう』に行くそうなので、そこで合流しますよ」

その言葉に、言い合いを止めた三人は、三様の反応を見せる。

愛妹は好奇心に顔を綻ばせ、猿は好戦的に笑みを浮かべ、猫はどこか名残惜しそうに後ろを振り返っていた。

「彼に会いたいですか、黒歌？」

「あ、会いたいと言うかなんと言うか……………」

私にそう言われた彼女は、一瞬肩を竦め、どこか気まずそうにそんなことを言う。

つい、ため息が溢れる。

彼と彼女の馴れ初めと言うか、出会いを知っている（と言うか聞かされた）私達からすれば、それは微笑ましい光景であり、だからつい、こう言ったのも仕方ないことだろ

う。

「リーダーには私から伝えておきます。お行きなさい」

「にや?」

一瞬、呆けた顔をする黒歌。

普段見られないようなその表情に、つい苦笑してしまう。

ルフエイも美猴も、言葉は無いが、その表情は私と同じものだった。

「あ、ありがとうにや。行つてくる!」

顔を赤らめながらお礼を言った彼女は、踵を返すと同時に黒猫へと変化し、そのまま走り去る。

それを見送った私達は、ため息と共に互いに見合わせ、開いた裂け目へと入つていった。

「これが、命短し恋せよ乙女つてやつですか」

「あいつは長生きするけどな」

「そんなこと言っていると、初代さま呼びますよ」
「何で!？」

風邪引き少年と看病 その3

「あー」

皆が一旦出ていった部屋のなか、僕はベッドに仰向けになり、天井を見上げる。

「疲れたあ………つて、いやいやいやいや」

なんで僕疲れてんの？ あれ？ おかしくない？ 看病されてたハズのに疲れたとか

おかしくない？ 僕疲労で風邪引いたんだよね？

アーシアさんの神セイクリッド・ギア 器とか小猫ちゃんのスープとか、アーシアさんの神セイクリッド・ギア 器とか姫

島先輩のお粥とかアーシアさんの神セイクリッド・ギア 器とか兄ちゃん達を買ってきた果物とか聖母

の微笑みとかで大分樂にはなつたけど………ん？

ま、まあ、最初の頃の凄まじい吐き気とか寒気はほとんど無くなつて来たかな？

ま
だクラクラするけど、倒れる程じゃないし。

兄ちゃんたちは何か話すことがあると言つて部屋を出て行つた。

僕の部屋は2階の一番奥にあるため、一階のリビングの音はほとんど聞こえない。だ

から皆がどんな話をしているのかは全くわからないでいる。

「ん……………」

と、そこでちよつと催した為、雉を撃ちに行くためにベッドから立ち上がる。

部屋を出て階段を下り、トイレのドアノブに手をかけた、と、そこで、リビングから漏れてくる声が聞こえた。兄ちゃんの声だ。

『……………なので……………皆で……………ハルトを……………コス……………女装……………喜び……………』

……………。

……………。

……………。

聞き間違いかな？ 聞き間違いだよね？ あ、あはは……………。

ひきつった笑みを浮かべながら用を足し、トイレから出てもう一度リビングの前に立つ。

今度は木場先輩の声が聞こえる。

『……………ヤらないかい？』

ムダにイケボだった。コカビエル戦の時と同じくらいイケボだった。悲しい。え？ て言うかなに？ 僕、今危機的状況なの？ え？ 貞操危ないの？

『主逃げて、超逃げて』

そうしたいけどさマルルー！ 僕多分、今走ったら十中八九この風邪が悪化するよ!? 次に聞こえてきたのは姫島先輩と小猫ちゃんの声。

『うふふ……この露出具合……完璧ですわ！』

『……むう……なら、私はこの……で』

『くっ、やりますわね……』

ああ、ダメだ、味方がアジアさんしかいない！ 助けてアジアさん！ 我がオカ

研唯一の癒し担当者！

『ここ、これで喜ぶでしょうか……』

『ああ、もちろんだとも』

『は、はい、頑張ります！』

だ、ダメだ……逃げ場がねえ……。

僕は絶望にうちひしがれ、その場に崩れ落ちる。

ここ、怖いよ。何されるかわかんなくて怖いよ。ぶっちゃけコカビエル戦の最中よりも怖いよ。貞操的な意味で。

だが結局、目の前の扉を開ける勇氣もなく、僕はふらつく足取りで部屋へと戻って行く。

ベッドに倒れ込み、布団に包まり目をつぶる。今の僕の心境を表すならばまさにまな板の鯉。

病気の僕に逃げたり抗ったりする余力など無く、もはや諦めの心で死女の宣告装を待つしかない。

——ああ、斯くも儚き哉、貞操人生。



それから数分後、音が聞こえた。

複数の、ギシギシという階段を上ってくる足音。しかし声は聞こえない。まるで言葉を無くしてしまったかのように、声ひとつ漏らさない。

階段を昇る音が廊下を歩く音に変わり、その音が僕の部屋の前で止まる。

扉一枚を隔てているハズなのに、ベッドから扉まで距離があるはずなのに、僕には皆の息づかいが聞こえた。

静かに、自らを鎮めるような呼吸。

荒く乱れた、興奮し昂る呼吸。

クスクスと漏れる、愉悦に満ちた呼吸。

どこまでも落ち着いて、むしろ誇らしげな呼吸。

か細く、気恥ずかしさを含む呼吸。

ゴツドイーターとして鋭敏になった僕の聴覚が、この緊張感のなか無駄に発揮され、その呼吸から数を割り出す。

数は五。

二人足りない。

扉がノックされる。

『ハルトー？ 入るわよー？』

それはグレモリー先輩の声で、そのいつもと変わらない穏やかな声音は、こんな状況にも関わらず僕の心を優しく撫でる。

その言葉は、まさに悪魔の囁き。怯えに憔悴した僕の心に染み渡り、その警戒心を解いてしまう。

「は、は、は」

だから僕は、そう答えてしまったんだ。

先程までの恐怖を抱きながら、それでも尚、抗いきれない優しさに負けて。

へへっ、さよなら皆。僕は今日、僕ではなく、私になるんだ……………。

へ？ 需要がある？ あははは……………それは、うん……………良かったよ……………
へへへ。

『主君！ お氣を確かに！ 主君ー!!』

『だ、大丈夫ですわ我が君！ わたくし、貴方様が女の子でも愛せる自信がありますわ
!』

『前々から思ってたが魔王、貴様はどこを目指しているのだ!』

『愚問ですわよ白狼王！ わたくしは我が君であればどのような姿であろうとも愛して
みせますわ!』

『それは我輩とて一緒だ！ 抜け駆けするでないわ!』

うへへ、アラガミ達も元気だなあ……………。

そして扉が開かれた。

その扉の向こうに立っていたのは五人の少女。

グレモリー先輩、姫島先輩、アーシアさん、ゼノヴィアさん、小猫ちゃん。

彼女達を見た瞬間、ああ、とうとうか、と僕は諦念した。

だが、僕は次の瞬間目を疑った。

目を疑い、数回瞬き、目を擦り、もう一度見やる。その行程をもう一回行う。

「…ハルト、恥ずかしいよ」

彼女達は、僕に着せる女装用の服を持っていなかった。

むしろ着ていた。つまり女装していた。

……………いやいやいや。ちよつと驚きと混乱で日本語がおかしくなつてしまった。

なんだよ、女子の女装って。腹痛が痛いかわるか。

「……………えつと？ なに？ 何女装コスプレしてんの？」

『はっ？』

何口走ってんのー!? いや僕の事だけど!

ちよつと本音というか冗談というか、とりあえず漏れちやつたよ! 思考ルビが!

「あ、いや、あの……………なんとというか……………似合ってますね!」

苦し紛れに僕が言った言葉に、皆が嬉しそうな顔をする。

いわゆるナース服を身に纏い、その手に包帯やら注射器やらを持ち、妙に妖艶さを醸し出すグレモリー先輩。ミニスカにガーターベルトで……………清楚さを感じさせる筈のナース服なのに、その胸の豊かさをむしろ強調し、引き立て、ピンク色の服と髪が良く似合う。

赤のチャイナ服に青の髪色が良く映え、その深いスリットから覗く、ゼノヴィアさんの程よく鍛えられつつも、肉付きの良いふくらはぎから太ももにかけての艶やかさは恐らく、このオカ研部員の中でもトップであり、その脚線美を惜しげもなく、かつチラリズムでさらしている。

そこにいたのはメイドだった。秋葉原やカフエにいるような、露出が多く、ただ利益と萌え、そしてエロを追求するような物ではなく、貞淑と清楚、そして献身と奉仕を主とした、まるで貴族のお屋敷に遣える本物のメイドを彷彿とさせる出で立ち。

元シスターという事もあいまって、アーシアさんから滲み出る奉仕の雰囲気は他の追随を許さぬ絶対的な物となっていた。

その姿はまさに魔女^{メイガス}。全身に黒衣を纏い、つばの広い帽子は顔の半分を隠している。肩から踵まであるローブは、前を閉じてしまうとその体を隠してしまうが、今は開けられている。

シヨートパンツに黒い膝上まであるブーツ、網タイツとガーターベルト。ノースリーブに肘まである黒い手袋、そしてマフラー。肩や顔以外の体のほとんどを隠しているが、彼女——姫島先輩の場合、そのスリーサイズの起伏はそこらの外国人に勝るとも劣らず、いやむしろ勝り、足は長くけれど顔の造形は大和撫子。

特に、身に付けているワンピースは、ゆったりとしたものではなく、いわゆるニット素材という奴で、ある程度体にピッチリとフィットし、縦のラインがそのボディラインを強調している。

黒の服で統一されながらも、魅力を隠すどころかこれでもかと主張してくるその肢体は、得も言われぬ妖艶な美しさを醸し出していた。

彼女の格好を語るには、いささか僕の語彙力では物足りないのだろうと思ってしまう。

小猫ちゃんの頭と腰に付いている、偽物であろうその白い猫耳と尻尾は、まるで本物のようなりアルさと、もともと彼女の物であったと言わんばかりの違和感のなさ。身に纏うのは白と青の着物。ただそれだけだ。それなのに、目を話すことができない。

きつちりと閉じられた着物の、そこから覗くうなじから顎筋までの滑らかなライン。その部分の男心への求心力は、和服ならではだろう。露出の少なさはトップでありながら、その可愛さと儚さ、そしてどことない艶かしさを感じ取ってしまうのは、僕が生粋の日本人だからだろうか。

個人的に小猫ちゃんと姫島先輩の優勝であった。言わないけどね。怖いから。

「その姿は一体……………」

「…イツセー先輩が、ハルトがこれで元気になるからって……………」

小猫ちゃんが答えると、それに頷きながら、グレモリー先輩が口を開く。
「あの子は露出が多いのが好きそうだけれど、あなたは意外と少ないのね」
イッセー

言われてギクリとする。

確かに、僕は全裸や肌色面積より、チラリズムを重視するところがある。そして胸よりどちらかと言えば太もも派だ。特に膝の上から太ももの付け根にかけてのラインが……あれ？ そう考えると、個人的な優勝はゼノヴィアさん？ あれえ？

いや、まあそれはおいといて。

おかしい。僕は兄ちゃんに、自分の性的嗜好を教えた覚えはない。うっかり溢したこともない。

ならなぜバレた？ 確かに昔から兄ちゃんが持つてくるアレ的な本の内容は幼馴染みやお姉さんの、低露出モノばかりだった。

だがどれも兄ちゃんの前で突き返しているから、そこからバレたとは考えにくい
……………とすると……………

ふと、そこで僕は、かつて兄ちゃんが言っていた言葉を思い出す。

『実はなハル。元浜が見るだけで女子のスリーサイズを当てられるように、俺は見るだ

けで相手のフェチズムがわかるのだ！ 特に中の良い奴、または付き合いの長い奴ならなおさらなあ！ 松田！ 貴様巨っばい巨っばい言ってるが、本当はちっパイ派だろ！

おっばいに貴賤無し！』

『なぜバレたあああ!? オレの隠蔽が見破られるなど！』

『あとついでに元浜は背中だな!! 後ろから見たとときの背筋とクビレだ！』

『なん……………だとお……………つ!?!』

ま、まさかそれで見破られたと言うのか……………恐るべし、性欲兵藤誠の化身……………。

「そんなに見られると流石に恥ずかしいな」

兄ちゃんの恐ろしさに戦慄していると、ゼノヴィアさんが顔を赤らめ恥ずかしそうにモジモジします。

そこでふと、僕の視線がどこを向いていたのかを認識する。

どうやら無意識に、僕はゼノヴィアさんの太ももを注視していたようだ。

くっ、本能って恐ろしい……………つ!!

「…むう。ハルト、私はどう?」

どこかむくれたような表情で、小猫ちゃんが詰め寄ってくる。

ふわりと、女の子特有の甘い匂いが鼻孔をくすぐる。

「か、可愛いよ、とつても。その耳とか」

「…そ、そう？ ……………（これは偽物だけど、ハルトだったら本物を見せても……………いや、ううん）……………良かった」

そう言つて笑つた小猫ちゃんの写真は、とつても可愛くて、でもどこか影があるように見えたのは、僕の気のせいだったのだろうか。

「あらあら、うふふ。彼女達ばかり見られると、寂しいですわ、ハルトくん」

いつの間にか皆と反対側に回っていた姫島先輩が、後ろから僕の首に腕を回し、耳元で囁く。

甘い吐息が耳朶をうち、ぞわりと甘い鳥肌が首筋を走る。

「ひ、姫島先輩！ ちょ……………」

慌てて振り向けば、いつのまにか後ろに回り込んでいた姫島先輩が、ベッドに両手を付き、片膝を乗せて身を寄せてくる。

タイツに包まれ、ガーターで強調してくる太ももと、生地越しに自己主張してくる谷間は、それだけで僕をたじろがせる。

「あ、えつと、あの、その……………とてもEr…綺麗だと思います……………」

「あらあらあら、うふふふふ……………」

良く耐えた僕う！

危うくエロいつて言うところだった！

でも嬉しそうだし結果オーライだよね！

ふと、そこで周りを良く見れば、心なしか皆の距離が近い。特に小猫ちゃんと姫島先輩が。

これはまずい。非常にまずい。

たまに女の子の間違われる事もある僕だけど、これでも立派な男の子なんだ。

これ以上この状態が続くと色々とやばばばばば………そうだ！

そこで僕は、苦し紛れに話題を反らしてみる。

「と、ところで、兄ちゃんと木場先輩は!?!」

僕がそう言うとその瞬間、皆の動きが一瞬止まる。

次いで、苦笑とも言えない、良くわからない笑みを浮かべ、隣にいた小猫ちゃんが僕の肩にポンと手を乗せる。

「……えつと………うん、ガンバって、ハルト」

「何を!?!」

え? 何怖い。

今度は後ろから姫島先輩が肩に手を乗せる。

「負けないでくださいね、ハルトくん」

「何に!？」

「あの、その、あうう、ごめんなさいハルトさん!」

「何が!？」

「あー、その、うん、すまない」

「だから何で!？」

待って待って、皆怖いよ。何その応援コール。むしろ逆に何も言っていないグレモリー先輩が一番怖いよ!

「その、私は止めようとしたのよ? で、でもね、あんまりにうれs……楽しそうだったから、つい言えなくて……ごめんなさい」

……。

……。

……。

……あつ（察し）

僕の思考がそこまで行き着いた瞬間、部屋の扉が開かれる。

扉が開かれると、皆はまるでモーゼの海割りのように道を空ける。

そして、その先にいたのは――。

「は、ハルトきゅ……………くん、どう、かな……………」

「くっそ、何でだよ……………何で俺まで女装これするハメになるんだよ……………木場だけって話だろ……………」

そこにいたのは、女教師のコスプレをした木場先輩と、コスプレようのセーラー服を着た兄ちゃんの姿が。

「……………似合う、かな、ハルトくん?」

頬を赤らめるな目を潤ませるな上目遣いはヤメロオ!

と、どれほど叫びたかった事か。風邪さえ引いていなければ距離を取るところだ。

しかも、妙に似合っているのが腹立つ。男性特有の角張った肩と、タイツ越しに浮き出る鍛えられた足の筋肉さえ無ければ見間違えてしまいそうだ。

兄ちゃん? 論外である。

その二人の格好女装を見て、僕はとりあえず、この一言を言い放った。

「ねえ……………吐いていい?」



死ぬかと思った。ホント、マジで。風邪関係なく。

あのあと悪ノリした兄ちゃんのお色気……間違った、『汚色気』攻撃を食らい、木場先輩からの、後ろのどことは言わない部分がキュツとなる言葉と視線とボディタッチを食らい、姫島先輩と小猫ちゃんが火花を散らし始めたと思っただけかゼノヴィアさんが参戦したり、そこにふぎけで入ったグレモリー先輩が三人から睨まれて蛇に睨まれた蛙のようになつたり……。

良くもまあ病人の部屋であそこまで騒げたもんだと心底思う。
まあ楽しかったからいいんだけどさ。

そしてトップリと日が暮れて、皆で夕食を食べたあとは、それぞれが自分の家へと帰って行った。

「ふう……」

まだ若干の気だるさは残るものの、大分元気になった僕は、部屋に入ると電気もつけずにベッドに座り込む。

つい一時間ほど前までこの部屋で皆と騒いでいたんだな、と思うと、今は僕一人の物音がしないこの部屋は、なんだか寂しくて、寒く感じてしまった。

「風邪の、せいかな……」

風邪を引くとセンチメンタルになりやすくなるって言うし。

ベッドに倒れ混み、毛布を抱き枕のように抱き締め寝返りを打ち、その向きから見える窓から、夜空を眺める。

田舎とも都会とも言えないこの町からは、見える星々が少なく、中途半端だ。

「ああ、今日は半月なのか」

でも、月は心なしかいつもより煌めいて見えた。

半月の光と街灯の光が入ってくる部屋は、電気をつけなくてもそれなりに明るく、心

地よい光を感じる。

疲れていたのか、横になると瞼が重くなっていく。

特に起きている理由もないので、その微睡みに身をまかせ、瞼を閉じていく。
と、その時、

「……あ、猫………」

屋根伝いに来たのだろうか、一匹の黒猫が窓の前にやって来て座り込む。

気のせいかな、その金の瞳はまるでこちらを見ているように感じて………



頬に温もりを感じて、ゆっくりと、僕の意識は微睡みから覚醒していく。

「んう……」

自分でも良くわからない声を出しながら体を起こし、欠伸と背伸びを行う。

まだ眠気の覚めない目で天井を見ながら、ふと、呟く。

「……………変な夢を見た気がする」

なんか、黒猫が綺麗なお姉さんに変身して、僕のおでこに手を乗せると、そこからじんわりと暖かい何かが広がって、体全体がポカポカした。

そしてその人は、僕の耳元で何かを囁いていた。

「なんて言ってたっけ？ 確か……」

——私はずっと、あなたを……………

『——あなたを』……………なんだっけ？』

思い出せない。

まあいいか。どうせただの夢だし。

よっ、とベッドから下りて、体の具合を確かめてみる。

「うん、よし！」

起きたときに何となく分かつてはいたが、立ってみて、ジャンプしたりしてみても確信する。

「治った!!」

我ながら、ゴッドイーターとは免疫力も凄いもんだと思う。

治ったとわかると、キュルキュルと、僕お腹の虫が鳴き声をあげる。

「お母さん。お腹空いたー」

その感覚に逆らわぬまま、僕は部屋を出ながら下にいるであろうお母さんに声をかけるのだった。

「治ったー」

「え、早くない?」



彼に顔を見られたかもしれない。

私と彼は、もう二度と出逢ってはいけないのに。
彼に触れてしまった。

私は二度と、彼に触れてはいけないのに。

彼の平和日常を脅かしてしまった私が。

手を血で染めきってしまった私が。

仲間たちに背を押され、この家まで来たけど、結局足踏みして、夜になるのを待った。彼の家に白音がいたのには驚いたけど、あの子の感情を感じたとき、ああ、やっぱり姉妹なんだなって思った。

夜に忍び込んで、彼の顔を見ていると、いても立つてもいられなくて、ついつい、仙術で彼の体に触れてしまった。

あの子を想うと心が苦しい。

最後に言葉を交わしたあの日から、彼は大きくなった。

遅しくなった。

カッコ良く、可愛くなった。

彼に触れてみて温もりを感じ、彼の匂いを覚えて、そして、胸が締め付けられる。

ああ、ハルト。

私の命の恩人で、私の大切な人。

ねえ、ハルト。

私はね、ずっとずっとあなたの事を

——
愛しています。

停止教室のヴァンパイア

第61話

夢幻の中を、意識が揺蕩う。

朧気な微睡みの中、どこか苦しくなるような郷愁にも似た感情と温もりが、僕の心を埋め尽くす。

これは記憶だ。

遠い遠い、誰か僕の夢。記憶

『ねえ、君は将来、何になりたい？』

『なにさ、藪から棒に』

黄昏の茜に染め上げられた夏の河川敷を、僕は幼馴染みと二人で歩いている。学校の制服に身を包んだ帰宅途中の、とりとめの無い会話のやり取り。

そんな会話の中で、彼女がふと、そんな質問をしてきた。

『んー、ほら、だって私もうすぐ卒業でしょ？ 高校三年生だし。そろそろ考えなきやつて』

『そう言われてもね……………だって僕まだ中学三年だし』

『今から考えてても良いじゃない。どうせうちの高校来るんでしょ？ あんな何の特徴もない学校に』

そういつて、彼女が笑う。

その笑顔が好きで、彼女が笑うといつも見入ってしまう。

『いいよ、別に。だってその学校には■■姉ちゃんがいるし』

『入れ替えだけどね。……………わかった、それで？ 話を戻すけど、将来の夢は？』

『夢、ねえ……………そうだね、強いて言えば』

『強いて言えば？』

僕の顔を姉ちゃんが覗き込んでくる。

長い綺麗な黒髪がサラサラと流れて、夕陽の光に反射する。

そのあまりに美しい景色に目を細めながら、それでもしつかりと僕は言葉にする。

『大切な人の居場所になりたい』

夢と言うには抽象的過ぎるかもしれない。夢と言うにはあまりにも夢が無さすぎるかもしれない。

でも、それで良いんだ。

確かに将来は何かしらの仕事に就くのだろう。けど、それは手段であつて目的じゃない。

だつて、僕の大切な人は――

『良い夢だね』

『え?』

彼女はそういつて少し駆けて、僕の前に立つと、振り返つてこちらを見る。

『大丈夫、君なら出来るよ』

『そうかな?』

『そうだよ! だつて君優しいもん』

『だから大丈夫。その夢叶うよ、悠斗なら!』



うつすらと瞼を開けると、カーテンの隙間から朝日が射し込んだ、薄暗い自室の天井が見える。

「……………」

——だから大丈夫、その夢叶うよ、ハルトなら！

「……………あの夢」

あれは、あの河川敷はどこなんだろう。

少なくとも、僕はあるな話をしたことも無いし、姉ちゃんと呼んだことのある人も居ない。

ましてや、僕の幼馴染みはイツセー兄ちゃんだけだ。

それなのに、なんなんだろうか、この感情は。

「……………っ!?!」

なんで、こんなにも涙が溢れるんだろう。

こんなにも気持ち溢れる夢だったのに、なのに僕は覚えていない。思い出せない。あの会話も、あの人の名前も、その顔も、全部。

「あの人は、誰だったんだろう？」

本当に不思議な夢だった。

とある初夏の日に見た、不思議な夢。

これが意味するところを、僕はまだ知らずにいた。



どこまでも高く碧い空！ 揺蕩う大きな白い雲！ 真つ白に輝く太陽！ 響き渡る
蝉の声！ 陽射しを反射し煌めく澄んだ水面！

今はまさに、命燃え盛る真つ赤な季節！ そう、夏！ 高校初めての夏！ みんなの
青春！

そして、

「兄ちゃんのバカあああああ!!」

「ほげらああああ!」

飛び散る鮮血、舞い上がる変態^{兄ちゃん}。

「お、落ち着けハル！」

「落ち着いてるよ！」

「嘘こけ！」

さて、今現在なぜ僕と兄ちゃんが言い争っているのかというと、事は数時間前に遡る。

ちなみに、なぜプールに来ているのかは数日前に遡る。



「プール清掃？」

僕の風邪が見事に完治して数週間後、暑さの増してきた初夏のある日、部室に入って

きたグレモリー先輩が持ち出した話に僕は疑問を浮かべる。

「ええ。ソーナ……生徒会からの依頼だね、夏の水泳授業に使うプールの清掃をお願いしたいんだそうよ」

「でも、なんで俺ら何すか？」

「人件費削減ですって。うちのプール、屋外だし広いから清掃となるとそれなりに人手が必要らしいの」

「それで何で僕らに？」

僕が問うと、グレモリー先輩は少し苦笑いを浮かべて言う。

「私たちは悪魔でしょ？ ハルトは違うけれど。だから人間がやるより早く済むからですって」

「生徒会は？」

「冥界に送るものも含めて、書類仕事に追われてるわ」

「うへえ」

書類仕事って言葉を聞くだけで頭痛くなりそうだ。

生徒会って大変だなあ。

「ああ、あと報酬で、プールは好きに使って良いそうよ」

「マジすか!？」

兄ちゃんがいきなり立ち上がってガッツポーズをする。

「みんなの水着が見られるぜひゃっほい！」

「もう、そんなに喜ばれたら僕恥ずかしいよイツセーくん」

「てめえじゃねえええ!!」

兄ちゃんの言葉に頬を赤らめる木場先輩。絶叫と共に胸ぐらに掴みかかるイツセー兄ちゃん。

……………うん、いつも通りだ。いつも通り過ぎて時既に時間切れだった。

「…水着かあ……………」

水着と言う単語に小猫ちゃんが思案するように呟く。

わあ、目の前の出来事をガンスルーだよこの子。

「……………ね、ねえハルト、今度いつs…」一緒に買い物いきましよう、小猫ちゃん」

なにかを決意したように頷いた小猫ちゃんが僕に語りかけようとしたその時、いきなり横合いから別の声が聞こえ小猫ちゃんの言葉が書き消される。

「…あ、朱乃さん？」

「うふふ、良いじゃないの、小猫ちゃん」

驚きと疑問の視線を向ける小猫ちゃんに、姫島先輩は彼女の頬をツンツンと突つつきながらイタズラっぽく笑う。

そして彼女の耳に顔を近づけ、

「(本番で見た方がサプライズ感あるじゃない?)」

「(……………っ!!)」

なにかを囁いた途端、小猫ちゃんが驚いた顔をして、そのあと頷きを返えし、僕を見つめる。

「え、な、なに?」

「…ううん、なんでもない」

「うふふ、ええ、なんでもありませんわ、うふふふ」

な、なんだろう、この二人のたまに見せる妙に息のあつた意思疎通は……………。



そして、そんな事があつた三日後の土曜日。

「夏だ!」

「休みだ!」

「プールだああああ!!」

僕と兄ちゃんは、プールの扉を前に拳を突き上げる。

「二人とも元気ね」

「そりやそうですよ部長！」

「夏のプールですよ!?! テンション上がらなきゃそいつは日本人じゃない！」

「日本人はあなた達と朱乃と小猫の二人だけよ」

「あつ……………」

そ、そうだった……………8人中半分が外国人だった……………。

「ま、まあとりあえず、いくぞハル！俺たちの希望が、水着美女そこで待っているんだから！」

「その希望とやらには同意しないけど、うん、わかったよ兄ちゃん！」

僕たちは同時に駆け出す。後ろから木場先輩とグレモリー先輩の声も聞こえたが、そんなものは気にしない！

「あ、ちよ！」

「まって二人とも！プールはまだ！」

そして僕たちは、その扉を押し開けるのだった！

「……そんな……な……」

「なんだよ、これ……」

「こんなのって……こんなのって無いよ……っ！」

その光景を見た僕は、膝を突き項垂れる。

下唇を噛み締め、拳を地面に叩きつけ、何度もかぶりを振って否定しようとする。

頭に描いていたのは、プールのその青と、日差しを反射する水面。そのコントラストが描き出す青春の一コマ。

だがしかし、僕らの眼が捉え、網膜に焼き付けたその光景は、あまりにも非情^{現実的}だった。

「なんで……なんでだよっ！」

「あんまりだ、こんなの、あんまりだ！」

顔を上げて見つめた先には、青と緑と、青と緑と緑と緑と緑と緑と……。

「こんなに緑^緑だらけだなんて！」

「そりやそうよ。だってまだ掃除してないもの」

「あはは、残念だったね、二人とも」

「うふふふ」

声のする方向、後ろに顔を向ければ、苦笑を浮かべたオカ研の面々。

皆の水着などではなく、汚れてもいい学校指定のジャージを着ていた。

「……………」

僕らは顔を見合わせる。

「俺らも着替えようか」

「そうだね」

その結論に至った僕らは、トボトボと更衣室へ向かうのだった。



「全力でやるぞおらあああああ！」

ブリステッド・ギア 赤龍帝の籠手あああ!! あ? こんなことに使うな?

馬鹿言えドライブグ! こんなときに使わずしてなにが赤龍帝だゴラア!」

なんて兄ちゃんの暴走もあり、掃除は滞りなく、兄ちゃんが自滅して藻まみれになっ

たこと以外特に問題は無かった。

え？ ブラッドアーツ？ ははっ、やだな、こんなことに僕がそれを使うわけ無いだろう？

「…ハルトの【波濤斬り】だっけ？ 広範囲が掃除できて便利だね」

……………。

「…？ どしたの、急に口笛なんかして」

「べ、べべべつつにいー？」



「そんなわけで、夏だ！」

「や、休みだ？」

「ノリが悪いぞ木場！ プールだあああ……………ぶぼれ!？」

「ばかああああ!!」

「イツセーくん!？」

水を張ったプールの前で、木場先輩と一緒に拳を突き上げていた兄ちゃんの背中に、ドロップキックをぶちかましプールに叩き込んだ僕は、上半身だけ服を脱いだ姿で兄ちゃんに怒鳴る。

「ごぼぼぼ……………ぷはっ！ 何すんだハル！」

「兄ちゃん！ 僕の水着どこやったの！」

「ちゃんと鞆に入れたじゃないか！」

「これが!? 僕の!?!」

そう言つて、持っていた鞆から僕の（らしい）水着を取り出す。

濃い紺色で、少し硬めの生地。

上と下が別れていて、上は胸元までで肩までの紐がある。

胸には白いゼツケンがあり、「はると」とかかかっている。

「……………」

無言で、上がってきて隣に立った兄ちゃんを向く。

「……………兄ちゃん」

「なんだ？」

僕の呼び掛けに、キョトンとした顔をする兄ちゃん。

そうかそうか、兄ちゃんのなかではこれが普通なんだな。

……………よし殺そう。

「スク水（♀）じゃないかああああ！ 兄ちゃんのばかああああ！」

振り上げた拳は、身長差も相まって最もスピードの乗った場所で兄ちゃんの顎を下か

ら捉える。

「ほげらああああ!!」

ゴツドイーターの膂力でカチ上げを食らった兄ちゃんは、くるくるときりもみ回転しながら飛んでいき、派手な音をたてて着水した。

「殺す気か!?!」

「死んでしまえ!」

そんなやり取りをガヤガヤとやっているとき、当然女子更衣室にも聞こえるようで、グレモリー先輩の声が聞こえてくる。

「どうしたのよハルト。そんなに騒いで」

「聞いてくださいよグレモリー先輩! 兄ちゃんがですね……………」

言いながら振り向き、そして固まる。

明らかに布面積の少ない赤いビキニを纏うグレモリー先輩。

露出は控えめで、けれども自身の体のメリハリを強調する某有名メーカーの競泳水着を纏う姫島先輩。

青いビキニとパレオで脚を魅せるゼノヴィアさん。

そして、旧式のスクール水着を着ている小猫ちゃんとアーシアさん。

「なにがあつたの?」

「……………はっ！ いや、兄ちゃんが僕の水着にこれをつけて……………」

グレモリー先輩の問いかけにハツとした僕は、先輩に自分の持つ水着を渡す。

「これは……………はあ」

「あらあら、うふふ」

「…かわいい」

グレモリー先輩は額に手を当ててため息を吐き、姫島先輩はなに考えてるのか分からない笑顔で笑い、小猫ちゃんは可愛いと言う。

「かわいいですよね、部長！ ……って部長のおっぱいがブフオ!?!」

隣に上がってきてそんなことをほざいて鼻血を撒き散らす兄ちゃん変態の鳩尾に一発入れて踏んでおく。

「ま、まあ可愛いけど、流石にこれは可哀想だわ。ハルト、普通ので良いわよ」

「はいー」

そこ！ 残念そうな顔をしない！

小猫ちゃんとか姫島先輩とか木場先輩とか、不特定多数の皆とか！

「……………あつ」

ふと、僕の足の下でそんな声が聞こえる。

「どうしたのイツセー?」

「あー、その……………」

なぜか口ごもる兄ちゃん。

イヤな予感がした。

「ハルの水着、忘れちゃった！」

「はあああ!!」

なんだよそれ！ え？ じゃあなに？ 朝うちに来たそのときに仕込んでたの？

そう問うと、是の言葉が帰ってくる。

「それで、その時僕の水着を出してしまうのを忘れたと」

「……………はい」

「死ね」

「あだだだだだ!! まって！ 止めて！ 両腕が！ 俺の両腕があああ!!」

背中を踏みつけている状態で、兄ちゃんの両腕を後ろに引っ張る。

その時、ぼん、と右肩に置かれる誰かの手。

思わず振り向くと、ほっぺにその人の人差し指が刺さる。

「うふふ、良いじゃないですかハルトくん。着ましょ？」

イタズラをした姫島先輩は、とってもいい笑顔でそんな事を宣った。

「え？」

「だって、水着が無いと泳げないでしょう?」

「いや、でも……………」

「…一緒に、泳がないの?」

「うぐつ……………」

その顔は反則だって、小猫ちゃん。

「うううう……………」

「着てくれたら私、ハルトくんになんでもしてあげますわ、うふふ」

……………ん? 今、なんでもって……………?>?

「え?」

固まった。

耳元でそんな事を囁かれて、固まった。

「料理でもデザートでもマツサージでも、それ以上のあれやモゴゴゴ……………なんですか小猫ちゃん」

「…なんでもないです」

「あらあら、まったく、うふふ。とにかく、私に出来ることなら何でも聞いてあげますわ」
それを聞いて答えないのはきつと、男じゃないのだろう。

いや、スク水着るのもあれだけどき。

第62話

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ぼっ」

「ブラッドアーツう！」

「待て落ち着け！ 冗談、冗談だから！ 待って！」

数秒間僕を見つめ、頬を染める動作をした兄ちゃんに向けて神機を構える。

「死んでしまえ変態！」

「お前自分から着たろうが！」

「これしか無いんだから仕方ないじゃないかあ！【インパルス・エッジ】！」

「あんぶら!？」

きちんと誘導して丁寧に教えたはずなのに、何故か小猫ちゃんは顔を頬を膨らませて僕をじっと見つめる。

……………何かしただろうか？

「…別に（あわよくば抱き付こうと思ったのに……）」

んー？　なんだろう、すごく不機嫌だ。

と、その時横から『Trans fer!!』なんて音声が届く、その方向に顔を向けると、兄ちゃんが籠手を出現させて沈んでいた。

その様子は何かを見ているようで、その視線を辿っていくと……………。

「…ハルト」

「ヤヴォール」

小猫ちゃんの右の親指が、彼女の細い首の前を横切り、下に向けられる。

そのハンドサインを見た僕は、拳を握りしめて振り上げる。

「ふん！」

ごんっ！　と、水中からでも良く聞き取れる鈍い音が響き渡る。

直後、大量の空気が兄ちゃんから吐き出され、そしてそのまま沈んでいき……………。

「これで世界は守られた。南無」

「…南無」

「え、あ、えっと………南無？」

僕と小猫ちゃんが合掌し、それに釣られてアーシアさんも手を合わせる。
いや、あなたキリストでしように。

「…あ痛！」

「あう！」

祈った事による頭痛に二人がやられ手いると、隣にあつた変態死体が動き出す。
「ぶふああああ!! 殺す気か! 死ぬかと思つたわ!」

立ち上がって何事かを叫び出す兄ちゃん。

その頭頂部には、大きく膨れたたんこぶが己の存在を主張していた。

「ん? どうかしたの? 兄ちゃん?」

「白々しいぞハルウ! お前だろ!」

「何のこと?」

「いや、だからお前が——」

「何のこと? ん?」

「目が笑っていないだと………(震え声)」

はっはっは、おかしな事を言う兄ちゃんだ。

「兄ちゃん、怒るよ?」

「……………あい」



「あー、泳いだ泳いだー」

ごろん、と兄ちゃんがビニールシートの上に寝そべる。

「やっぱプールはいいねえ」

その隣に腰掛けながら、小猫ちゃんと木場先輩の水泳競争を眺める。

パワーに物を言わせた小猫ちゃんのバタフライと、スピードで勝負している木場先輩のクロールによる競泳は、現在3往復目に突入していた。

「小猫ちゃんがんばれー」

僕がそう声をかけると、小猫のスピードが二段階ほど上がる。うわ、水しぶき凄い。

そんな感じで休んでいると、突然兄ちゃんが立ち上がり、反対側のプールサイドへ猛然と駆けていく。

その方向に視線を向けると、サンオイルを持ったグレモリー先輩が手招きをしている。

「……………あー」

なんと言うか、その、見せつけてくるなあ……………ぺっ、このリア充めが。

と、そうやって僕が非リアの代表として、怨嗟の唾を（心の中で）吐き出していると、いきなり後ろに気配を感じ、振り向こうとする。

だが、その動きをすることはできなかつた。

まず認識したのは、後ろから首に回された白く細い腕。

次に、その腕の持ち主の温もり。

そして——二つの柔らかい、けれども弾力のある暖かい感覚……………。

「うふふ、ハールトくん」

耳元で跳ねる、楽しげな、けれどもどこか色気を含んでいる声。

押し付けられたあと、擦り付けるように上下している背中の柔らかい二つの感触。

「——」

「あらあら、ビックリして固まってしまったの？ うふふ、可愛いんだから……………か

ぷっ」

「ひよああああ!?!」

あまりの出来事に思考が停止していると、突如右の耳たぶを啜えられてしまう。そしてそのまま艶かしい音を出しながら耳朶を甘噛みされる。

「はむ、んむんむ、ぺろっ」

「んっ……んんっ……ひよあ!？」

ゾゾ、と耳から背筋にかけて、得も言われ得ぬ感触が駆け巡る。

意外と強い力で抱きつかれているため、少し力を込めた位じゃ抜け出すことが出来そうにない。

その間も、甘噛みは続けられていく。

「はむはむ……」

「んんん……ストツプ!」

だから僕は意を決して、少し強引にホールドから抜け出し、すぐに距離をとる。

「な、なにするんですかあ!」

「うふふ、ごめんなさい? あまりにもハルト君の反応が可愛くて」

「可愛いつて……」

危なかった。

もう少しで男としての大切な何かを無くすところだった。

え? スク水着てる時点で手遅れ? うるさいよ。

僕の抗議に、科を作ってそう答えた下手人である姫島先輩は、楽しげに笑っていた。

「……そうやってからかうの、良くないですよ」

「大丈夫よ、貴方にしかやらないもの」

「いや、そういうことじゃなくて……………」

それで僕が勘違いしたらどうするんですか！

「それよりもハルトくん」

「……………なんですか」

「もう、そんなに怒らないの……………ねえ、リアスやイツセーくん達見たいに、私にサンオイルをぬつて「ちよつと雉撃つてきます！」……………あら」

はるとは にげだした。

へたれの しょうごうを手にいれた。

やかましい！ へたれてないやい！ まだ自分から女の子の素肌に触る勇気が無いだけだ！

そのまま更衣室へと駆け込んだ僕は、扉を閉めてため息をつく。

「ビツクリしたあ……………いきなりあんなことしてくるんだもんなあ……………」

はあ、ともういちどため息をつきながら座り込む。

すると、

「ビツクリしたのはこっちだぞ、ハルト」

という言葉が更衣室に響き渡る。

その、言葉の主を探してキョロキョロと辺りを見回すと、ロッカーの物陰からゼノヴィアさんが姿を現した。

「なにしてるんですか？」

「ん、なに、探し物をな」

ゼノヴィアさんを見た僕は、そう訪ねずにはいられなかった。

そういや、さつきから姿が見られないなあ、とは思っていたけど、なるほど探し物か。

……いやまて。ちよつと待て。それよりも問題が一つ。

「……………いやまて。男子更衣室こっここで？」

そう、ここは男子更衣室だ。

つまりここにあるのは、僕と兄ちゃんと木場先輩の私物だけ。女性であるゼノヴィアさんの持ち物があるとは思えない。

「……………ふ、まあ、細かいことは気にするな。禿げるぞ」

一瞬の沈黙の後、スツと目を逸らしてそう宣うゼノヴィアさん。あからさまに怪しい。

「いや、細かくないよね？ 割りと重要だよね？」

「神結ハルト！」

「ひゃい!？」

僕がそのあからさまな怪しさに踏み入ろうとした瞬間、ゼノヴィアさんが僕のフルネームを大声で呼んだ。

突然の事だったので、ビックリして変な声を上げた僕は、立ち上がって固まってしま
う。

大声を出したゼノヴィアさんは、感情の読めない表情のまま、ゆっくりと僕の方へ歩
を進めてくる。

その姿に、どこか恐怖を覚えた僕は、ゼノヴィアさんの歩みに合わせてゆっくりと後
ろへ下がっていく。

が、しかし、悲しいかな、直ぐに扉にぶつかり、これ以上は下がれなくなってしま
う。
ドンっ！

いきなり横からそんな音がして、それにビックリした僕は思わず肩を疎ませる。

見ると、ゼノヴィアさんの左手が、ドアを押さえるようにして僕の顔の横に押し付け
られていた。

「あ、あの……ゼノヴィア、さん？」

様子のおかしい彼女に、恐る恐る声をかけるが、彼女はそれに応じず、僕の首もとに顔を近づける。

そして、

「——すんすん、はあ……やはり、良い匂いだ」

僕の首筋の匂いを嗅いだゼノヴィアさんは、恍惚とした声音で表情を崩す。

「」

「すんすん、すんすん、はあ……プールで少し薄れてしまっているが、やはり衣類よりも生の香りは素晴らしい……」

絶句した。言葉を失った。

まさにそんな言葉が当てはまる状況だった。

何が起きてる？ ゼノヴィアさんに匂いを嗅がれてる？ まって？ え？ まずその右手に握られてる布は何？ 僕の服？ パンツは勇気がでなかった？ わつつ？

あまりの衝撃に僕が混乱していると、太ももに手が添えられる。

「うひー！」

その手は、まるで僕の体を這うようにまさぐられ、そして徐々にながっていく……

「ああ、これが強い雄の、私の本能が欲する雄の臭いか……」

ゼノヴィアさんが色っぽい声でそう呟く。

僕の太ももを這うように彼女の手が僕の大事な所に……………

その瞬間だった。

「チエストおおお!!」

けたたましい音を響かせて、窓ガラスをぶち破って現れたのは木場先輩だった!

いや、正確には木場先輩をぶん投げて突入してきた小猫ちゃんとイツセー兄ちゃん
だった!

「…ハルト、無事?」

「う、うん」

「……………投げといてあれだけど、おーい木場、無事か? ………………返事がない、まるでただ

のしかb……………^{アー}メ^アデ^シイ^アツク!^ア ^{アー}メ^アデ^シイ^アツク!!^ア」

続いて入ってきたのは、姫島先輩とグレモリー先輩。

「ゼノヴィア! あなたいったい何をしているの!」

「……………む、私はただ、悪魔になったからやりたいことをしようと……………ひい!」

「うふふふふ、ゼノヴィアさん? ちよーつとこちらに来てくださいね? お話があ

りますので」

そして、姫島先輩に連れていかれるゼノヴィアさん。

危なかつた………なんとか僕の貞操はぎりぎり守られたようだ。

そして、この日、僕はゼノヴィアさんのことが少しだけ……少し？ いや、割りと苦手になったのだった。

第63話

人というものは、成長して、いろんな物を知っていくうちに、性格や自身の在り方、考え方を変えていく。

特に何か大きな出来事が無かったとしても、日々の生活で蓄積されていく経験は、いつか振り返ったとき自分が大きく変わっていることを実感させられる。

最も身近な例で言えば、子供の頃の憧れをいつの間にか諦めていたり、子供の頃嬉しかったことが、今では死ぬほど恥ずかしかったり。

——結論を言おう。

「お父さんお願いだからカメラを出すのをやめて！ それ一一番高い眼奴レフじゃん！ 本当やめて、何でもするからあ！」

「ん？ 今何でもって……」

「それが息子に言うことか母親あ！」

誰かこのある意味モンスターなペアレンツを止めるのを手伝って！

「だがなハルト、これはお前の晴れ舞台なんだぞ！」

「違うから！ 毎日の事だから！」

「ハルくん？ 明日お母さん、お弁当頑張っちゃうわ！」

「いつものでお願いします！ 運動会でも遠足でも無いんだから！」

高校初の授業参観と言うことでやたら張り切っている両親が暴走するのを止めるのは本当に疲れる。

だがここで諦めてしまえば恐らくきつと、僕の高校生活は終わりを迎えてしまう。

「あ、あなた……………どうしましょう、ハルくんが反抗期だわ」

「とうとう、来てしまったのか……………」

「やかましい！ なんと言われようと僕は（高校生活を）守って見せる！」

「やだ、かつこいい……………キュン」

「母親あ！」

中学までは、小学校からの知り合いが半数以上だった為、なんとか乗りきれた（？）が、高校は中学以前の知り合いが居ないに等しい。

故に譲ってなるものか。



そして参観日当日。

両親には勝てなかったよ……………。

「……………あの、ハルト」

「小猫ちゃん、僕の両親は変わったことをしていない」

「……………いや、でも後ろで」

「変わったことは、していない」

「……………ビデオカメラを」

「していない、いいね？」

「アツハイ」

ああそうさ、きつとあれは幻覚なんだ。

後ろでビデオカメラを構えている両親なんて幻覚に決まってるのさ！

見てよ、皆無言だよ！　なんか気まずそうな、なんとも言えない顔して前を向いてるよ！

先生なんか見てみなよ！　すつごくやりづらそうだよ！　ほら、数式で凡ミスしたし！

ううう、だから苦手なんだよ、授業参観って……………。

ああ、恥ずかしい。穴があつたら埋まりたい。入って埋りたい。

そして休み時間。

チャイムが鳴ると同時に脱兎の如く逃走した僕は、廊下の一角に座り込む。

はあ、なんでこんなに疲れなきやなんないんだろう……………世界は不条理だ。

「あら、ハルトくん？ どうかしました？」

うちの両親があまりにもぶっ飛んでいるという世界の不条理さに打ちのめされていた僕に声をかけてきたのは、僕の顔を覗き込んでいる姫島先輩だった。

って、

「近い近い近い！ 近いですって！」

「あらあら、残念ですわ」

なんで毎回この人はこんなに近いかなあ！ おかげで女の人特有のいい匂いとか髪の毛のサラサラ感とか、豊満なおパイの感触がダイレクトに来るから色々と危ないの！ 思春期男子としては！

勇気が無いから言えないけどね！

「それで、どうかしましたの？」

そう言つて姫島先輩は僕の隣に腰かける。

「オデノカラダハボドボドダ」

「はい？」

「通じない……………だと……………これがジエネレーションギャップか…っ！」

「二つしか変わらないのでは？」

ふええ、姫島先輩がマジレスして僕を苛めてくるよお。

なんて冗談は置いといて、

「あー、ちよつと色々ありまして……………」

僕は昨日の夜からのやり取りを大まかに説明した。

すると、何故か隣でクスリと笑う声が出た。

「優しいご両親ですね」

「ああ、まあ、優しいんですけど、ちよつと過保護…………でもないな。でもないけど愛情表現が過激というかなんというか」

「ふふ、けどそういうの、少し憧れますわ」

どこか羨ましそうな声でそう呟く姫島先輩の表情は、とても優しい笑顔で、どこか悲しそうな笑顔で、寂しそうで、声をかけずにはいらなかった。

「どうか、したんですか？」

「え？」

僕の質問を予想していなかったのか、不意を突かれた先輩はキョトンとした表情でこちらを見た。

「いえ、なんか、悲しそうな顔をしていたから」

「……………ふふ」

そういうと、何故か先輩はおかしそうに笑い声をあげる。

「ふふふふ、悲しそう、ですか」

「な、なんですか?」

「ふふふ、いえ、やっぱりあなたは優しいのですね、ハルトくん」

クスクスと、何故か楽しそうに笑う姫島先輩の表情には、もう悲しげな色はなくて、むしろどこか嬉しそうな表情に見えた。

なんにしても、やっぱり姫島先輩は笑顔が一番綺麗だと思うから、笑ってくれて良かった。

そのあと僕たちは、始業のチャイムが始まるまで好きな物や苦手な物、休日の過ごし方とかの、他愛の無い雑談に花を咲かせたのだった。



「お姉さまのばかあああ！」

.....

「……なんです今の？ 会長先輩っぽい声でしたけど」

「さあ？ 後でリアスにでも聞いてみますわ」

などという会話が あつたのは余談である。

ほんと、何があつたんだろう？



授業参観にはどうやらグレモリー先輩のお兄さん、つまり魔王さまが来ていたようで、そのせいなのか今日の部活はお休みとなった。

兄ちゃんの話によるともう一人魔王さまが来ていたようで（なにそれ怖い）、どうやらその魔王さまが魔王少女だったらしい。

ちよつと何言ってるかわかんない。

ちよつと兄ちゃんが摩訶不思議な事を言っていたが、魔王さまが家に来るとかで問い詰める間もなくそそくさと帰っていった。

「……………暇だなあ」

帰路の途中にある公園のベンチに腰を下ろして、ぽけーつと空を見上げてそう呟く。最近は何も部屋に行つてばつかなかつたから、不意にこう、何も無い日があると本当に暇だ。小猫ちゃんはちよつと用事があるといつて今日はもう帰つちやつたし、どうしようかなあ。

「あら、ハルトくん。どうかしましたの?」

不意に後ろから声がかけられる。

振り向くとそこには姫島先輩が立っており、どうやら帰る途中のようだ。

「今日部活休みになつたけど、暇だなー、と思ひまして。というか姫島先輩、こつち側なんですわね」

「ええ。そういうえば、いつもはハルトくんが早く帰るのでこうして会うのは初めてでしたわね。ふふふ」

そう笑いながら、先輩は僕の隣に腰を下ろす。

「この公園、よく来ますの?」

「え? あー、まあ、はい。子供の頃とかは結構ここで遊んでましたね」

「そう。ふふふ、なら私たち、もしかしたら子供の頃に会ってるかも知れませんわね」
そう言つて立ち上がった姫島先輩は、後ろ手に手を組ながら、くるりと回つて僕の方に振り向く。

その時、遠心力で浮き上がった黒髪がふわりと宙を舞つて、黄昏の茜色を反射して

……

「」

一瞬、呼吸が止まった。
だつて、

その姿が、その動きが、その光景が、

——あの夢と、重なつて見えたから。

「ハルトくん？　どうかしました？」

先輩に声をかけられて、我に返る。

すぐに頭を振って、今の光景を振り払う。

——あれは違う。

何が？

——この人じゃない。

なら、誰なの？

無意識に沸き上がる言葉に疑問を覚えながらも、その考えを振り払い、顔を上げる。

「何でも無いですよ。ちよつと、綺麗だなあつて」

「……………あらあら、うふふふふふ」

誤魔化す為に本心を口にしてみると、姫島先輩は一瞬固まって、それからすぐ満面の笑みを浮かべて、おかしそうに笑い出す。

「ふふふ、相変わらず素直ですわね……………そういうの、ズルいですわ」

「え？」

最後にぼそつと先輩が呟いた言葉は聞き取ることができなかつたが、なにやら上機嫌なのでよしとしよう。うん。

さて、そろそろ帰ろうかな。

そう思つて僕も立ち上がると、姫島先輩は僕の前に立つてこう言つた。

「あ、あの、ハルトくん………これから、その、私の家に、……き、来ませんか？」

「え？」

その言葉に、僕の思考が停止したのは言うまでも無いことだろう。

第64話

姫島先輩に誘われやって来たのは、この町にいくつかある神社のうちの1つ、山頂の寂れた神社だった。

「着きましたわ」

「え？」

「ここが、私の家ですわ」

そう言われて鳥居を見上げ、さらに向こうの鳥居も見つめて、そして疑問を抱く。

……………あれ？ 悪魔って神聖な場所はアウトだったんじゃないかった？ あれ？

でも……………うん？

「姫島先輩、……………」

「大丈夫ですわ。だつてここ、もう神様を奉つてないもの」

「わあい罰当たりい」

「悪魔ですもの」

「ですよー。知ってた。」

「さ、行きましようハルト君」

「あ、は、はい！」



シヤカシヤカシヤカと、茶筌が独特の音をならしながら濃茶を立てている。

「どうぞで」

「あ、はい」

モツキユモツキユと食べていた主菓子置き、お茶を取る。

え？ 作法？ 知らないよ。

たしか、こう三回茶碗を回して、そんで一口……………苦い。

「お、おいしい……………です」

「あら、ふふふ、濃茶は苦かったかしら？ ごめんなさいね」

僕の反応を見てクスクスと笑う姫島先輩の今の格好は、どこかの旅館の女将さん見たいな紫の和服で、和風な顔立ちの先輩にはよく似合っていた。

「あ、あの姫島先輩、どうしたんですか？ 急にお誘いなんで」

「……………それは……………」

うん？ なんか言いづらそうだぞ？

「そ、それよりもハルトくん、今日はここで夕飯食べて行きませんか？ 私、料理には自信

がありますから！」

「うえ!? 急ですね、本当に……………」

「あ、やつぱりダメ、ですよね……………何を言ってるでしょうか私は。ごめんなさい」

「ああいえ！ そんなことは！ ぜひいただきます！」

「でも……………」

「両親なら電話すれば問題なしです！ 多分！」

そんな明らかに落ち込んだ顔を見たら断れないっての。

しかし、どうしたんだろ。なんか今日の先輩はどこか変だぞ？

いや、いつも何考えてるかわかないけどさ。

「そ、それじゃあ作ってきますね！」

そう言つて慌ただしく姫島先輩は台所へと向かつてしまふ。

「あつ………何の用か聞きそびれちゃつた。まあ後で聞けばいいか」
さて、僕も両親と連絡を取らなきやな。

よつこらせ、と腰を上げて鞆から携帯電話を取りだし………。

「姫島せんぱーい、電話貸してくださーい！」

お家に忘れたつばい。学校で使つた記憶ないからきつと家だね。

「良いですわよ。玄関口にありますのでー」

「はーいー」

これ、親に女の先輩の家でご飯食べるつて伝えたら大騒ぎなんだろうなあ。

この前先輩が家の前で待つてるだけでも大騒ぎだったんだから。

ちよつとめんどくさいなあ………なんて、そんなことを考えながら僕は電話の場
所へと足を向け――

ぞくりと。

「っ!!」

首筋に、得も言われ得ぬ怖気を感じ、全身の毛が逆立つような感覚に捕らわれる。

「この、感じは!」

知っている。

高校生になつてからの短い期間だけど、僕はこの感覚をよく知っている。

「墮天使……………っ!」

そう、墮天使。

この短い期間に、何人もの墮天使と戦い、彼らの殺意と敵意を向けられてきた。

しかもこの感じ、ただ近くにいるのではなく、こちらに意識を、しかも殺意を向けて

いる気配だ。

「くっ、神機!」

気配なんてものを感じ取れるようになっていて自分に驚きと呆れを抱きながら、扉を

あけて外へと飛び出す。

すると、そこには……………。

「姫島せん——」

そして、僕の視界を光が、聴覚を轟音が包み込んだ。



月光だけが薄暗く闇夜を照らす夜道に、その男たちはいた。

「おい」

「ああ。あの小僧が入ったからだろう。結界が綻びてる」

「くく、あの女もバカな奴だ。魔力も光力も持たない人間を結界内に入れるなぞ」

「所詮は混じり物、と言うことだ。行くぞ」

「くははは、この時をどれ程待ちわびたことか！」

男たちはその背に生えたカラス様に真つ黒な翼を広げて、その結界の内側——
——山頂の寂れた神社へと飛翔していった。



「♪」

つい、鼻唄が漏れてしまう。

これから大好きな人に料理を振る舞うのだ。気合が入るに決まっている。

「さて、何を作ろうかしら……………」

冷蔵庫の中の食材を見ながらメニューを考える。

なにげに、こういうメニューを考えるのが一番楽しかったりするものだ。

「喜んでくれるかしら？ ふふふ」

彼は特に好き嫌いは無いと言っていたし、自分が料理を失敗しなければ大丈夫だろう。

「姫島せんぱーい、電話貸してくださいー！」

居間の方から彼の声がかけられる。

携帯、忘れたのかしら？

そんな疑問を抱きながら返事を返す。

「よし、焼き鯖と椎茸の煮物、肉じゃがにしましょう」

多いような気がしなくもないけど気がしなくもないけど気にしない気にしない。これくらいならばぱつと作れるし。

「さて……………」

よし、と気合いを入れて調理に取りかかろうとしたそのときだった。

轟音。いや、爆音。

その音は外から、それも彼が向かった筈の玄関から聞こえて来た。

「なに、なんなの!？」

あまりの事に一瞬思考が追いつかず、そのあと、サーゼクス様の言葉がよみがえった。

『リアスの【女王】^{クイーン}。ここには人避けの上位、意識避けの魔法をかけた。これより君の家は、君に親しい者か、あるいは君が認めた者しか入れなくなる。だが、これだけは注意したまえ。

どれだけ君が認めても、人間だけは入れてはならない。魔力も光力も持たぬ彼らが無意識にこの結界を越えてしまえば、途端にこの結界は綻び、解けてしまうだろう』

全身から冷や汗が吹き出した。

忘れていた。

失念していた。

そうよ、彼は人間じゃない。なにを考えているの、姫島朱乃!

共に幾度の戦場を越えてきた。

彼の強さと能力を目の当たりにしてきた。

してきたからこそ、失念していた。

彼は人間なのだ。

悪魔でも墮天使でも天使……ではあるけれど、それでも彼は人間なのだ。

「ハルトくん——ッ！」

この場所で、私以外のところでの攻撃など、一人しか考えられない。

急いで駆け出し、魔力を纏う。

玄関は無惨に破壊されて、そこには誰もいなかった。

だが、少し離れた場所から、金属と金属のぶつかる音や、爆発音が聞こえる。どうやら移動したらしい。

羽を広げて飛び上がり、その音の場所へと向かう。

その途中の道すがら、切り伏せられ倒れている墮天使を数人ほど見かけた。

だが、戦闘音はまだなりやまず、それが墮天使の数が多いことを知らせている。

「ハルトくん！」

視界が歪む。涙だ。

自分のせいで。自分が大事なことを忘れていたせいで今、彼が戦っている。
臆病で泣き虫な彼が、たった一人で。

そして、そこにたどり着いたとき、私が目にしたものは——

「いっ……」

何よりも、見たくない光景で——

「く、そ……」

前後から光で腹を貫かれたハルトくんが崩れ落ちる。

残っている墮天使の数は4。そのうち二人は、羽を四枚ももつ中級墮天使。倒れた彼を中心に、月光に照らされた鮮やかな朱が広がる。

その朱は、どこまでも広がって行き、水溜まりをつくる。

「あ、あああ……………」

思考が真っ白になる。

果てしない憎しみが、怒りが、胸中を埋め尽くす。

「くくく、見つけたぞ！ 混じり物の娘！」

「至高の御方の血を引きながら、悪魔へと身をやつした恥知らず！」

「今日ここで、この小僧と同じように殺してくれる！」

「覚悟せよ、雷光の娘！」

「あああああああ!!!」

——
殺してやる。

そこから先は、ほとんど覚えていない。
気がつけば、私は血塗れで、けどどこにも傷なんか無くて………

そして背中には——

二枚の黒い翼が生えていた。

第65話

多勢に無勢だった。

初めて神機を使ったレイナーレとの戦いの時よりも、フェニックス、コカビエルとの戦いを乗り越えたことで僕は遥かに強くなっていた。

けど、四方を囲まれ、それこそ下以外の全方位からの攻撃に僕は徐々に追い込まれ、確実に疲弊していった。

向こうはパツと見た感じで十数人。三人ほど斬り倒したけど、これではキリがない。おまけに向こうは光の槍を飛ばす遠距離攻撃も持っている。そしてこちらは、こんなに囲まれた状態では剣での攻撃以外のアクションは全て隙となり、致命的な一撃を受けてしまい兼ねない。

ゆえに精々が【乱戦の心得】と【スタウトファイト】を発動させる位しか方法が無かった。

「くうっ……」

正面からの攻撃を切り払うと同時に身を振るが、それでも後ろから迫っていた槍を躲

しきれず、方を掠め肉が抉られる。

「ふん、おかしな神セイクリッド・ギア器を使う人間だが、やはり戦いは数よ」

四枚の翼を生やした墮天使の二人のうち一人が僕を上空から見下ろして嗤う。

「……………ぺつ、ふん。そんなところで見ることもしかできない人には言われたくないね！

コカビエルの方がもつと正々堂々としてたよ！」

口に溜まつた血を吐き捨ててそういうと、先程から捌いている槍とは二回りも大きさの違う光の槍が幾本も降り注ぐ。

バックステップでなんとか躲すも、その一本が右足のふくらはぎを掠め、僕は着地に失敗して地に転がる。

「貴様人間ごときが最上級墮天使の名前を口にするな！」

「いたぶり殺そうかと思つたがもういい。さっさと始末してしまえ！」

そう命令された周囲の墮天使の動きが変わる。

先程まで少し離れたところから槍を投げってくるだけだったが、それが波状攻撃で斬りつけてくる動きに変わったのだ。

「くっ、ブラッドアーツ【朧月】！」

まず一人目、袈裟斬り。

同時に右肩を切り裂かれる。

二人目、逆袈裟斬り。

背中を斬られた。

三人目、刺突で突き刺した。

同時に僕の背中から腹にかけて光の槍が飛び出る。

それで動きが止まった瞬間を目掛けて、投擲された槍が正面から腹を貫く。

「いんぐ……」

血を吐き出した。

膝をつく。

正直言つて、ここまでされてもどこか現実感が無かった。

それもそうだ。あの激戦を乗り越えて、僕ならやれると、慢心にも似た自信を持っていたのだから。

だから、ふと今回が初めて一人で戦っているのだと、膝をつくまで気付かなかった。

「く、そ……………」

視界が歪み、倒れこむ。

「あああああー！」

隣から悲鳴が聞こえた。

ゆっくりり首を動かすと、そこには驚きと怒りに包まれた表情の姫島先輩が立っ

た。

墮天使達が何か言っている。

姫島先輩が混じり物？ 御方の血を引くって、誰のこと？

薄れ行く意識の中、最後に見たのは絶叫する姫島先輩と迸る雷と光。

そして、一対の綺麗な黒い翼だった。



「主よ、なぜそなたが負けたか、分かるか？」

白狼が金の瞳で僕を見据えながら問う。

「僕が、慢心したから？」

「否」

答えた言葉は即座に否定される。

「僕が弱かったから？」

「それも否」

「……じゃあ、なんなのさ？」

問いの答えが解らなくて問いかけると、隣の魔蝶から返答があつた。

「それは、あなたがまだ知らないから」

「なにを？」

「あの夢の、意味を」

あの夢、とはきつと、あの夕焼けの河川敷の、名前も顔も分からない『姉ちゃん』の事だろう。

僕が言葉を発する前に、今度は鋼蠍が口を出す。

「あの夢の意味を知らなければ、否、思い出さなければ、主君は弱いままなのです」

「思い、だす？ 君達は知ってるの？ あの夢の意味を。あの夢の答えを」

「ああ、知っていると」

「なら、教えてよ！ 知りたいんだ、知らなきゃいけない気がするんだ！」

一歩前にでて訴える。

だが、その訴えは首が横に振られることで拒絶されてしまう。

「なんで!？」

「それは、あなたが自ら思い出さなければ意味が無いから」

「それが、我輩たちの誓約だから」

「なんだよそれ……………なんで教えてくれないんだよ！　なんで、僕だけ知らないんだよー!」

「すまぬ……………それにも答えられぬのだ。許せ主よ。ほら、目覚めの時間だ」

白い世界がぼやけ始める。僕の意識が覚醒しようとしている証だ。

「どうして、教えてくれないんだ……………」

そう呟くと同時に世界が暗転し、僕の意識は現実へと戻って行った。



目を覚ますと、僕は布団に寝ていた。

外はもう真つ暗で今が何時なのかも分からない。

「(ハハ)は……………」

多分、姫島先輩の家だ。

「傷が、治ってる?」

腹に手を当てたり、巻かれている包帯に触ってみても痛みはなく、少しだけずきずきと腹に鈍痛が残っているだけだ。

そこで、襖から漏れる光に気が付く。

きつと向こうに姫島先輩がいるのだろう。

襖に手をかけたところでふと立ち止まる。思い出すのは先程の光景。

途切れる意識の最後に見た、先輩に生えた墮天使の翼。

あれは、つまり……………。

ふすまを開ける。

そこは渡り廊下になっていて、漏れていたのは月明かりの用だった。流星は山ノ上と
いったところか、自分の家で見ると遥かに明るく見える。

「……………起きたのね、ハルトくん」

右から声がかけられ、そこを剥けば、薄い白装束——恐らく寝巻きだろう——に身を包んだ姫島先輩がいた。

「ご両親にはちゃんと連絡を取りましたわ。明日は祝日だから、ゆっくりしてこいって言つてましたよ」

「……………まったく、家の親は……………」

予想通り過ぎる答えに、少し笑いが溢れてしまう。

無言で先輩の隣に座る。距離は拳二つ分位。なんとなくこれがちょうどいい気がしたから。

けど、そこに座つたからと言つて何かを話す訳でもなく、互いに無言で空を、真ん丸の月を眺めている。

「傷は大丈夫なの？　すぐに再生が始まっていたけれど」

長いような短いような沈黙の後、先輩が口をひらく。

「はい。なんかもう殆ど治りかけてて」

「それもゴツドイーターの性質？」

「どうでしょう。多分そうだと思いますけど」

「なら、あとは制服を直すだけね」

再び沈黙。

普段はこんなに沈黙しないはずなのに、何と無く互いに閉口してしまう。

「……………ねえ、ハルトくん」

また、先輩が呼び掛けてくる。

「はい」

空を見つめたまま、返事を返す。

きつと先輩も空を見たままだ。

「ハルトくんは、墮天使は嫌い？」

「うーん……………」

「私はね、大嫌い」

僕が質問に答えあぐねると、先輩は少し声を鋭くしてそう言った。

「あの真つ黒な翼も、墮ちた光も、そのあり方も、その存在その物も、私は大っ嫌い」

「どうして？」

「私の家族はね、墮天使に奪われたの。墮天使に襲われて、母を殺されて、一人で逃げて、それでも私を殺そうとする墮天使が追ってくる。今日の日だってそう。ここ数年間無かったからすっかり警戒を怠っていたわ。」

大好きな母を殺した墮天使が、私は嫌い」

「……………お父さんは？」

僕はふと、疑問に思ったことを口にだす。

「父？ ……そうね、父も嫌いよ」

「どうして？」

「……………ハルトくん、こつち向いて」

呼ばれて、先輩の方を向く。

するとそこには——

「どう？ 醜いでしょ？」

悪魔と墮天使の翼を生やした、美しい先輩が、そこにいた。

「その翼……………」

「私の父は墮天使。墮天使幹部【雷光】のバラキエル。どう？ 驚いたでしょ？」

そう言つて笑う先輩の顔には、悲しいほどに自嘲の色が浮かんでいた。

「醜いでしょ？ おぞましいでしょ？ こんな、悪魔でも墮天使でもない、中途半端

な混じり物は。

きつとハルトくんは墮天使が嫌いなのでしょう？ イツセーくんを殺したのも、アーシアちゃんを殺したのも、君に大怪我をさせたのも、全部墮天使。嫌いにならない訳が無いわ」

自嘲の笑みを浮かべるその顔は、今にも泣きそうで、

「私は嫌い。墮天使が嫌い。墮天使の父が嫌い」

今にも壊れそうで、崩れそうで、

「そして何より、こんな自分を隠さなきゃ生きていけなくて、でもこうやってさらけ出して支えてほしいって思ってる、自分が一番汚くて、大っ嫌い!!」

助けを求めている目をしていたから――

「軽蔑するでしょう？ 醜いでしょう？ これが私なの。姫島朱乃私の本性なの！
……………ごめんね、今まで黙ってて」

――だから、抱き締めた。

「ふえっ!？」

キヤラじゃないのはわかってる。らしくないって、きつと深夜のテンションなんだと思う。

でも、こうしなきゃ行けない気がした。

「僕は、先輩のこと好きですよ」

「――」

「いつも笑顔で、優しく、ちよっぴり意地悪な所もあるけど、それでも一緒にいるとあつたくて」

抱き締める腕に力を込める。苦しくないように、安心できるように。

「堕天使が嫌いかと言われても、正直わかりません」

「……………どう、して……………」

「人間や悪魔にいい人と悪い人がいるみたいに、堕天使にもきつとそう言う人がいると思うから」

「でも、私は……………」

「現代っ子舐めないで下さいよ。人外娘？ ハーフ？ ドンと来いです」

先輩の体が震え始める。

シャツの胸元が少し湿り気を帯びる。

「ちよつと月並みな言葉ですけど、僕に取つて先輩は先輩なんです。墮天使だろうが悪魔だろうがその半々だろうが、僕には関係無いんです」

嗚咽が聞こえ始める。

その背中を撫でながら、言葉が続ける。

「先輩は姫島朱乃。僕たちの先輩で、グレモリー眷属の【女王】^{クイーン}。僕に取つては、それだけで十分なんですよ先輩」

「う……うう……」

僕の腕の中にあつた先輩の腕が後ろに回されて、僕をしつかりと抱き締める

嗚咽の音がさつきよりも大きくなって、泣き声に変わる。

「辛かつたんですね。ずっとずっと隠してて。でも、きつと大丈夫ですよ。兄ちゃんもアーシアさんも木場先輩も、きつと受け入れてくれます。だから、泣き止んだら笑つて下さい」

胸に埋められた頭をゆつくりと撫でる。

「僕は、先輩の笑つた顔が一番好きですから」



「……………あの、先輩？」

あれから数十分。

ひたすら泣いた姫島先輩は、今現在そっぽを向いてしまっている。

「……………僕、何かやらかしました？」

「ふうんだ。別に年下に慰められたからって拗ねてませんよーだ！」

なに今の可愛い。

「えー、じゃあ、どうしろと……………」

「名前」

「え？」

「名前で呼んで」

「い、いきなり？」

「小猫ちゃんとアーシアちゃんとゼノヴィアちゃんは名前で私だけ名字だなんて、そんなのズルいわ」

「いや、グレモリー先輩も……………」

「リアスはいいの！ どうでも！」

「ど、どうでも!?!」

それでもいいのか懐刀。^{クイン}

い、いや、でもそれで機嫌を治してくれるのなら！

「あ、あけ、」

「……………」

「朱乃……………先輩」

「っーんだ」

「ええ…。あ、朱乃、さん……………」

「……………つん！」

「だめかー。……………朱乃」

「はい、ハルト！」

勇気を振り絞って呼び捨てで名前を呼ぶと、まるで花のような笑顔が綻んだ。

「ふふふ、はーるとー」

「は、はいー!」

「んーん、呼んだだけ。ふふふふ」

だ、誰だこの人ー!!

え? いつもの先輩どこ行った!? これが素なのか!?

その普段とのあまりのギャップの激しさに戸惑っていると、不意に腕を引っ張られ、引き倒される。

ポフン。

倒れた先で、僕の頭部を柔らかくて暖かい感触が包み込む。

こ、これは!

「ふふふ、可愛い顔」

これは、HIZAMAKURAだ!!

しかも僕の頭を撫でるその優しい手つきが、とつても落ち着く。

あ、ヤバイこれ。イツセー兄ちゃんがキモい顔してたの何と無く分かる気がしなくもない。

やんないけど。

「ねえ、ハルト」

「はい」

「ハルトの好きって、先輩としての好きでしょ」

一瞬、どうしてそんなことを聞かれたのか本気で理解できなかった。

「……………どうして？」

「んー、なんとなく、かしら。きっとハルトには、ずっと前から好きな人がいる気がするの」

ずっと、前から……………。

そういわれると、なんだかそんな気がする。

思い出せないけれど、思い出そうとするだけで、胸が暖かくて、切なくて、悲しくて、けれど愛おしくて。

そんな風に思える人が、いた気がする。

「多分、そうなんだと思います。僕も自覚は無かったですけど、そんな気がします」

「ふふ、やつぱり」

「……………いいんですか？ こんなこと言っても」

「いいの。ハルトには、真っ直ぐな気持ちを見て欲しいから。顔も知らない誰かに勘違いされたままなのは嫌だから」

「すみません……………」

「謝らなくていいのに」

そんなやり取りをしている間も、朱乃は僕の頭をなで続ける。

「私、負けないわ。絶対ハルトを振り向かせて見せる」

「……………はい」

そう意気込む朱乃の姿がなんだか面白くって、ちよつと笑い声が出てしまう。

「あ、なんで笑うのよ」

「あたー！」

ぽかつ、と軽く額を叩かれてしまった。

「……………そろそろ寝ましようか」

「そうですね」

朱乃……………さんがそう行つたので、僕も返事をして立ち上がる。

惜しく感じたけれど、仕方ないね。

「それじゃあ、おやすみなさい」



「……………あの」

「なあに？」

「いや、なあに？　じゃなくてですね」

あれえ？　どしてアケノさん、僕のオフトン入ってる？

「……………添い寝、ダメかしら？」

「僕、一応男ですよ？」

「ハルトなら歓迎するわ。むしろ私が襲いそうですもの」

「リビングで寝てk……………うわぁ！」

戦線離脱をしようとした瞬間、腕を捕まれ引きずり込まれてしまった。

そして現在、僕の目前には朱乃さんの豊満な胸部装甲が……………。

チュ。

呆けている僕の額に、柔らかい感触。

見ると、朱乃さんが僕の額にキスを……………キス!?

「お休みのキスですわ。ハルトのファーストキスは、ハルトが一番大切だと思った人にあげるまで取っとくのよ？」

私があるの一番になれたら嬉しいけれどね。

そう言つて先輩が笑つた。

「……………も、もう寝ます」

「あらあら、うふふ。はい、おやすみなさいハルト」

せめてもの反抗で背中を向けて眠ると、朱乃さんが後ろから抱きついて来るが、それでも頑張つて目を瞑っていると、戦いの疲れが溜まっていたのか、睡魔はすぐにやつて来た。

おやすみなさい、朱乃さん。

あなたが笑つてくれて、本当に良かったです。

そうして、僕の意識は夢の中へと落ちていくのだった。

第66話

大切だと思える人がいた。

愛してると、心から言える人がいた。

その人と寄り添う平凡な日々は何よりも楽しくて、暖かくて、安らかだった。

顔も名前も思い出せない、大切な姉ちゃん。

世界は地獄だった。非情だった。

だから僕は力を欲した。

思い出せない記憶が抱かせる感情に、焦燥感に急かされるように、その力に手を伸ばしたんだ。

今度こそ守れるように、つて……………。



——その世界は地獄だった。

荒れ果て、喰い尽くされ、破壊され尽くした世界には、生命の生存圏などほとんど皆無に等しかった。

例え人類がどれ程強くなるうとも、新たな戦力の開発に成功しようとも、ましてや、聖域と呼ばれる、安全地帯が作られたとしても、だ。

人類は何時だつて窮地にあつた。

戦える人間が強くなつても、それでも守れる人間に限りはある。配給できる物資にも

だ。

だから僕は決意した。

『姉ちゃん。僕、ゴツドイーターになるよ』

病で床に伏せる幼馴染みの姉ちゃんに、残り僅かとなった薬を飲ませた後、僕はそう告げた。

『……………え?』

その言葉に、姉ちゃんは呆けた顔をする。

『どう、して……………?』

震える声と手で、僕は問いかけられる。

それもそうだ。最近は安定して戦えるようになってきたとは言え、やはりゴツドイーターは死と隣り合わせの存在なのだ。

戦いで死ぬこともあれば、神機に適合出来ずに死ぬこともある。

そんな世界に僕は自ら足を踏み入れようとしているのだ。姉ちゃんだって戸惑うに決まってる。

でも、

『姉ちゃんの薬は、もう残り僅かだ。でもこれ以上配給での入手は望めない。』

でも、配給はゴッドイーターの家族に最優先に配給されるんだ』

『でも、だからってハルトが、そんな、ゴッドイーターにだなんて……………っ！』

姉ちゃんは、僕の両腕を掴んで身を乗り出してくる。

『僕たちは互いの親に適正があつたからここに入れたんだ。なら、僕にだって適正があるはずなんだ』

『だからって！』

『僕は！』

尚もいい募る姉ちゃんの言葉遮るように、僕は声を張り上げる。

『決めたんだ、僕はゴッドイーターになるって！このままだったら、姉ちゃんが死んじゃう！そんなの僕は嫌なんだ！姉ちゃんには笑ってほしい、大好きな■■姉ちゃんには、生きていて欲しいんだ！』

声を張り上げて、目を真っ直ぐに見つめて、僕の思いの丈を正直にぶつけた。

『ハルト……………』

『苦しいんだ。辛そうな姉ちゃんを見るたびに。そのたびに、なにも出来ない無力な自分が恨めしくなる。』

だから……………』

そこまで言ったとき、僕の言葉は遮られた。

姉ちゃんが僕の腕を引っ張って、顔を自分の胸に埋めさせたから。

『……………ありがとね、ハルト』

『姉、ちゃん』

『ハルトがそこまで言ってくれて、私は嬉しいわ。でもねハルト。覚えておいて?』

姉ちゃんはそのまま、僕の頭を優しく撫でながら、囁くように綺麗な声で僕に語りかける。

『私が死んだらハルトが悲しむように、私だってハルトが死んだら悲しいの。だからね、必ず帰ってきてね。無理はしないで、ちゃんと生き残ることを最優先に考えて?』

『……………うん』

『私はハルトが活躍するより、生きて、笑って帰ってきてくれることが、一番嬉しいんだから』

『うん』

姉ちゃんが、僕の背に手を回す。

僕も同様に手を回して、抱き締める。

微かに、鼻腔を太陽の香りが擦った気がした。

『愛してるわ、ハルト』

『僕も愛してるよ』

—
■ …か姉ちゃん』



鼻腔をくすぐる芳しい香りに応じるかのように、僕の意識は浮上していく。
目を開けば、和風の天井が目に写る。

「……なにか、夢を見ていた気がする」

とつても大切な、大事な夢を。

《やはりまだ、思い出せないのか?》

うん、マルドゥーク。

君達が言つた夢はまだ、僕にはわからない。

《そう、か……》

と、その時、襖の向こう側から声が聞こえる。

「ハルトくん、起きてますか?」

姫島先輩の言葉に僕が返事を返すと、そつと音を立てないように襖が開かれる。

「おはようございます、ハルトくん」

そう言つて僕の元まで来て微笑んだ先輩に、少し見とれてしまう。

いつもとは違い、ただ結わえただけの髪を左肩の上から前に垂らし、紫の着物に白のエプロンと襷をかけた姿は、まさしく大和撫子と言つた具合で、旅館の女将や武家屋敷の奥方と言われても納得できてしまう出で立ちだった。

「お、おはようございます、姫島先輩」

その姿に見とれ、その直後に昨日自分が何をしたのかという自覚が滝のように流れ込み、羞恥心で今にも転げ回りたくなる。

「……………」

「先輩？」

いつもならおはようと返してくれるハズの先輩は、ただニコニコと微笑みを浮かべてこつちを向いたままだ。

「どうしました、先輩？」

そう問いかけても微動だにせず、一瞬時が止まってしまったのかと錯覚してしまいうな……………あつ。

え、もしかしてそういう……………？ あ、ちよつと待つて勇氣が……………。

「お、おはようございます、あ、朱乃…さん」

「はい、おはようございます」

そして世界は動き出した。

……………そつかあ、先輩の事はこれから名前呼びか、そつかあ。

いや、別に構わないんだけど、きつと周りから色々言われるんだろうな。

朱乃さんに案内されて通されたのは、既に朝食の準備ができて居間だった。

それを見て、得も言われ得ぬ感動が僕を襲う。

「わあ……！」

ちやぶ台にのせられた焼き鯖に肉じやが、味噌汁と白米、そして椎茸の煮物。

なんとも純和風の朝食に、昨日夕飯を食べていないことも相まって、量が多いなあという感想を押し退けてお腹が小気味の良い音を鳴らして空腹を主張した。

「あう」

「あらあら、うふふ」

なんだか恥ずかしくなつて少しうつむくと、クスクスと朱乃さんが笑う。

「むう、笑わないで下さいよ」

「いえいえ、ハルトくんも男の子なんだなあ、と思っただけですわ。おかわりはまだありますので、沢山食べてくださいな」

「はあ」

座布団にそれぞれ座り、両手を合わせる。

「いただきます」

脳を刺激する香りに誘われるまま、お箸を手に取り、鯖の身を崩して口に運ぶ。

鼻を抜けるような、焼けた脂の香ばしき、程よい塩気と鯖の淡白な旨み、そしてそれを引き立てるように一粒一粒が立っている米の甘み。

そのすべてが僕の脳を刺激する。

「お、美味しいです！ とっても！」

ついうっかり服が脱げてしまえそうなほどに。

一度その美味しさを知ってしまったと、もう止まることはなく、食事に没頭してしまう。味の染み込んだジャガイモとのホクホクさ、噛む度に出汁が染み出てくる椎茸と甘い人参、合わせ味噌と豆腐とワカメの単純だけど、だからこそ美味しさが際立つ味噌汁。気がつけば、3杯のご飯を平らげている僕がいた。

「ごちそうさまでした！」

「はい、お粗末様でした。ふふふ」

両手を合わせてそういうと、途中からニコニコと僕を見ていた朱乃さんがどこか嬉しそうに笑う。

「沢山食べたわねえ」

「あつ、すいません……もしかして朱乃さんの分も食べちゃいました……？」

「あらあら、そんなことは無いですわ。むしろ、そこまで美味しいと言って頂けて何よりですわ」

そう言いながら食器を片付ける朱乃さんの顔はとっても嬉しそうに微笑んでいた。

「あ、手伝います」

「良いのよ。ハルトくんはテレビでも見て待つてて？」

僕の提案を断った朱乃さんはテキパキと食器をまとめて台所へ待つていく。

仕方なく言われた通りテレビでも見ようかとリモコンを探したとき、ふと庭へ視線を向けると、そこには魔力で粗方治したであろう制服が、日光に照らされながら風にはためいていた。

そして部屋の隅には裁縫道具が置かれ、よくよく制服を見ると、手縫いをしたようなあとを見ることができた。

……………これが、女子力というやつか。

もし女子力スカウター何でもものがあつたならば、朱乃さんを図つたその瞬間に爆発してしまふだろうな、何て思ったのは多分僕だけではないはず。

そのあと、テレビを見ていると、洗い物をしているはずの朱乃さんがひよっこりと顔を
を出して、

「ハルトくん、なんならお風呂も入りませんか？ 昨日の事があつて入つてないでしょ

う?」

「え? いや、さすがにそれは、その……………」

「下着なら魔力で綺麗にするので気にしないで下さい」

「いやしますよ!」

むしろ綺麗に出来るんかい。魔力の力ってスゲー。

というか、そう言ってくるってことは、ちよつと匂うってこと?

それなら、入った方が良いのかな……………?」

「そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……………」

「はい。タオルは脱衣場に置いてありますので。あと、湯船も沸かしておきましたわ」

なんとという至れり尽くせり。

ヤバい、自堕落になってしまいそうで怖い。

「あ、ありがとうございます」

朱乃さんにお礼を言つて風呂場へ向かう。

そこで真つ裸になって、腹を見ると、あれだけ貫かれたのにも関わらず傷は殆ど残つていない肌が露になる。

「これもゴッドイーター化の影響なのかな?」

そんな独り言をぼやきながら風呂に入り、体を流そうとすると、脱衣場の扉が開く

音がする。

なんだろう？ 朱乃さん、何か取りに来たのかな？

頭を洗いながらそう思っていると、後ろで風呂場の扉が開く音がした。

「……………え？」

慌てて振り向くと、そこにはなんと……………

「背中、流してあげますわ」

頬を赤らめて、蠱惑的な笑顔を浮かべた朱乃さんがそこにたっていた。

何を言っているのか以下略。

しかも——

全裸で。

何を以下略。

それを見た僕が鼻血を吹いたのは言うまでもないだろう。

なにこの据え膳。

ヘタレには刺激が強すぎるよ朱乃さん……。

湯気に逆上せたのと、昨日の分も含めて血を流し過ぎた僕は、そのまま意識を落としました。

第67話

.....

「はあう!？」

すごい夢を見た気がする。

正確にはピンク色主体の浴室でのあれやこれやな夢。R指定は守った気がする。

「(っ)は.....」

目が覚めれば、見慣れぬ木造の天井と本を読む朱乃さん、背中に伝わる固い感触と頭にある朱乃さんの太股の柔らかい感触、そして伊草の香りと朱乃さんの甘い匂い.....

「.....っ!」

「あら? 起きました?」

なんとか噛み殺した。悲鳴を。

ああ、ビックリした.....じゃなくて!

「ひ、ひひ姫じ.....じゃなかった、朱乃さん!？」

「はい? どうしました?」

「い、いやどうしましたじゃなくてですね！ ……今どういう状況なんですかね」

問うと、朱乃さんはキョトンとした顔で首を傾げ、僕を覗き込む。

「どういう、と言われましても？」

「いやいやいや……」

「膝枕ですが？」

「いや見ればわかるんですけどね？ あと、どうして僕の頭を押さえつけてるんですか

？ ちよ、起き上がれない力強い強い！」

強く押さえつけられてるのに、掌も太股も柔らかくてむしろ心地良い。

なにこのテクニック。すごい。

「もう、暴れないで下さいな。 ……心配したんですから……」

そう言われると反論出来なくて、渋々抵抗をやめる。

決して太股の柔らかさに屈したわけではない。断じて。太股柔らかい。

「僕、どれくらい寝てました？」

「んー、1時間くらいかしら？」

「そ、そんなに!?! ……心配をお掛けしました」

逆上せてしまったとはいえ、そんなに寝ていたとは。

やっぱり疲れてるのかな？ 体感だと2ヶ月くらい寝てたような気がしないことも

無いし。

「まあ、目が覚めたのなら良かったですわ。このあと予定もありますので」

「予定、ですか？」

部活でなんかあったっけ？

「ええ、本当はこのままイチ、んん、ゆっくりしていたのですが、魔王様にお呼ばれしたら断るに断れませんか」

「へー、魔王様に……【女王】^{クイーン} ってのは大変ですね」

特に考えもなくそう返すと、朱乃さんはなぜか首をちよこんと傾げ、僕の顔を覗き込んでくる。

「？ 呼ばれたのは、ハルトくんもですよ？」

「えっ」

「サーゼクス様への用事は、リアスに頼んで夜にしてもらえたのですが」

「えっ」

「流石にあまり繋がりのないレヴィアタン様からの呼び出しは断れませんか」

「えっ」

え、呼び出し？ 魔王から？ 誰が？ 僕が？

い、いやだ、凄く嫌だ……。なんか、恐怖よりも嫌な予感がする。

「なんでも、悪魔と行動を共にする人間に興味が沸いたとかなんとかで」「す、凄く行きたくないです」

そう答えると、朱乃さんは優しく微笑んで、僕の前髪を撫でる。

「大丈夫ですわ。レヴィアタン様は癖の強いお人ですけど、とっても優しい方ですから」「うう、そうは言っても……」

僕は、悪魔、と言うかオカルトチックな物が苦手だ。

最近はお力研の皆にも慣れて仲良くしてたから、もう大丈夫かなって思ってたけど、それでもやっぱり初対面の悪魔と会うとなると、どうしても体が硬直してしまう。

きつと、僕一人で会ったら会話してられないだろう。

「大丈夫、私が付いてるわハルト」

唐突に、耳元でそう囁かれる。

その言葉使いに昨日の夜、いや、今日の夜のことを思い出して、どうしても顔が赤くなる。

「……………そういうの、ズルいと思います」

「あらあら、うふふ、そんなに顔を赤くして、可愛いですわね」

「……………顔が赤いのはお互い様じゃないですか」

「こうまで言われたら、腹を括るしか無いよね？」

大丈夫、もうあそこまで過剰に反応はしないはずだ。
なんだかんだ言つて、慣れてしまえばちゃんと話せるんだから。

「さて、と」

一通り会話して、朱乃さんの太股とかを楽しんだあと、僕は立ち上がる。

その時、朱乃さんの名残惜しそうな声と、温もりから離れて少し肌寒く感じる後頭部に後ろ髪引かれながらも、彼女の方に向き直る。

「確かー時からの予定でしたよね？　なら、そろそろ準備しません」

「……………そう、ですね」

ちよつと俯き気味に頷く彼女の、普段の余裕からは考えられないその姿に、珍しい物が見られたとほんの少し笑みを溢す。

「また今度、時間がある時にでも一緒に出掛けませんか？」

「え？」

僕の言葉に、勢い良く朱乃さんが顔をあげる。

「今日は予定があるから無理でしょうけど、今度の休みの日に、お出かけしませんか？」

「そ、それは、デート……………と言うことでいいのでしょうか？」

「デート……………まあ、そういうことになるのかな？」

「そ、そうですわね！」

首肯を持って返答すると、見るからに元気を取り戻した様子で彼女は立ち上がる。そして、筆筒の上から修復した僕の制服を取って渡してくる。

「そうと決まれば、厄介事………いえ、用事を済ませてしましましょう。場所は部室
よ」

おい今厄介事つったぞこの人………いや、もう突っ込むまい。

それよりも僕は、これから魔王様に会うための心構えをしなくては。

主に倒れないための。



……正直舐めてた。魔王ってすごいなあ。

「あれ？ 聞いている？ と言うか生きてる？ おーい、ハルきゅんー？」

いやもうね、悪魔怖いとかそんな条件反射とか吹き飛ばすくらいにはぶっ飛んでるね魔王様って。

「むー！ 皆から悪魔が苦手って聞いてたから緊張解すための衣装で来たのにー！」

いやあ、話によるとあのグレモリー先輩のお兄さんも、今日は神社お寺巡りを堪能してるって話だし、すごいシスコンって話だし、そう考えるとこの人のコレも、魔王じゃ普通なのかなあ……？

「…………お姉様、私は何度その格好を止めてくださいと言えはいいのですか……」

「えー、ダメ？」

「ダメです」

「…………なんだよ、魔王少女って……」

「あ、復活した」

「…大丈夫?」

ようやく現実目に向けた僕に、兄ちゃんと小猫ちゃんが声をかけてくる。

「うん、一応ね。正直、頭がショートしてはいたけども」

「気を付けろよハル、この人の本気はまだまだなんだから」

「えっ」

「…昨日はいろいろと酷かった」

「久しぶりなんだから、しゃんとしろよな」

「…先輩、それ言っちゃダメです」

と、とりあえず意識を戻して、

「あ、あの、レヴィアアタンさま……………」

「もー! 違うってば! 私のことにはレヴィちゃん、若しくはマジカル☆セラフォル、

あるいはレヴィアたんって呼んでってば」

「あっはい」

なんだろう、このノリ。

魔王ってつまり王様でしょ? 王様軽くない? え? 魔王はだいたいオフではこ

んな感じ? マジすかグレモリー先輩。

「…………じゃあれ、レヴィ、ちゃん…………」

「はい良くできましたー！ えらいえらい」

「あ、ありがとうござ……じゃなくて！ あの、どうして僕ら呼ばれたのでしょうか？」
 今回呼ばれたのは木場先輩と、グレモリー眷属にとつての新参者である兄ちゃんと
 アーシアさんと僕だった。いや、僕眷属じゃないけどさ。

「いやあ、君たちとは話したことないつてのと、君たちはあのコカビエルを倒しちゃった
 からねー。興味沸いちゃった」

「興味、ですか？」

「だって、赤龍帝に回復系 セイクリッド・ギア 神器、【聖魔剣】つていう禁 バランスブレイク 手、そして不思議な武器と
 能力を使うおかしな人間」

にやり、と笑ったその顔には、先程までのおちやらかなた雰囲気はなく、ただただ興味
 の眼光を覗かせる一人の美女の容貌があつた。

「リアスちゃんを覗けば下級悪魔だけだと言うのに、上級悪魔を下し、さらには最上級墮
 天使をも下したグレモリー眷属。そして彼らと行動を共にする人間。」

冥界はこの話題で今持ちきりだよ？ こんなのも、私でなくても興味を抱くわよ？」
 だから、

そう、魔王は言葉を区切り、テーブル越しに身を乗り出して僕に顔を近づける。

「気を付けなさい、神結ハルト。これは警告。」

人の身に過ぎたる力は……いえ、そうでなくとも強大な力は、更なる災いを引き寄せるわ………努力々、忘れないようになさい」

そう言って、レヴィちゃん様は僕から顔を離して、にっこりと笑う。

その笑顔は、最初の天真爛漫な物に戻っていて、先程までの声音が嘘のような表情をしていた。

「はい、これでお話はお仕舞い！ あとはリアスちゃんと朱乃ちゃんのお話し合いだから、眷属の皆は帰っておっけー！」

ぱんつ、と手を鳴らして立ち上がった魔王様は、そのままグレモリー先輩と朱乃さん連れて、会長先輩と一緒に出ていく。

途中、「あれ？ もしかしてこれで出番終わり？ え？」なんて会長先輩の言葉が聞こえた気がしたが、まあ気のせいだろう。

四人が、と言うか魔王が部屋から出ていった途端に、部屋にいる全員から息が溢れた。なんだかんだ言って、魔王という絶対強者と対面して皆疲れていたのだろう。

とりあえず、僕は四人が出ていった扉を見つめながらポツリと感想を呟いた。

「魔王少女あの服装でシリアスめな事言われても、なんだかなあ………」
「言ってるな、ハル」

第68話

我らがオカルト研究部の居城たる旧校舎には、『開かずの教室』と呼ばれる部屋が存在する。

普段部室として使っているシャワーのついた学校の機能としてみたら謎すぎる教室と呼べるのかよくわからない部屋が二階にあり、件の『開かずの教室』が一階の奥に存在していた。

「帰る!!!」

「いきなりか!?!」

当然の帰結である。何がうれしくておどろおどろしい魔方陣で封印が施され、剩これ見よがしに「KEEP OUT」のテープが張り巡らされている部屋に、わざわざ入らねばならないのだろうか。

「お前、こういうの慣れたんじゃないやなかったのかよ!」

「悪魔と! ホラーは! 別物だよ! はーなーしーてー!」

「オカルトっていうならどっちも同じだろ! ていうか種別じゃ悪魔もホラーだよ!」

「いーやーだー! HA☆NA☆SE!」

「…ハルト、大丈夫、中にいるのは悪魔の子だから」

「あ、なら安心だね」

「おい待てや」

なんだ、それならよかった。

「つたく……それで部長、中には誰がいるんです?」

「ええ、それなのだけけど」

兄ちゃん尋ねると、グレモリー先輩はこの『開かずの教室』には、なんと一人、グレモリー眷属の、もう一人の【僧侶】ベシヨッフの子がいるそうなの。

曰く、強力な【神器】セイクリッド・ギアを持つが使いこなせず、暴走する。

曰く、先のコカビエル戦を含めたこれまでの活躍が評価され、封印解除の許可がおりた。

曰く、我らがオカ研の稼ぎ頭。

曰く、引きこもり。

………うん、なんというか、濃い。相変わらずこのメンバーは個性が濃い。

「さて、開けるわよ」

朱乃さんと扉を封印を解きながら説明していたグレモリー先輩が、ゆつくりと扉を開ける。

「ギヤスパー、入るわよ」

そして開かれる扉。響き渡る絶叫。

『イヤアアアアア！ お外出たくないお外怖いいいい！』

『ごきげんよう、今日も元気ね。それはそれとして外へ出ましょう？』

『やですうううう！』

あ、何か通じるものを感じる。

声的には女の子、かな？ 『扉越しでくぐもつてるせいもあって、少し中性的だ。』

『あらあら、ようやく封印が解けましたのに……………悲しいですわ』

『あ、ご、ごめんなさ……………』

『さ、行きますわよ』

『イヤアアアアアアアアア!!』

中から聞こえるお姉さま二人の説得……………説得？ に盛大に抵抗している声を聞きながら、僕ら新入り四人は顔を見合せ首を傾げる。

古参の小猫ちゃんと木場先輩は事情を知っているらしく、苦笑を浮かべている。

正確には苦笑を浮かべているのは木場先輩だけで、小猫ちゃんは、舌打ちをしていた。

「こ、小猫ちゃん？」

「…なに」

「怒ってる?」

「……怒ってない。ちよつとイラツと来ただけ」

「あつはい」

いつもよりタメが少し長い。これは本気のやつだ。触らぬ小猫に祟り無しって古事記でも言つてた。

中から聞こえる会話から、出てくるのにはもう少し時間がかかりそうだと当たりを着けた僕らは、そつと中の様子を伺つてみる。

見えたのは、ファンシーなぬいぐるみや調度品と、締め切られたカーテンで薄暗いなかの唯一の光源であるパソコン、そして棺桶。………うん? 棺桶?

そしてパソコンのあるデスク前に朱乃さんとグレモリー先輩がしゃがみこんでいた。もしやあの下に逃げ込んだのかな?

ここからじゃ二人が壁となつて見えないため、僕らは部屋の中へ入り、そこへ近づく。すると、そこには………

「びやあああああああ! 人が増えたあああああ!」

段ボールが一つ、叫んでいた。

「………なるほど、グレモリー眷属のもう一人の【僧侶^{ビショップ}】は段ボールの付喪神か」

「違うわよ!」

違つたらしい。

ということとはくそう、もう一つ障壁があつたとは。

「ほらギヤスパー、出てきなさい。新しい眷属も増えたんだから、挨拶なさいな」

「すごい、グレモリー先輩がお母さんみたいなこと言つてる。おかん味やばい」

「わかる」

と、そこで動き出したのは段ボール付喪神でも先輩方でもなく、

「…ギヤー君、出てこないとこのパソコンがどうなつても知らないよ?」

「………え?」

「…私、パソコンのことは良くわかんないけど、これがすごい高いやつだつて言うのは見たらわかる」

「こ、小猫ちゃん?」

「…だからね、ギヤー君」

そこで小猫ちゃんは段ボールへと近づき、良く聞こえる声で言い放つた。

「…出てこなかつたら、物理的に破壊する」

「こんにちわ皆さん僕はギヤスパー・ヴラデイ! グレモリー眷属の【僧侶】ビショップでウ

ヒイイイ!! 人がいっぱいいるうううう!!」

あ、この子面白い子だ間違いない。

つてあれ？ 目の前が白く――

「ん？ あれ？」

瞬きをする一瞬の間に、先程までそこにいたギヤスパ―……ちゃん？ くん？ の姿が見えなくなっていた。

「お？ おお？」

どうやら同じことを体験したらしく、兄ちゃんやアーシアさん達も同じように首を捻っている。

「それがあの子の神セイクリッド・ギア 器の力ですわ。今はほら、あそこの棺桶の中に」

「ひいひい！」

「つてことは、瞬間移動？」

そう疑問を口にしてみると、隣にいたグレモリー先輩が首をふって答えた。

「いいえ、彼の能力は時間停止。セイクリッド・ギア 神 器の名前は『フォービドゥン・パロール・ビュ停止世界の邪眼』」

「なるほど、時間停止ですか……ん？ 彼？」

「ええ。彼はギヤスパ―・ヴラデイ。見た目はアレだけど、歴とした男よ。男の娘。あ、それと吸血鬼のハーフね」

「男の娘」

「行け！ 木場先輩！ 君に決めた！」

「やらないかい？」

「ヤメロオ！」

◆◆◆そんなこともありました◆◆◆
閑話休題◆◆◆

「しかし、時間停止とかまた反則な力つすね」

「そうね、二天竜の力も大概だけれど、使いこなせればこれほど厄介な神セイクリッド・ギア 器は無いわ」

その言葉に、僕はなぜかの……彼が封印されていたのかを思い出した。

「ああ、確かにそんな厄介なのが暴走するのは危ないですね」

「でしよう？ 彼より遥かに実力が上の者なら止められないのだけど、そうでないものほど長く停まってしまうのよ」

つまり、もしみんなが停まっているときに停まらなかつた人に悪意があつた場合、かなりヤバイって事だね。

「ふむ、吸血鬼か。教会時代はその類いのグルーや下級の吸血鬼をよく殲滅したものだ」
「ひいひいひい！」

「案ずるな、今は同じ眷属の仲間だ。狩りはしないさ」

そう言つて微笑んだゼノヴィアさんは、段ボールを床に置く。

「だが、それはそれとして、軟弱な男はダメだぞ。木場に狙われてしまう」

「待つて最近僕の扱い酷くないかな」

「何を今更」

木場先輩が落ち込んだ。でも反論できないと思うんだ僕。

「そ、それは確かに嫌ですけど！」

あ、追い討ち。

「ふむ、それなら鍛えてやろう。どうせ外へ出ねばならんだ、調度いい」

そう言うときゼノヴィアさんは、デュランダルを仕舞い込んでいる空間の裂け目に手を突っ込み、『ソレ』を引っ張り出した。



「酷い、何が酷いつて絵面が酷い」

一組の少女少女が織り成す光景に、僕がそれとなく何かそれっぽい解説を入れていると、横からそんな言葉が聞こえた。

「お、匙」

「よう兵藤。それと神結。解禁された眷属が入るって聞いたから見に来たんだが………あれはなんだ？」

「キマシの搭」

「あんなきたn…酷いタワーなんか嫌だわ！ゼノヴィア嬢目がちよつと怖いし！てかあの美少女誰だよ！」

「まあまあ、落ち着けよ匙。逃げてる方がさつき解禁された子だ」

「……慣れてんな。つてか、おいおい、金髪美少女かよ！羨ましいねえ！」

ギヤスパークンを見てテンションを上げる匙先輩が

「だが男だ」

「えっ」

「だが男だ」

「」

言葉を失い頷れる匙先輩。

「なんだよソレ、詐欺じゃねえか！ 何であの子といい神結といい、オカ研には女子並みに可愛い男子が二人もいるんだよ！ 始まってんな！」

「あんたの脳は終わってるけどなあ！」

「落ちて着けハル！ やめろ！ 神機を抜くんじゃない！」

そのとき、僕らは誰かの気配を察知した。

コカビエルとの経験が活かされたのか、匙先輩とギヤスパークくん以外の皆が一瞬で戦闘態勢をとり、各々の武器を構える。

何故なら、察知した気配が墮天使の物だったからだ。

「おーおー、反応の速いこった。コカビエルを倒すだけの事はある」
すると、兄ちゃんが一步前に出て拳を構える。

「（こ）に何の用だ、アザゼル！」

「よう赤龍帝」

場に緊張が走る。

匙先輩もなにかを顔を引き締め、セレクトドギア神器を構え、ギヤスパークくんは木の後ろでガタガタ震え、ソレを守るようにゼノヴィアさんが彼の前に立っている。

「まあまあまあ、落ち着けよ。別に戦いに来た訳じゃねえんだ。ちよつと、聖魔剣とやらに興味が湧いたんで見に来ただけだ」

「木場が狙いか!? ここには居ない!」

「なんだ、いないのかよ。つまんねえ……………ん?」

アザゼルの視線が僕を、正確には僕の持つ神機を捉えた。

「お前、その武器は……………いや、でも、そんなハズは……………」

な、なんだ? 急に目を見開いたかと思えば、口許に手をあててブツブツいい始めるし、何がしたいんだ?

「神機についてなにか知ってるの!?!」

「……………確証が取れない事を話すつもりは無い。悪いが用事ができた、これで帰らせて貰う」

そう言うと、アザゼルは少し険しい顔をしてこの場を去ろうとし、

「ああ、そうそう、そのヴァンパイアと赤龍帝じゃない方の【兵士】ボーン」

ギヤスパークんと匙先輩を呼ぶと、アザゼルは唐突にそれぞれの神セイクリッド・ギア器の特徴を説明し、効果的な使い方を捲し立てるように説明していった。

「あとはヴァンパイアには血でも飲ませときゃ力も付くさ。それじゃあな」

散々場をかき回し、言いたいことを言うだけいって、墮天使のトップは去っていった。
「な、なんだったんだ一体……」

「しかし、流石墮天使の総統と言ったところか」

「ゼノヴィアさん？」

「ここまで私たちどころか、先輩がたにも気配を悟らせず、尚且つ私たちだけにわかるように気配を垂れ流す。これは並の技術じゃない」

「そ、そう言えば部長たちが来ねえ！」

言われてみれば。あの二人ならすぐさま飛び出て来そうなのに。

「それに結界の類いも感じられなかったから、あれは純粹な技量で行ったものだろう」
「すげえな……」

「業腹だが、今の私たちでは勝てるのも事実だろう。アレは確実にコカビエルより遙かに強い」

武器を構えはしたけど、だからこそよりわかった。アレは勝てない。戦意を見せない状態での威圧感だ。戦場で相見えたなら、アレほどの驚異は無い。

「そ、そうだ！ 一旦先輩達に相談しよう！」

「なら、俺は会長達に話してくる！」

兄ちゃんのその言葉に、場は一斉に動き出し、各々の主へと相談に行くのだった。

第69話

『ふええええええん!!』

甲高い絶叫が、旧校舎に響き渡る。

「……………何事？」

アザゼルが来たその日の夜、精神的に疲労困憊して帰って、漸く眠りに着ける、といった瞬間にかかってきた呼び出しの電話。

流石に慣れてきたとは言え、寝る直前の呼び出しに、僕は少々不機嫌な声音で隣のイツセー兄ちゃんに尋ねる。

「いやあ、それがなあ……………かくかくしかじかで」

「まるまるさんかく、なるほどね」

兄ちゃんの説明に納得し、自分で淹れたお茶を啜る。

しかし、話を聞くにギヤスパークんの事情はかなり厄介だ。アーシアさんや木場先輩、朱乃さんの事情も酷く不快で憤りを抱かずにはいられない物ではあったし、ギヤスパークんのそれも同じなのだけど…………

「名門ゆえの家庭事情か……………」

僕やイツセー兄ちゃんのような、ついこの前まで平凡な一般人をやっていた身からすると、そういつたお家騒動は遙か遠い世界の事に感じてしまう。

唯一関わったといえるグレモリー先輩の婚約騒ぎも、何だかんだ言つてグレモリー先輩のお家は僕らの味方だったし、結構簡単に収まったと思う。

けど、ギヤスパークんのはきつとそんな簡単じゃない。

「ねえ、イツセー、ハルト」

そんな考えたつてどうしようもならない事に思考を捕らわれていると、グレモリー先輩が僕らに声をかける。

「もし、時間を止められたら貴方たちは、どんな気分？」

「……………少し、怖いですね」

悲しげな表情で訊ねられたその質問に、兄ちゃんは少し躊躇いながらも、誤魔化さずに答える。

僕は、どうなんだろう？

正直言つて、あまり彼に恐怖は抱いてない。

けれどもそれはきつと、彼がグレモリー眷属の一員だから。

グレモリー先輩の見込んだ人が扱う力に、僕は多分恐怖なんて抱かない。

「だけど、もしギヤスパークくんが僕らの仲間じゃなくて、無関係の状態だったなら……多分僕も警戒すると思います」

時を停めるということはつまり、世界の概念に干渉する絶大な力だ。様々な現象を起こすオラクル細胞だって、物理的な破壊をもつてしか世界に干渉できなかったというのに、あの神セイクリッドギア器はそれを容易く行ってしまう。

そしてそれが日々成長していると言うのなら、尚更人は彼を恐れ、離れていくのだろう。

『ぼ、僕は、こんな神器ちからいらさない！ この力はみんな停めちゃう！ 親も、兄弟も、友達になつてくれた子も、みんな、みんな停めちゃうんだ！ 怖がる！ 嫌がる！ もう嫌なんだ、怖がられるのが！ 怖がられるのが怖いんだ！ ……大好きな人が停まっちゃうのは、もう、嫌なんだ……だからもう一人がいいんだ！ ここから出たくない！』

声を荒らげて泣き叫ぶギヤスパークくんの感情は悲痛で、一人がいいと嘯く言葉は寂しそうで。

彼は一度命を落としたらしい。

家を終われ、ヴァンパイアハンターに襲われ、その果ての餓死。

その話を聞いたときのゼノヴィアさんは昼間の事を恥じ、深く反省していた。

仕事があるために行かなければならないが、後日改めて謝罪すると言っていた。

「この子をまた引きこもらせてしまふなんて……………私は【王】^{キング}失格ね」

グレモリー先輩が自嘲して笑う。

「部長、サーゼクス様との打ち合わせがこれからあるんですよね？」

そんな先輩に、兄ちゃんが声をかける。

「あとは俺たちに任せて下さい！」

兄ちゃんの申し出に、先輩は少し躊躇ったような間を開け、そして折れた。

「ええ、任せるわ……」

「折角できた男の後輩ですから！」

「同じく、同級生ですし」

「……………ふふ、ありがとう、二人とも」

微笑んだ先輩は、名残惜しそうに扉を見つめ、部室から出ていった。

それを見送った僕らは互いに顔を見合わせ、言葉を交わすことなく頷きあい扉の前に

座り込む。

「お前が出てくるまで、俺らはここを動かねえ！」

兄ちゃんが腕を組んで鼻を鳴らしながら言う。

さて、持久戦と行こうか。

……………と一時間が経過する。

むう、流石に強情だ。

やつぱり、黙ってるだけじゃダメなんだよな、きつと。

「ねえ、ギヤスパークくん」

突然声を書けたからか、扉の向こうでビクツとした気配を感じる。

「ギヤスパークくんは、怖い？ その神セイクリッド・ギア器と、僕たちが」

『……………』

反応は無いが、構わず語りかける。

「僕にはね、神機っていう、よく分からない力があるんだ。神話に生きたあのコカビエルやアザゼルですら知り得ない、本当に未知の力」

右腕を握り混む。どこまで伝わるか分からないけど、きつとこうやって本音を晒せば、きつと伝わってくれるはず。

「兄ちゃんだって最強の龍が宿って、しかも左腕を捧げてる。

僕らはね、別に特別な物を持つてないし、過酷な過去を過ごしていた訳でもないんだ。それなのにこうやってここにいるし、苦しい戦いだって体験してきた」

隣では兄ちゃんも頷いている。

「怖かった……ううん、正直言うとな、今でも怖い。

僕は元々怖がりりで、初めて皆が悪魔だと知ったときは大声で泣き叫んで、みつともないことしたんだ。

それに、この力だって怖い。

誰も知らなくて、僕だけが使い方を知っていて……使つてると時々、知らない感情が僕を埋め尽くす」

これは、初めて口にする想いだ。兄ちゃんも驚いた顔をしている。

「力を使う度に、その感情は強くなって行つて、酷く怖くなる。

けどね、きっと僕はこの力を使い続けるんだ」

『どう、して……？ 怖いなら、使わなければ良いじゃないか。知らない感情を抱いて、戦つて、それで大切なものを失つたら……』

「失わせねえ」

返つてきた質問に、僕でなく兄ちゃんが答える。

「俺はバカだしさ、ハルトの言つた事も、その悩みもわかんねえけどよ、それでもこれだ

けは言える。

俺は、いや、グレモリー^俺眷属^ちは、仲間の大切なもんはぜってえ守る。仲間も守る………それで、その仲間にはお前も入ってんだ、ギヤスパー」

自信たっぷりに答えた兄ちゃんは、ギヤスパークんに語りかけると同時に僕の頭に手を置いてグリグリと撫で付ける。

『なんで、何でそんなに自信たっぷりに言えるんですか！ それで死んじゃったら、どうするんですか！』

「それで死なねえようにするために、眷属全員で支え合うんだ」

「まあ、僕は眷属じゃないんだけどね」

「それでもだよ」

「わかってるって」

支え合う。それはきつと、この眷属の一番の強みだと僕は思う。

『………強いんですね、二人は』

「強^強く^くなん^{なん}か^かね^無え^いさ^よ」

力なく発せられた彼の言葉に、僕らは同時に返す。

「強かつたらきつと、僕らはここにはいない」

「一人で強かつたら多分、俺たちは一人で戦って、それで多分一人で死んでた」

「え？」

「俺たちは全員揃ってやっと、誰かを守れる」

「グレモリー眷属は支え合うチームなんだ。皆、補い合う力を持ってて、足りないところを全員でカバーする」

「そうやって俺たちは戦って、生き抜いて、守ってきたんだ」

『……………でも、僕は』

すすり泣く声が聞こえる

『皆さんが戦ってるとき、僕は部屋で縮こまっていた！ 一人だけ部屋に隠れて、見ないようにした！ そんな僕なんか、僕なんか……………つ！』

「だから！」

兄ちゃんがドアに手をかけ、思いつきり引っ張る。

いつのまにか発動していた【鼓舞】の力で増した筋力によって、ドアは鍵を破壊しながら抉じ開けられる。

「だから、これからはお前も一緒だ、ギヤスパー」

「僕らにはまだ、足りないものが多すぎる。君の力が、君の存在が必要なんだ」

泣き腫らした瞳に、光が映る。

「力を貸してくれ、ギヤスパ・ヴラディ」

「僕らも君を支えるから、君にも僕らを支えて欲しい」

「君は独りじゃない！」
お前は

「——う、あ……………」

「怖かったら俺を頼れ！　なんとって俺は最強の龍を宿した、お前の先輩だからな！

先輩なんだからな！」

胸を張って、その胸に拳を叩きつける兄ちゃん。

「僕だって、同級生なんだから、いつだって！」

真似をする僕。

「あああ、あああ……………」

ぼろぼろと、ギヤスパークんの赤い双眸から涙が溢れる。

「なんだったら、お前の力なんかとつとと上回って、停められねえようにしてやるよ！」

「そーだそーだ！　引きこもりなんかに負けないかね！」

「うあああああああああ!!」

僕らの言葉に、とうとう耐えきれなくなったギヤスパークんが大きな声で泣き出す。

けれどもその声は、最初に聞いた悲しみの声ではなく、

「ここに、ぼく、ここにいてもいいんですね！」

「おう！」

「めいわく、かけるかもしれないのに！」

「構わない！」

「うええええええん!!」

喜びに満ちた、これから立ち上がるための涙だった。



「はい、お茶」

「あ、ありがとう………ハルトくん」

「呼び捨てで良いよ。僕もそうする。ギヤスパ」

「う、うん。ありがとう、ハルト」

泣き止んだギヤスパーにお茶を渡して、僕は椅子に座る。

「ね、ねえハルト」

「うん？」

「それ、あの、先ば……………」

「うん？ イツスーがどうしたって？」

僕が座っているのは、先ほど泣き止んだばかりのギヤスパーに、時間を止めたら女の子のおっぱい揉み放題とかバカを抜かした兵藤とかいうイツスー。

「性欲とかは男子だから仕方ないしよくわかるけども、いくらなんでもそれは最低だよ、

イツスー兄ちゃん」

「うるせえ！ 朱乃さんとか小猫ちゃんとかと仲の良いお前に言われたかねえぞハルト！」

「はっ、アーシアさんとかグレモリー先輩と同居してる人に言われたくありませんー！

浮気だ変態め！」

「あだだだだ!!」

やっぱりバカを抜かす兄ちゃんに座った状態でその腕を捻り上げると、ギヤスパーがそれを見て笑う。

「先輩とハルトって仲良いんだね」

「まあ、幼馴染みだしね」

「あだだだだだだ！ 折れる、折れるうう！」

「そうなんだ」

「かれこれ十年くらいの付き合いになるかな？」

「これちよつとダメなやつ！ ハル、ハルー！」

流石にうるさいので兄ちゃんの腕を離す。

「折れるかと思った……………」

ゼーハー、と呼吸を乱す兄ちゃんの上になおも座り続けていると、ガチャリと扉が開く。

「ギヤスパークんの笑い声、外まで聞こえてたよ。凄いねもう彼と打ち解け……………」

そう言っに入ってきたのは、ホモ……………ホモの木場先輩だった。

彼は僕と、僕に座られている兄ちゃんを見て固まる。そしてその鼻から一筋の赤い液体を垂らし、

「ず、ズルいじゃないかイツセーくん！ 羨ましい！」

「うっせえ！ なら変わるか木場あ！」

「喜んで！」

「やめて!? 僕を売らないで!」

一瞬にしてその場はカオスに包まれたのは、言うまでも無いだろう。

困みに、

「ふああああ………段ボール、落ち着くうう………」

段ボールに入り混み、持ち手の穴から赤い瞳だけを覗かせるヴァンパイア。それを見て、僕は崩れ落ちる。

「ま、マトモだと………ギヤスパーは女装以外マトモだと思ってたのに!」
「諦めろ、女装の時点でマトモじゃない」

「あ、木場先輩は出血多量で気絶したから廊下に捨てておいた。

「……………そうだ!」

不意にポンスと手を叩いた兄ちゃんは、部屋にあつた紙袋を手に取り、二つの穴を開

ける。

「ギヤスパー、ちよつと出てきてみ」

「え？ はい」

ひよこ、と首だけを器用に段ボールから出すギヤスパー。やたらと慣れてる。

「そんなに人と目を合わせるのが嫌なら、ほれ」

兄ちゃんはその紙袋をギヤスパーに被せる。

「こ、これは——」

薄暗い旧校舎、羽を生やして飛ぶ段ボールと、そこから紙袋を被って赤い目だけを覗かせる謎の生命体！

「どうですか、似合います〜？」

そう言つてふよふよと羽を使つて近付いてくる。

な、なんだこれは………B級パニック映画のクリーチャーか!?

「あ、なんかこれすつごく落ち着きます………僕にピッタリかもです」

「お、おう」

「君は凄いやつだよ」

「ほ、本当に？ これを被つてれば、僕もグレモリー眷属としてハクがつくかも」

……………なんか、類は友を呼ぶと言うか、なんとと言うか、これで良いのかグレモリー眷属。

いや、今回は多分に僕らのせいだけでも。ごめんなさいグレモリー先輩。

第70話

——また、夢か。

それを認識したとき、僕の意識は直ぐにそう判断した。

いつの間にか慣れてしまった、明晰夢のようなフワフワとした感覚に、つい身構えてしまう。

けど、今回のそれは、いつも見る、知らない記憶の夢じゃなかった。

僕や兄ちゃん、小猫ちゃん、朱乃さん、グレモリー先輩、皆が部室にいて笑っている、そんな夢。

他愛のない会話をして、お菓子を食べて、形だけの悪魔の研究をおふざけでやってみたり。

そんな日常の光景の夢。

暖かくて、楽しくて、こんな時間がいつまでも続けば良いって、ずっと思えた。

次に見たのは、戦いの夢。

これまで戦ってきた相手と、僕らオカ研で戦い抜いた日々の追憶。

決して許せない怒りをぶつけ、譲れぬ信念をぶつけ、悪意に、敵意に立ち向かってきた、激動の日々の夢。

辛くて、苦しくて、悲しくて、けれども互いの感情をぶつけ合った記憶。

楽しい夢記憶を見た。辛い夢記憶を見た。悲しい夢記憶も見た。嬉しい夢記憶もあつた。

これまでの沢山の記憶が夢として甦ってきて、これが夢だと認識しているのに、不思議とそれが現実のように思えて、心地よくなつていく。

『ねえ』

誰かの声が聞こえる。聞きなれたような、聞きなれていないようなその声は、目の前から聞こえてくる。

『ねえ、ハルト』

その声の主に顔を向ける。

そして、認識する。

『ねえ、ハルト』

目の前にいる記憶の僕が、語りかけてくる。

同時に、世界から音が消える。

彼がゆっくり振り向くと共に、世界が徐々に光に飲み込まれて、白く塗りつぶされていく。

そして、

『君が望んだ光景は、本当にこれだった？』

世界が朱く染め上がった。



「つ!!!」

意識の完全な覚醒を待つことなく、勢いよくベッドから転げ落ちる。

「はっ、はっ、はあっ……………」

バクバクと心臓は脈打ち、火照った体に冷えた床が心地よく感じる。

「い、今のは……………」

激しく胸を叩く心臓はそのままに、荒れた呼吸をゆっくりと整える。

仰向けになって、天井を見上げる。

「なんだよ、僕が望んだ光景って」

呼吸も落ち着き、体も冷めると、次第にあの夢への怒りが溢れてくる。

ああ、まただ。

また、こうやって僕の知らない感情を叩きつけてくるのか、この記憶は！

「知らないよ……………知るかよ！ 僕が望んだ光景なんて知らない！ 僕はただ、大好きな

皆といられればそれでいい！ それだけでいいんだ！」

それだけでいい。そう叫ぶも、心は晴れない。

「ああ、くそ。なんなんだよ、一体」

暗闇のなか、ゆつくりと起き上がる。

こんな状態で眠れるわけがない。

「すこし、頭を冷やそう」



夜の公園は、昼間の喧騒とはうって変わって静まり返り、静謐な空気に虫の鳴き声だけが響いていた。

ベンチに腰掛け、空を見上げる。

雲一つない夜空には、満月とまではいかなくても、それなりに大きな月が空を照らしていた。

「僕が、望んだもの……」

そんなもの、今まで考えたことすら無かった。

ただ、皆と一緒にいて、笑っていられば、それだけで満足できると思ってた。だけど、

「きつと違うんだろうな」

あの夢を見て、夢の僕に言われて、僕の胸に何か足りないような、そんな気持ちが沸き上がる。

これは一体なんだろうか。僕はなぜ、こんなにも満ち足りているのに、何かを探しているのだろうか。

「……いや、違うか。わかってる」

きつと、その答えがこれまで見てきた夢にあるんだと思う。

知らない景色、知らない町、知らない、愛した人。

名前も顔も知らない、一番愛していた人がいる。

会ったこともないのに、見たこともないのに、気がつけばそれを探している時がある。

「僕は、一体なんなんだ……」

知らない記憶の夢を見る。

知らない人の記録を見る。

けれどもそれは紛れもなく僕で、僕以外の何者でもなくて。

訳がわからなくなつて、違和感と、疑問と、その他色々な感情がない交ぜになつて、僕の心を苛む。

「わからない……わかんないよ！ もう、なんだつて言うのさー！」

込み上げてくる感情の波に耐えきれなくて、その場で頭を抱え込んだ。

「僕は誰だ！ 僕はなんだ！ ねえ、誰か教えてよ！ 僕は一体誰で、なんでこんな力を使える！ なんであんな夢を見る!? 答えてよ！ アラガミ!!」

《……すまない、主。我らは、それに答えることが……》

「そうやって、君たちはまた僕を遠ざけるんだね」

《そんな!? 我らは!》

「だつてそうじゃないか！ 知っているのに教えてくれなくて、自分で見つけろ？ できたら苦労しないよ！ ねえ、教えてよ！ どうして僕は、ゴッドイーターになつたの!? ねえ……教えてよ……」

高まつた感情は涙と言葉となつて溢れ出す。

わからない。

わからない事だらけだ。

「……うあ……!」

耐えきれず、嗚咽が漏れた。

頭の中はグシャグシャで、自分でも何を考えてるのかわからなくなって、

そうして、僕はずっと泣いていた。



どれくらいの間そうしていたのかはわからない。

沢山泣いて、泣き続けて、そうしていつの間にか寝てしまっていたのだろう。気がつけば虫の声も聞こえなくなっていて、あんなに明るかった月も今は厚い雲に隠れていた。

「……………暗い」

月明かりのなくなった公園は、すこし異様なまでに暗くなっていた。

「街灯が点いてない?」

その暗さの理由は、本来なら着いているであろう公園の街灯が全て消え、この時間でも通るはずの車の気配すらも無くなっていた。

「っ、」

恐怖が心に入り込んでくる。

こんなのは苦手だ。早く帰ろう。

そう思い、立ち上がった時だった。

『だあめ』

不意に背後から、女性とも男性とも取れる声が聞こえた。

「っ!!!」

戦闘で培った勘のおかげだろう。すこし前までの僕ならパニックを起こして固まっていたのかもしれない。

考えるより先に体は反転し、その場から大きく飛び退く。

そして振り向いた先、暗闇になれた目がとらえたその姿は、

「……………アラ、ガ……………ミ？」

黒く闇に溶け込むような巨軀、そのなかで浮かび上がる赤い瞳と白い髭、翼のような背の刃。

———ディアウス・ピター。

アラガミにおいて、最強クラスと言われる存在。暴虐の化身。

「そん、な……………」

『くくく、久しぶりの人間じゃ。それも、とびきり旨そうな臭いをしておる。これは不安の臭いじゃのう』

まさか、そんな、あり得ない。

まさかの出来事に思考が止まる。頭が白く染まる。

「……………あり得ない、なんで？ そんなはずは……………そんなの、聞いてない！ だって、そんなの、話がちがう！」

思わず叫ぶ。自分が何を叫んでいるかもわからずに、ただただ込み上げてくる混乱を叫ぶ。

まるで、僕以外の誰かが叫んでいるような感覚だ。

「ぐうつ!! ああああ!!」

唐突に、締め付けるような頭痛が襲う。

《主！ よく見ろ！ あれはアラガミじゃない！ あれははぐれ悪魔だ！ 正気を持って、主！》

そんな筈はない。

だって、目の前にいるのは確かに、アラガミで、けど、そんなことは、あり得なくて……。

思考が纏まらない。身体はいやに震え、呼吸も乱れる。

《主君！ 来ます！》

ガンガンと警鐘を鳴らすかのように僕を苛む頭痛のなか、アラガミ達の声が聞こえ、無意識に横に飛んで神機を呼び出した。

顔をあげると、そこにはアラガミではなく、獣のような姿をしたはぐれ悪魔の姿が

あつた。

その悪魔の追撃が迫ってくる。

「いの……っ」

刃を一閃し、追撃を凌ぐ。

——君が望んだ光景は、本当にこれだった？

「——っ」

夢の台詞がリフレインして、息が止まる。

違う！ 僕が望んだのは、望んだのは……っ！

《我が君！》

「っ!? があつ!」

一瞬生まれた逡巡の隙を狙われ、横風ぎの一閃が僕の左側を襲い、大きく吹き飛ばされる。

「かはっ! はっ、はっ、はっ、は……っ」

受け身を取れず体を強く打ち付け、口から血が溢れる。

『くかかか！ 脆い、脆いのお！』

「あ、え？」

——痛い。

痛い。痛い。痛い。痛い痛い痛いいたいいたいいたいいたい！

今まで感じたことのない痛みが全身を襲う。

なんだよ、これ。これ迄だってこれ以上の大怪我をしたって言うのに、比べ物にならない痛みだ。

「いたい……………いたい……………なん、で？」

『どれ、どう食ろうてやろうかのお』

「ひっ」

恐怖が心を埋め尽くした。

嫌だ。怖い。嫌だ。嫌だ。怖い。

「いやだ…いやだ……………嫌だあああ！」



そこから先は、正直覚えていない。

覚えているのは、あの恐怖と、赤く染まった視界、泣きながら逃げ惑うはぐれ悪魔のみ。

気がつければ僕は、自室のベッドで横になっていた。

「んっ……………」

ゆっくりと目を開けると、視界がぼやけて、よく前が見えない状態だった。

よく見えないが、感覚的にここが自室だというのはわかる。

「……………起きたの？」

「っ、誰?!……………っあ!」

部屋にいる事で安心していただけ、横から聞こえてきた知らぬ声に、反射的に体を起こそうとするも、全身に痛みが走る。

「動かない方がいいわ。治療はしたけど、まだ完全じゃないから」

その声に敵意はなく、胸に当てられた手から放たれる魔力が、僕の体をじんわりと暖かく包み込んでいる。

どうやら治療魔法のようだ。

いや、それよりも。

「ありがとうございます。……あなたは何？」

「——気にしないで。ただの通りすがりのはぐれ悪魔よ」

「はぐれ!？」

「はぐれだからって、無差別に人を襲うような連中と一緒にしないで。私はただ、ただ

……」

「ただ?」

「……………あなたには関係のないことよ」

何かをこまかすようにそう答えた彼女は、胸に当てていた手を放してしまう。

だが、治療のお陰だろうか、少しずつ視界が戻ってくる。

「治療は終わったわ。もう行くわね」

そういうと、彼女は立ち上がり、窓に手をかける。

「ま、待って!」

視界がほとんど戻り、ようやく彼女が見えるようになったのだ。お礼を言いたい。

「君の、君の名前を教えてください！」

戻った視力がとらえた彼女の姿は、残念ながら後ろ姿で、その顔を見ることはできない。

「……………私、名前？」

出ていこうとしていた彼女の動きが止まる。

だが、彼女が振り向くことはなかった。

「……………そう、あなたはまだなのね、ハルト」

「え？」

なんで、彼女は僕の名前を知っている？

「あなたは私の名前を知っているわ。けど、ごめんなさい。今は名乗れない」

「なら、せめて顔だけでも見せてくれないか？」

「……………いずれ、またもう一度会えるわ。だからハルト。その時まで思い出して。お願いね、ハルト」

そう言つて、彼女は部屋から飛び出して行つてしまった。

「待つて！」

慌てて窓に駆け寄り、外を見るも、そこに彼女の姿はない。

ただ、黒猫が一匹、塀の上を歩いて行くだけだ。
「彼女は、一体……………」

彼女の名前を、僕が知っている？

そんな筈はない。黒髪ロングの知り合いなんて朱乃さんと副会長さんくらいしかいないはず。

それに、黒の着物を着ている人なんて……………。

……………いや、まさか、そんな。

思い出したのは、昔、初めて恋をした悪魔の女性。

でも、あの人は誰かに追われていなくなった筈なんだ。
だから、きつと、違う筈だ。

——また、わからない事が増えてしまった。

僕の、僕自身に対する疑問はさらに大きくなり、そんな僕の苦悩も知らぬまま、夜は明けていったのだった。

第71話

放課後のチャイムが鳴り、運動部の元気な掛け声がグラウンドから響いてくる教室で。一人、僕は考え事に耽っていた。

今日はなんだか、早く時間が過ぎたような気がする。

昨夜の出来事がどうしても頭から離れず、あの言葉ばかりが脳裏で繰り返される。

——あなたはまだなのね

まだ？ まだって、なんだ？

僕のあの夢と何か関係がある？ ただのはぐれ悪魔を、実物を一度も見たことの無い

アラガミと勘違いするなんて事も、今まで無かったのに。

《…主君、拙者らも一応アラガミなのですか？》

まあ、そうなんだけど、そうじゃなくてね？

「おい、ハル」

「『思い出して』か………思い出すって、多分あの夢のことだよな」

「ハールー」

「あの夢は絶対にただの夢じゃない。何か意味があるはずだ……」

「なあ、ハルってば！」

「!! つ、アバツ!!」

「ほげら!!」

突然の大声に驚いて勢いよく顔を上げれば、何か固いものに頭頂部を強打してしまい、僕は頭を押さえながらうずくまる。

「いたたた……ん？ 何してんの兄ちゃん」

頭をさすりながら前を見ると、まるで潰れたカエルのようなポーズで倒れている兄ちゃんの姿が。

と、潰れたカエルがもぞもぞと動きだし、体を起こしてこちらを睨む。

「あ、生きてた」

「お前なあ……」

涙目で顎を押さえながら立ち上がる兄ちゃん。どうも僕の頭がそこに直撃したらしい。

そう認識したら痛みが増してきた気がする。

ようやく痛みが引いたのか、兄ちゃんは顎から手を離し、僕の前の席に座り直す。

「で、ハル。お前も今日朱乃さん家行くんだろ？」

「うん」

そうだった。今日、何でも朱乃さんとこの神社にお偉いさんが来てて、僕と兄ちゃんに会いたがってると今朝オカ研のミーティングで言ってた。

「なら、道案内もかねて、一緒にいこーぜ！」



夕暮れの道を、兄ちゃんと二人で歩く。野郎二人連れだったの、色気もへったくれもないバカ話で盛り上がる道中、その会話が恋愛へとシフトするのはある意味道理だったのだろう。

切っ掛けは、兄ちゃんの

「俺、部長の事が好きなんだよね」

なのだからバカなんだろうか。いや、アホだったか。

「へー」

「反応うつす!? つかなんか今地味に罵倒された気がする!」

「してないよ。て言うか、兄ちゃんのそれホントまじで今更だからね? あんなん公言してるようなものだよ? なに、ネタなの?」

「ちっげーよ! 真面目だよ!」

「いや、だつたら膝枕とかチューとかあれだけされててそんなこと宣う神経を疑うよ」

「うーん、でもなあ」

「なに怖じ気付いてんのさ。へタレ」

「やだ今日やけに辛辣」

だつてあれ見えてて凄いいモヤモヤするし……

「そういうハル、お前はどうかなんだよ?」

「え、僕?」

「朱乃さんと小猫ちゃんだよ」

「……………」

「まさか、気付いてないって訳じゃねえだろうな?」

「まあ、ね」

朱乃さんはこの前本人から聞いたし、小猫ちゃんも、もしかしたらとは思っていた。

自意識過剰見たいで口にするのは少し憚られたけれど。

「俺が言うのもなんだが、お前どーするんだよ」

「どうって言われても……」

二人のことは嫌いじゃない。むしろあそこまでの好意を向けられて、嬉しくない訳がない。

……でも、僕は……

「俺は夢がハーレムだし、悪魔は一夫多妻が認められてるって話だけど、お前はどんなだよ？」

兄ちゃんみたいにそうやって考えられたらきつと楽なんだろう。

でも、僕は、そんな簡単に複数の女の人と恋仲になれるような甲斐性も、度量もきつとない。

だから、この前の、朱乃さんの告白すらも有耶無耶にして逃げたんだ。

「二人のことは好きだよ、きつと。でもね、兄ちゃん、僕は……」

「なんだ？」

なんていえば良いのだろうか。夢で見た女の人に惹かれているから、二人とは付き合えない、なんてさ。

「僕はきつとさ、兄ちゃんみたいにはなれないんだ。複数の人と恋仲になって、みんなを笑顔になんかできそうもないんだ」

「そんなことねえって。ハルならみんなを幸せにできるさ」

兄ちゃんがそう笑う。きつと特に考えた言葉でなくて、純粹に僕を信じているから出た言葉なんだと思う。

それが無性に、苦しい。

「僕ね、この前、朱乃さんに告白されたんだ」

「なに!! 赤飯案件か!」

「でも、断っちゃった」

「なんで!」

「……………バカな話があるんだ。聞いてよ、兄ちゃん」

そうして僕は、少し前から見るようになった夢のことを話した。

知らないはずの懐かしい町のこと。

覚えがない、戦いを決意した日のこと。

そして、その夢に必ず出てくる、顔も名前も知らない、大切な人。

見る夢はバラバラで、普通の町の時もあれば、荒廃した世界の時もある。

統一性なんかなくて、繋がりもわからなくて、でも必ずその女の人が僕の心を揺さぶ

る。

きつと、そう。

きつと僕は、その夢の女性に恋をしたんだと思う。

名前も知らない。顔も見えない。

それなのにひどく心が、魂が求めるその人に、僕は恋をした。

「これが、あの二人にとって残酷で、不誠実な事だつてのはわかつてる。わかつてるけどね、兄ちゃん。それでもその人の事を探してしまう僕は、きつと彼女達を幸せにはできないんだ」

「なるほどねえ……」

話を聞いた兄ちゃんは、その顎に手を当て、似合いもしない神妙な表情で考え込む。

「なあハル」

「なあに？」

「お前もハーレム作れば？」

とりあえず殴った。

顎の先を的確に鋭く抉るようなストレートだ。決まった。

「当たるかあ!! 唐突なバイオレンスやめろや!」

「ごめん、人が真面目な話してるのに兄ちゃんが兄ちゃんみたいな事言うから」

「そうだよ！ 俺だよ！」

「……………はあ」

「露骨な呆れ…………いや、まあ落ち着けてハル。別に考えなしに言った訳じゃねえよ」

んなバカな。

「あのね兄ちゃん。確かに悪魔は一夫多妻が認められてるし、推奨されてるくらいがあるけどさ、そんな簡単に困えて言うのは、ちよつと失礼だよ？」

好きな人がいるけどその人の事がわからないのでとりあえず自分の事を好きでいる女の子を妻にしますってそれ、最低野郎の思考じゃないか。

「ちげーよバカ。お前はハーレムつてものをわかっちゃいねえ。ハーレムつてのはな、欲望だけで作るもんじゃねえんだよ！」

「ダウト」

「ごめんちよつと盛った。まあ実際、ハーレムは確かに偉いやつが無理やり作つてたりするかもしれないけど、俺が目指すハーレムつてのは、いわば愛の結晶なんだ！」

兄ちゃんが目指すハーレム？

確かに、兄ちゃんの回りにいる女の子の人、グレモリー先輩とアーシアさんは、兄ちゃんの事がすごく好きっぽいし、愛の結晶はあながち間違いないのかもしれない。

「おこがましいかも知れねえが、俺は部長とアーシアが好きだ。どっちが一番なんて決められねえ。」

でももし、いつか一番が決まったとしたら、俺はきつと、それでも二人を好きでいると思う。一番がいても、もう一人だって同じくらい愛せる自信がある」

「……………それは、兄ちゃんの器と愛が深いグレモリー眷属だからだよ」

「かも知れねえ。けど違うかも知れねえ。」

要はなハル。俺が言いたいのはこう言うことさ」

立ち止まって、僕の目を見て、兄ちゃんは言う。

僕が悩んでた一番の理由を。僕すら気づいていなかった、悩みの答えを、自らの欲のままいつも通りに、兄ちゃんは答えをだす。

「その人も、あの二人も好きなら、同じだけ好きになれ。」

それが、せめてもの誠実さだって、俺は思うぜ、ハル」

「
」
いつだって。

いつだってそうだ。兄ちゃんは僕が悩んで、答えが出せなくなるとき、いつもそう

やって、なんにも考えてないような顔して平然と答えを出してくれる。

「……同じだけ好きになれ、か」

それがなんだか可笑しくてつい笑いが込み上げる。

「な、なんだよ、せつかく人が真面目に答えたつてのに笑うことねえだろ……」

「ごめんごめん、でもありがとう兄ちゃん。おかげで少し決心ができた。

ちゃんと、二人と話してみるよ」

「おう！」

「だから兄ちゃんも、あの二人と話しなよ？」

「……………おう」

急に声の萎んだ兄ちゃんを笑いながら、そうこうしているうちに、ようやく朱乃さんの家についたようだ。



「おうハル。オレの見間違いかもしれねえけど、目の前に見えるあれはおかしくねえか？」

朱乃さん家を目前にして、兄ちゃんがそんなことを呟く。指差す方向には彼女の家の特徴である長い階段と鳥居が一つ。

「なにがさ？」

「いや、ほら、あれはなんだ」

「神社だね」

「生姜？」

「違うジンジャーじゃない」

「待っておかしくね？俺ら悪魔ですぞ旦那？んで朱乃さんも悪魔。神社っておかし

くね？そもそも宗教自体違わねえ？」

「でも兄ちゃん、考えてみなよ。あのザ・大和撫子な朱乃さんがこの神社で巫女服装して楚々とした姿で過ごしてる姿を」

「…違和感どころじゃねえ。ベストマッチだな……」

「そう言うことさ」

「なるほど……」

うん、我ながらナイスな説明。これ以上しつくり来る説明はできそうもない。パー

フエクトだ。

と、納得したにも関わらずなぜかしきりに首を傾げる兄ちゃんと、満足げに頷く僕が階段を登り始めたところで、階段の上に朱乃さんが現れた。

「いらつしやい、ハルトくん、イツセーくん」

「――」

……ああ、ダメだ。

さつき兄ちゃんに答えを貰ったばかりだと言うのに、僕が来たことに嬉しそうに顔を綻ばせるその姿に酷く……酷く胸が、痛い。

第72話

悪魔にとつてはアウエー中のアウエーな境内にいるからか、兄ちゃんが辺りを見回しながらそわそわしている。

「大丈夫よイツセーくん。ここは特別な約定と法陣で守られていますもの。悪魔だつて入れますわ」

「へえー、凄いですね」

……そういえば、グレモリーっていう名門の眷属とはいえ、どうして一悪魔でしかない朱乃さんの家にはこんな優遇がされてるんだろうか？

ふとその疑問を朱乃さんに問いかけてみる。

「それは……」

「それは、魔王ルシファアの妹君の眷属であるんだから、これからの協定のための友好の印、という訳ですよ」

答えようとした朱乃さんの言葉を遮って、第三者の言葉が割り込んでくる。

驚いてそちらに顔を向けると、一人の青年が立っていた。

彼は柔らかな笑顔を僕らに向けて、右手を差し出す。

「初めまして、赤龍帝の兵藤一誠くん。そして……………【異端】の神結悠斗くん」

——異端。

今言われた言葉の意味は理解できても、意図を理解することが出来ず、僕はただその手を見ることしか出来なかった。

「おい、あんたがどこの誰かは知らねーがよ、ハルに言った事はどういう意味だよ？」

そんな僕の代わりだろうか、兄ちゃんは少しドスの聞いた声で問いかけ、青年を睨み付ける。

「ああ、怒らせてしまったのなら申し訳ありません。別に悪い意味で言ったのではないのです。」

しかし、ふむ、どうやらまだのようですね」

「それはどういう……………」

まだ、というあの人と同じ言葉をこぼした青年に、僕は問いかけた。
けど、その問いに、対する答えは得られなかった。

「それは君自身で知るべきです。私はあくまで知識として知っているだけです。」

ただ一つ言えるのは、君は覚悟しなきゃいけない、ってことだけです」

「覚悟?」

「ええ、これは私の勘ですが、きっと生半可なことでは無いでしょう」

「……………」

覚悟、か。

夢を見たとき、僕は涙を流した。苦しかった。辛かった。それが何かはわからないけれど、それを知ればもつと苦しくなるのは何となく理解している。

怖いなあ。

とても怖い。

けど、でも、それを知らない限り僕はおそらく、このモヤモヤをずっと抱えることになる。

それは、嫌だな。

「…覚悟は、できてます。多分。ただ少し怖いだけで」

「……それなら、安心ですね」

そう言った青年は、アーシアさんのような慈愛に満ちた微笑みを浮かべ、そつと柔らかに僕の頭を撫でる。

それがとても暖かくて、少しだけ心が軽くなった気がした。

「さて、まだ名乗っていませんでしたね。本題に写る前に名乗るとしましょう」

青年は僕の頭から手を離し、僕と兄ちゃん二人に体を向ける。

「改めて初めまして。私は【守護】のミカエル。人々には四人の熾^{セラフ}天使の内の一として

知られております。あ、あと天使たちの長をしております」

「……………」

「……………」

僕と兄ちゃんは顔を合わせ、視線を交差させる。

——なあハル。

——なに？

——もしかして大物？

——もしかしなくても天使のトップだね。

「……………」

兄ちゃんがなんか面白い顔で僕をみる。

「……………」

僕はニツコリと笑顔を返す。

それから数秒の間が空き、

「生意気いってさっせんしたああ!!」

兄ちゃんの土下座と共に響き渡る謝罪が、風に乗せられて空高く響き渡った。



「それで、そんなお偉いさんがどうしてこんなところに?」

土下座を続ける兄ちゃんを無視してミカエル:さまに問いかける。

「実はですね、あなた方お二人に用がありました」

「僕らに?」

「ええ」

そういつて、ミカエルさんは兄ちゃんを立たせて、パチン、と指をならす。

すると、兄ちゃんの目の前に一振りの剣が光と共に現出した。

「これは?」

兄ちゃんの問いにミカエルさまは答えた。

何でも、過去の聖人、聖ジョージことゲオルキウスの使用した聖剣らしい。

それを、今度の会談での友好の証として悪魔側へのプレゼントとして贈与するとのこ

とだ。

「兄ちゃん兄ちゃん、これあれだよ、ラグラージにリーフブレード叩き込む的な」
「甦る第三世代のトラウマ………っ!!」

僕の的確な例えに、イマイチ理解してなさそうなアホ面を晒していた兄ちゃん表情が恐怖に染まる。

と、思ったのだが、何でも魔王さま、アザゼルさま、ミカエルさまが特殊な術式を組み込んでいるらしく、兄ちゃんは持つことができるらしい。

『特殊な術式』って言葉便利すぎない？ て言うか豪華すぎない？

そんなこんなで、なんとかのドライグがサポートすることで、アスカロンは
【赤龍帝の籠手】^{ブリステッド・ギア}と一体化することができた。

「これで、イツセークくんへの用は終わりです」

となれば次は僕か。

しかし、僕にいったい何の用だろうか。また贈り物だとしたら、お門違いというかなんというか。

「あの、僕は確かに兄ちゃんたちといますけど、別に悪魔じゃ無いですけど……」

「いえ、悪魔でなくても、あなたはリアス・グレモリー陣営の戦力の一角として我々から認識されています」

あー、そういう。

「それと、申し訳ないのですが、あなたへのは贈り物ではないのです。ただ、見てもらいたいものがあります」

まあ、確かに聖剣とか持つてても持て余すしね。

見てもらいたいものつてなんだろう？

ミカエルさまが先程と同じように指を鳴らし、僕に見てもらいたいものとやらが光と共に現れる。

今度は僕の前ではなく、ミカエルさまの手の上にだが。

——異質な匣だ。

大きさ的にはティッシュ箱を二つ重ねたようなサイズだ。それはいい。だが、その匣はあまりに異質であり異常だった。

がんじがらめに巻き付けられた鎖。

それを覆うように張られている大量の護符。

その上から張り巡らされたいくつもの呪文のような文字と小さい魔方陣の数々。

そういう知識がなくても分かる。これは封印だ。それも、かなり嚴重に、慎重に、執拗にかけられた封印。

『主君！ 下がってください!!』

『この気配は?!』

『そんな馬鹿な…!』

「…これ、は？」

冷や汗が流れる。

僕の内のアラガミたちが警鐘をならす。

これほどの封印が施されているにもかかわらず、そこから漏れ出してくる気配は、僕の背筋を這い上がり、脳髓を刺激する。

「お、おい、どうした、ハル！ 冷や汗がすごいぞ！ この箱がどうしたんだよ!」

「……兄ちゃんは、この匣に何も感じないの？」

「え？」

よく見ると、ミカエルさまも、朱乃さんも兄ちゃんも冷や汗どころか、この匣の気配すら感じていない様だった。

「やはり、わかりますか」

僕の様子を見ていたミカエルさまが口を開く。

「3陣営に加え日本の神社でも封印を施して貰いました。その上で漏れでるこの気配を感じられるのは、我々や魔王、墮天使総督を除いておそらく貴方だけでしよう」

そういつて、ミカエルさまは匣の封印を一つづつ、丁寧にはどいていく。

「み、ミカエルさま、その匣の中にはいったい何が…?」

朱乃さんが恐る恐る、という風に問いかける。

「これは数カ月前とある一団、我々と敵対する集団の拠点の一つを討伐した際に、彼らの研究施設から押収したものです。長らくこれの正体がかめず、しかしその凶悪性から誰も手をつけられなかった。

ですが、そこに貴方の情報が我々のところに飛び込んできたのです、神結ハルトくん」
ミカエルさまは、そういつて僕の目を、僕の内にある力を見つめる。

「君の力はあまりに異質だ。君の武器も、能力も、君自身も。まるで、この世界には存在していないかのような異質さ。

この匣に収めた物質と同じ異質さです」

最後の封印が解かれる。

その瞬間、この場の空気が変わる。

先程まで何も感じていなかった朱乃さんと兄ちゃんの二人も、その気配に冷や汗をたらし、咄嗟に臨戦態勢をとる。

「その反応は正しい。ですがご安心を。この物質は今触れなければなんともありません。また、この場には現在3陣営それぞれが戦闘員が待機しています。有事の際は、あなた方三人は確実に逃がして見せます」
そうして、匣が開かれる。

ああ、

この気配を、

僕は、

知^知ら^らない^い。

いや、知^知ら^らない^いはずだ。その筈なんだ。

それから放たれる濃密な気配は、殺意ではない。そして敵意でも、害意でもない。

これは、食欲…？

匣に収められていたのは、拳ほどの肉塊だった。

肉というにはあまりに白く、そして塊でありながら未だに脈を打つ、異質な物質。

その肉塊から、あまねく全てを喰らい尽くしてしまいそうな食欲なまでの食欲を感じとる。

『馬鹿な………』

マルドゥークが驚愕する。

サリエルが絶句する。

ボルグ・カムランが息を飲む。

『主よ、それは』

言われ無くとも、何故だか理解できた。

『それは——』

——我らの同胞だ』

つまり、アラガミ。

僕の中に在る、この世ならざる異端の神々が、神々を模した怪物が、この肉体を同胞と言ったのだ。

その意味を理解できないほど、僕は蒙昧じゃない。

アラガミの肉片がこの世界に存在する。

そして、それを3陣営と敵対する組織が持っている。

僕は目の前の天使に問いかける。

「……………これを見せて、僕にどうしろと」

声が震えるのを、必死に隠し殺す。

「ハルトくん、貴方にはこれが何か、分かるのですね？」

「分かる。知らないけど、これがなんなのかしつかりと理解した訳じゃないけど、分かる」

「ではこれは」

「その肉は、肉の持ち主の名は「アラガミ」 神々の名を冠しあらゆる命を喰らい尽くす星の化け物にして、あまねく文明を喰い破る捕食者」

「なぜ貴方がそれを知っているのか、聞いても？」

「わからないよ、何も。何でそれがここに在るのか。なぜ僕がこんな力を宿しているの

か。僕にはさっぱりだ」

「そうですか」

すると、そこに僕らの会話を聞いていた兄ちゃんがもどかしそうに割り込んできた。

「な、なあハル！ 俺たちにも分かるように説明してくれ！」

その言葉に、僕は返す。

混乱している心をなんとか宥めて、謝りながら。

「ごめん、兄ちゃん。明日、皆と話すよ。僕だつて混乱してるんだ。時間が欲しい」

「……………そうか」

兄ちゃんはそれでなんとか納得してくれたのか、引いてくれる。

「ハルトくん我々が貴方にこれを見せたのは、貴方にも会談に加わつて欲しいからです」

ミカエルさまが僕の目を見て、僕への用件を伝える。

「え？ 魔王さまや、堕天使の総督が参加するような会談に？」

「はい。この肉塊を持つていた連中は、我々の和平を好ましく思つておらず、必ず襲撃が

あるでしょう。その時、貴方の【神セイクリッド・ギア器】……いえ、神機、でしたか。その力が必要

になるはずですよ」

「つまり、僕に戦えと？」

「貴方が戦いを好まないのは私にも伝わっています。ですが、どうか」

そう、僕にミカエルさまは懇願した。

その頭を垂れて、天上の上位存在が、人間の少年に、懇願した。

その予想外の行動に僕や兄ちゃん、朱乃さんは絶句し、そして周囲の待機しているであろう人たちの動揺も伝わってきた。

「無論、対価はありません」

「た、対価？」

「——その力の解明。および貴方の自由の保護。我々は、それに全面的に協力し、貴方の自由を約束します。貴方がどの陣営に付くのかも、どこへ行くのも、我々は強制せず、そのことを約束いたします」

それは、魅力的だった。

自由の保護はいい。おそらく僕は、グレモリー先輩に着いていつて、悪魔陣営にいらさうから。

魅力を感じたのは、僕の力の解明。

僕にすらわからないこの力と知識がどこから来たのか。なぜ僕に宿っているのか。

それを知る手伝いをしてくれるのなら、僕は——

「私は、嫌です」

不意に、そんな言葉が僕らに届く。

声の主を辿ればそれは、朱乃さんからの物で。

「朱乃さん？」

「私は嫌です、ミカエルさま」

その声は震えていて、眦には涙が浮かんでいる。

唇を噛み締めながら震えている彼女は、息を吸って、僕らを、ミカエルさまを強い眼差しで見つめる。

「それはどうしてですか？」

ミカエルさまは優しく、問い質す。

「彼は、ハルトくんは優しい人なんです！ 戦うのが嫌いで、怖いことが嫌いな、優しい人なんです！ もうこれ以上彼を戦いに巻き込みたくないんです！ 私は、彼を愛しています！ だから、人間の彼を、私は……っ!!」

悲痛な叫びだった。

湿った声で、自身の我儘を、エゴを、愛ゆえに叫ぶ悲痛な悲鳴だった。

「彼は私を受け入れてくれた！ その彼が傷付くのは、もう見たくないんです！ せつ

かくコカビエルの傷も治って、ようやく日常に戻ったのに、また、また!!

そんなのに、私は耐えられない!!!」

きつと、これを叫ぶ相手が悪魔か、墮天使であったなら、下らぬエゴだと切り捨て、歯牙にもかけなかったのだろう。

しかし、それをミカエルさまは優しく、慈父のような眼差しで見つめ、僕に視線を向ける。

—— 貴方は、どうしたいのですか？

そう目で問われ、僕は——